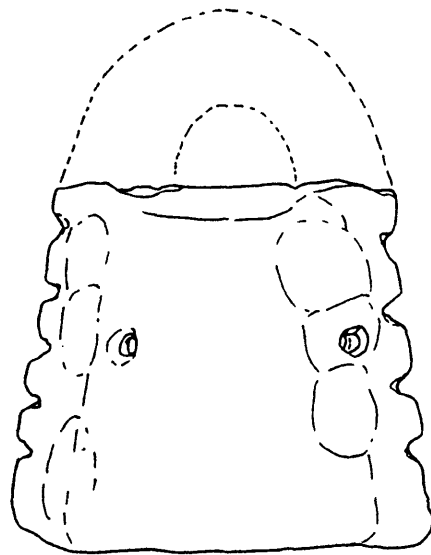


一般国道23号中勢道路(9工区)道路建設事業に伴う

松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告



1993・3

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県の県庁所在地である津市は、伊勢平野の中央部に位置し、海・山・川の豊かな自然環境と、温暖な気候にも恵まれ、古来より多くの遺跡が営まれてきました。とくに、弥生時代の安濃川左岸には、三重県を代表する弥生時代遺跡である納所遺跡が所在しており、その豊富な出土品は全国的にも注目を集めています。

さて、今回報告する松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡は、納所遺跡の西側一帯に広がる遺跡群で、一般国道23号中勢道路建設に先立って調査されたものです。このうち、松ノ木遺跡は縄文時代晩期の竪穴住居と弥生時代の方形周溝墓、森山東遺跡は弥生時代の水田、太田遺跡は弥生時代の銅鐸形土製品や弥生時代後期から古墳時代にかけての豊富な土器・木製品の出土でそれぞれ注目されました。

これらの遺跡は、現状保存が困難なため記録保存というかたちとなりましたが、わたくしどもに課せられた重要な責務のひとつは、その膨大な記録を整理して報告書というかたちで世に公開することであると考えています。今後、これらの成果が、各方面で活用されることを切望しております。

調査にあたり御協力いただいた関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

最後に、この報告書が、地域の歴史と文化に対する御理解の深まりの一助になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層の御理解と御協力を念願してやみません。

平成5年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 久保富子

例 言

1. 本書は、平成3～4年度に三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道23号中勢道路第9工区建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書（第1～2分冊）のうち、松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡（第1分冊）の報告書である。

2. 調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3. 発掘調査は昭和63年から平成元年の2年度にわたって実施した。体制は以下の通りである。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 同事務局文化課（昭和63年度）

三重県埋蔵文化財センター（平成元年度）

現地調査業務

〔昭和63年度〕文化課主幹兼文化財第二係長 伊藤久嗣・主査 吉水康夫

主事 増田安生

主事 浅生悦生（津市教育委員会より派遣）

臨時調査員 和気清章（津市教育委員会より派遣）・同 油田秀紀

〔平成元年度〕埋蔵文化財センター主幹兼第2調査課長 山澤義貴

第3係長 浅生悦生（津市教育委員会より派遣）

主事 増田安生・主事 森川幸雄

主事 村木一弥（津市教育委員会より派遣）

臨時調査員 竹内英昭・同 油田秀紀

現場作業 （社）中部建設協会

調査協力 津市教育委員会

4. 各遺跡の発掘調査は、松ノ木遺跡が村木一弥・竹内英昭、森山東遺跡が増田安生・和気清章、太田遺跡が浅生悦生・油田秀紀を担当者として実施した。

5. 整理・報告書作成業務は平成3年から4年の2年度にわたって実施した。体制は以下の通りである。

〔平成3年度〕

調査第2課 課長 新田 洋

主査兼第3係長 駒田利治

主事 渡辺尚登・近藤 健・天野秀昭

主事 村木一弥・山口 格（津市教育委員会から派遣）

〔平成4年度〕

調査第2課 課長 新田 洋

主査兼第3係長 駒田利治

主事 本堂弘之・小菅文裕

技師 穂積裕昌

主事 山口 格・中村光司（津市教育委員会から派遣）

室内整理 市川嘉子・太田浩子・小坂規美子・一木八千代・森川尚子・駒田 泉（平成3年度含）

6. 発掘調査ならびにその後の整理過程において、以下の方々の御指導・御教示を得ました。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略、所属は指導時）

青木哲哉（立命館大学）・磯部 克（県立津西高等学校）・工楽善通（奈良国立文化財研究所）・八賀 晋（三重大学）・藤澤良祐（瀬戸市教育委員会）・堀場義平（三重大学）・宮本長二郎（文化庁）・森 勇一（愛知県埋蔵文化財センター）・安田喜憲（国立国際日本文化研究センター）

7. 調査を担当したものが報告も執筆するのが本来であるが、事情によりできなかった遺跡もある。執筆分担は目次及び文末に記した。

8. 当遺跡については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財調査概報』Ⅰ及びⅡとしてその調査概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

9. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

10. 本書で報告した遺跡の位置は国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、真北は座標北の $N 0^{\circ} 16' W$ 、磁北は座標北の $N 6^{\circ} 10' W$ である。

11. 本書で使用した遺構の名称・番号は調査時点での呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。

12. 本書で使用した遺構表示略記号は下記による。

SD：溝・大溝 SE：井戸 SK：土坑 SR：旧河道 SX：方形周溝墓 SZ：不明遺構・その他

13. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前言	1
II. 位置と歴史的環境	(駒田利治) 3
III. 松ノ木遺跡	(竹内英昭) 9
1. 位置と地形	9
2. 遺構	9
(1) 縄文時代	13
(2) 弥生時代	14
(3) 古墳時代	19
(4) 時期不明の遺構	20
3. 遺物	
(1) 遺構出土の遺物	23
(2) 包含層出土の遺物	29
4. 結語	
(1) 縄文晩期土器の位置づけ	37
(2) 弥生前期の土器について	37
(3) 方形周溝墓について	38
(4) 中期前半の壺型土器の文様	38
(5) 松ノ木遺跡の立地について	38
(6) 安濃川流域の縄文晩期後半～弥生中期前半にかけての遺跡の立地と変遷について	39
(7) 伊勢地方への弥生文化の波及過程	39
縄文土器観察表	43
写真図版	44
IV. 森山東遺跡	
1. 位置と地形	(増田安生) 57
2. 調査の経過概要	(倉田直純) 59
3. 遺跡の基本層序	(倉田・清水正明) 59
4. 遺構	
(1) B地区の水田遺構	(倉田・増田) 61
(2) C地区の上位水田遺構	(倉田・増田) 65
(3) C地区～E地区の下位水田遺構	(倉田・増田) 68
(4) E地区下層の水田遺構	(倉田・増田) 75
(5) A・B地区 上層の遺構	(小菅文裕) 78
5. 遺物	
(1) 弥生・古墳時代の遺物	(穂積裕昌・小菅) 84
(2) 平安時代～室町時代の遺物	(山口 格) 88
(3) 近世の遺構出土遺物	(本堂弘之) 93

6. 結語	(倉田)	97
(1) 水田の時期について		97
(2) 水田の立地について		97
(3) 小区画水田について		99
(4) 水田の広がりと居住区		100
遺物観察表		101
写真図版		110

V. 太田遺跡

1. 位置と地形	(浅生悦生・倉田)	123
2. 調査の概要	(浅生・倉田)	124
3. 遺跡の基本層序	(浅生・倉田)	124
4. 遺構	(浅生・倉田)	126
(1) A地区の遺構		126
(2) B地区の遺構		130
5. 遺物		
(1) 縄文時代の遺物	(中村光司)	135
(2) 弥生・古墳時代の遺物	(中村・穂積・渡辺尚登)	135
(3) 歴史時代の遺物	(山口)	170
6. 結語		
(1) 遺構について	(浅生・倉田)	171
(2) 大溝出土土器について	(中村)	171
(3) 大溝出土の木製品について		173
A. 木製品組成からみた遺跡の性格	(穂積)	173
B. 個別遺物のまとめ	(渡辺・穂積)	174
C. 太田遺跡出土の蹴放し材と楣材について	(穂積)	175
(4) 銅鐸形土製品について	(中村)	177
遺物観察表		181
写真図版		193

図 版 目 次

Ⅲ. 松ノ木遺跡

- P L. 1 A・B地区調査区全景
- P L. 2 旧河道SR3
- P L. 3 竪穴住居SH6、落込み遺構SZ7
- P L. 4 方形周溝墓SX2・SX10
- P L. 5 SX10木製品出土状況
- P L. 6 C・D地区調査区全景
- P L. 7 方形周溝墓SX11・SX12
- P L. 8 土坑SK14・溝SD13
- P L. 9 SR3・SH6出土遺物
- P L.10 遺物 縄文・弥生土器
- P L.11 SX10出土遺物
- P L.12 SX10出土木製鋤
- P L.13 遺物 古墳時代以降の土器・銭貨他

Ⅳ. 森山東遺跡

- P L.14 遺跡遠景、A・B・C地区全景
- P L.15 A・B地区上層遺構
- P L.16 溝SD16、掘立柱建物SB29
- P L.17 土坑SK14・15、溝SD34・35
- P L.18 井戸SE5、B地区水田遺構
- P L.19 C地区水田遺構
- P L.20 C地区水田面、D地区水田遺構
- P L.21 D地区水田遺構部分・足跡
- P L.22 E地区上層水田遺構

- P L.23 E地区下層水田遺構
- P L.24 遺物 弥生・古墳時代の土器
- P L.25 遺物 古墳時代・中世の土器
- P L.26 遺物 中世・近世の土器

Ⅴ. 太田遺跡

- P L.27 遺跡遠景、全景
- P L.28 大溝遺物出土状況（中上層、中層）
- P L.29 大溝下層遺物出土状況、大溝断面
- P L.30 下層溝状遺構、木杭
- P L.31 遺物出土状況
- P L.32 遺物出土状況、B地区南部全景
- P L.33 大溝下層出土遺物
- P L.34 大溝下層出土遺物
- P L.35 大溝下層出土遺物
- P L.36 大溝下層出土遺物（銅鐸型土製品他）
- P L.37 大溝中層出土遺物
- P L.38 大溝中層出土遺物
- P L.39 大溝上層出土遺物
- P L.40 大溝上層・SD1・包含層出土遺物
- P L.41 大溝出土木製品（農工具）
- P L.42 大溝出土木製品（容器・家具・紡績具）
- P L.43 大溝出土木製品（建築部材）
- P L.44 大溝出土木製品（建築部材）
- P L.45 大溝出土木製品（建築部材）

挿 図 目 次

I. 前 言

第1図 中勢道路（9・10）工区内遺跡位置図…2

II. 位置と環境

第2図 中勢道路内遺跡位置図 ……4・5

第3図 明治27年陸地測量部地形図 ……7

Ⅲ. 松ノ木遺跡

第4図 調査区配置図 ……9

第5図 A・B地区土層断面図〈1〉 ……10

第6図 A・B地区土層断面図〈2〉 ……11

第7図 C地区土層断面図〈1〉 ……12

第8図 C地区土層断面図〈2〉 ……13

第9図 D地区土層断面図 ……14

第10図 A・B地区遺構実測図（折込） ……15～16

第11図 C地区遺構実測図（折込） ……17～18

第12図 D地区等高線図 ……19

第13図 旧河道SR3 土層断面図 ……20

第14図 方形周溝墓SX10 遺構実測図 ……20

第15図 方形周溝墓SX10 遺物出土状況図…21

第16図 方形周溝墓SX10 遺物出土状況図…22

第17図 方形周溝墓SX11 遺構実測図 ……23

第18図 方形周溝墓SX12 遺構実測図 ……24

第19図 遺物実測図〈1〉 ……25

第20図 遺物実測図〈2〉 ……26

第21図 遺物拓影・断面図〈3〉 ……27

第22図 遺物実測図〈4〉 ……28

第23図 方形周溝墓SX10 出土木製品〈1〉…30

第24図	方形周溝墓 S X 10 出土木製品〈2〉	31	第59図	S K 14・S K 27・包含層出土遺物 (平安～室町時代)	92
第25図	遺物実測図〈5〉	32	第60図	S D 35出土遺物	93
第26図	遺物実測図〈6〉	33	第61図	旧美濃屋川出土遺物	94
第27図	遺物実測図、拓影〈7〉	34	第62図	自然流水路出土遺物(近世)	95
第28図	遺物実測図〈8〉	34	第63図	包含層出土遺物(近世)	96
第29図	銭貨拓影	35	第64図	小区画水田面積のヒストグラム	98
第30図	安濃川流域の縄文晩期遺跡分布図	41	第65図	水田と居住域	99
第31図	安濃川流域の弥生前期遺跡分布図	42	V. 太田遺跡		
IV. 森山東遺跡			第66図	太田遺跡・森山東遺跡発掘調査区位置図	123
第32図	森山東遺跡・太田遺跡発掘調査区 位置図	57	第67図	遺構配置図及び地区割り図	125
第33図	安濃川流域平野の地形図	58	第68図	大溝西壁土層断面図	126
第34図	西壁各地点の柱状土層図	60	第69図	大溝(旧河道)遺構実測図	127
第35図	上層水田遺構平面図	60	第70図	溝 S D 1 断面	128
第36図	C地区大畦畔部分土層断面図	60	第71図	上層遺構(大溝・S D 1・S D 2)と 遺物出土地点	128
第37図	B地区水田遺構平面図(1:500)	62	第72図	大溝土器溜りの平面図・断面図	129
第38図	B地区水田遺構平面図(1:200)	63	第73図	下層溝状遺構	129
第39図	足跡実測図	63	第74図	溝 S D 3 断面図	129
第40図	C地区水田遺構平面図(1:500)	65	第75図	木杭	129
第41図	C地区上位水田遺構平面図(1:200)	66	第76図	溝 S D 3 縦断面図	129
第42図	C～E地区水田遺構平面図(1:500)	68	第77図	B地区調査区遺構平面図	130
第43図	水田No.262・263の足跡と耕作痕	70	第78図	大溝中層遺物出土状況図(折込) 131～132	
第44図	水田No.258の耕作痕	70	第79図	大溝下層遺物出土状況図(折込) 133～134	
第45図	水田No.265・272の足跡	70	第80図	縄文土器	135
第46図	C～E地区水田遺構平面図(1:200)(折込) 71～72		第81図	弥生土器・土師器の形式分類図(1)	136
第47図	E地区下層・上層水田遺構平面図(1:500) 75		第82図	弥生土器・土師器の形式分類図(2)	137
第48図	E地区下層水田遺構平面図(1:200)	76	第83図	弥生土器・土師器の形式分類図(3)	138
第49図	A・B地区上層遺構配置図	79	第84図	弥生土器・土師器の形式分類図(4)	139
第50図	S B 29、E 4・5遺構実測図	80	第85図	弥生土器・土師器の形式分類図(5)	140
第51図	S D 1・S D 6遺物出土状況	81	第86図	弥生土器・土師器の形式分類図(6)	141
第52図	B地区北部遺構平面図	83	第87図	弥生土器・土師器の形式分類図(7)	142
第53図	水田西及び覆土出土の弥生土器	84	第88図	大溝下層出土土器実測図(1)	143
第54図	S D 6出土遺物	85	第89図	大溝下層出土土器実測図(2)	144
第55図	S D 6・S D 8・自然流水路出土遺物 (弥生・古墳時代)	87	第90図	大溝下層出土土器実測図(3)	146
第56図	包含層出土遺物(弥生・古墳時代)	88	第91図	大溝下層出土土器実測図(4)	147
第57図	A地区 S D 1・自然流水路出土遺物 (平安～室町時代)	89	第92図	大溝下層出土土器実測図(5)	148
第58図	S D 9・S D 34出土遺物	91	第93図	大溝下層出土銅鐸形土製品実測図	149

第94図	大溝中層出土土器実測図(1)	150	第108図	大溝出土木製遺物実測図(杭材)	166
第95図	大溝中層出土土器実測図(2)	151	第109図	大溝出土木製遺物実測図(杭材)	167
第96図	大溝中層出土土器実測図(3)	152	第110図	大溝出土木製遺物実測図 (板材・棒状木製品)	168
第97図	大溝上層出土土器実測図(1)	154	第111図	S D 1 出土土器実測図	169
第98図	大溝上層出土土器実測図(2)	155	第112図	包含層出土土器実測図(古墳時代)	169
第99図	大溝上層出土鉄鍬実測図	155	第113図	B地区出土土器実測図	170
第100図	大溝出土木製遺物実測図(農具)	157	第114図	包含層出土歴史時代遺物実測図	170
第101図	大溝出土木製遺物実測図(農工具)	158	第115図	大溝甕D類層別出土個数	172
第102図	大溝出土木製遺物実測図 (容器・家具・紡績具)	159	第116図	前沖遺跡出土蹴放し材(上)・ 杉垣内遺跡出土楣材(中)と 蹴放し材(下)	175
第103図	大溝出土木製遺物実測図(建築部材)	160	第117図	各地の蹴放し材と楣材	176
第104図	大溝出土木製遺物実測図(建築部材)	161	第118図	三重県内出土銅鐸形土製品	179
第105図	大溝出土木製遺物実測図(建築部材)	163			
第106図	大溝出土木製遺物実測図(建築部材)	164			
第107図	大溝出土木製遺物実測図(建築部材)	165			

表 目 次

Ⅲ. 松ノ木遺跡		第20表	遺物(土器・陶器・磁器)観察表(8)	108
第1表	安濃川流域周辺の遺跡一覧	第21表	遺物(土器・陶器・磁器)観察表(9)	109
第2表	松ノ木遺跡出土縄文土器観察表	第22表	木製品観察表	109
Ⅳ. 森山東遺跡		第23表	鉄製品観察表	109
第3表	基本層序	Ⅴ. 太田遺跡		
第4表	B地区水田遺構一覧表(1)	第24表	A地区土層基本層序	124
第5表	B地区水田遺構一覧表(2)	第25表	三重県内出土銅鐸形土製品一覧表	178
第6表	C地区上位水田遺構一覧表	第26表	遺物(土器)観察表(1)	181
第7表	足跡計測表	第27表	遺物(土器)観察表(2)	182
第8表	C地区～E地区下位水田遺構一覧表(1)	第28表	遺物(土器)観察表(3)	183
第9表	C地区～E地区下位水田遺構一覧表(2)	第29表	遺物(土器)観察表(4)	184
第10表	C地区～E地区下位水田遺構一覧表(3)	第30表	遺物(土器)観察表(5)	185
第11表	E地区下層水田遺構一覧表(1)	第31表	遺物(土器)観察表(6)	186
第12表	E地区下層水田遺構一覧表(2)	第32表	遺物(土器)観察表(7)	187
第13表	遺物(土器・陶器)観察表(1)	第33表	遺物(土器)観察表(8)	188
第14表	遺物(土器・陶器)観察表(2)	第34表	遺物(土器・陶器・磁器)観察表(9)	189
第15表	遺物(土器・陶器)観察表(3)	第35表	木製品観察表(1)	189
第16表	遺物(土器・陶器)観察表(4)	第36表	木製品観察表(2)	190
第17表	遺物(土器・陶器)観察表(5)	第37表	木製品観察表(3)	191
第18表	遺物(土器・陶器)観察表(6)	第38表	木製品観察表(4)	192
第19表	遺物(土器・陶器)観察表(7)			

I. 前 言

昭和58年4月に都市計画道路中勢バイパスとして鈴鹿市北玉垣町から一志郡三雲町までの33.8kmの区間が都市計画道路に決定された。

この道路は、中勢地域の道路網を充実させるとともに総合的な地方都市交通体系の確立を図るためのもので、現国道23号線の交通緩和と周辺の適切な土地利用を目指し、地域の経済発展に寄与しようとするものである。

この中勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和57年1月に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無の照会を受けたので、三重県教育委員会が主体となり、関係市町村教育委員会の協力を得て分布調査を昭和58年度に実施し、昭和59年5月に建設省へ分布調査結果を回答するとともに、建設省三重工事事務所、県道路建設課と今後の取扱いについて協議を重ねた。

さて、中勢道路は、このバイパスの一環を担うものとして津市大里窪田町の主要地方道津関線から同市大字神戸の都市計画道路雲出野田線にいたる7.2kmの区間の計画道路で、昭和59年4月に事業採択されたが、この計画道路に所在する埋蔵文化財は、遺跡数18件、遺跡面積（分布調査面積）約130,000㎡である。

これらの埋蔵文化財の取扱いについては、建設省中部地方建設局三重工事事務所と三重県教育委員会文化課との間で協議し、現状保存が困難な遺跡について事前の発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。

そこで、昭和63年度4月に建設省中部地方建設局長と三重県知事が協定を締結し、昭和63年度から平成7年度までの8年間で事前の発掘調査を実施していくことになった。

また、現地作業については、調査件数も多く、調査面積も広大であるため、作業員の安定的確保と発掘調査の適正かつ円滑な推進を期して、社団法人中部建設協会に委託する方法を採ることとした。このようなことから、同年4月に発掘調査業務の分担に関する事項についても建設省中部地方建設局長と三

重県教育委員会教育長及び社団法人中部建設協会理事長の三者による協定を締結して発掘調査を実施することとなった。

同年5月25日から約1カ月かけて、大里窪田～大古曾間約0.9kmの一身田地区と美濃屋川～津港跡部線間約1.0kmの安東地区を対象に範囲確認調査を実施した。ただし、丘陵部は未買収地が多いため今回の調査からは対象外とした。

範囲確認調査は、遺跡推定範囲に20mを原則として4m×4mの試掘坑を設定し、遺物包含層、遺構、遺物の状況などを確認した。

この結果をもとにして、三重工事事務所、中部建設協会及び文化課の三者協議を実施し本年度の本調査の面積を決定し、8月1日より森山東遺跡と太田遺跡の2遺跡の本調査を開始した。

森山東・太田遺跡では、弥生時代の小区画水田跡や自然流路が検出され、木製農具、銅鐸形土製品、各種建築部材が出土し、当地域での稲作農耕のようすを示す極めて貴重な資料を得たが、森山東遺跡で検出された小区画水田跡が南にも広がっていることが確認されたため、翌年度にその部分の調査を実施した。

松ノ木遺跡は、平成元年度に調査したが、当初13,000㎡を調査対象としていたところ、範囲確認調査の結果、調査対象地の南半分の遺構・遺物が希薄であったため調査面積を縮小したが、沖積平野部では県下でも発見例のない縄文時代晩期の住居跡や弥生時代中期の方形周溝墓が検出されるなど貴重な遺構が発見された。

なお、発掘調査にあたって、昭和63年度は三重県教育委員会事務局文化課が担当したが、平成元年度からは、県教育委員会規則により設置された三重県埋蔵文化財センターが担当することとなった。

また、担当職員の増員の必要から県教育委員会職員に加え、津市教育委員会と「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づく協定を締結して派遣職員を得たほか、臨時的調査補助員も確保して発掘調査に万全を期した。



	遺跡名	所在地		遺跡名	所在地
24	六大B遺跡	津市大里窪田町字竹村 他	34	宮ノ前遺跡	津市長岡町字宮ノ前
25	橋垣内遺跡	〃 〃 字橋垣内	35	森山東遺跡	〃 〃 〃
26	大古曾遺跡	〃 一身田大古曾字山ノ口 他	36	太田遺跡	〃 〃 字太田
27	新池2号墳	〃 一身田上津部田字ノノ坪	37	松ノ木遺跡	〃 安東町字樫ノ木
28	新池1号墳	〃 〃 字小広	38	蔵田遺跡	〃 納所町字西澤田
29	西岡1号墳	〃 〃 字西岡	39	位田遺跡	〃 北河路字位田
30	西岡2号墳	〃 〃 〃	40	替田遺跡	〃 南河路字替田
31	山籠遺跡	〃 〃 字山籠	41	式ノ坪遺跡	〃 野田字式ノ坪
32	門脇北古墳	〃 〃 字門脇	42	里前遺跡	〃 〃 字里前
33	コウゼンジ遺跡	〃 〃 〃	43	鎌切3号墳	〃 神戸字鎌切

第1図 中勢道路（9・10工区）内遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院1：25,000 棕本・白子・津西部・津東部）

Ⅱ. 位置と歴史的環境

1 位置

津市は、伊勢平野のほぼ中央部に位置する。西には、布引山地の連山が南北に連なり伊賀地方との分水嶺となり、東は穏やかな伊勢湾に臨んでいる。鈴鹿山脈・布引山地に水源を發する志登茂川・安濃川・岩田川などの河川が、東西方向に發達した台地・丘陵にそって東流し伊勢湾に注いでいる。これらの河川は、流域に沖積作用を及ぼし肥沃な沖積平野を形成している。ことに安濃川の流域は長く、沖積地の広がりも広く、これを基盤にして古くから開けてきた。

森山東遺跡(35)・太田遺跡(36)・松ノ木遺跡(37)は、安濃川左岸の沖積地にあり、北側には標高50mほどの見当山・長岡丘陵が広がり、その裾を安濃川の支流美濃屋川が流れている。これらの遺跡は、沖積地内に形成された自然堤防などの微高地上に立地している。

2 歴史的環境

伊勢地方の中央部では、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。

津市西方約12kmの安芸郡美里村西出遺跡(1)では、縄文時代早期の大鼻式・大川式・神宮寺式の土器を出土し、主体をなす大川式のa式が2類に細分される可能性を示唆した。早期の押型文土器は、亀山市大鼻遺跡・松阪市鐘突遺跡・同鴻ノ木遺跡・多気町坂倉遺跡などの出土例があり、近年その編年的位置付けが明らかにされつつある。

これらの遺跡は、海岸線からやや内陸部の丘陵地に立地している。また、東浦遺跡(2)や橋垣内遺跡(25)でも押型文土器片が出土している。

前期は、遺跡・遺物とも県内で最も遺跡数が少ない時期となっており、この地域でも早期から晩期までの土器を出土する芸濃町北奥遺跡・安濃町蛇ヶ谷・合野遺跡(3)での出土が知られている程度である。中期には、遺跡数も増加し若林遺跡(4)・大里西沖遺跡(5)・東浦遺跡が志登茂川流域に、芸濃町雲

林院青木遺跡・同大石遺跡などが安濃川流域に確認されている。大石遺跡では、中期後半の竪穴住居3基等が調査された。主体となる深鉢は、現状では県下の他遺跡では、類例をあまり見い出せない土器群である。

後期には、松ノ木遺跡・北奥遺跡・雲林院青木遺跡からの出土が知られるのみで調査例が少ない。

晩期には、沖積地への進出が著しく遺跡の数も増え、松ノ木遺跡・納所遺跡(6)・橋垣内遺跡A地区・四ツ野B遺跡・北奥遺跡のほか、安濃町多倉田遺跡(7)・辻の内遺跡(8)・平田古墳群(9)で土器の出土が確認されている。四ツ野B遺跡では、埋設甕の出土が確認されており、これらの土器は、条痕文土器を主体としている。

弥生時代には、安濃川流域を中心にして多くの遺跡が営まれるようになる。伊勢湾西岸へ到達した弥生文化は、伊勢平野を形成する河川流域に拠点的な集落を形成していたと考えられる。雲出川の支流三渡川右岸の三雲町中ノ庄遺跡に前期中段階の遠賀川式土器をもたらししている。この遠賀川式土器は、漸次北上し安濃川の納所遺跡、鈴鹿川流域の鈴鹿市上箕田遺跡、四日市市永井遺跡へと受け継がれていく。この安濃川流域でも納所遺跡のほか上村遺跡(10)で前期新段階の土器が出土した。

中期になると、安濃町北端遺跡(11)・平田遺跡(12)・亀井遺跡(13)・長遺跡(14)・山籠遺跡(31)などが丘陵地に出現してくる。平田遺跡では、中期前半から中葉の円形の竪穴住居3基、山籠遺跡では中期後葉の方形乃至は長方形の竪穴住居10基が確認されている。また、松ノ木遺跡、納所遺跡では、方形周溝墓も確認されている。

後期になると遺跡数は、急増しており、弥生文化の浸透が窺われる。安濃川左岸の見当山丘陵裾には養老遺跡(15)・森山遺跡(16)・森山東遺跡・桐山遺跡(17)・竹川遺跡(18)が調査されており、安濃川右岸の半田丘陵上には、高松遺跡(19)・尺目遺跡(20)・大ヶ瀬遺跡(21)・野田遺跡群(22)・平栄遺跡(23)



第2図 中勢道路内遺跡位置図 (1 : 50,000) (国土地理院 1 : 25,000 棕本・白子・津西部・津東部)



が調査されており、右岸上流でも多倉田遺跡(7)・浄土寺南遺跡(45)・北浦遺跡(46)等が知られている。

この時期の墳墓には、高松弥生墳墓(47)・大ヶ瀬弥生墳墓(48)や高松C遺跡(49)鎌切遺跡(50)で方形周溝墓が確認されている。

この地域は、県内でも銅鐸の出土が多いことでも注目されている。安濃川右岸の半田丘陵の神戸(74)・野田・高茶屋で銅鐸の出土が報告されている。神戸銅鐸は、外縁付鈕2式で2区に流水文を施し、大阪府恩智銅鐸と同范である。野田銅鐸は、突線鈕Ⅲ式で横帯文を施す。高茶屋銅鐸は、突線鈕Ⅱ式であり、複数が出土したと言われる。また、野田銅鐸は三遠式、神戸・高茶屋銅鐸は近畿式に属しており、両者の重複する地点にあたり、弥生文化の複雑さを示している。さらに、安濃川流域では、左岸にはその出土が報告されていないことも、小地域における弥生文化のあり方を知る上で興味深い。

古墳時代には弥生時代から引き続き生産力の向上を見たと考えられ、それを背景に壮大な墳墓も築かれるようになる。弥生時代末期には、安濃町前田遺跡(51)・同大城遺跡(52)の方形台状墓が築かれている。大城遺跡では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置づけられる9基の方形台状墓が確認された。こうした方形台状墓は、古墳時代にも引き継がれ、坂本山古墳群(53)などの出現をみる。坂本山古墳群は、3基の円墳と5基の方形墳で構成され、木棺直葬の主体部には僅かな鉄製武器・工具が副葬されるのみであり、円墳の墳麓に供献されたと考えられる古式土師器壺・器台から4世紀末の築造と考えられ、安濃川流域の古墳群では最古の位置を占める。これらの古式古墳群の様相は、前代の方形台状墓と隔絶的な相違点を見いだしがたい。

安濃川流域でも、5世紀前半になると大型の古墳の出現がみられる。中流域の明合古墳(54)は、一辺60mの方墳で、南北に方形の造出しをもち、二段築成の墳丘には葺石及び埴輪が認められている。周辺には、方墳の陪塚を数基伴う。一方、下流域の垂水池ノ谷古墳(55)は、全長約80mの前方後円墳で伊勢湾西岸でも最大級の古墳であり、埴輪の存在も確認されている。

安濃川流域では、上流から甲南4号墳(56)・前野

1号墳(57)・御屋敷跡13号墳(58)・殿村1号墳(59)・おこし古墳(60)・鎌切1号(61)・鎌切3号墳(62)の前方後円墳が右岸に築かれている。

古墳時代後期には、標高320mの長谷山の東方山麓を中心に横穴式石室を内部主体とした400基以上と推定される長谷山古墳群(63)をはじめ、多くの群集墳が営まれる。調査された古墳群には、埋葬施設に小石室を採用する安濃町山ノ下B古墳群(64)、方墳で構成されるメクサ古墳群(65)、一つの円墳に2つの横穴式石室をもつ1号墳を含む安濃町大塚古墳群(66)、前方後円墳3基を含む鎌切・稲葉古墳群(67)、堅穴系横口式石室を埋葬施設とする13号墳を含む中大谷古墳群(68)、5世紀中頃の木棺直葬による古墳築造を端緒とし、その後横穴式石室の採用を経て7世紀前半期に盛行期を迎える平田古墳群(9)などがある。これらの古墳群は、既に5世紀代に出現しているが、築造のピークは、6世紀後半から7世紀初頭である。

一方、元井池古墳(70)・安濃町堂山1号墳(71)・日余1号墳(72)などは、木棺直葬墳で埴輪を伴い、6世紀前半に築造されたものである。また、君ヶ口古墳(73)は、全長24mの帆立貝式の前方後円墳で横穴式木芯室という特異な埋葬施設をもち6世紀前半に築造されている。これらの古墳も7世紀後半に入ると追葬が行われるのみで、新たな古墳の造営はなくなり、終末をむかえる。

また、7世紀前半の築造と考えられている鳥居古墳では、家形石棺をもつ石室内から金銅製押出仏が出土し、近隣に位置する奈良時代前期の四天王寺廃跡(69)との関係も注目されている。

古墳時代集落の調査は、安濃川流域での調査例は少なく、前期の5世紀中頃に比定できる堅穴住居8基が確認された新畑遺跡(75)が知られる程度でこの分野の研究は今後の大きな課題となっている。一方安濃川流域と見当山丘陵を介して広がる志登茂川流域では中鶯遺跡(76)で前期の堅穴住居4基、川北遺跡(77)で同時期の堅穴住居75基が調査されており志登川流域では、古墳時代前期の人々の確実な定住が裏付けられる。しかしながら、この集落を背景にした、前期古墳が確認されていないことは、安濃川流域と対照的である。それは、盟主的存在の支配領域

の広がりともみるかは、今後の調査事例の増加をまっ
て検討すべき課題であろう。

律令期には、条里制も施行されたと考えられ、そ
の生産力を背景に集落跡も増加している。

この地域における条里制は、概ね菴芸郡、安濃郡
一志郡に共通した地割りとなっていることが、明ら
かにされている。すなわち、伊勢湾西岸では、伊勢
湾の海岸線に平行して施行されており、中ノ川流域
から雲出川北岸までは、阡線がN30° Eとなる条里
地割が卓越している。

森山東遺跡・太田遺跡は七条三里に含まれ、松ノ
木遺跡は七条四里内に位置している。森山東遺跡B
地区上層で確認されたSD15は、約N 120° Eの方
位を取り東流していることから坪界を流れる条里溝
と考えられ、平安時代後期から室町時代の遺物を出
土している。この条里地割は、圃場整備以前までは
良くその景観を留めていた。

一方、志登茂川流域では、一身田町から大里窪田
町地内の中勢道路建設地周辺までに条里地割を認め
ることができる。一身田町内には、「一ノ坪」等の
条里名と地籍図が残され、条里地割の復元が可能で
ある。また、志登茂川左岸の沖積地及び丘陵には、
「い之坪」等の「いろは」の付く条里地名が残され、
もとは条里が行なわれていたのではないかとされる。

しかし、志登茂川右岸の上津部田の丘陵に「イノ
坪」等の「イロハ」の付く条里地名が残されている
ことと、両地域の地形から「いろは（イロハ）」の

条里地名の残されている地域は、実際には条里地割
は、行われなかったと考えられ、志登茂川左岸の沖
積地は、この時期には、志登茂川の氾濫原を形成し
ていたと考えた方が妥当性をもつ。

この中勢道路建設に伴い、発掘調査を行った六大
B遺跡(24)では、70数棟の掘立柱建物を確認して
おり奈良時代と推定される建物群は、規則性が強くこ
の条里地割の方向とほぼ一致する。平安時代にいた
るとやや北寄りに変化していくが、概ねこの条里地
割に規制されて集落が営まれたことを示している。

しかし、六大B遺跡に南接する橋垣内遺跡は、飛
鳥時代からの掘立柱建物が70棟以上確認されてい
るが、その建物方向は、不統一である。両遺跡の性
格にも起因するであろうが、この二つの遺跡の盛衰
の過程で、条里制が施行されたと考えられる。

これらの遺跡の西には、奈良時代から平安時代の
大型掘立柱建物が確認された安養院跡(78)が位置し、
この遺跡からは、陰刻花文をもつ緑釉陶器が出土し
ている。また、先の六大B遺跡でも約400点を数え
る緑釉陶器の出土と相まって、「和同開珎」銀銭や
石帯、硯等も出土しており、平城宮跡出土木簡に
「伊世国菴伎郡」(表)「久菩多里私部小□□」(裏)
にみえる久菩多里の官衙遺構と推定される。この地
域は、その後窪田郷、窪田庄、窪田御厨へと展開し
ていき、江戸時代には伊勢別街道筋の街並を形成し、
現在に至っている。(駒田 利治)

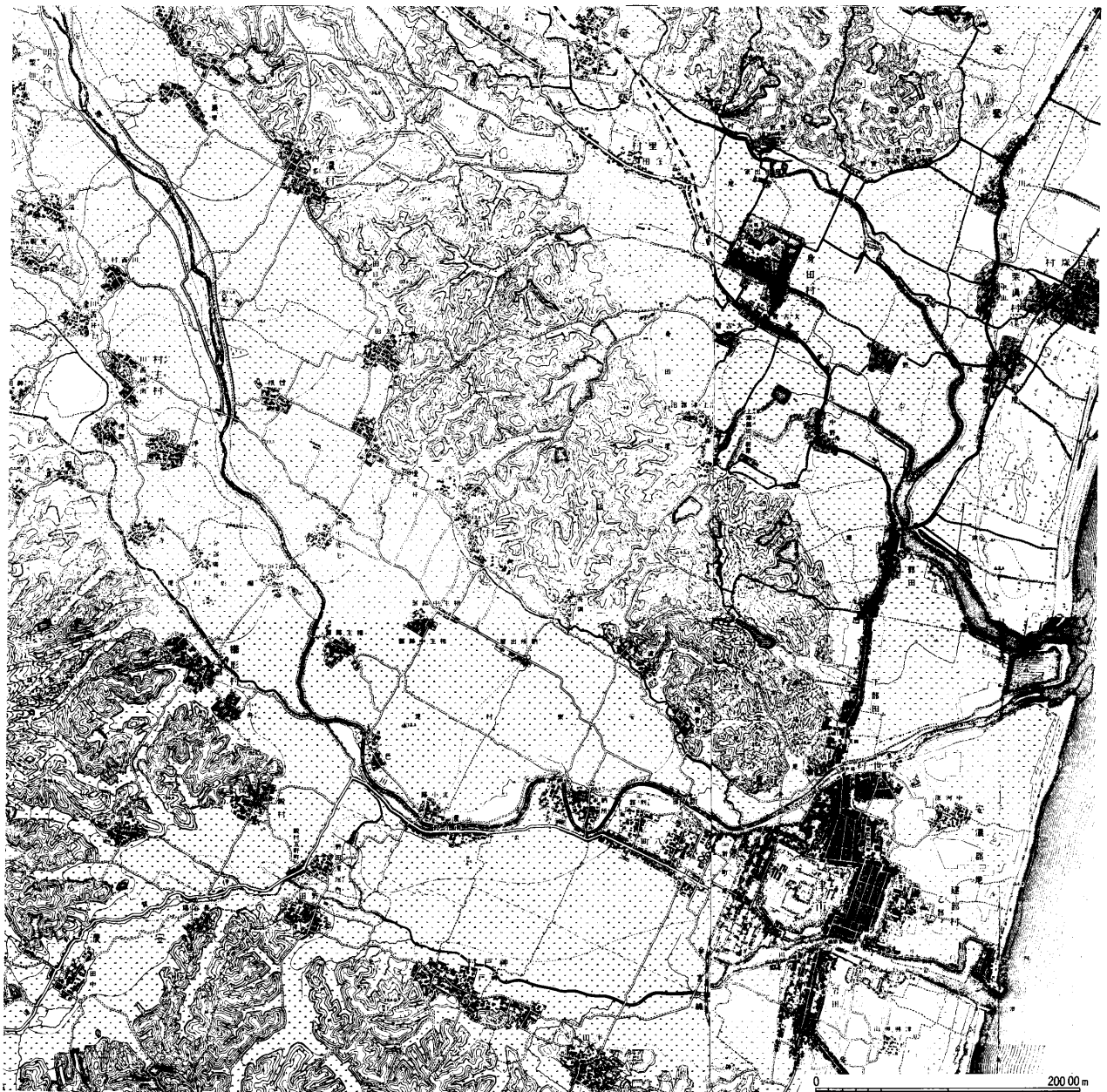
【参考文献】

堀田隆長「三重県安芸郡美里村西出遺跡」『日本考古学年報』42 1991
山田 猛「押型文土器群の型式学的再検討—三重県の前半期を中心にして—」
『三重県史研究』第4号 三重県総務部学事文書課 1988
清水正明・小林 秀「東浦遺跡・棕本南方遺跡ほか」三重県埋蔵文化財セン
ター 1993
森川幸雄・近藤 健「一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」
三重県埋蔵文化財センター 1991
伊藤裕偉・森川幸雄「Ⅱ. 津市 大里地区内遺跡群」『平成3年度農業基盤
整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第1分冊—』三重県
埋蔵文化財センター 1992
『平成2年度三重県埋蔵文化財センター年報2』三重県埋蔵文化
財センター 1991
伊藤徳也・森川幸雄「Ⅲ. 安芸郡芸濃町棕本大石遺跡」『平成3年度農業基
盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第1分冊—』三重
県埋蔵文化財センター 1992
伊藤久嗣・吉水康夫「納所遺跡—遺構と遺物—」三重県教育委員会 1980
早川裕巳「多倉田遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1981
伊藤克幸「辻の内遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘
調査報告』三重県教育委員会 1976
伊藤秋男他「平田古墳群」安濃町遺跡調査会 1987

谷本鋭次他「中ノ庄遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1972
仲見秀雄他「鈴鹿市 上箕田遺跡」三重県文化財連盟 1961
仲見秀雄他「上箕田遺跡 弥生式遺跡第二次調査報告」鈴鹿市教育委員会
1970
伊藤 洋「補論」『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会 1973
吉村利夫「上村遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1972
伊藤克幸「(付)北端遺跡」『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財
発掘調査報告』三重県教育委員会 1976
谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵
文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1973
萱室康光「長遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1989
増田安生「山籠遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
三重県埋蔵文化財センター 1990
下村登良男他「養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告—付・竹川遺跡—」
三重県教育委員会 1972
三重大学歴史研究会「津市高松弥生遺跡について」『古代学研究』37 1964
萱室康光「尺目遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1975
谷本鋭次他「山口遺跡・大ヶ瀬遺跡・平栄遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財
発掘調査報告Ⅰ』三重県文化財連盟 1973

浅生悦生他「野田遺跡群発掘調査報告」津市教育委員会 1974
 中村信裕「安芸郡安濃町 浄土寺南遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地
 域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981
 谷本鋭次「高松弥生墳墓発掘調査報告」津市文化財保護協会 1970
 津市教育委員会「稲葉・鎌切古墳群」『三重県埋蔵文化財年報15』三重県教
 育委員会 1985
 山田 猛「安芸郡安濃町 前田遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋
 蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983
 田中秀和「三重県安芸郡安濃町大城遺跡群」『日本考古学年報』43 日本考
 古学協会 1992
 小玉道明他「坂本山古墳群・坂本山中世墓群」津市教育委員会 1970
 三重大学歴史研究会「三重県安芸郡明合方墳について——三重県主要古墳基
 本調査3——」『ふびと』23 1965
 三重大学歴史研究会「伊勢湾西岸における前方後円墳——三重県主要古墳基
 本調査7——安濃川流域の前方後円墳」『ふびと』29 1968
 三重大学歴史研究会「長谷山群集墳分布調査報告」『ふびと』40 1983
 吉村利男「山ノ下B古墳群」『三重県埋蔵文化財年報12』三重県教育委員会
 1982

三重大学歴史研究会「メクサ4号墳発掘調査報告」津市教育委員会 1972
 萱室康光他「メクサ3号墳発掘調査報告」津市教育委員会 1991
 新田 洋「大塚古墳」『三重県埋蔵文化財年報11』三重県教育委員会 1981
 浅生悦生「中大谷13・16号墳発掘調査報告」安濃町遺跡調査会 1988
 三重大学歴史研究会「元井池古墳発掘調査報告」津市教育委員会 1969
 三重大学歴史研究会「堂山一号墳」安濃村教育委員会 1974
 吉村利男「近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告——日余1号墳——」三
 重県教育委員会 1974
 萱室康光「君ヶ口古墳発掘調査報告」津市教育委員会 1974
 吉村利男「新畑遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1973
 萱室康光「中馬遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1977
 萱室康光「川北遺跡・川北城址調査概要」『三重の古文化』19
 仲見秀雄「菟芸・安濃・一志郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』
 1979
 萱室康光他「安養院跡発掘調査報告」津市教育委員会 1990
 三重県埋蔵文化財センター「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報
 報告」I～V 1989～1993



第3図 明治27年陸地測量部地形図(1:50,000)

Ⅲ. 津市安東町 松ノ木遺跡

1. 位置と地形

松ノ木遺跡は、安濃川と美濃屋川に挟まれた沖積地に立地する遺跡で、地形的には微高地から低湿地へと移行する箇所であり、太田遺跡より南に300mほど距離をおく。また、中勢地域で代表的な弥生遺跡である納所遺跡^①は、東へ約1,000mに位置する。このため、松ノ木遺跡でも当初から弥生時代を中心とした遺跡となる期待がもたれた。

付近一帯は昭和45年頃からのほ場整備によって、条里遺構の残っていた旧来の水田景観からは大きく変容しているものと思われ、発掘調査による旧地形の復原も課題であった。

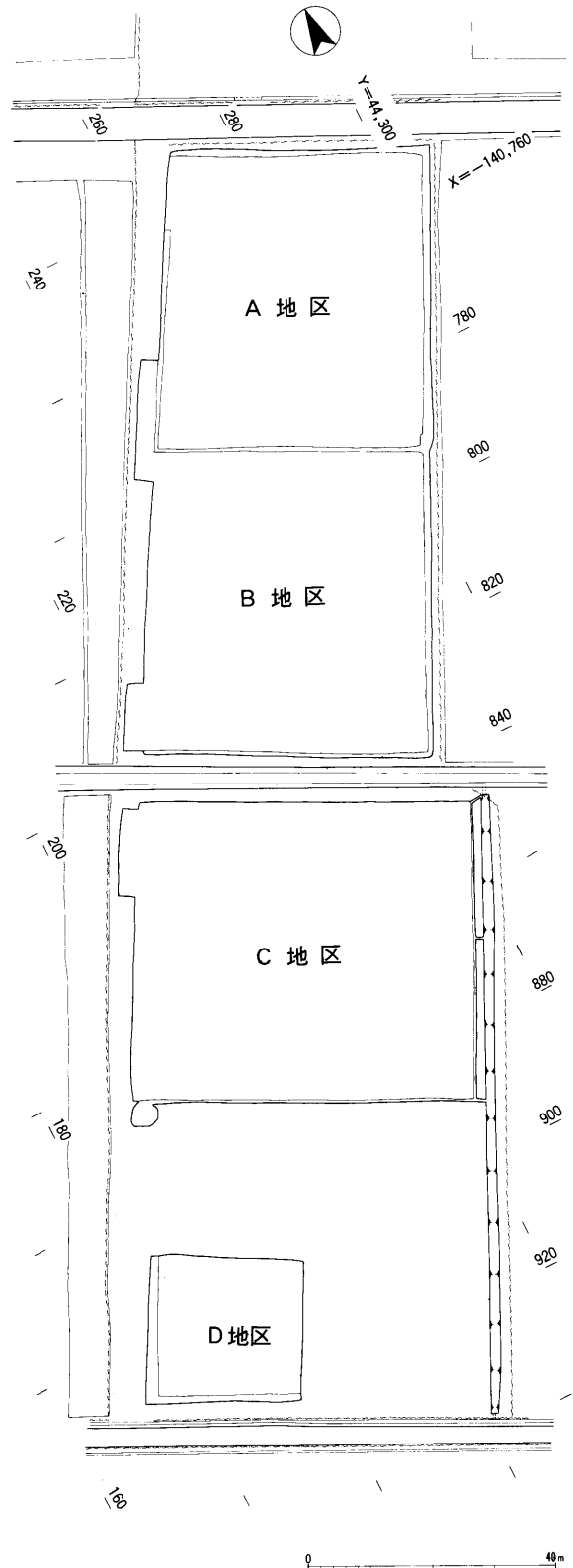
遺跡の範囲としては、さらに東西に広がると考えられるが、このうち路線内の13,000㎡ほどが調査の対象となったが、遺構密度などを考慮に入れて、最終的には7,800㎡について発掘調査を実施した。

調査期間は、平成元年の4月11日より同2年1月6日までで、調査はC地区より開始し、D地区、A地区、B地区の順に進めていった。各地区の調査面積は、A地区が1,800㎡、B地区が2,200㎡、C地区が2,600㎡、D地区が1,200㎡である。

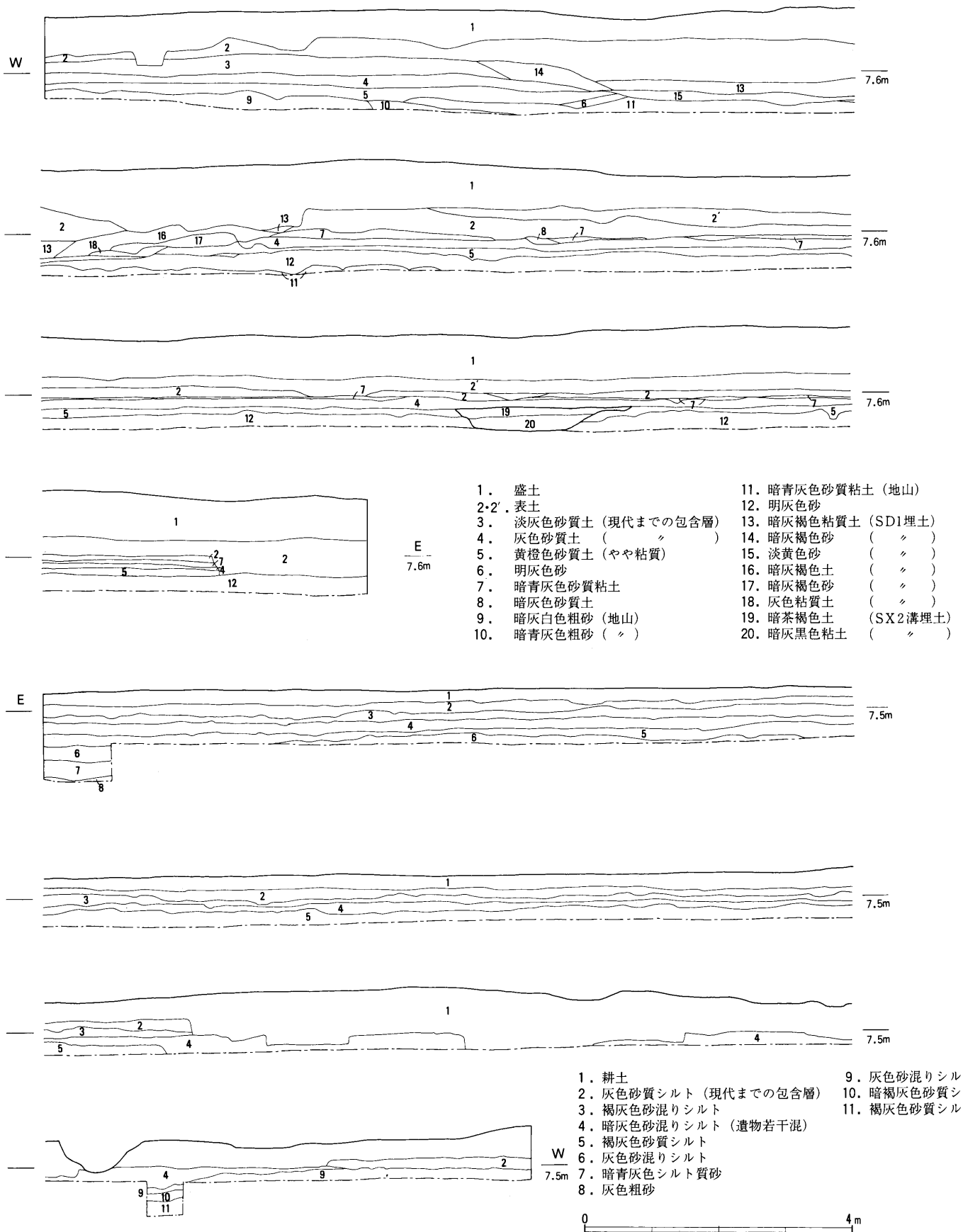
また、調査後の遺構実測は、C・D地区については国土座標を活用した平板測量および縮尺1/20の遣り方実測を併用し、A・B地区については、ヘリコプターによる空中写真測量に拠った。

2. 遺 構

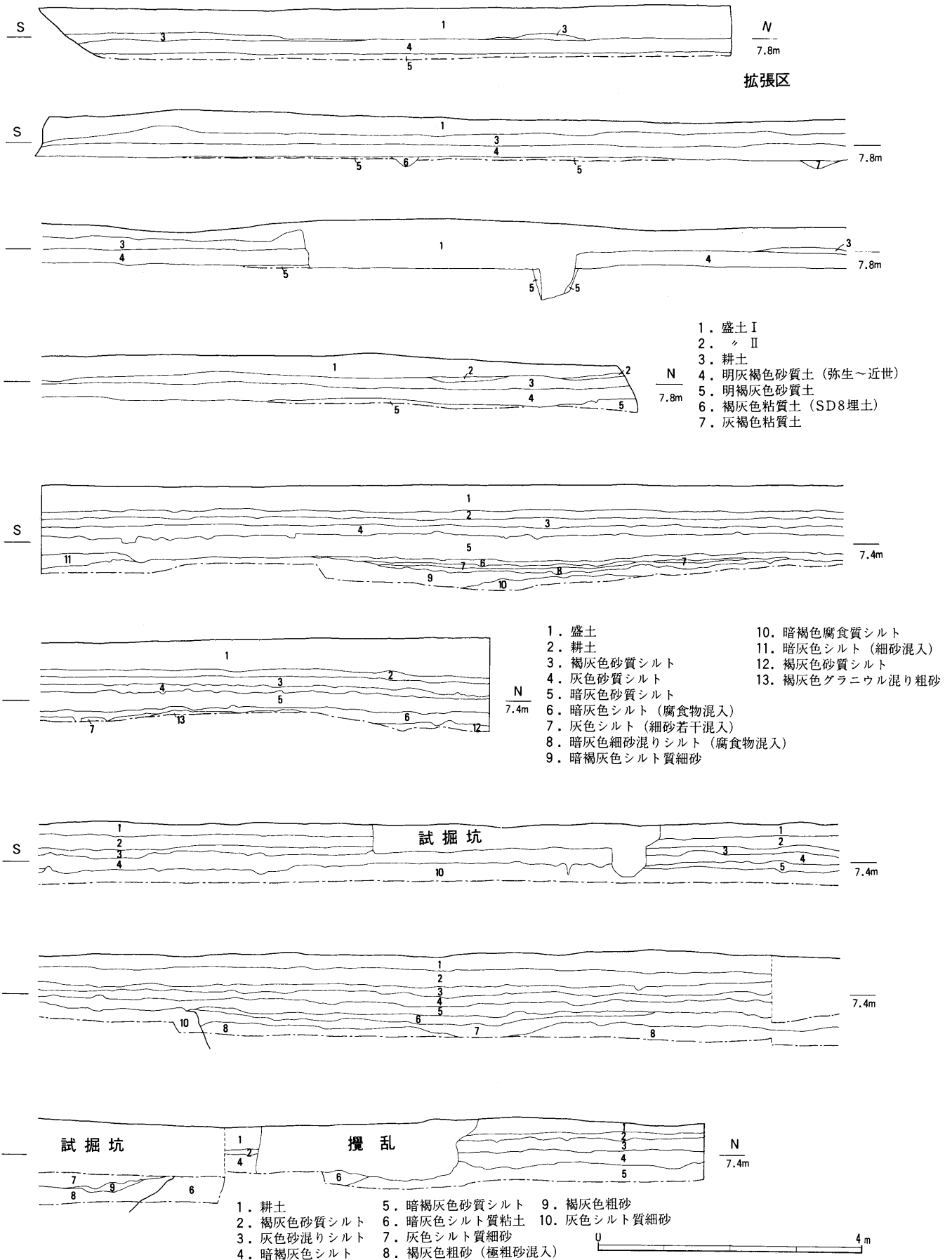
松ノ木遺跡は、全体として遺構密度は低いものであったが、A～D地区のうち、A地区から竪穴住居1棟、方形周溝墓1基、旧河道1条、溝状遺構1条、土坑2基、落込み遺構1基が検出され、B地区では方形周溝墓1基、溝状遺構2条が、C地区からは方形周溝墓2基と溝状遺構1条、土坑1基などが検出されたが、D地区からは明確な遺構は検出されなかった。



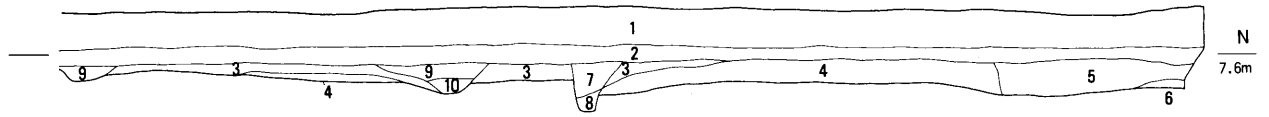
第4図 調査区配置図 (1 : 1,200)



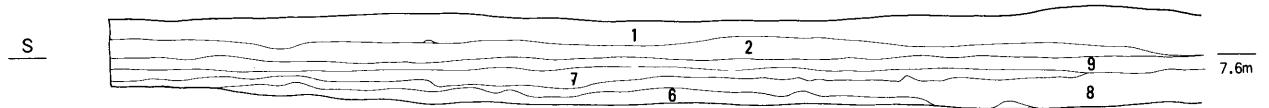
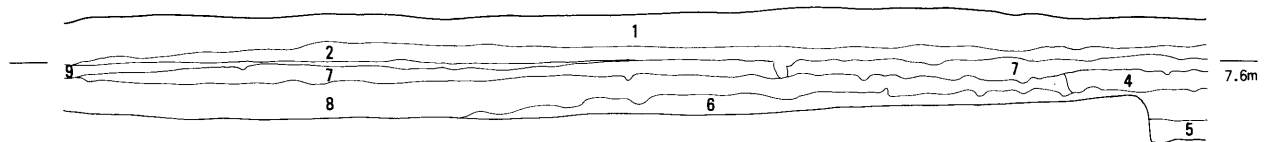
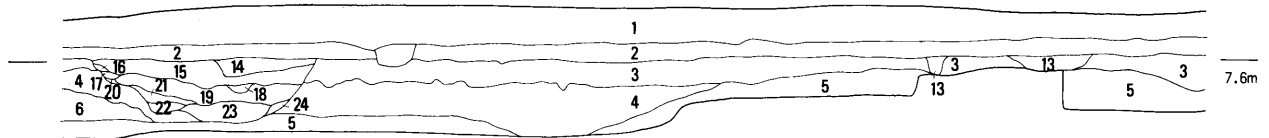
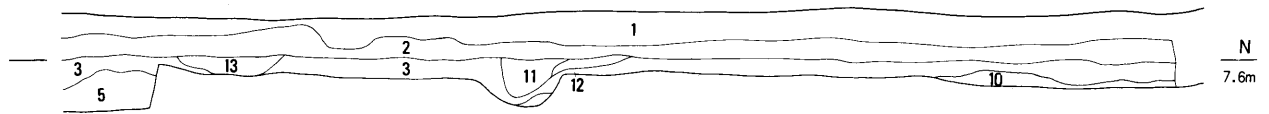
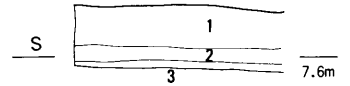
第5図 A・B地区土層断面図〈1〉〔上; A地区北壁, 下; B地区南壁〕(1:80)



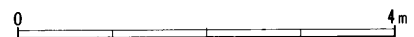
第6図 A・B地区土層断面図〈2〉〔上；B区西壁，中；拡張区西壁，下；A区西壁〕（1：80）



- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. 盛土 | 6. 淡灰褐色砂質土 (明褐色土混り) |
| 2. 耕土 | 7. 暗灰茶色砂質土 (細礫を含む) |
| 3. 暗灰茶色砂質土 | 8. 暗灰褐色粘土 |
| 4. 明灰褐色シルト | 9. 灰茶色砂質土 |
| 5. 淡灰褐色粘土 (明褐色土混り) | 10. 明灰色粘土 |



- | | | |
|--------------------|----------------|----------------|
| 1. 盛土 | 9. 灰色砂混り粘土 | 17. 茶褐色砂混りシルト |
| 2. 耕土 | 10. 褐灰色シルト質細砂 | 18. 茶灰色シルト |
| 3. 灰褐色砂混りシルト (旧耕土) | 11. 灰褐色細礫混りシルト | 19. 明灰色シルト |
| 4. 褐灰色砂質シルト | 12. 灰褐色シルト | 20. 灰色粗砂 |
| 5. 灰褐色砂礫 (粘土混り) | 13. 灰褐色砂質土 | 21. 灰褐色シルト |
| 6. 灰色砂礫 (シルト混り) | 14. 灰褐色粗砂 | 22. 青灰色粗砂混りシルト |
| 7. 黄灰褐色砂質シルト | 15. 灰褐色砂質土 | 23. 青灰色砂 |
| 8. 灰褐色シルト | 16. 暗黄灰色シルト | 24. 暗茶褐色砂質土 |



第7図 C地区土層断面図〈1〉〔上；拡張区西壁，下；拡張前西壁〕（1：80）

(1) 縄文時代

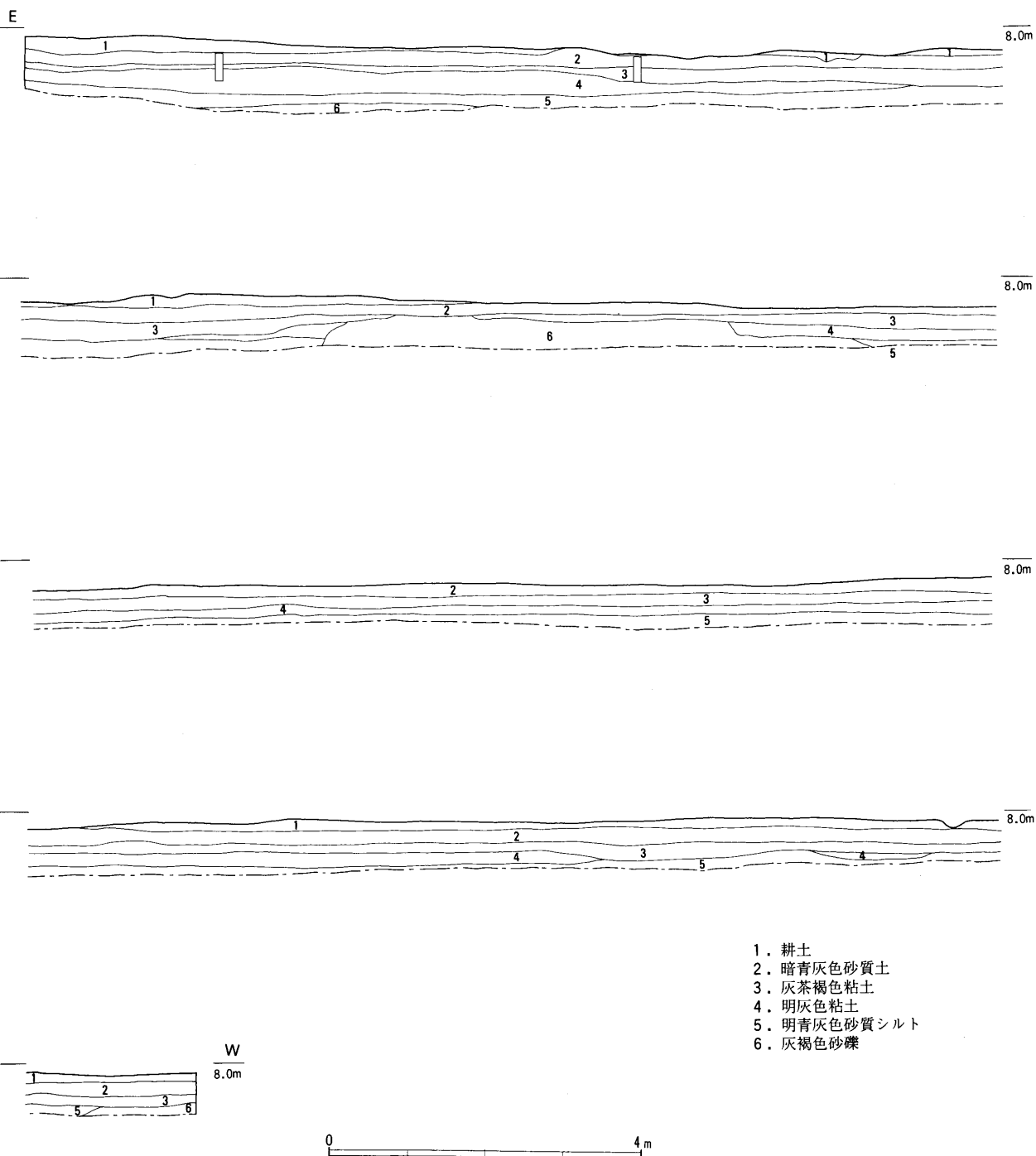
A 地区

竪穴住居 S H 6 A 地区の南西隅で全体の1/2弱ほどが検出されたが、落込み遺構 S Z 7 によって残りの部分は明瞭でない。住居跡のやや南寄りに、薄く炭化物の集積箇所がみられた。縄文晩期の土器が出土した。

土坑 S K 4・5 とともに旧河道 S R 3 の川岸に位

置する不定形の土坑で、若干の縄文土器が出土したが、遺構の形状からすると、あるいは風倒木など植物根によるものである可能性が考えられる。

旧河道 S R 3 調査区を北西～南東流する幅14～15m、深さ1.7m～2.7mの旧河道で、基本的な堆積層としては、淡青灰色砂礫層を最下層（第5層）とし、褐灰色粗砂層（第4層）、白灰色砂礫層（第3層）で、河道機能を失ってからの堆積層である褐色



第8図 C地区土層断面図〈2〉〔南壁〕(1:80)

砂質シルト層（第2層）および暗灰色細砂混じり粘土質シルト層（第1層）と続く。各層に遺物は含まれるが、第1層からは縄文晩期～弥生前期の土器が、第2層および第3層からは縄文晩期の土器および自然流木などが、第4層からは堅果類や木葉片、流木などの自然遺物が主として出土した。

落込み遺構S Z 7 堅穴住居S H 6を半分以上取り込み、調査区のさらに西側に広がるものと思われる。粘土およびシルト層が埋土となっており、沼沢地状の堆積物とみられる。縄文晩期の土器および堅果類が出土している。

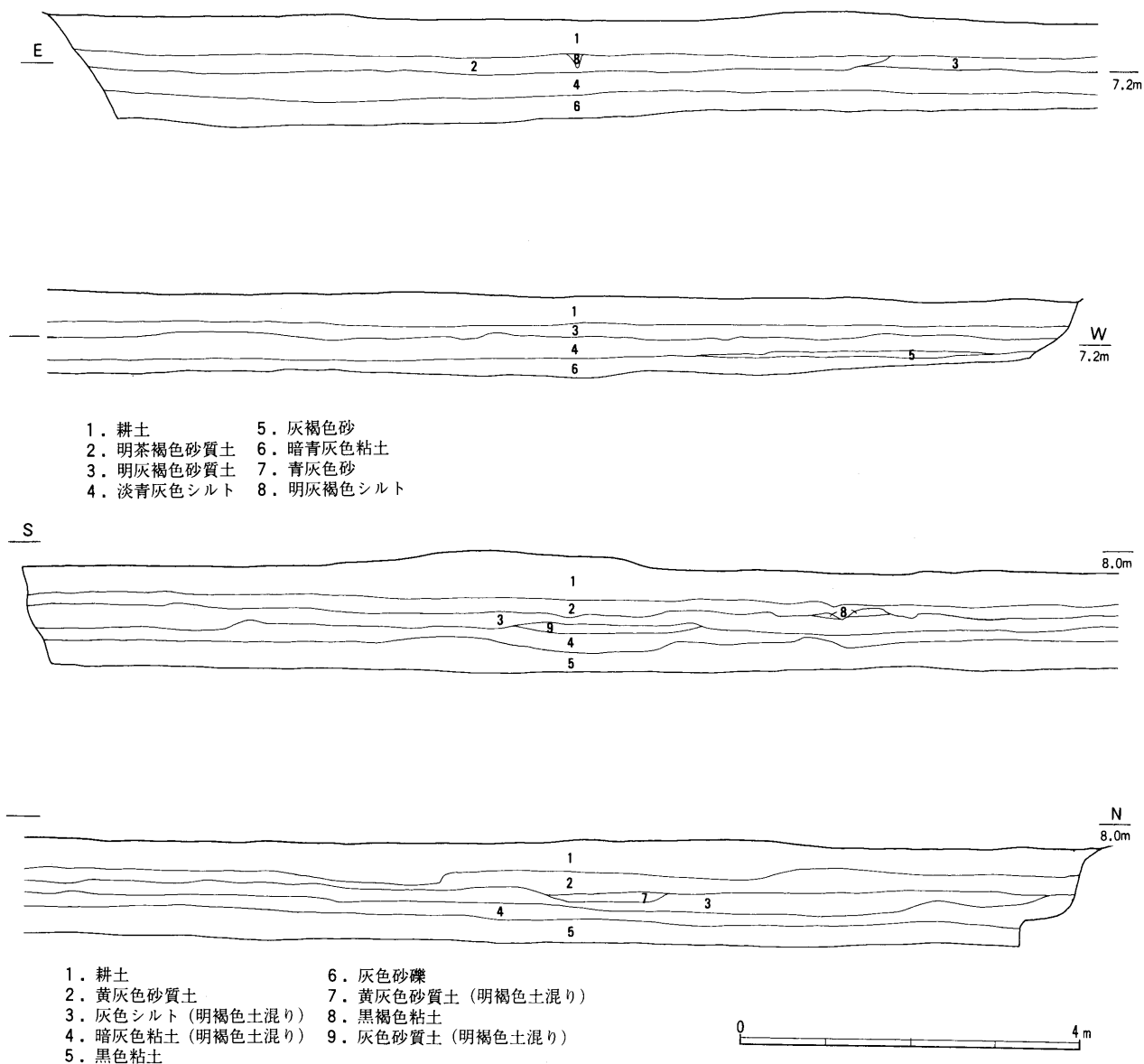
(2) 弥生時代

A地区

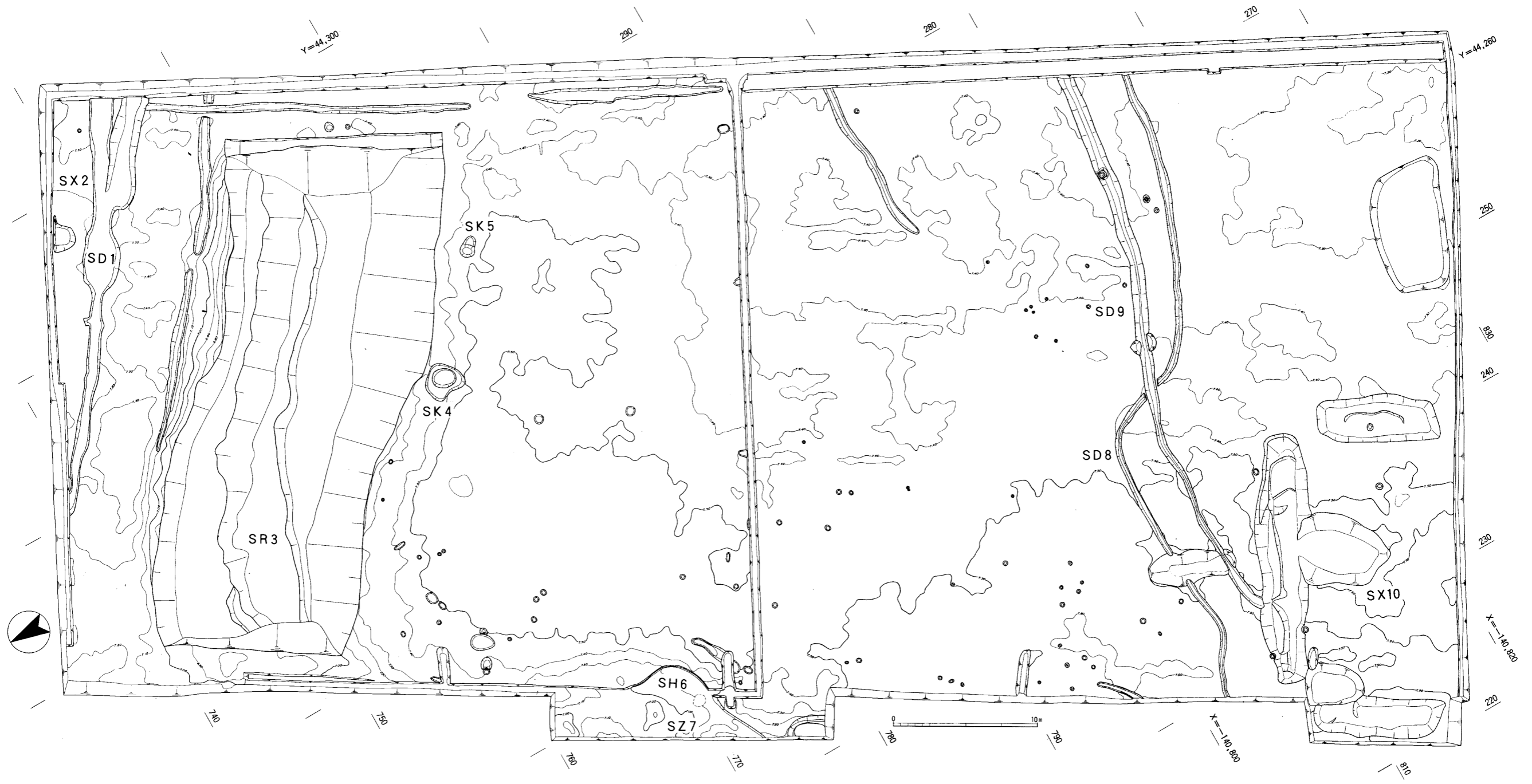
方形周溝墓S X 2 A地区の北東隅で溝の一部が検出された。遺物は出土しなかったが、他の方形周溝墓と比べ、溝の堆積層が同様であることや、隅部にブリッジをもつことから、S X 2も方形周溝墓と判断できる。墳丘盛土等は、削平されてまったく検出されなかった。

B地区

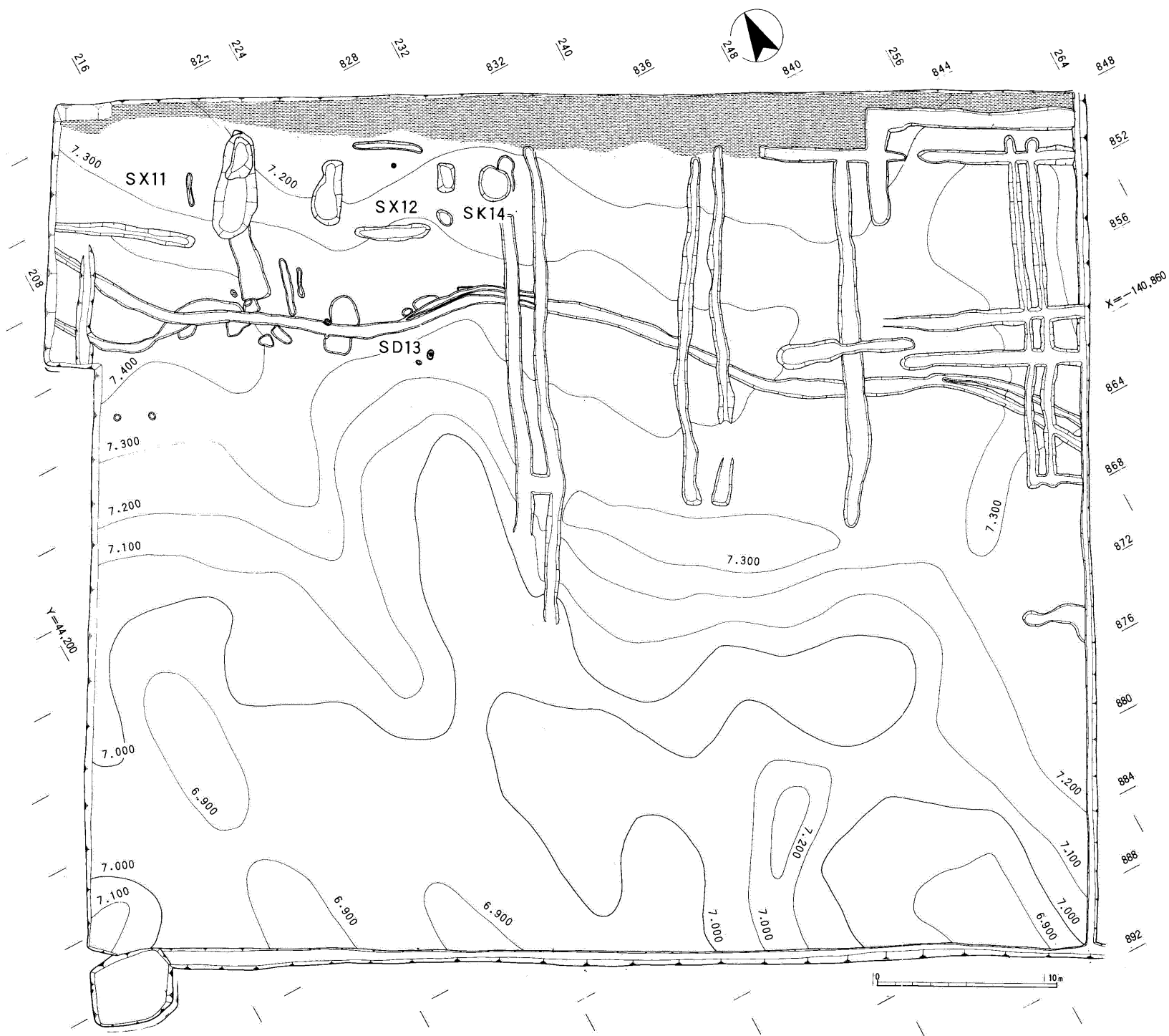
方形周溝墓S X 10 B地区の南西隅付近で、3方向の溝が検出された。四隅にブリッジをもつ形態のもので、墳丘部は長辺18.0m、短辺10.7m、長辺は溝の外側で計れば23.5mにもなる。墳丘盛土は削平



第9図 D地区土層断面図〔上：南壁，下：西壁〕



第10图 A·B地区遺構実測図 (1:300)



第11図 C地区遺構実測図 (1 : 300)

網目は旧用水路跡

されており、主体部も検出されなかった。

出土遺物として、北側溝から木製鋤や木片が出土し、西側溝からは弥生中期の土器と板状木製品が出土した。

C地区

方形周溝墓 S X 11 調査区の北西隅で、東・南の2方向の溝のみ検出され、他の溝は調査区外になる。盛土等はすでに削平されていて、検出されなかった。

他の方形周溝墓の状況から、おそらく四隅にブリッジをもつタイプと思われる。墳丘部で長辺9.0m以上、短辺6.8m以上となる。

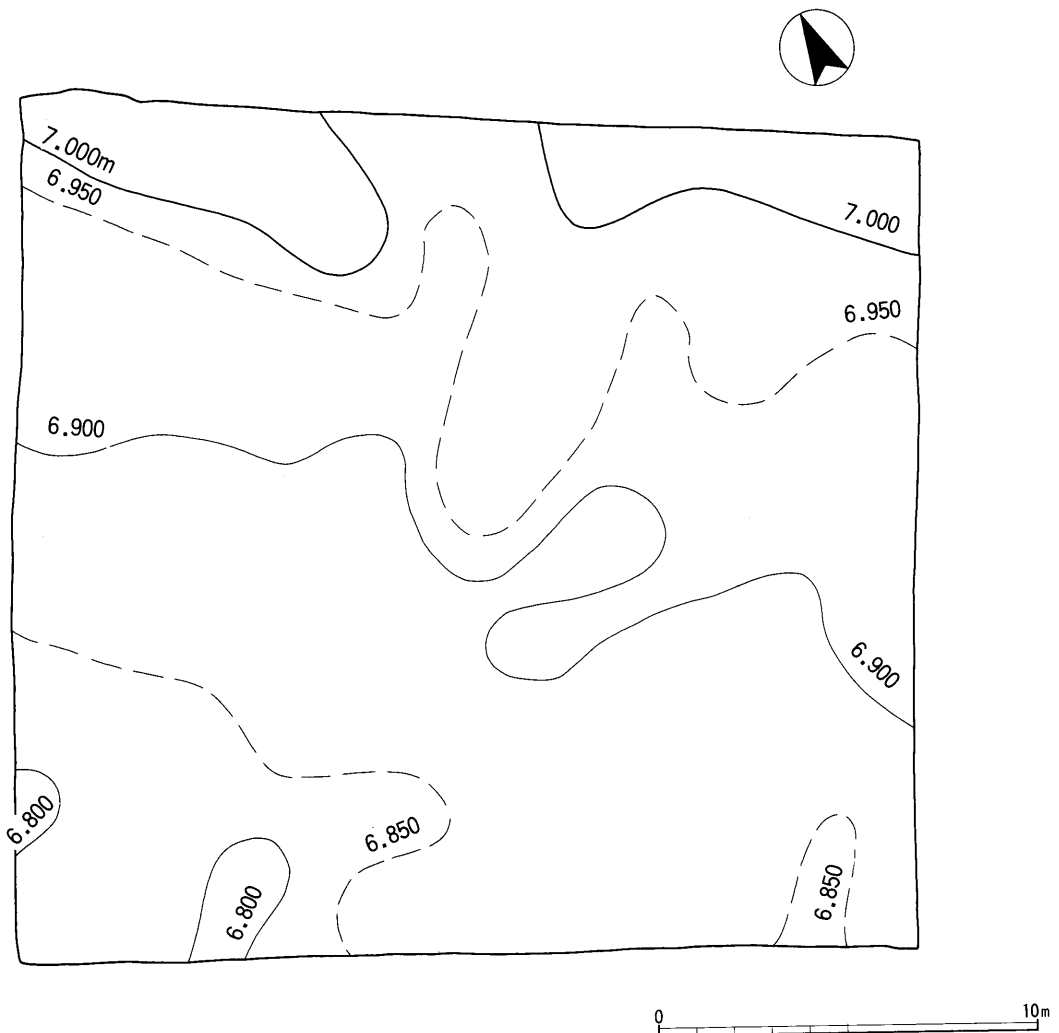
東溝から、弥生前期末の土器が出土しているが、小片であるため、本来 S X 11 に伴う供献土器であったかは不明であるが、他に同時期の遺構が認められないため、S X 11 が当時期に比定できるものと思われる。

方形周溝墓 S X 12 S X 11 のすぐ東に位置する。やはり四隅にブリッジをもつタイプのもので、墳丘部の長辺5.2m、短辺4.2mをはかり、溝を含めた規模は、長辺8.0m、短辺5.6mとなる。4基中では最も小型のものである。S X 11 とはほぼ方位が同じで、南北の溝が東西の溝と比べ、狭長なものである点など、両方形周溝墓は規格がよくとれている。東溝から弥生土器の甕形土器片が出土した。

(3) 古墳時代

C地区

溝 S D 13 調査区を東西に横切る溝で、やや蛇行気味に東に向かって流れていたものと思われる。溝は部分的に分流する箇所があり、幅0.8m、深さは0.3mほどをはかる。幅の細い溝で、一時的な自然流路と思われるが、古墳時代の遺物が出土している。



第12図 D地区等高線図(1:200)

(4) 時期不明の遺構

A地区

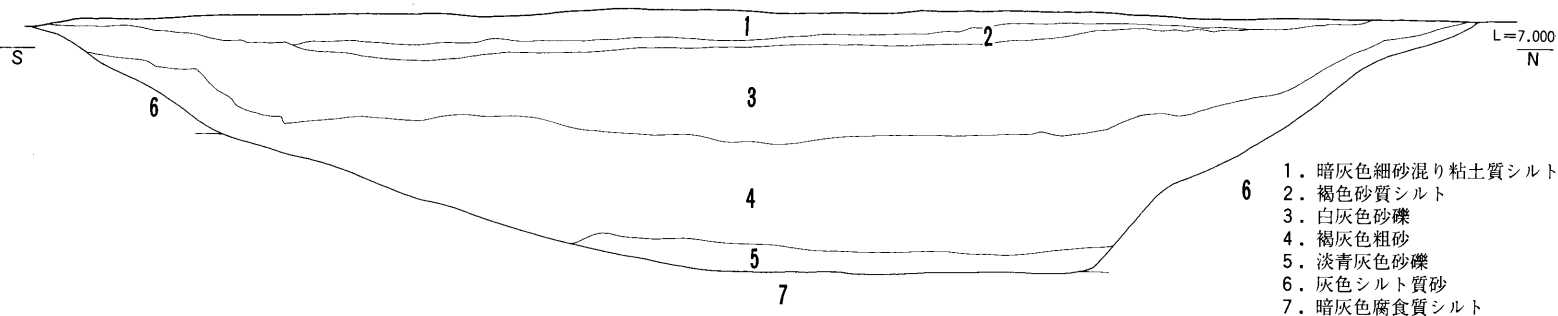
溝状遺構SD1 SD1は、A地区の北端で検出された、北西～南東流する幅0.5～2.6m、深さ0.1m以上の溝状遺構である。旧河道SR3とほぼ平行する方向で、方形周溝墓SX2と重複関係をもつが、ほ場整備以前の現代溝の痕跡である。

B地区

溝状遺構SD8・9 調査区を横断して東西流す

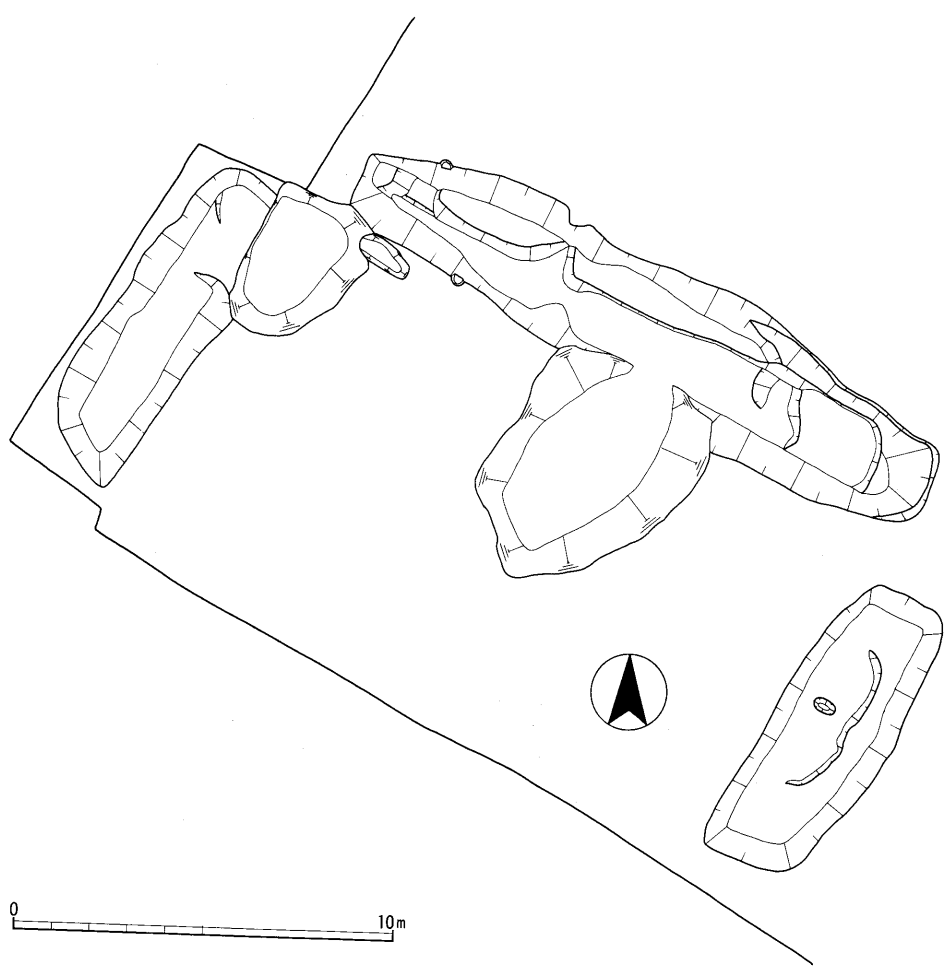
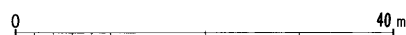
る溝状遺構で、SD9がほぼまっすぐに流れ、方形周溝墓SX10の北側溝に注ぎこむのに対して、SD8はやや蛇行して延び、調査区のほぼ中央付近でSD9と交差する。SD8がSD9に先行することが確かめられた。SD8が幅0.5m、深さ0.2mほどで、SD9も幅0.4～1.0m、深さ0.3mとなる。ともに一時的な流路跡とみられる。若干の遺物が出土したが、時期を知ることはできなかった。

C地区

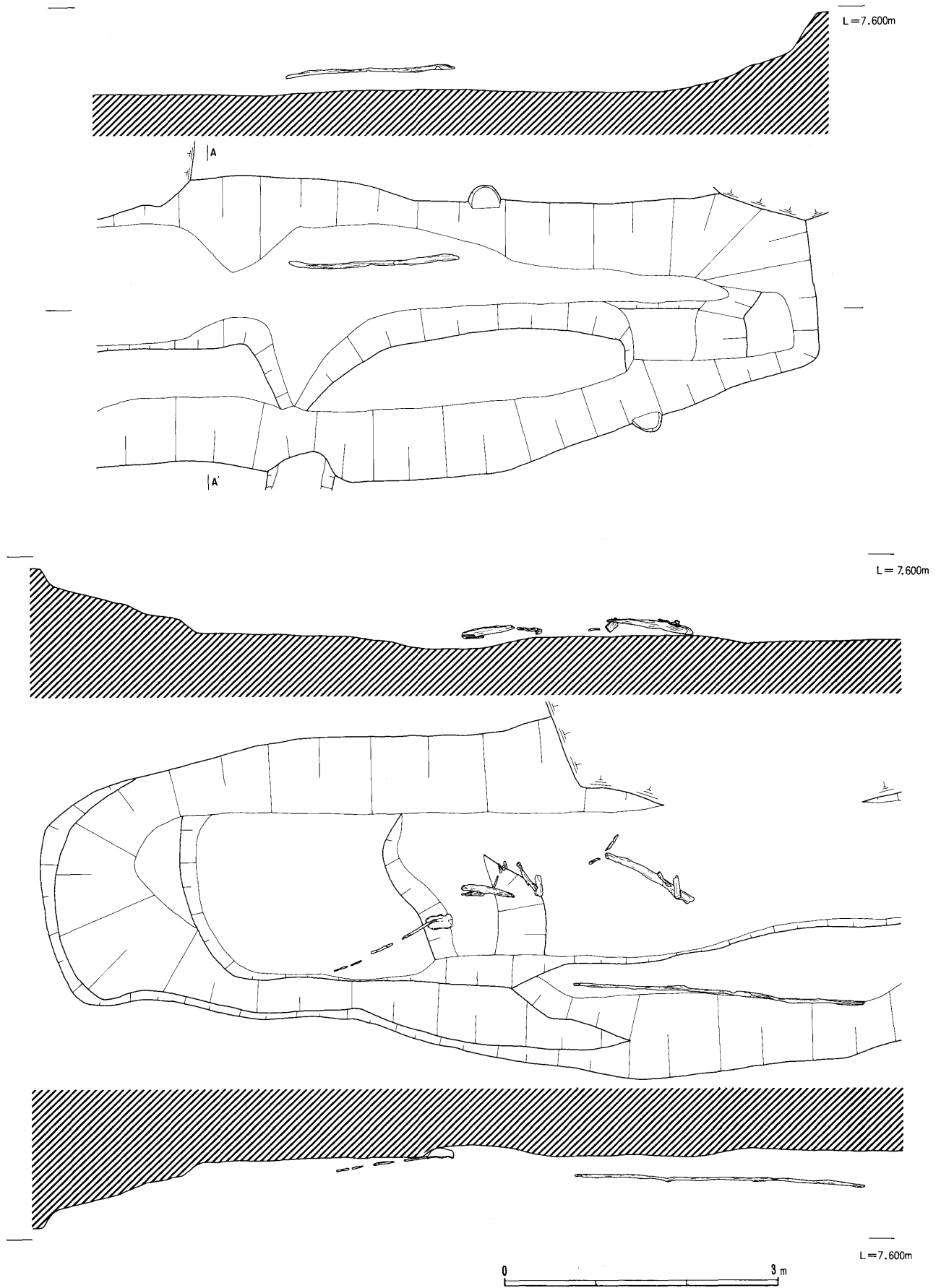


- 1. 暗灰色細砂混り粘土質シルト
- 2. 褐色砂質シルト
- 3. 白灰色砂礫
- 4. 褐灰色粗砂
- 5. 淡青灰色砂礫
- 6. 灰色シルト質砂
- 7. 暗灰色腐食質シルト

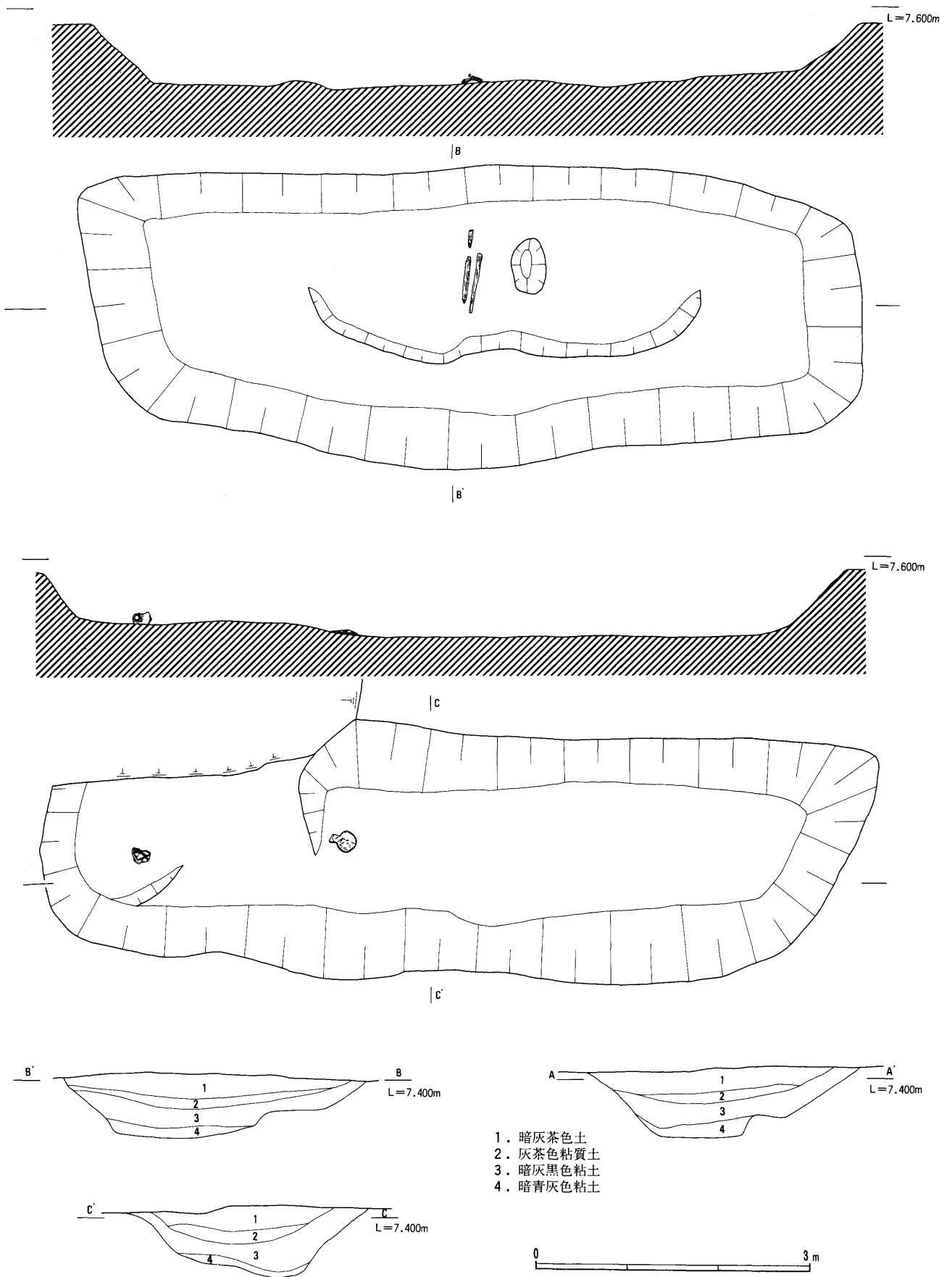
第13図 旧河道SR3 土層断面図 (1:120)



第14図 方形周溝墓SX10 遺構実測図 (1:200)



第15図 方形周溝墓S X 10 遺物出土状況図〔北溝〕(1 : 60)



第16図 方形周溝墓S X 10 遺物出土状況図〔上；東溝，下；西溝〕（1：60）

土坑S K14 S X12のすぐ東方に位置する土坑で、径1.8~2.0m、深さ0.4mをはかり、平面形はやや不整形な円形である。時期を示す遺物には恵まれていないが、わずかに曲物の側板が出土した。

3. 遺物

出土遺物の大半は、昭和45年頃のは場整備に伴う整地層から出土したもので、特にC地区に多く、遺物自体はすべて細片であり、縄文時代後期~江戸時代以降のものまで含まれていた。

遺構出土の遺物としては、縄文時代のものとして、A地区の旧河道S R 3から土器のほか、石器片・堅果類・木葉片・自然流木などがみられ、竪穴住居S H 6および土坑S K 4・5からは、それぞれ土器が出土した。

弥生時代の方形周溝墓4基のうち、遺物が出土したのは、方形周溝墓S X10とS X11で、どちらも周溝内からの出土である。S X10からは、壺形土器の1個体分のほか、木製鋤や板状木製品が出土し、S X11からは壺形土器の小破片が出土した。

また溝S D13からは、古墳時代の土師器・須恵器や滑石製有孔円板などが出土した。

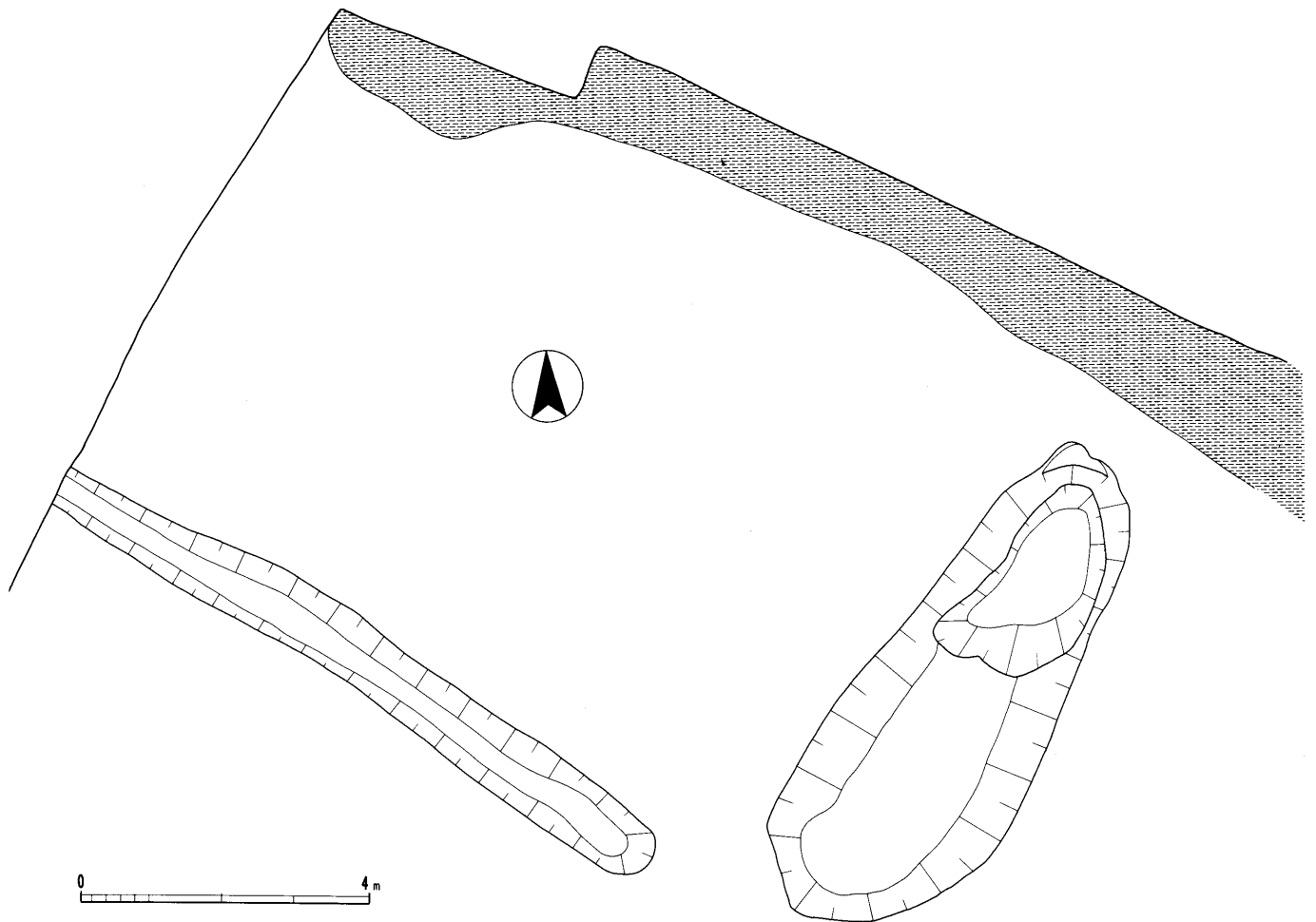
(1) 遺構出土の遺物

a. 縄文時代

松ノ木遺跡の遺物は、A~C地区にかけてみられたが、B地区で最も出土頻度が高く、全地区を通して、整理箱で15箱ほどを数えるが、個体数としてはあまり多くないものと思われる。

旧河道S R 3出土遺物(第19図 3・5~8・10・12、第20図 14、第21図 23~26、第22図 38・39)

旧河道S R 3からの土器の出土量は、遺構の大き



第17図 方形周溝墓S X11 遺構実測図(1:100)

さに比して少量であったといえる。第1層からは弥生土器および縄文土器がわずかにみられ、第2層から縄文土器片がごく少量あり、実際にSR3の堆積物からなる第3層からは、縄文土器および石製品、自然木および堅果類の種子などが出土した。遺物の大部分は、第3層からの出土で、縄文土器は小片がほとんどであった。縄文土器の器種としては深鉢形土器のみが確認できた。また、石器類は打製石斧や用途不明の石製品が出土した他、サヌカイトやチャートなどの石屑も若干みられた。

深鉢形土器 (3・12・14・23~26) 3は、底部付近を欠くが、最も全体の器形のわかるもので、口径25cm、器高17.8cm以上をはかる。口縁端部はやや角張り、平坦な面をなす。肩部の屈曲はみられず、砲弾形となる。外面は下方から上方へ向かってのヘラケズリ調整され、全体に煤が付着している。

12は口縁部と体部の境が、比較的明瞭な稜をなして区別されるものである。体部外面はヘラケズリ調整されている。

底部片 (5~8・10) 10は外面を下方から上方に向かってヘラケズリ調整されている。

第1層出土の14は、口縁部が外側に肥厚し、やや不明瞭な肩部をなすものである。

石製品 (38・39)

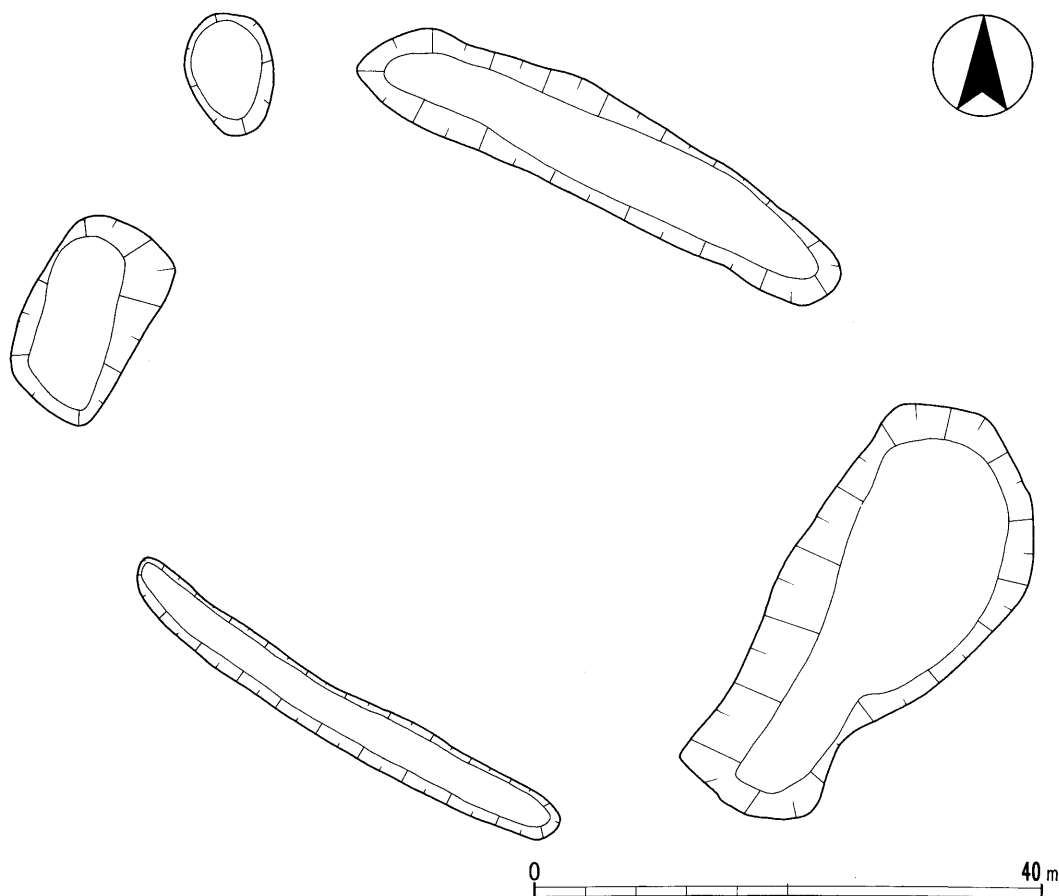
38は三角柱状の石製品で、側面に窪みがみられる箇所があるが、用途などは不明である。材質は砂岩である。

39は刃部を欠くが、打製石斧と考えられる。両面に粗い剝離痕がみられる。形態的には、頭部から側面がほぼ平行して開くが、刃部付近でやや広がるものである。材質は頁岩系のものである。

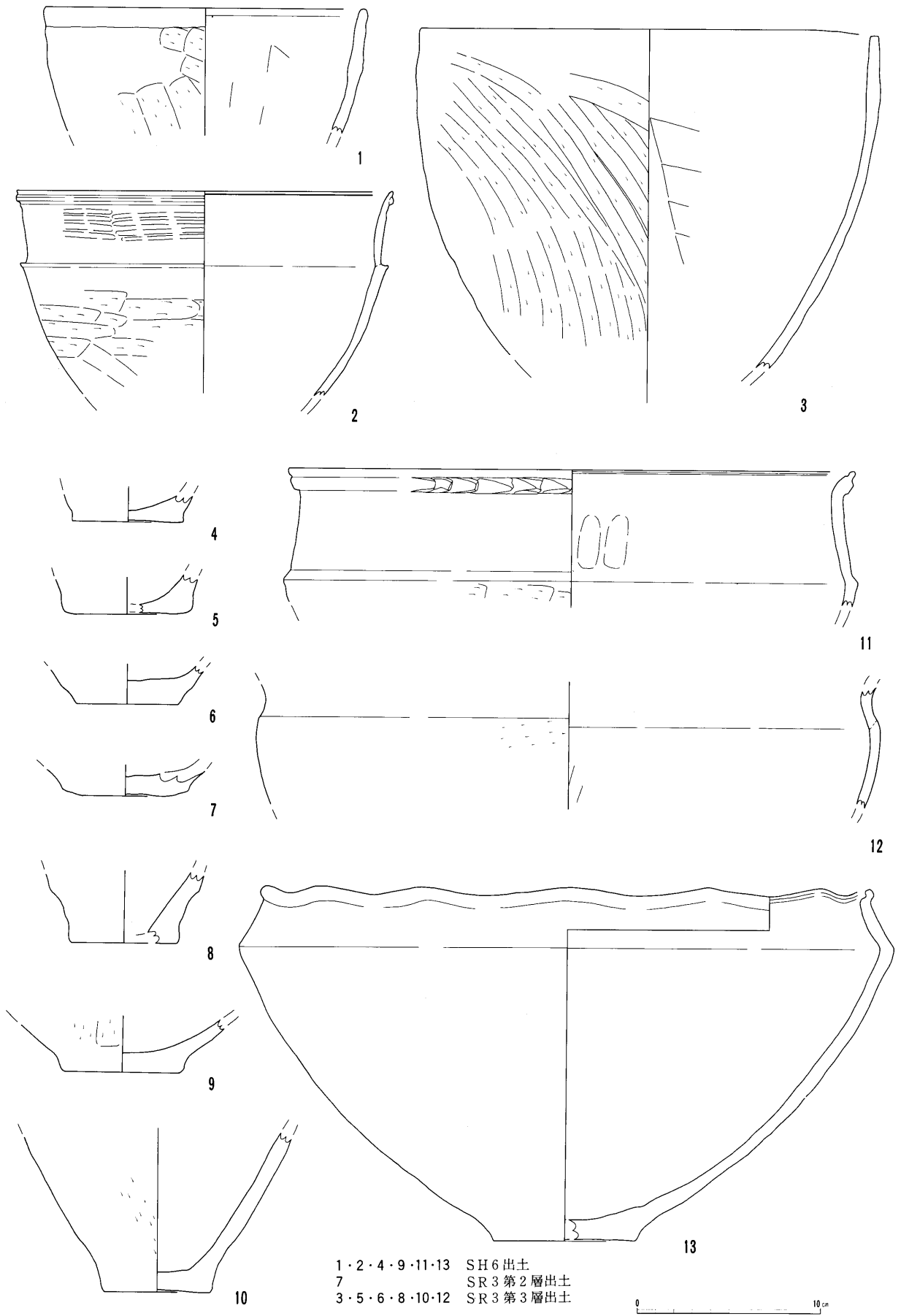
竪穴住居SH6出土遺物 (第19図 1・2・4・9・11・13、第21図 29~36)

SH6からは縄文土器および堅果類などが出土した。縄文土器は、深鉢形土器と浅鉢形土器があり、13は良好な接合状態にあった。

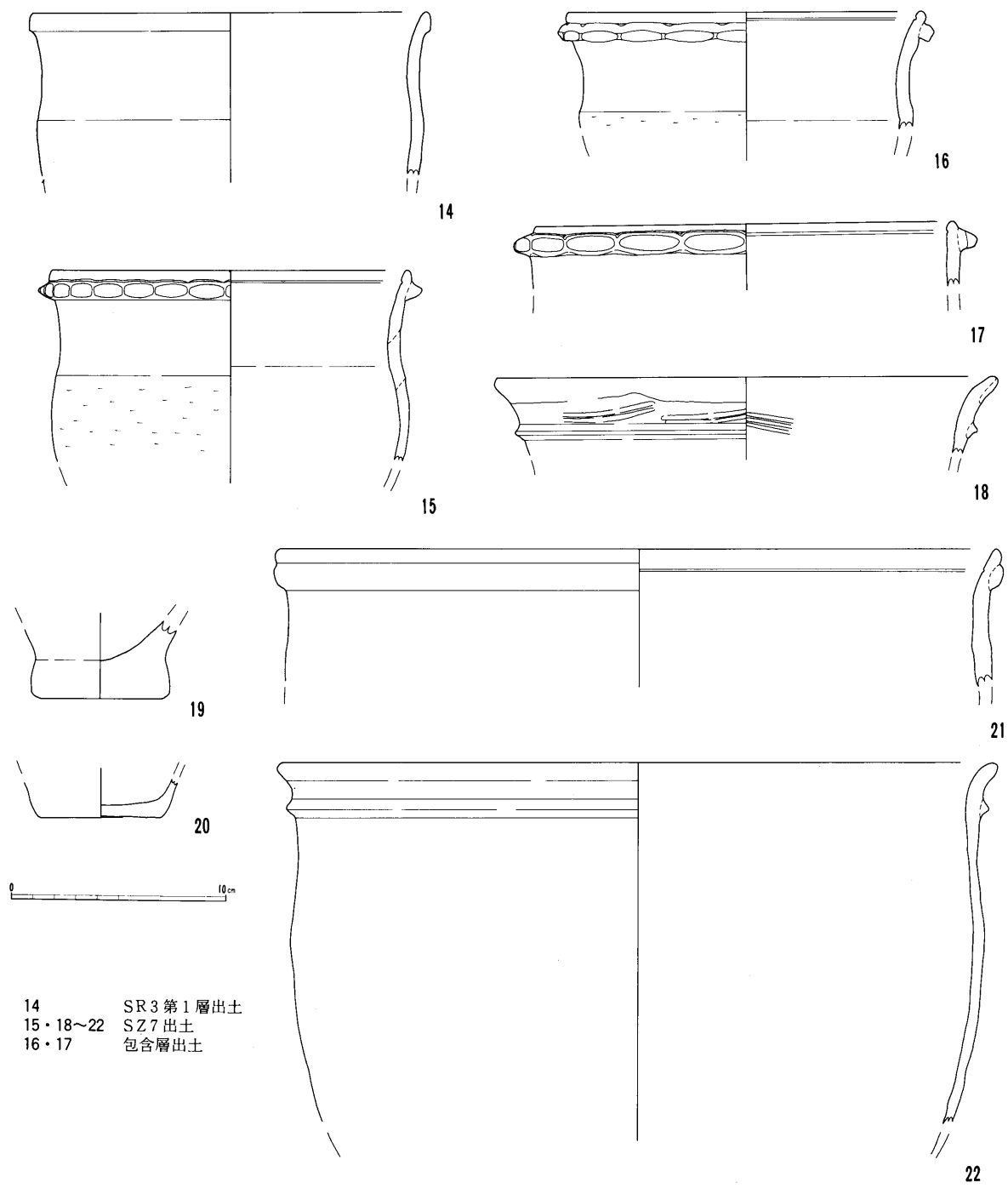
深鉢形土器 (1・2・11・29~36) 1は肩をもたない砲弾形となるものと思われる。体部外面はヘ



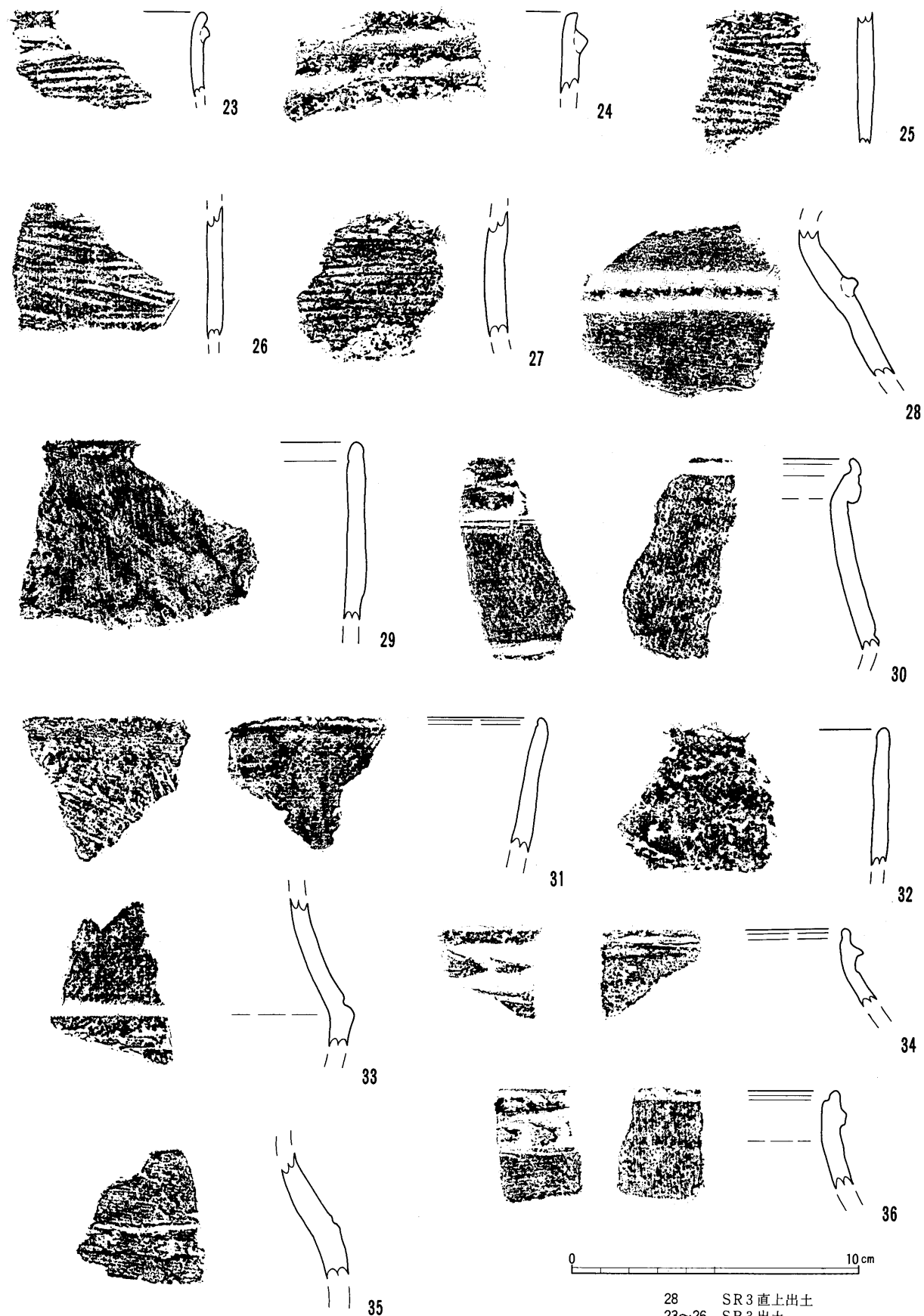
第18図 方形周溝墓S X 12 遺構実測図 (1 : 100)



第19図 遺物実測図〈1〉(1 : 3)



第20図 遺物実測図〈2〉(1:3)



28 SR 3 直上出土
 23~26 SR 3 出土
 29~36 SH 6 出土
 27 包含層出土

第21図 遺物拓影・断面図〈3〉(1:2)

ラケズリ調整する。2は口縁部と体部の境が段をなして区別されるもので、口縁部外面の若干下がった位置に幅の狭い素文の突帯がめぐる。口縁部内面に1条の沈線がみられる。外面は口縁部を条痕調整するが、体部以下は主として横方向のヘラケズリが施される。また、11はやはり明瞭な肩部をもつもので、口縁部外面の若干下がった位置にD字形の押圧を加えた突帯がめぐらされる。外面は、体部以下をヘラケズリする。口縁部内面にはやはり1条の沈線がめぐる。

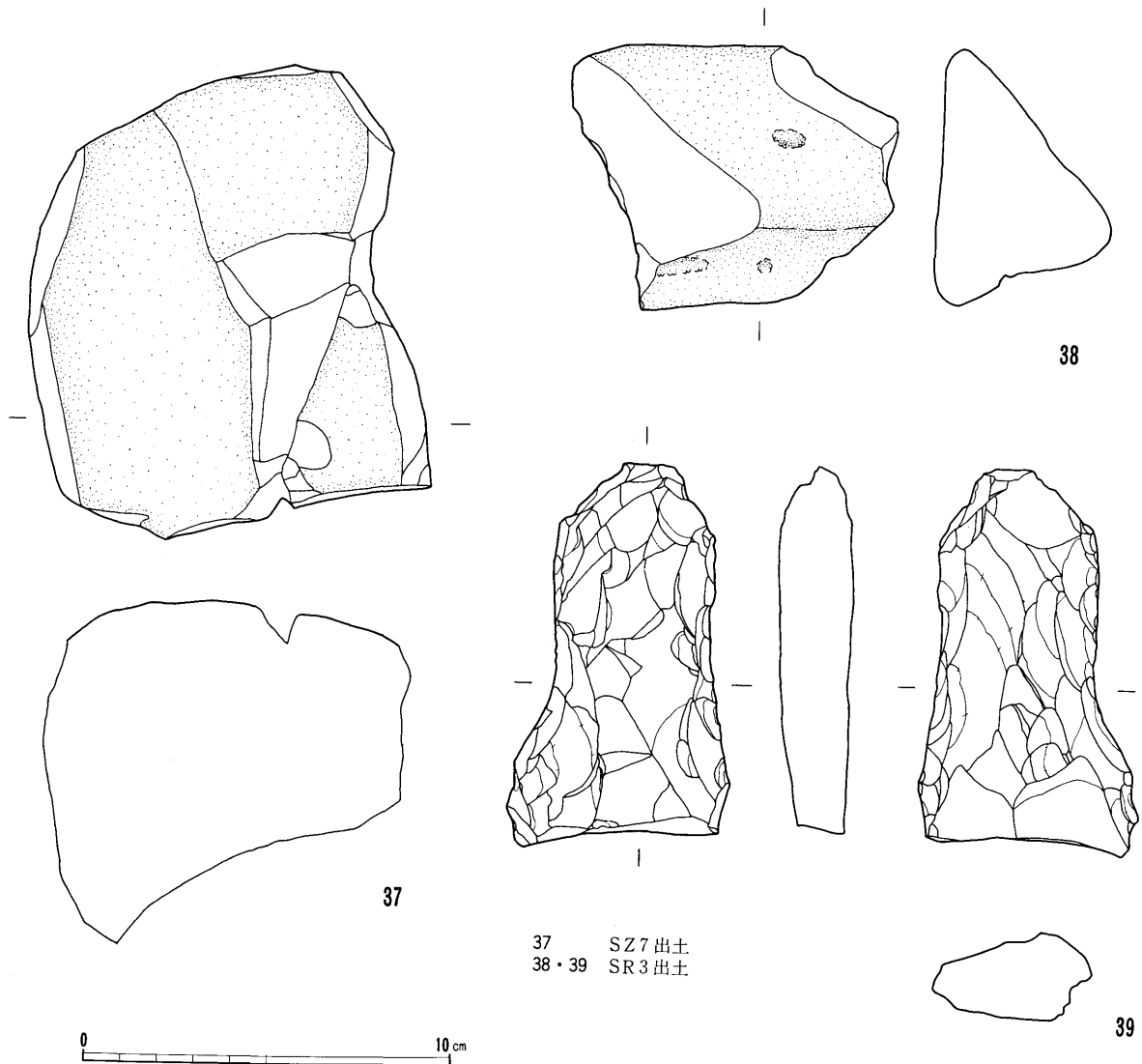
浅鉢形土器 (13) 13は、逆く字形に屈折するものである。口縁部は波状口縁となる。底部は平底となり、体部外面は全体に丁寧に磨かれている。口縁端部は屈曲し、内面にやや幅広の沈線が1条めぐる。

底部片 (4・9) 9は体部のたちあがり方からすると、浅鉢形土器の底部の可能性はある。

落ち込み遺構 S Z 7 出土遺物 (第20図 15・18~22)

S Z 7からは、縄文晩期の深鉢形土器が出土している。

深鉢形土器 (15・18~22) このうち15は、口縁部からなだらかに屈曲することで、肩部と認識できるもので、口縁部外面のやや下がった位置にユビによる幅広のO字状の押圧を加えた突帯がめぐる。体部外面はヨコ方向のヘラケズリ調整する。18は、外反して開く口縁部の破片で、口縁部はやや肥厚し、外面の下がった位置に低平な素文の突帯が1条めぐる。外面は条痕調整される。21は口縁部の若干下がった



37 SZ7 出土
38・39 SR3 出土

第22図 遺物実測図〈4〉 (1:2)

た位置に幅広の素文の突帯がめぐるものである。色調は乳濁色となり、他とはやや趣きが異なる。口縁部内面のやや下がった位置に1条の沈線が施されている。22は、口縁部が外反して開くが、体部との境は明瞭でなく、砲弾形になるものと思われる。口縁部はやや肥厚し、外面の下がった位置に素文の突帯が1条めぐる。

底部片 (19・20) 19は厚手で、底部が突出するが、20はかなり薄手のものである。

b. 弥生時代

方形周溝墓 S X 10 出土遺物 (第25図 82、第23図 40、第24図 41~43)

広口壺形土器 (82) 頸部がやや長く伸び、口縁部が外反して開くもので、胴部に最大径がある。頸部および胴部に貝殻腹縁による直線文が施されている。中期前半のいわゆる「朝日式」の土器である。

木製鋤 (40) 組み合わせ式の木製鋤で、突起のついた隅丸方形の刃部に柄穴を穿ち、断面円形の柄を挿入している。

用途不明板状木製品 (43) 一枚板を鍵穴形に作り出したもので、鑿状工具による加工痕が全体にみられる。何の用途に用いられたものか想像することが難しい。

板状木製品 (41・42) 41は、長方形の板状木製品で、木製鋤とも考えられるが、舟底状突起などは認められない。

方形周溝墓 S X 11 出土遺物 (第27図 121)

壺形土器 (121) 小片であるが、垂流遠賀川式土器の体部上半の一部である。4本以上の横方向の貼りつけ突帯と2本以上の縦方向の貼りつけ突帯の組み合わせからなり、突帯には押圧が加えられている。従来からの土器編年^④に従えば、前期末に位置づけられるものである。

方形周溝墓 S X 12 出土遺物 (第25図 72)

甕形土器 (72) 大きく外反した口縁部をもつもので、口唇部にキザミメをめぐらす。

c. 古墳時代

溝 S D 13 出土遺物 (第26図 96・97・103)

土師器台付甕 (96・97) S字状口縁の系譜を引く屈曲した口縁部と、大きく張り出す体部からなる。口縁端部に平坦な面をもつ。体部外面には、この器

種独特の粗いハケメ調整がされ、内面にはタテ方向のユビオサエ痕がみられる。

滑石製有孔円板 (103) 一部を欠失するが、径1mm程度の穿孔を2箇所に有する。

(2) 包含層出土の遺物 (第26図~第29図)

a. 縄文時代

深鉢形土器 (16・17・27) AおよびB地区で出土したもので、口縁部下に突出度のある貼りつけ突帯がつき、突帯にはユビによる幅広の押圧が施される。肩部は稜をなし、以下をヘラケズリする。口縁端部はまるくおさめ、内面のやや下がった位置に1条の沈線がめぐらされる。

16・17は、深鉢形土器の口縁部付近の破片で、落ち込み遺構 S Z 7 出土の15の深鉢形土器と同じ特徴をもつものであるが、突帯の形状に若干の差があり、別個体と認識した。

注口土器 (120) C地区から唯一出土した縄文土器で、注口部の破片である。注口の付根あたりに凹線が施されている。縄文後期頃のものと思われる。

b. 弥生時代以降

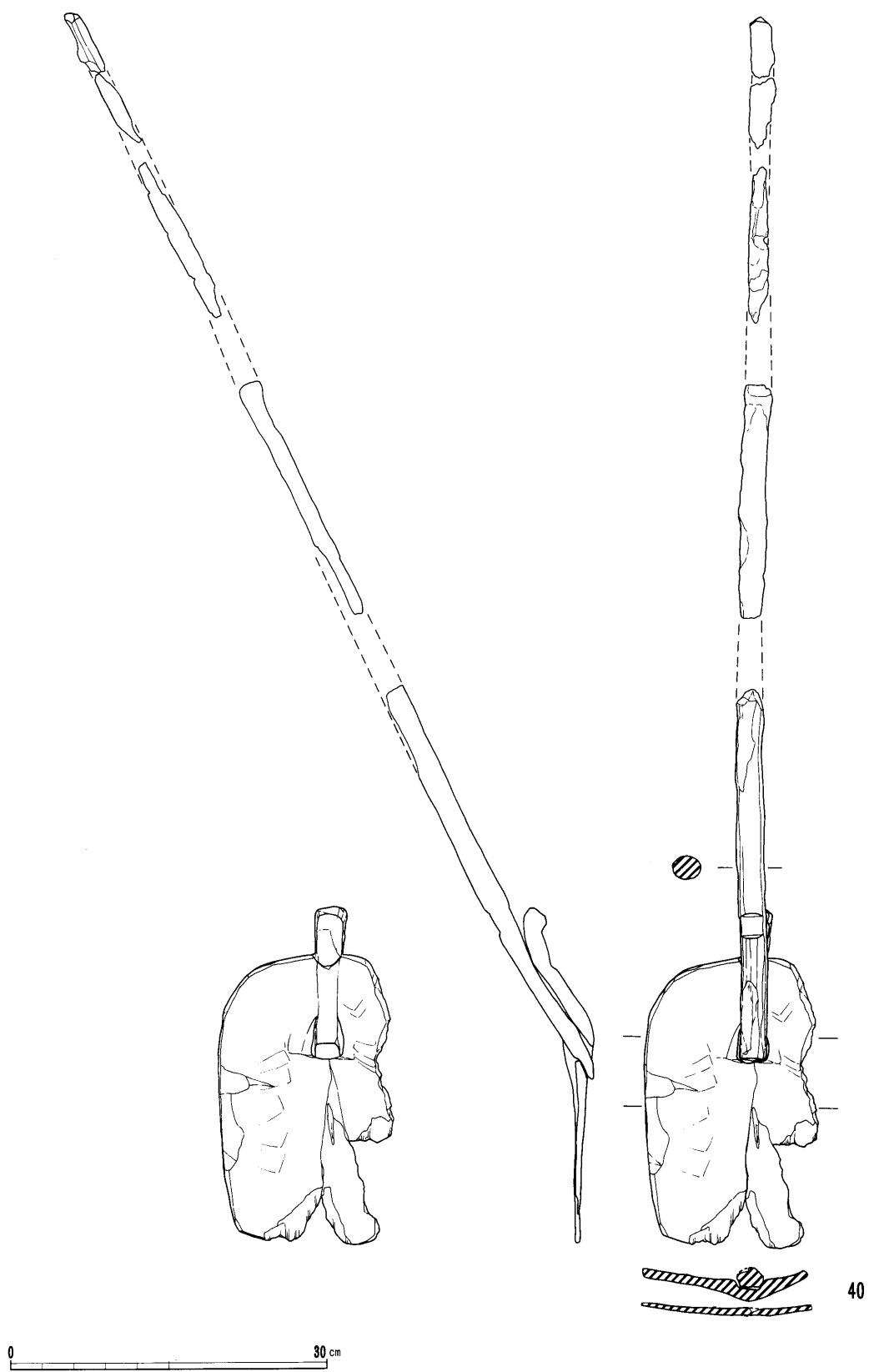
弥生土器壺形土器 (28・104) 28は、体部の小片で、細かな押圧を加えた突帯が1条めぐる。104は、口縁部の小片である。内面に瘤状隆起が貼り付けられている。

土師器皿 (55~57) 口径10~11cm、器高2cm前後の皿で、煤が付着しているものがある。ナデ調整によるが、ユビオサエ痕が目立つ。

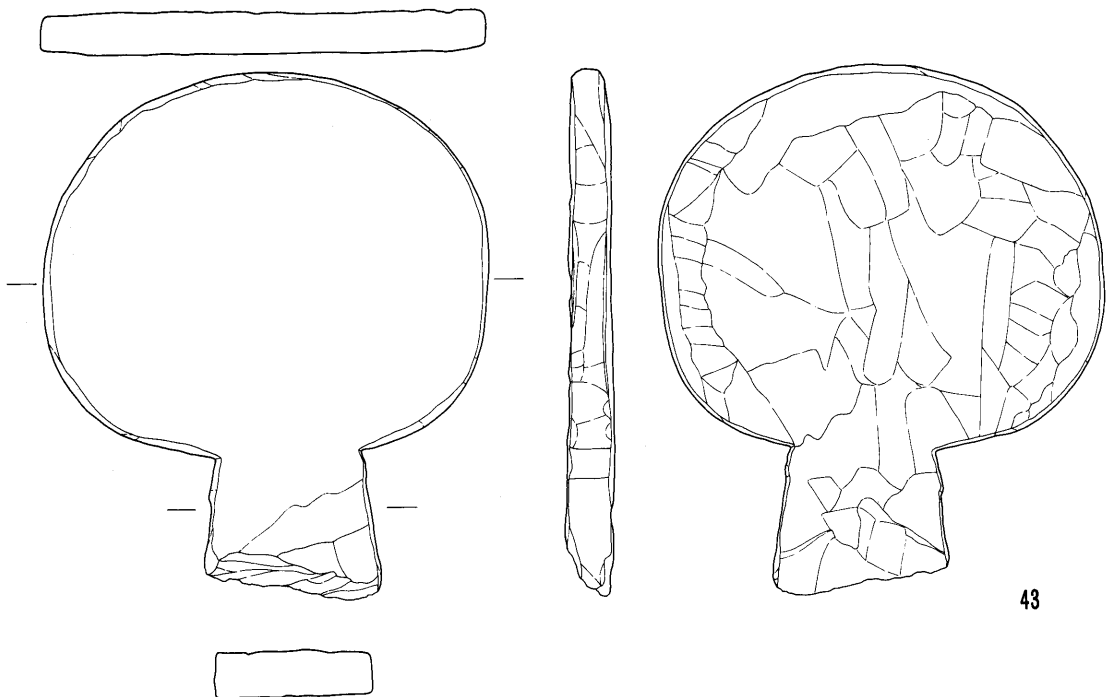
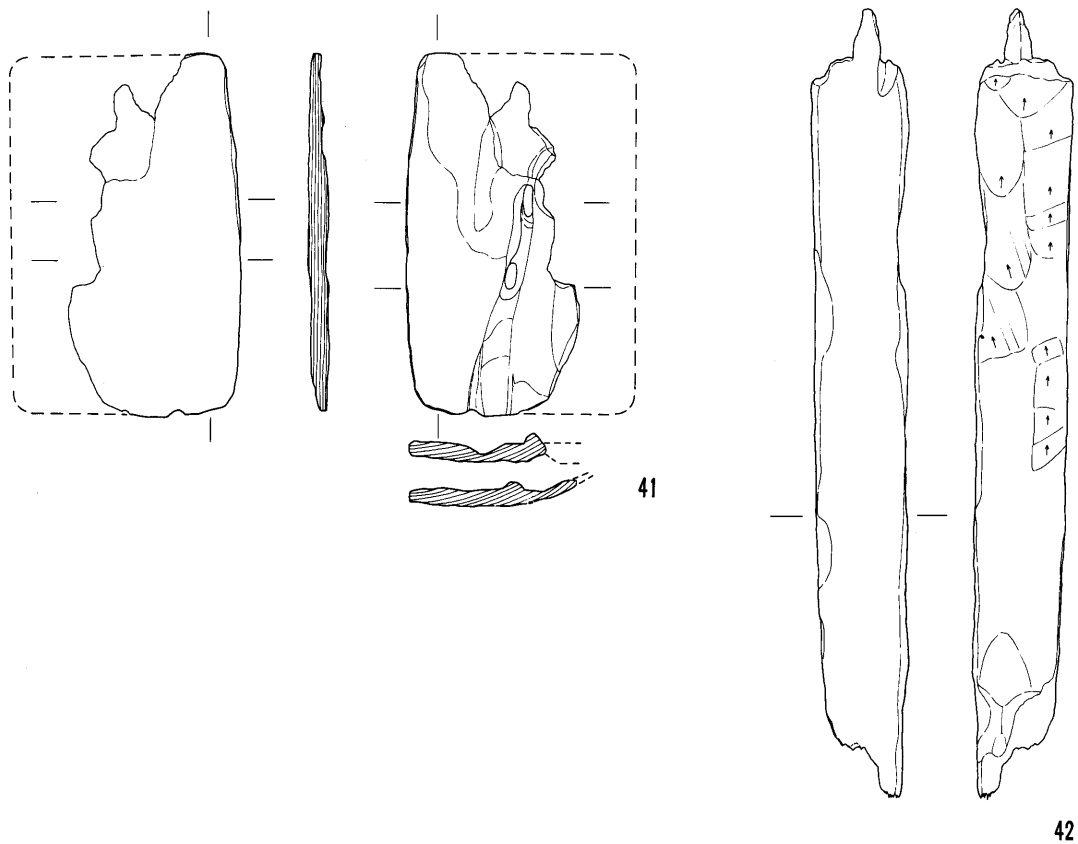
土師器台付甕 (68・98・99) S字状口縁の系譜を引く台付甕で、98・99は口縁部片で、体部外面には粗いハケメ、内面にはユビオサエ痕が目立つ。98は、肩部に張りがあり、口縁部の屈曲度合から、他のものと比べやや古相となる。68は脚台片で、大きく八字に開く。端部は折り返さず、端面に平坦な面をもつ。

土師器甕 (76・110・116) いずれもく字形に外半する口縁部からなり、116が端部を上方に立ち上げるのに対し、76・110は、内側に折り返すものである。後者は、平安時代後期のものと思われる。

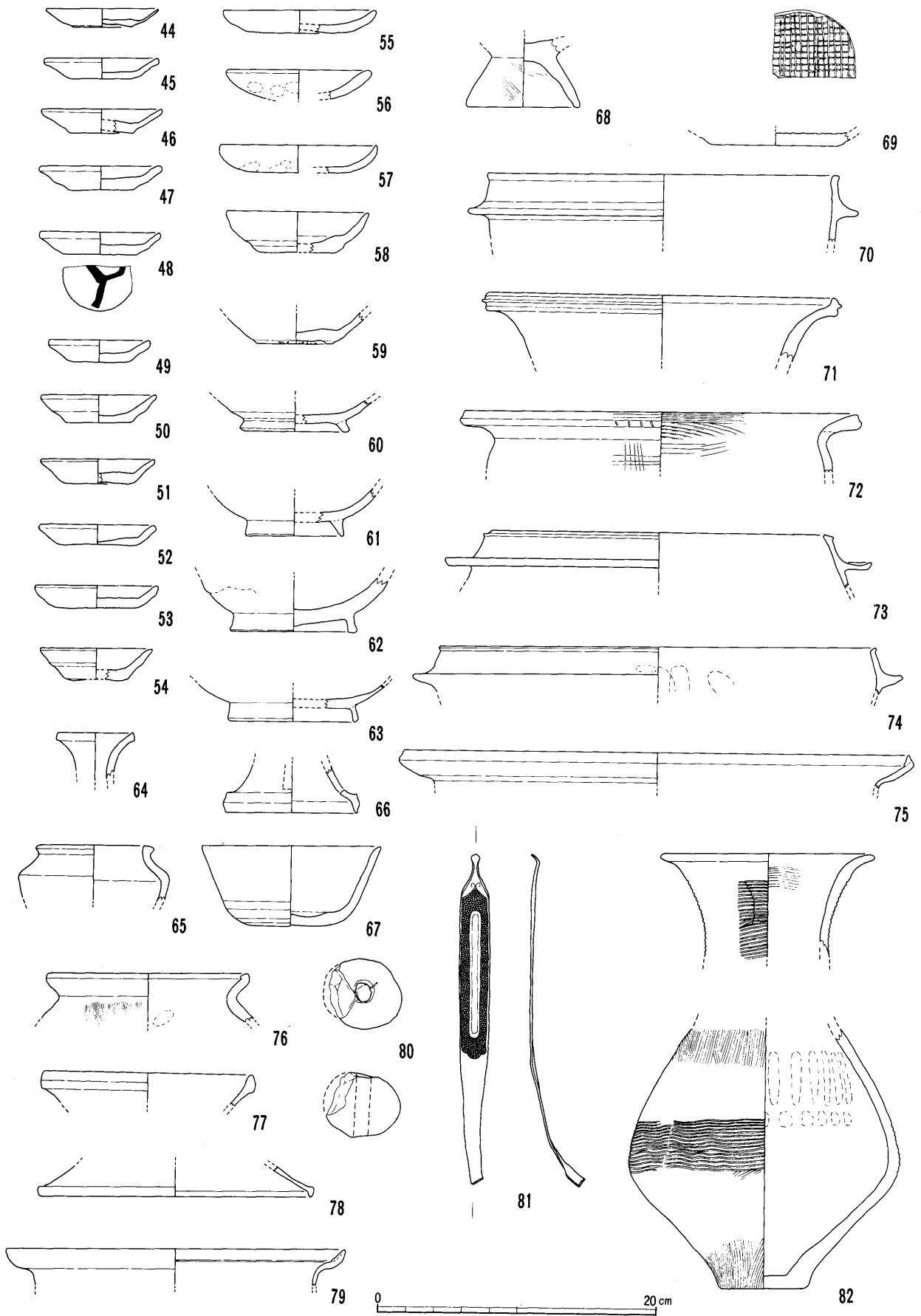
土師器埴 (94・105) 94は、小型品で、球形の体部のやや上方で最大径をもち、口縁部がまっすぐ外上方に開く。105は、体部のみの破片で、楕円形



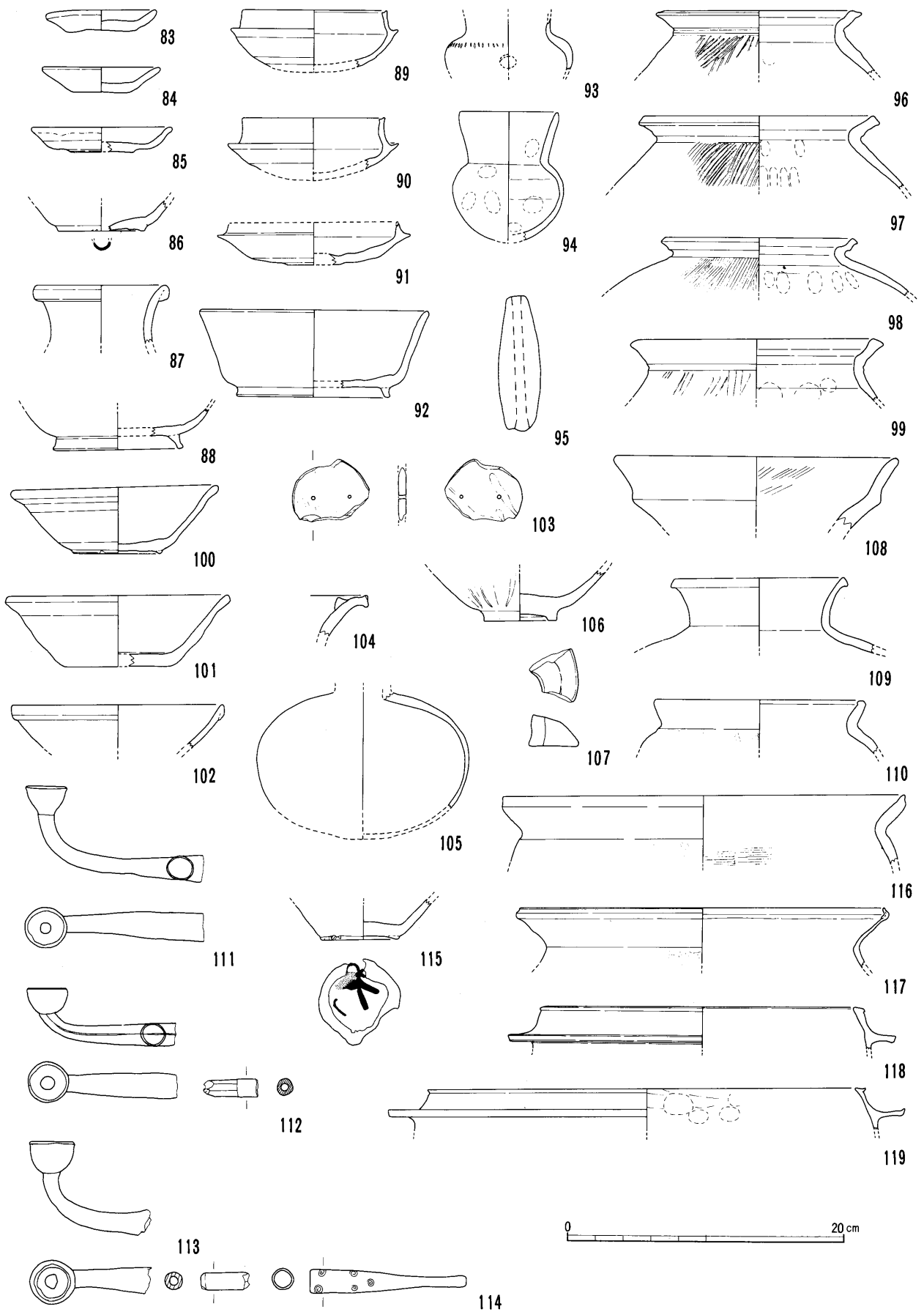
第23図 方形周溝墓SX10 出土木製品〈1〉(1:6)



第24図 方形周溝墓SX10 出土木製品〈2〉(1:4)



第25図 遺物実測図〈5〉(1:4, 80・81は1:2)



第26図 遺物実測図〈6〉(1:4, 95・103・107・111~114は1:2)

の体部中央に最大径をもつものである。

土師器壺 (108) 二段に立ち上がる口縁部の破片で、端部は丸くおさめる。

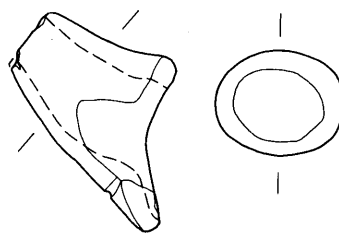
土師器鍋 (75・79・117) 口縁端部を折返し、ナデつけることによってやや窪んだ面をなすもの(79)と、断面三角形となるもの(75・117)がある。

土師器羽釜 (70・73・74・118・119) 70は、口縁部がほぼ直立して立ち上がるのに対し、他はやや内傾して立ち上がる。いずれも鄂部以下に煤が付着している。

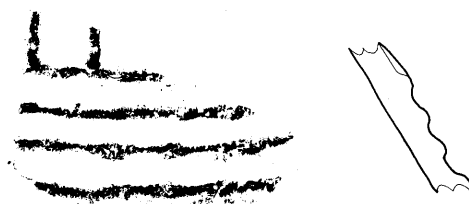
須恵器杯身 (58・67・89~91) 89・90はたちあがりが高く、口縁端部に面をもつ。90はTK 2 3型式^⑧、89の方はTK 4 7型式に相当する。一方、91はたちあがりが高く扁平な器形で、TK 2 0 9型式に相当するものと思われる。

須恵器高杯 (66) 短脚高杯の脚部片。脚端部が内弯気味に下方へのびる。長方形のスカシがつくものと思われる。TK 4 7型式に相当するものと思われる。

須恵器甗 (93) 体部上半の破片で、肩部付近に刺突文をめぐらす。



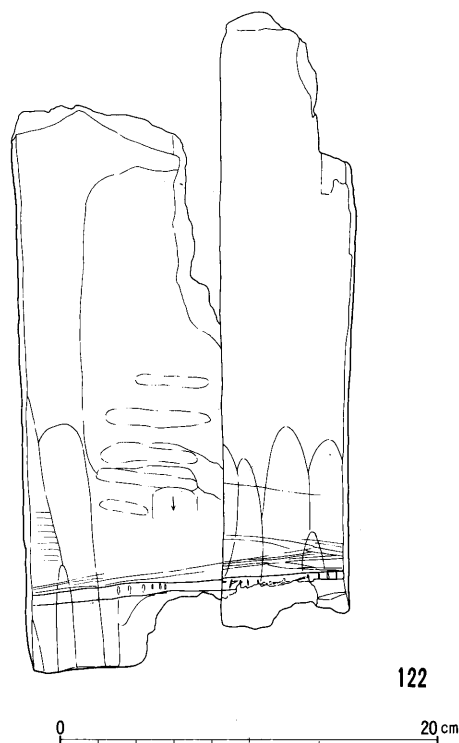
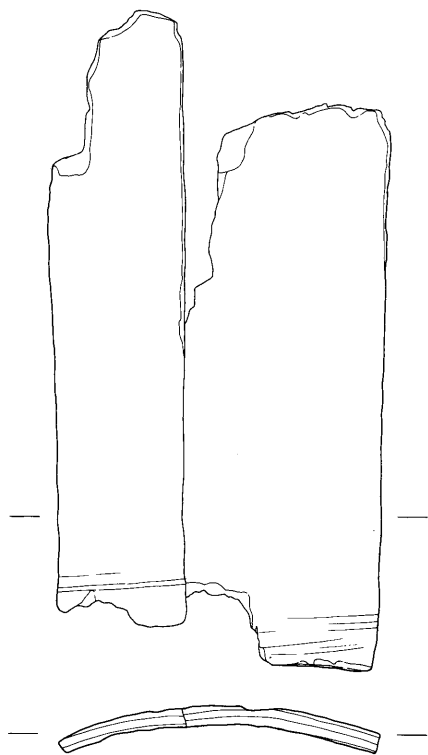
120



121



第27図 遺物実測図〈7〉、拓影(1:2)



122

第28図 遺物実測図〈8〉(1:4)

須恵器蓋 (78) 天井部を欠くが、斜下方へまっすぐ開き、口縁部が下方に短く垂下する。奈良時代中葉を前後する頃のものである。

須恵器無高台杯 (67) 平底の底部からまっすぐ外上方に開く体部からなる。奈良時代前～中葉のものである。

須恵器有高台杯 (92) 底部のやや内側に断面方形の高台を貼りつける。体部はまっすぐ外上方に開き、端部は丸くおさめる。奈良時代中葉を前後する時期のものと思われる。

須恵器壺 (109) やや外反して開く口縁部をもつ。体部は、丸みを帯びて大きく膨らむものと思われる。

須恵器甕 (71) 外反して開く口縁部の破片で、端部は上方につまみ上げられ、外面に2条の凹線をめぐらす。

灰釉陶器椀 (61・63) 61は、断面三角形の高台を貼りつける。体部は内弯しながら上方に立ち上がる。また、63は、61と比べて、高めで細身の高台がつく。

灰釉陶器壺 (87) 口縁部をゆるやかに外反させ、端部を外側に折り返し、玉縁状に肥厚させるものである。

白瓷系陶器椀 (59・86・100・101・115) 全形のわかる100および101は、底部から外上方にまっすぐ開くもので、101は高台を欠くが、100には低平な高台を貼りつけている。101は、口縁端部に外傾する面をもつ。また、86および115の底部外面に、そ

れぞれ墨書が認められる。

白瓷系陶器皿 (44～54・83・84) いずれも平底の底部に外上方に開く口縁部からなるが、44のみ口縁部の器壁が極端に薄く、他のものに比べ胎土が精良であり、異質感がある。48の底部外面に墨書がみられる。

緑釉陶器椀 (88) 底部付近の破片で、外に開く、やや高めの高台がつく。須恵質に焼成されたものである。

青磁椀 (106) 底部片で、断面方形の削出し高台がつき、体部外面に蓮弁文様をもつ。

白磁椀 (77・102) 口縁部を玉縁に折り返す椀で、体部は直線的に開く。

陶器卸皿 (69) 底部の破片で、ヘラ状工具によって、縦横に深く刻み目が認められる。

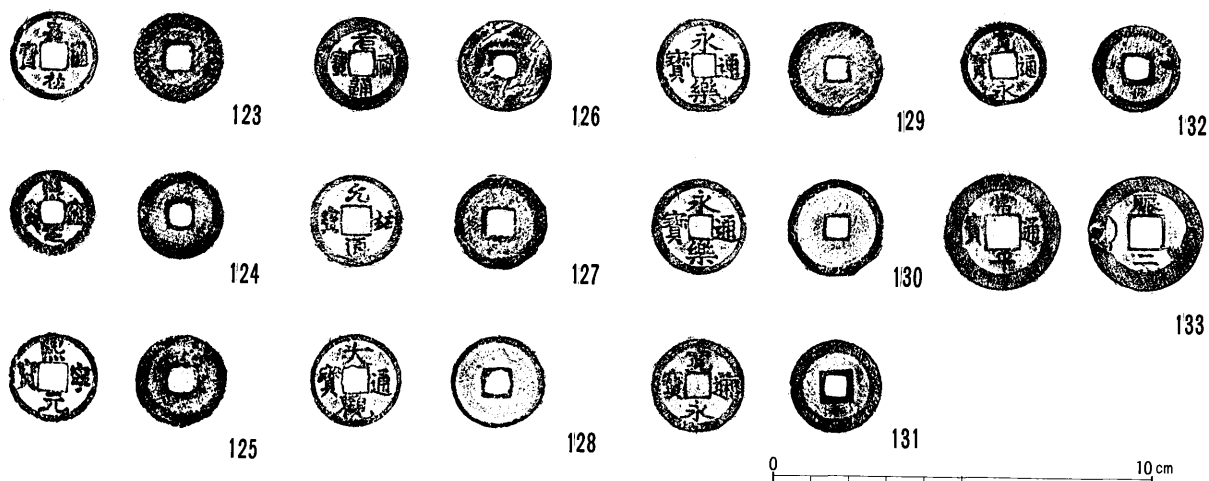
陶器皿 (85) いわゆる瀬戸美濃系の皿で、口縁部内外面の緑色の釉が施されている。底部外面には、回転糸切り痕がみられる。

陶器椀 (62) 器壁が厚く、内面に三叉トチンの跡がみられる。体部外面下半以下を除き、暗茶褐色の釉薬が施されている。

陶器茶入 (65) 肩部が張り、口縁部が短く立ち上がるもので、内外面にいわゆる飴釉が施されている。

磁器壺 (64) 頸部が細くすぼまり、口縁部が外反して開く。

土錘A (80) 径2.5mm前後の球形土錘で、中央に径5mmほどの貫通孔がある。



第29図 銭貨拓影 (1 : 2)

土錘 B (95) 長さ4.9mmの棒状土錘。

土製紡錘車 (107) 全体の1/4以下の破片であるが、断面形が台形で、中央に貫通孔がある。

筭 (81) 長さ11.8cm以上のもので、先端を欠く。

煙管 (111~114) 雁首と吸口部があり、一部に木質が残存している。吸口には渦巻状の文様が刻ざまれている。

銭貨 (123~131) 「嘉祐通寶」 (123) ・「熙寧元寶」 (124・125) ・「元祐通寶」 (126・127) ・

「大觀通寶」 (128) ・「永樂通寶」 (129・130) ・「寛永通寶」 (131・132) ・「常平通寶」 (133) がある。「寛永通寶」を除くと、いずれも国外銭で、前三者は宋銭、「永樂通寶」は明銭で、初鑄年代はそれぞれ1056年・1068年・1086年・1408年であるが、日本での使用期間は長い。

「常平通寶」は李氏朝鮮の銭で、裏面に「賑二」の文字があり、鑄造所名を表すものといわれる^⑥。初鑄年代は1678年である。

〔註〕

- ① 伊藤久嗣・吉永康夫『納所遺跡』三重県教育委員会 1980
② 一般に「深鉢形土器」と呼ばれたものを頸部のくびれ具合から「深鉢形土器」・「甕形土器」あるいは「壺形土器」に分ける考えもあるが、ここではこれらを一括して「深鉢形土器」と呼称している。

佐藤由紀男「土器の使われ方」『突帯文土器から条痕文土器へー伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まりー』第1回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会 1993

- ③ 加藤安信ほか『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982
④ 前掲書②
⑤ 田辺昭三『陶邑古窯址群 I』平安学園考古クラブ 1966
⑥ 松原典明編「古銭一覧表」『日本考古学小辞典』ニューサイエンス社 1983

4. 結 語

(1) 縄文晩期の土器の位置づけ

松ノ木遺跡出土の縄文土器は、C地区で1点のみ後期と思われる破片が含まれるが、他は晩期後半以降のものである。突帯文深鉢土器の分類および編年的位置づけ、あるいは伊勢地方における地域相については、鈴木克彦氏の業績^①が秀でてい

る。当遺跡出土の突帯文深鉢土器についても、一部鈴木氏の引用されるところであり、氏の分類・編年を基に出土土器全体の位置づけを行ってみたい^②。

遺構出土のものをみると、旧河道SR3では河川堆積物である粗砂層より、比較的形態を残しているもの(3)が出土している。これは口縁部を面取りし、外面全体をヘラケズリする砲弾形をした無文の深鉢形土器である。外面に煤が残り、ローリングはほとんど受けていないとみられる。他に肩部に稜をもつ深鉢形土器の破片や平底となる底部片なども出土しており、その所属時期はII期のうちにおさまるものと思われる。また、SR3が河道としての機能を失って後の堆積層であるSR3の最上層から、弥生前期新段階とみられる土器片(28)が出土しており、SR3の河川堆積が縄文晩期のうちに終焉したとみられる。

竪穴住居SH6では、その埋土中より深鉢および浅鉢形土器が出土している。深鉢形土器のうち、口縁部外面下にD字形の押圧を加えた突帯がめぐり、体部との境には明瞭な段をなすもの(11・34・36)は、五貫森式の典型例であり、鈴木氏の分類の4類とされたものにあたる。口縁部外面下に細く素文の突帯をめぐらし、体部との境は明瞭な段をなす。口縁部突帯下には二枚貝腹縁による条痕調整がみられるが、体部より下をヘラケズリするもの(2)もII期に、また、まとまって出土した浅鉢形土器は、波状口縁をなす逆く字形に折れるもので、平底であり、上記深鉢形土器の時期と矛盾しないものである。また、旧河道SR3同様の口縁端部を面取りする無文の深鉢形土器もみられる。

これらから、竪穴住居SH6の所属時期は、II期に相当するものである。ただ、同じく埋土中から、8類に分類される、口縁部が外反し、低平で素文の

突帯が口縁部よりやや下った位置にくる深鉢形土器も出土したが、これは竪穴住居の埋土中でも上面付近にあたり、SH6を取り込むように広がる、落ち込み遺構SZ7との関係も不明瞭であり、SH6自体の存続時期の下限を示すものではないと思われる。

その落ち込み遺構SZ7からは、II期からIV期にかけての突帯文土器が出土した。深鉢形土器のうち、口縁外面の若干下った位置に幅広で低平な素文の突帯をもち、以下を条痕調整するもの(21)やO字形の押圧を加える突帯をもつものは、馬見塚期併行であるIII期にあたる。また、同じく深鉢形土器で、口縁部が外反し、やや下った位置に素文の突帯をもつもの(18・22)は、IV期に比定されるものである。

SZ7からは、やや異形の深鉢形土器もみられる。(15)これは口縁部外面直下に指による幅広のO字形の押圧を加えた突出度の大きい突帯をもち、口縁部内面にはII期の深鉢形土器にみられたものより痕跡的な沈線をめぐらすもので、明瞭ではないが肩をもつ。体部はヘラケズリ調整をおこなっている。突帯に施された押圧の形状からすればIII期を遡るものではないが、馬見塚式にみられる通常の深鉢形土器とは趣を異にする。同様の土器は包含層中の(16・17)でもみられるが、いずれも器面調整が条痕文でなくヘラケズリによっている。

ところでIV期は、馬見塚式より後出の条痕文系土器である樫王式と時期的に併行する部分があるとされる。8類としてあげられた深鉢形土器が、このIV期の代表的な類型であり、すでに弥生時代前期古・中段階の土器が当時期とも併行するとみられている。

松ノ木遺跡でも弥生前期新段階の土器は散見できるが、当遺跡に隣接して、東方に広がる納所遺跡からは、弥生時代前期の中段階の土器が多く出土している。この時期にはすでに当地域に弥生文化が成立していたと考えられるわけであるが、隣接する松ノ木遺跡でのあり方は、伊勢地方でも比較的早く稲作が定着したとされる安濃川流域の平野部においても、前期の弥生土器に併行する縄文系の突帯文土器の展開が予想される。

(2) 弥生前期の土器について

方形周溝墓SX11の周溝内埋土より亜流遠賀川式

土器の壺形土器の破片が出土した。伊勢地方の中・南勢地域に分布の中心をおくとみられる、この種の土器に関する研究史および諸問題も、やはり鈴木克彦氏によって整理されている^③。

氏の場合でも、亜流遠賀川式土器とⅣ期の突帯文土器との短絡的な結びつけは避けながらも、遺跡の立地・分布などの状況証拠を通じて、両者の関連性には肯定的である。

亜流遠賀川式土器にみられる諸特徴が、晩期縄文要素に通じるものだとすれば、一見初期稲作に不適な丘陵地に立地する遺跡のなかに、その発生要因を求めるのは当然の帰結であろうが、伊藤久嗣氏は低地遺跡の中ノ庄遺跡出土の半截竹管文土器群が、亜流遠賀川式土器の成立に影響を与えた可能性を指摘しており^④、亜流遠賀川式土器と遺跡の立地との結びつきについては、まだ課題が多い。

ただ、亜流遠賀川式土器が低地部の遺跡にもみられるという点は、低地部のムラと丘陵部のムラとが対立関係にあったというようなことを考えなければ、物流・婚姻等を含めたムラどうしの交流の結果ということと理解できると思う。

以上のごとく、伊勢地方の縄文晩期から弥生前期にかけての具体相は、土器の変遷も含め、まだまだ追求しなければならない点が多く、今後も弥生文化受容をめぐる複雑な地域展開について、よりミクロな分析が求められよう。

(3) 方形周溝墓群について

松ノ木遺跡A～C地区にかけて方形周溝墓とみられる遺構が4基検出された。このうち、1基はA地区の北東隅に検出され、他の3基はB地区南部からC地区北部にかけてみられたものであり、分布からは少なくとも2グループに分けることができる。

いずれも四隅が切れるタイプのもので、平面形は長方形となり、いわゆるA4形方形周溝墓と呼ばれているものである^⑤。

規模のわかるもののうち、B地区のSX10は、長辺18m、短辺11mと、伊勢地方のなかでもトップクラスの規模をもつものであり、C地区のSX12が長辺6.7m、短辺5.4mほどであることから、グループ内でも等質的な状況でない。

出土遺物がみられたものは、SX10とSX11で、SX10では供献土器とみられる、ほぼ1個体分の壺形土器の存在から、弥生中期前半に比定できる。

一方、SX11は弥生前期末の亜流遠賀川式土器の体部小片のみの出土であったため、本来SX11に伴うものであったかは疑う余地が残されるが、近辺に同時期の遺構がなく、包含層遺物にもこの時期のものが含まれていないことや、SX10の所属時期を参考にすると、前期末に遡る可能性はある。

(4) 中期前半の壺形土器の文様

方形周溝墓SX10から出土した壺形土器(82)は、やや長くのびる口頸部と胴部最大径付近に直線文をめぐらす、中期前半の典型的なものである。

ただ、直線文の施文具については貝殻腹縁を使用しているとみられ、櫛状工具ではない。納所遺跡や中ノ庄遺跡など、伊勢地方の他の遺跡でも当時期の壺形土器の施文具は、櫛状工具よりむしろ貝殻腹縁のよると考えられるものが多い^⑥。

また、一志町鳥居本遺跡^⑦や納所遺跡^⑧には、亜流遠賀川式土器の壺形土器のうち、突帯間に横位の条痕調整を施すものが存在する。これが単に調整痕であるとしても、そのあり方は中期前半の壺形土器の直線文に近く、当地域ではこれら壺形土器の施文には当初、櫛状工具ではなく、貝殻腹縁が通常使用されていた可能性が強いのではないかと思われる。

(5) 松ノ木遺跡の立地について

松ノ木遺跡は、安濃川左岸の沖積地に立地し、遺構検出面での標高は6.8m～7.4mにおよび、全体としては、おおむねA～C地区北半までがほぼ標高差のない微高地であり、遺構のなくなるC地区中央付近を境として緩やかにD地区に向かって低くなる。調査区内の土壌は、灰褐色砂質シルト層が基本であるが、D地区では水田土壌と考えられる黒色粘質土が広がる。また、A地区の南西隅付近から西は、粘土層が次第に厚く堆積していくものとみられ、河道に挟まれたバックマーシュが広がるのではないかと思われる。

A地区で検出された縄文晩期の旧河道は、安濃川の一支流と思われるが、堆積物や出土遺物から判断

すると、かなり短期間に急速に堆積していったものと想像される。

この旧河道からは、川底を中心にトチノミ・クリ・オニグルミ・シイノミなどの堅果類が多量にみられ、また出土した流木にもサカキ・クリ・ヤマグワ・マユミ・ケヤキなどの広葉樹林や、カヤ・イヌガヤ・ネズミサシなどの針葉樹林がみられた。おそらく先に挙げたような堅果類は、貯蔵穴などは調査区内で検出されていないものの、縄文晩期においてはそれらが食物資源として活用されていたことは容易に想像できる。

松ノ木遺跡の縄文晩期～弥生前期を考える上で重要なことの一つは、その遺跡の立地であろう。遺跡の周辺には納所遺跡の存在はもちろん、遅くとも弥生前期新段階には森山東遺跡で水田土壌の形成がみられたように、付近は初期水稲耕作の適地であった。こうした地形環境の下で、松ノ木遺跡が逸早く成立したことは、伊勢地方における縄文晩期段階での土地利用のあり方についてきわめて示唆的である。

近畿地方では、松ノ木遺跡よりなお時期的に若干遡ると考えられる口酒井期の標式遺跡となった兵庫県口酒井遺跡^⑧には初痕土器や石庖丁が存在するなど、すでに稲作の兆候はみられる。

また伊勢地方でも、鈴鹿市上箕田遺跡^⑨から、松ノ木遺跡より型式的には若干遡るものの、ほぼ五貫森期のうちに比定できるとみられる土器群に混じって、夜臼系の壺形土器片が出土している。このことから伊勢地方においても、五貫森期にはすでに稲作に関する情報もたらされていた可能性が大きい。

しかし松ノ木遺跡では、早ければ弥生前期末から方形周溝墓が築かれている可能性があるものの、これより遡る段階の弥生土器など、弥生文化的要素をもつ遺構・遺物は見当たらず、むしろ時期的には弥生前期と併行するとみられる最終末の突帯文土器が出土するのみである。調査区外にも遺跡が広がる可能性は大きいですが、縄文晩期段階での低地進出に関らず、弥生前期古・中段階での弥生文化的要素を松ノ木遺跡から引き出すことは難しい。

(6) 安濃川流域の縄文晩期後半～弥生中期前半にかけての遺跡の立地と変遷について

松ノ木遺跡の位置づけを今少し明確にするために、安濃川流域全体の縄文晩期後半～弥生中期前半にかけての遺跡を追っていくと、丘陵上などのやや高所に立地するものと、沖積地に立地するものがあり、すでに縄文晩期から二極的な展開を示してきている。

縄文晩期では、殿村遺跡および平田遺跡などは前者の例で、後者の例としては、松ノ木遺跡や安濃川流域で代表的な弥生集落である納所遺跡でも少量の縄文晩期の土器を含み、その他蔵田遺跡、辻の内遺跡、浄土寺南遺跡、浄土寺米買遺跡、多倉田遺跡などもあげることができる。

ただこれら二者の例は、松ノ木遺跡を除くと、生活跡に直接関するような遺構に伴うものはなく、出土土器も量的に少ないために、遺跡の性格を知るにまで至らないものがほとんどである。

このうち松ノ木遺跡以外を除き、所属時期の判明しているものは、納所遺跡がⅢ期以降、蔵田遺跡・殿村遺跡でⅢ期、浄土寺米買遺跡でⅡ期のものがみられる他は、いずれもⅣ期に属するものと思われる。ただ、浄土寺米買遺跡には縄文後期の土器も若干みられた。また、安濃川流域ではないが、同じ津市内には他に大里窪田町の橋垣内遺跡でもⅢ期の深鉢形土器が、津市南部の高茶屋小森町の四ツ野B遺跡からはⅣ期を中心とした土器群が出土している。

安濃川右岸の安濃町域にみられた縄文晩期頃の遺跡は、弥生前期段階に継続してみられるものはない。また一部、安濃川を遡った地域の丘陵上に立地する城坂遺跡では前期の土器が出土しているが、亜流遠賀川式土器の破片の単独出土であり、遺跡の実態はわからない。しかし、平田遺跡など、弥生前期の遺物・遺構は認められないものの、中期前半には堅穴住居がみられ、丘陵上に集落を形成している。納所遺跡や上村遺跡など、中期前半に引き続き発展していくムラも少なくなく、中期前半段階には、安濃川流域の集落が、発展・定着していく様子が窺える。

(7) 伊勢地方への弥生文化の波及過程

伊勢地方への弥生文化の波及には、二つの波が重視されるべきではないかと思う。第一波は、稲作や遠賀川式土器を積極的に受け入れた集団による弥生文化の幕開けを告げるものであり、これらのなかに

は在地集団のほかに移住民等も含まれるものと思われ、西からの波である。

そして第二の波は、弥生前期新段階～中期初頭にかけてのもので、A4型と分類された四隅の切れるタイプの東日本型方形周溝墓の普及もその現象の一つであり、中期前半の壺形土器の施文具に貝殻腹縁が多く用いられることも尾張地域などとの関連で考えられるものと思われる。

第一波で稲作を開始した人々の間でも、水利灌漑などを通じて協業を要した稲作ゆえに、ムラの発展のためには、地縁の紐帯をより堅固なものにする必要が生じたであろうし、第一波を見送った人々も、水田の開墾という非常に激しい景観の変化に関心を寄せざるを得ないという相互の歩み寄りから、伊勢地方の旧態然としていたムラも次第に稲作中心の生活へと融合していったと思われる。

しかし、当地域では弥生文化の急来という当初のインパクトが薄れ、ワンクッションをおいた状況での浸透したゆえに、亜流遠賀川式土器などといった地域色をもつ土器が出現する素地も当然生まれたものと考えられよう。

ただしこの第二の波は、伊勢地方の場合、東日本の縄文的要素が揺り返したという表現では必ずしも適当ではなく、西から入った弥生文化が、伊勢地方を含めた伊勢湾西岸地域で咀嚼されて広がったものであり、伊勢湾西岸地域としてのカラーをもった弥生文化の定着を意味するものであると思う。

(竹内英昭)

〔註・参考文献〕

- ① 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相—伊勢地方からの視点—」『三重県史研究』第6号 1990
- ② 鈴木克彦氏は縄文晩期後半期の突帯文深鉢土器を1～8類に分類した上で、それぞれの所属時期をI～IV期に分けて設定した。各期の他地域の編年との併行関係おおむね以下の通りである。

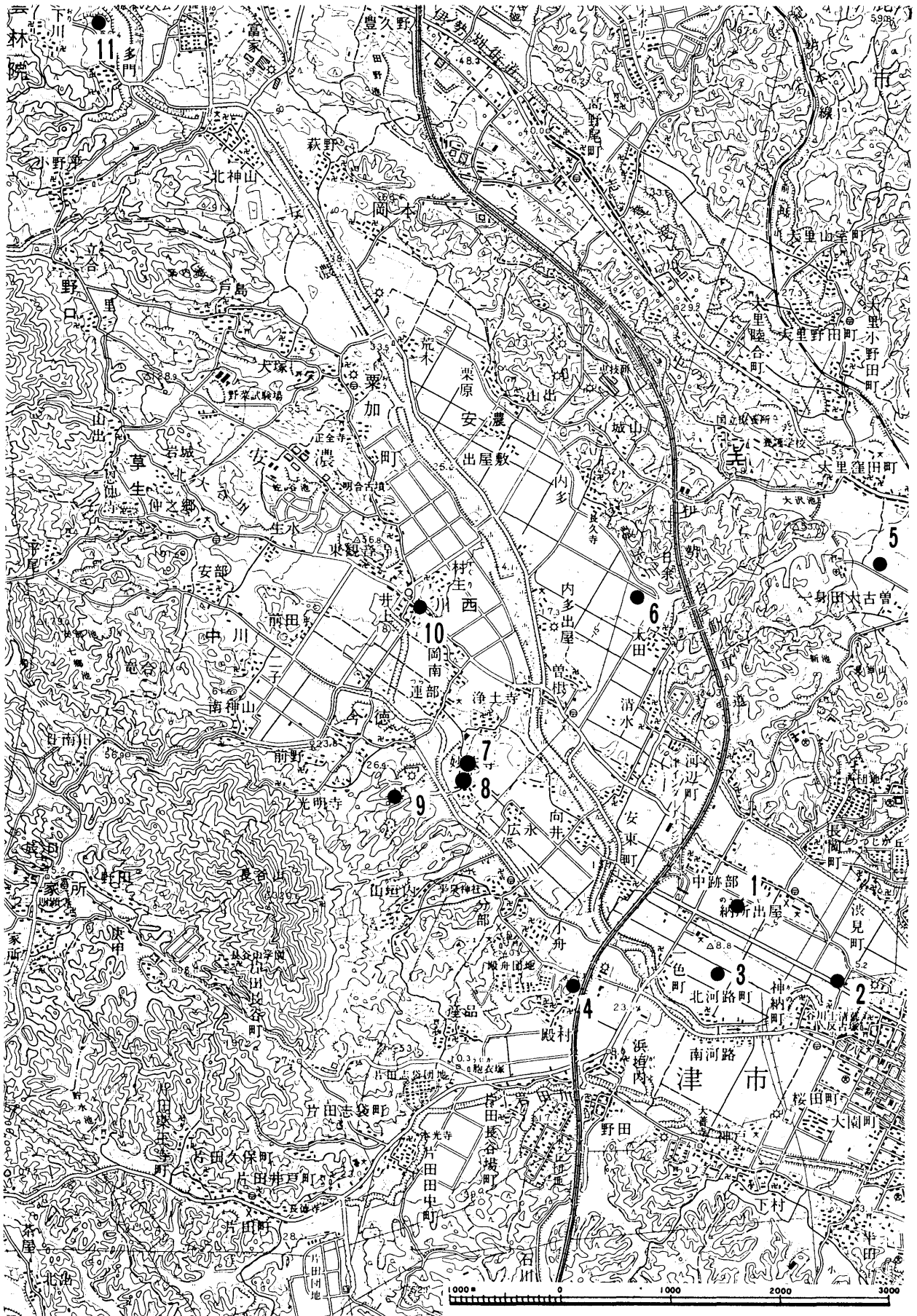
	東海地域	畿内地域
I期	西之山期	滋賀里IV期
II期	五貫森期	船橋期（口酒井期を含む）
III期	馬見塚期	長原期

IV期 檜王式期 弥生前期古段階

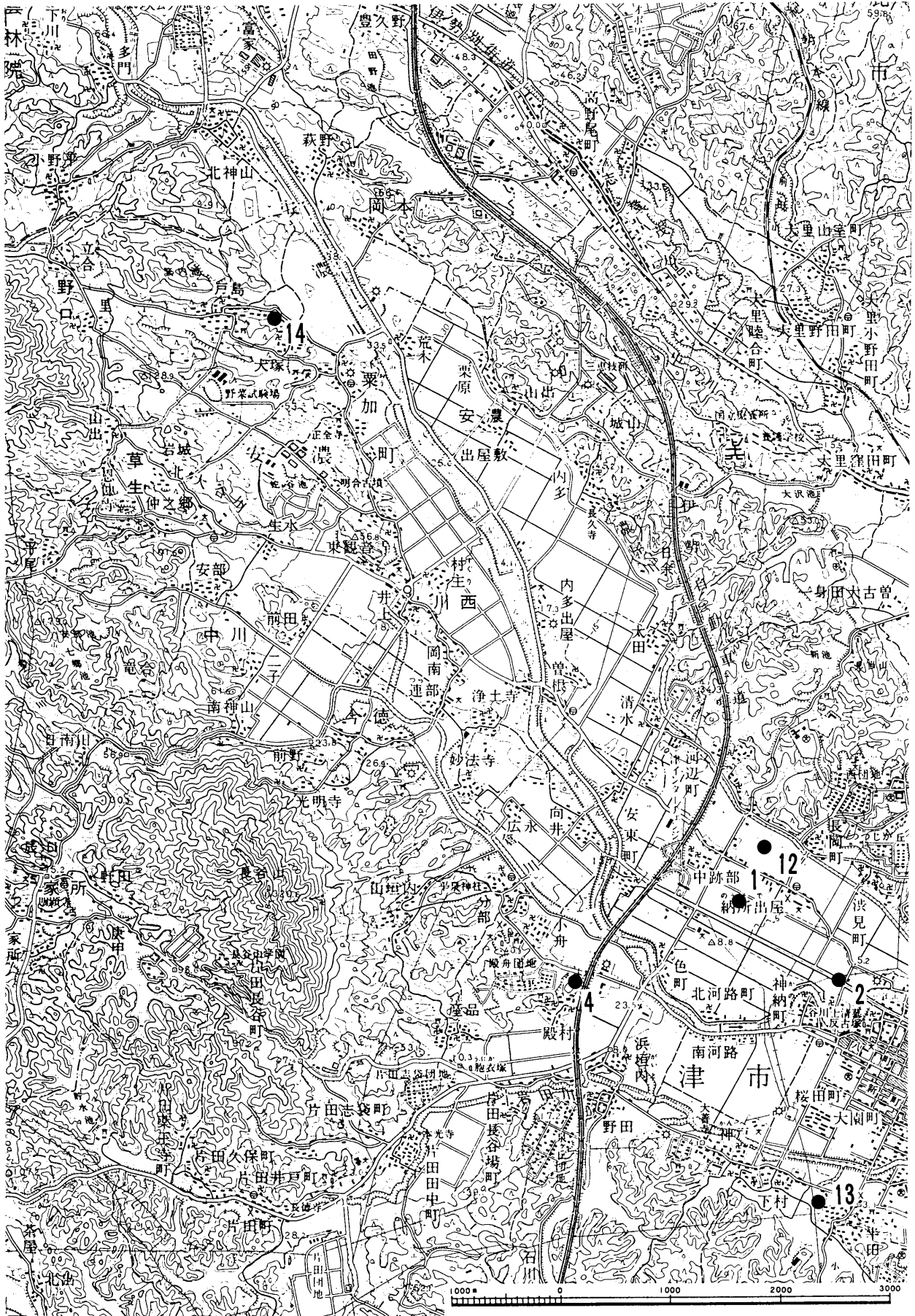
- ③ 鈴木克彦「〔亜流遠賀川式土器〕再考」『Mie history Vol. 2』三重歴史文化研究会 1990
- ④ 伊藤久嗣氏作製 愛知県考古学談話会秋期研究集会『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題』当日配布資料「三重県」1985
- ⑤ 石黒立人「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』No. 7 愛知考古学談話会 1987
なお、一宮市山中遺跡などでは、弥生前期に遡る四隅の切れた方形周溝墓が検出されている。
- ⑥ 伊勢地方の中期前半の「櫛描直線文」の壺形土器は、中ノ庄遺跡など、大部分のものが施文本体に貝殻腹縁を使用していることが観察できる。
- ⑦ 昭和62年度に三重県教育委員会が発掘調査。
- ⑧ 伊藤久嗣氏よりご教示を受けた。
なお、氏によれば、亜流遠賀川式土器を古・新の2期に分けるとすれば、古期に多いとのご指摘である。
- ⑨ 南博史「伊丹市口酒井遺跡—第11次発掘調査報告書—」古代学協会 1988
- ⑩ 新田剛『上箕田遺跡』鈴鹿市教育委員会 1993

	遺跡名	立地	時期
1	松ノ木遺跡	低地	II～IV
2	納所遺跡	低地	III～弥
3	蔵田遺跡	低地	III
4	殿村遺跡	丘陵上	III・弥前
5	橋垣内遺跡	段丘上	III
6	辻の内遺跡	微高地	IV
7	浄土寺南遺跡	微高地	IV
8	浄土寺米買遺跡	微高地	II
9	平田遺跡	丘陵上	IV
10	多倉田遺跡	微高地	IV
11	椀田遺跡	段丘上	III
12	森山東遺跡	低地	弥前～
13	上村遺跡	台地弥	前～
14	城坂遺跡	丘陵上	弥前

第1表 安濃川流域周辺の遺跡（縄文晩期～弥生前期）一覧



第30図 安濃川流域の縄文晩期遺跡分布図 (国土地理院 1 : 50,000 津西部)



第31図 安濃川流域の弥生前期遺跡分布図 (国土地理院 1 : 50,000 津西部)

図版 番号	遺物 番号	器形	出土位置		法量 (cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調
			地区	遺構	口径	器高				
第19図	1	深鉢	A	SH6	17.4		外:口縁部ナア、以下ケズリ調整 内:ヨコナア	石英・白色粒多く含む	良好	暗茶褐色
	2	深鉢	A	SH6	20.4		外:口縁部下に突帯、体部との境に段をなす。 口縁部条痕、体部ケズリ調整	白色砂粒・ウンモ多く含む	良好	暗茶褐色
	3	深鉢	A	SR3	24.8		外:ケズリ調整 内:条痕のちナア	石英・白色粒多く含む	良好	暗黄灰色
	4	底部	A	SH6			平坦な底面をもつ	石英・白色粒多く含む	良好	淡茶褐色
	5	底部	A	SR3			平坦な底面をもつ	石英・白色粒多く含む	良好	明褐色
	6	底部	A	SR3			平坦な底面をもつ	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	淡茶褐色
	7	底部	A	SR3			平坦な底面をもつ	石英・白色粒多く含む	良好	淡茶褐色
	8	底部	A	SR3			平坦な底面をもつ	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	淡褐色
	9	底部	A	SH6			外:ケズリ調整	石英・白色粒多く含む	良好	淡茶灰色
	10	底部	A	SR3			外:ケズリ調整 内:ナア	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	淡茶褐色
	11	深鉢	A	SH6	30.6		外:口縁部下にD字押圧突帯、肩部に稜をもつ。 体部以下ケズリ調整	白色粒・ウンモ多く含む	良好	茶褐色～ 黄褐色
	12	深鉢	A	SR3			外:肩部に稜をもつ。口縁部ナア、体部以下ヘラケズリ	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	淡茶褐色
	13	浅鉢	A	SH6	32.8	19.3	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	淡茶灰色
第20図	14	深鉢	A	SR3	18.4		外:口縁部が突帯状に肥厚する。	白色粒・ウンモ含む	良好	明黄褐色
	15	深鉢	A	SZ7	16.4		外:口縁部下にO字状押圧突帯をもつ。 口縁部ナア、体部以下ケズリ調整	石英・白色粒・ウンモ含む	良好	淡茶褐色
	16	深鉢	A	包含層	16.6		外:口縁部下にO字状押圧突帯をもつ。 口縁部ナア、体部以下ケズリ調整	石英・白色粒含む	良好	暗茶褐色
	17	深鉢	A	包含層	19.6		外:口縁部下にO字状押圧突帯をもつ。	石英・白色粒含む	良好	暗茶褐色
	18	深鉢	A	SZ7	23.2		外:口縁部から下がった位置に突帯をもつ。 口縁部二枚貝による条痕調整	石英・白色粒多く含む	不良	淡茶褐色
	19	底部	B	SZ7			平坦な底面をもつ	石英・白色粒多く含む	良好	明黄褐色
	20	底部	B	SZ7			平坦な底面をもつ	石英・白色粒含む	良好	淡茶灰色
	21	深鉢	A	SZ7	17.4		外:口縁部下に無文の突帯をもつ。 口縁部二枚貝による条痕調整	石英・白色粒多く含む	良好	乳褐色
	22	深鉢	A	SZ7	17.2		外:口縁部やや下がった位置に無文の突帯をもつ。 内:ナア	石英・白色粒・ウンモ・ チャート片含む	良好	淡茶褐色
	第21図	23	深鉢	A	SR3			外:口縁部やや下がった位置に突帯をもつ。 突帯以下を条痕調整する。	微細な石英粒・ウンモ含む	良好
24		深鉢	A	SR3			外:口縁部やや下がった位置に無文の突帯をもつ。	石英・白色粒多く含む	良好	淡茶褐色
25		深鉢	A	SR3			外:条痕調整	石英・白色粒多く含む	良好	淡茶灰色
26		深鉢	A	SR3			外:条痕調整	石英砂粒・微細なウンモ多量に 含む	良好	淡茶褐色
27		深鉢	A	包含層			外:条痕調整 内:ナア	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	暗褐色
29		深鉢	A	SH6			外:ケズリ調整	石英・白色粒含む	良好	黒褐色
30		深鉢	A	SH6			外:口縁部下にD字押圧突帯、肩部に稜をもつ。 内:口縁端部に一条の沈線	白色粒・ウンモ含む	良好	淡茶褐色
31		深鉢	A	SH6			外:ケズリ調整	石英・白色粒・ウンモ含む	良好	暗茶灰色
32		深鉢	A	SH6			外:口縁部をまるくおさめる。		良好	暗茶褐色
33		深鉢	A	SH6			外:肩部に稜をもつ。口縁部条痕調整 体部以下ケズリ調整	白色粒多く含む	良好	暗茶褐色
34		深鉢	A	SH6			外:口縁部下にD字押圧突帯、肩部に稜をもつ。 内:口縁端部に一条の沈線	石英・白色粒含む	良好	暗茶褐色
35		深鉢	A	SH6			外:肩部に一条の沈線をもつ。	白色粒多く含む	良好	暗茶灰色
36		深鉢	A	SH6			外:口縁部下にD字押圧突帯、肩部に稜をもつ。 内:口縁端部に一条の沈線	石英・白色粒・ウンモ多く含む	良好	淡茶灰色
第27図		120	注口土器	C	包含層			外:下半部に1条の凹線をもつ	やや粗い	良好

第2表 松ノ木遺跡出土縄文土器観察表



A・B地区調査区全景（南西から）



A・B地区調査区全景（東から）



旧河道SR3 (西から)



旧河道SR3 出土自然木



竪穴住居SH6・落込み遺構SZ7（南西から）



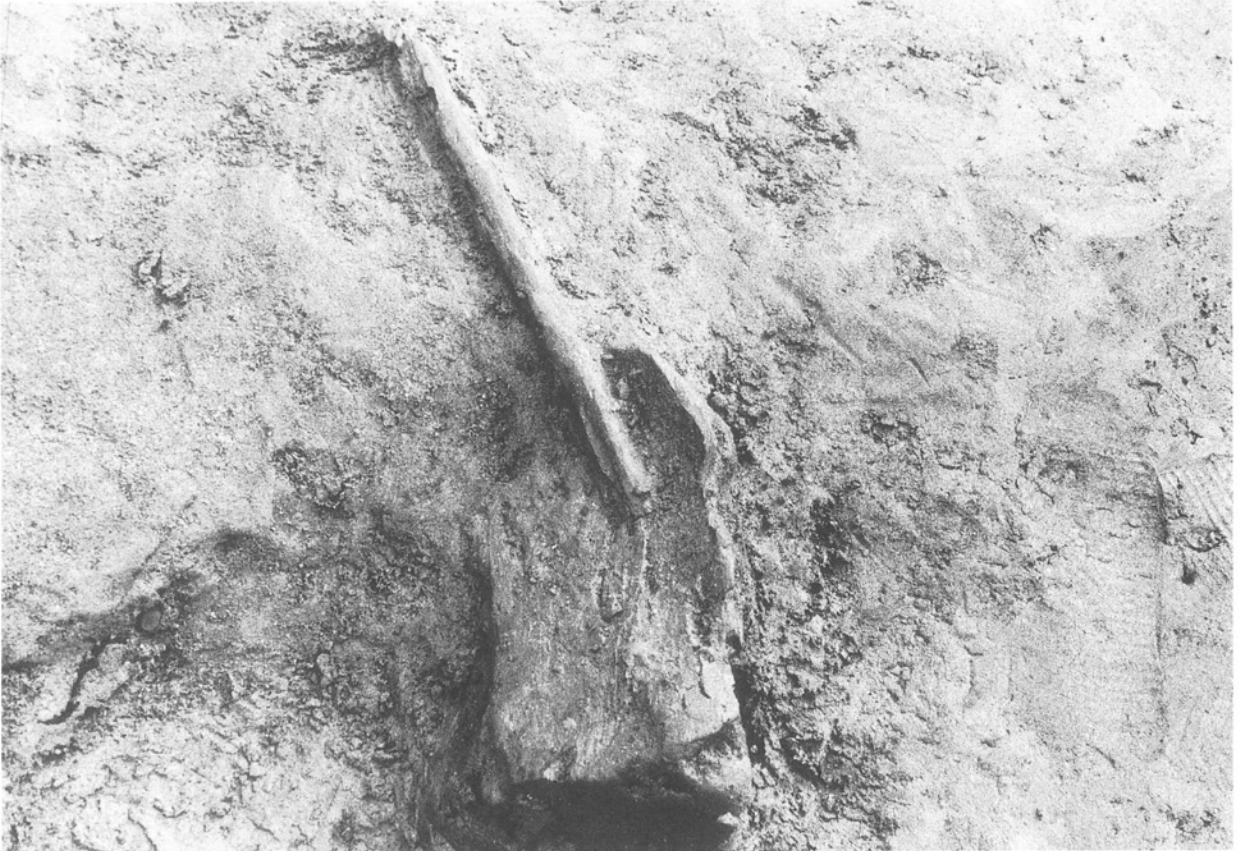
竪穴住居SH6炭化物



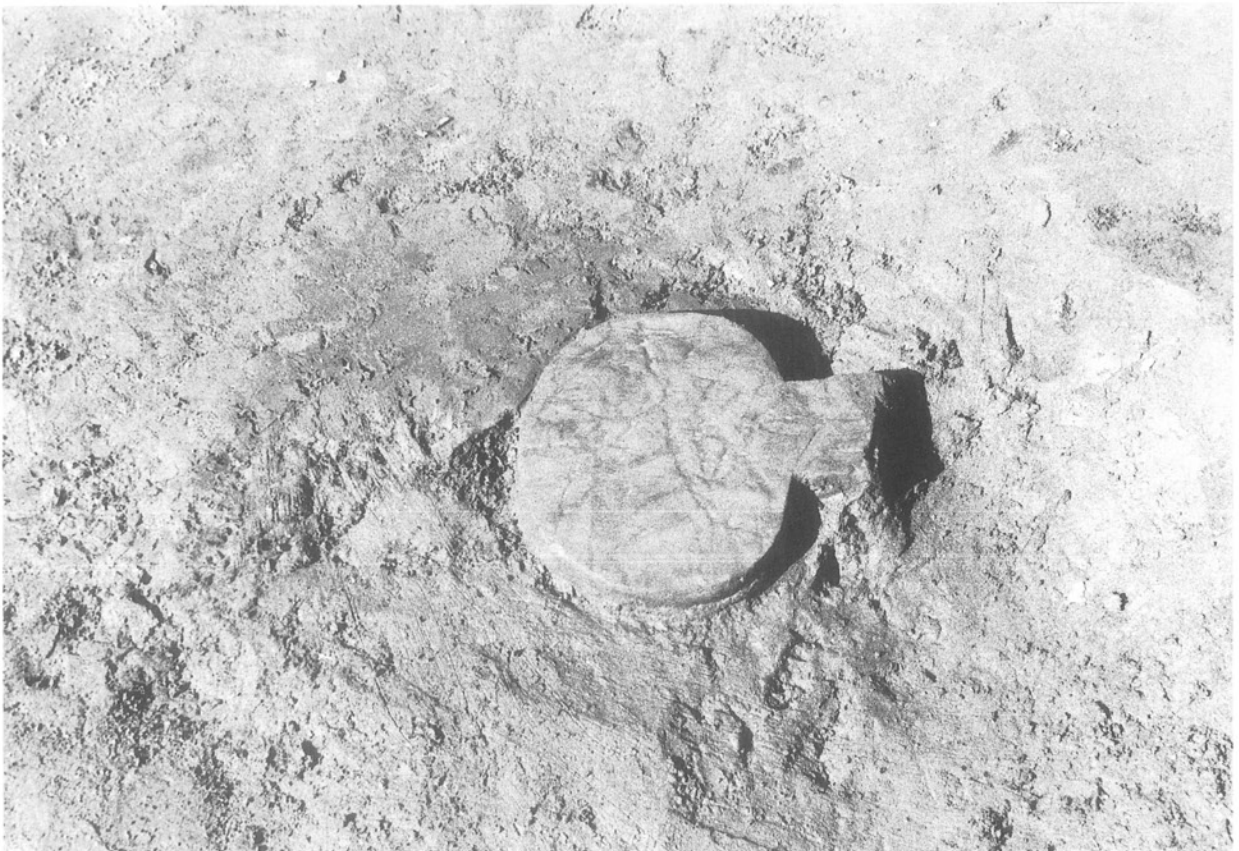
方形周溝墓 S X 2 (南西から)



方形周溝墓 S X 10 (南東から)



方形周溝墓 S X 10出土鋤



方形周溝墓 S X 10出土用途不明木製品



C地区調査区全景（南から）



D地区調査区全景（西から）



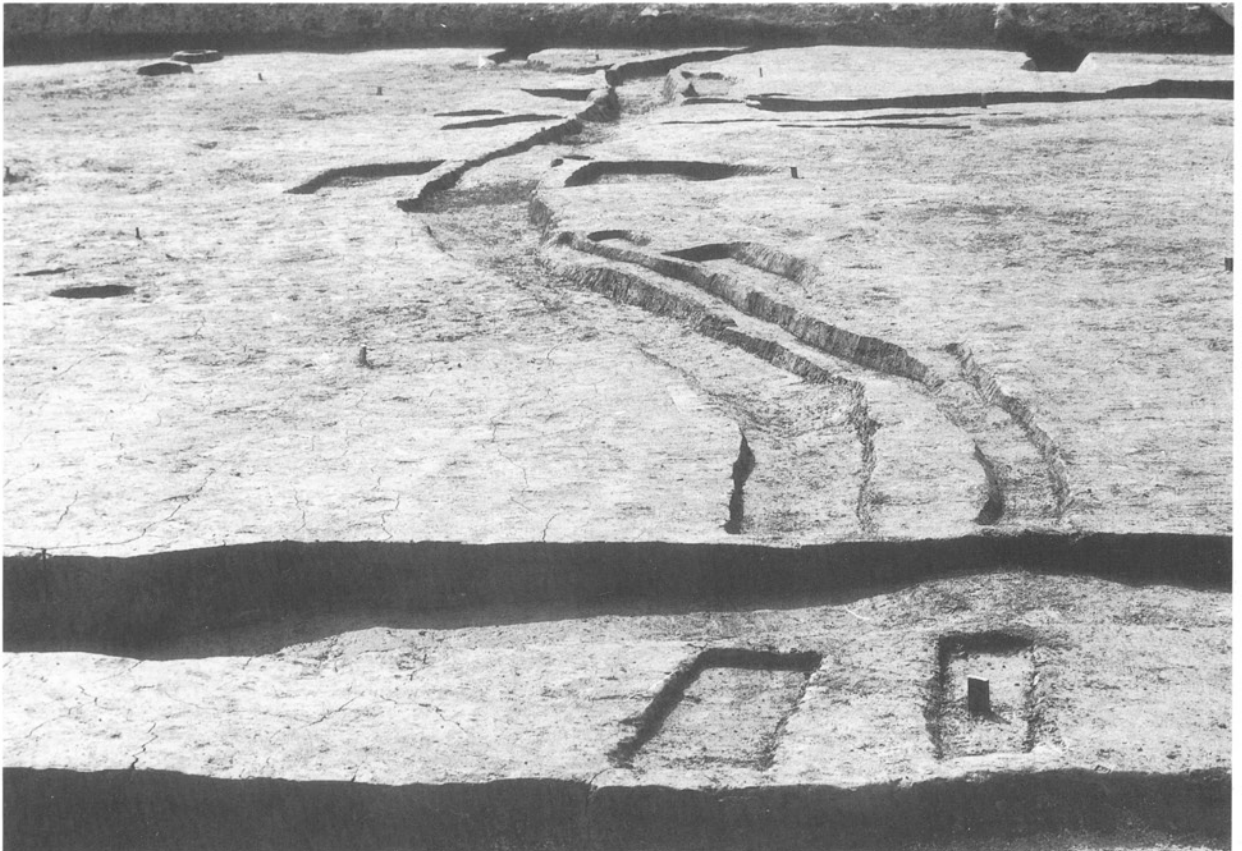
方形周溝墓 S X 11 (奥側) ・ S X 12 (手前) (東から)



方形周溝墓 S X 11 (西から)



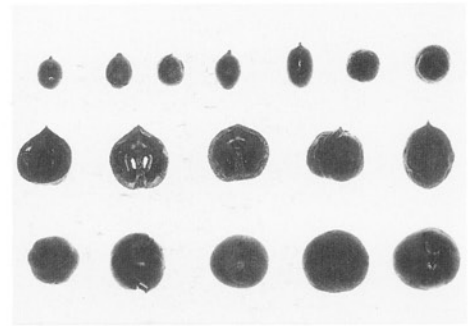
土坑S K14 (南西から)



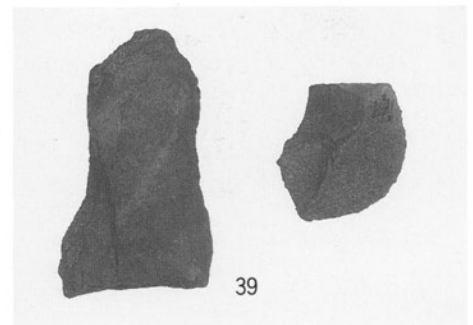
溝S D13 (東から)



SR 3 出土土器



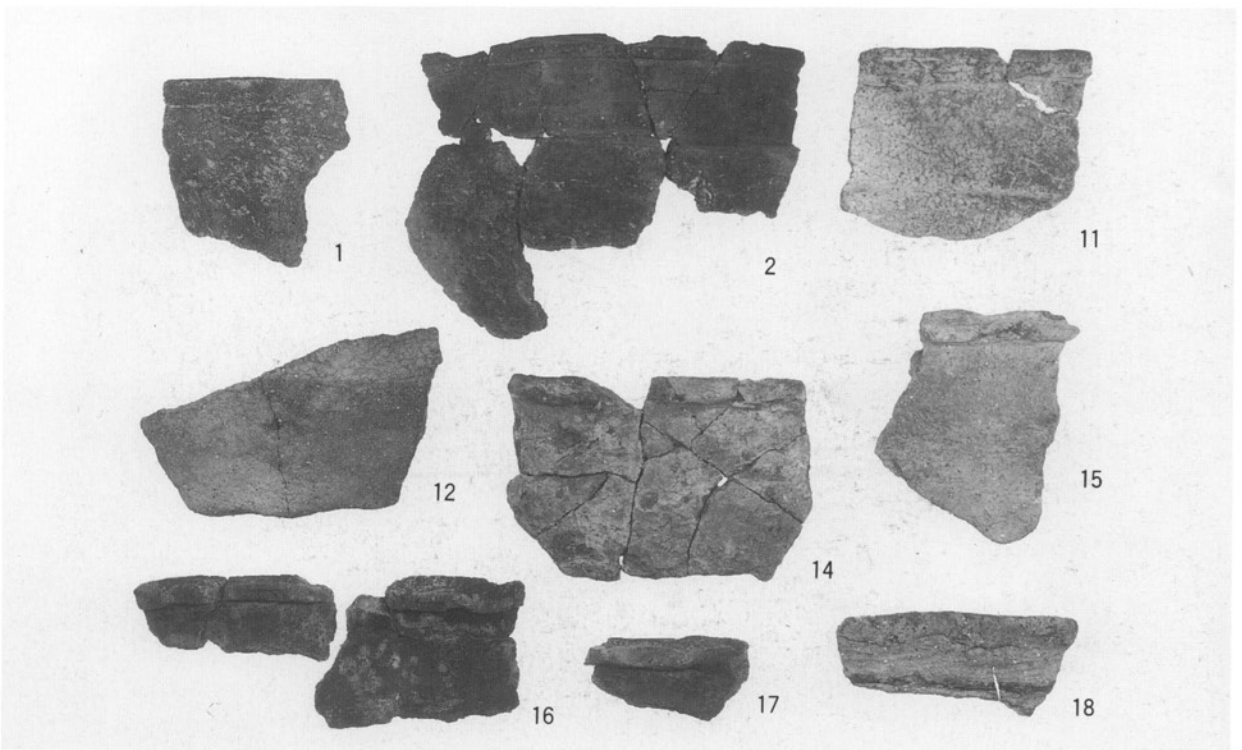
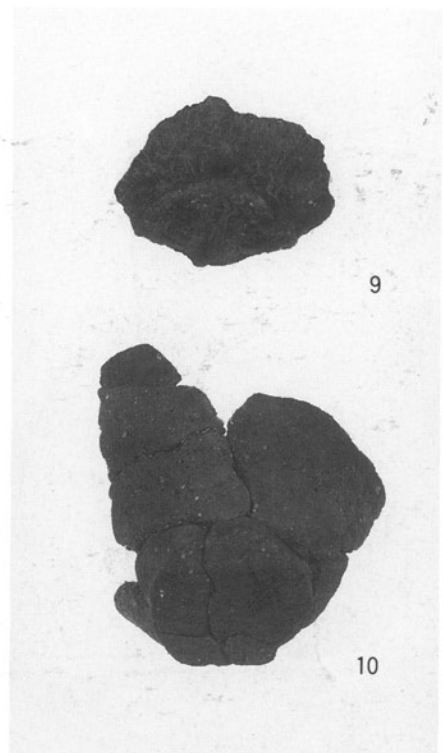
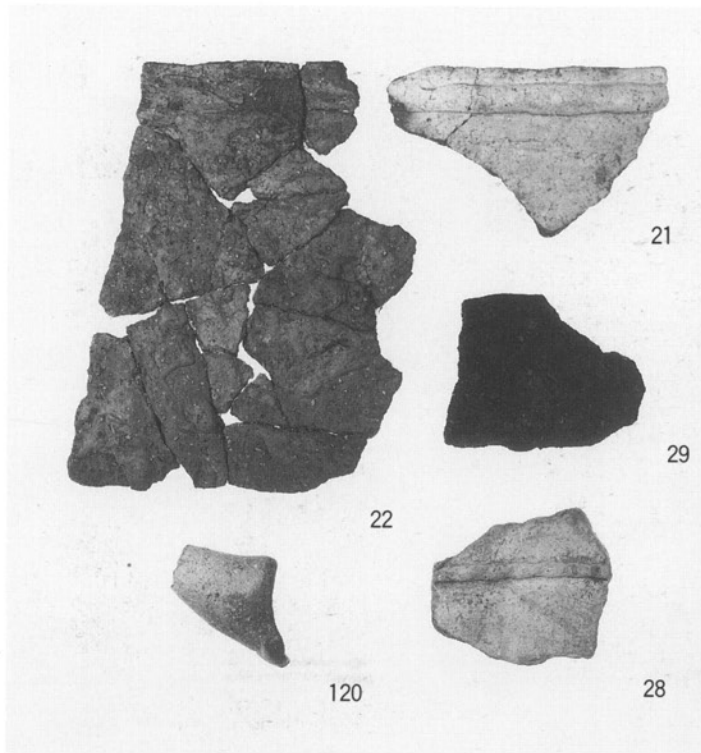
SR 3 出土堅果類



SR 3 出土石器・サヌカイト片



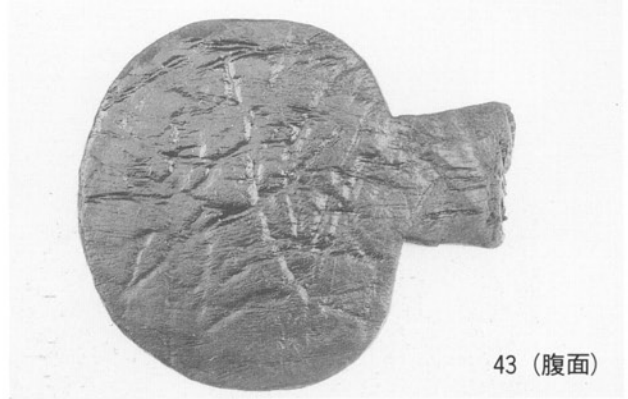
SH 6 出土土器



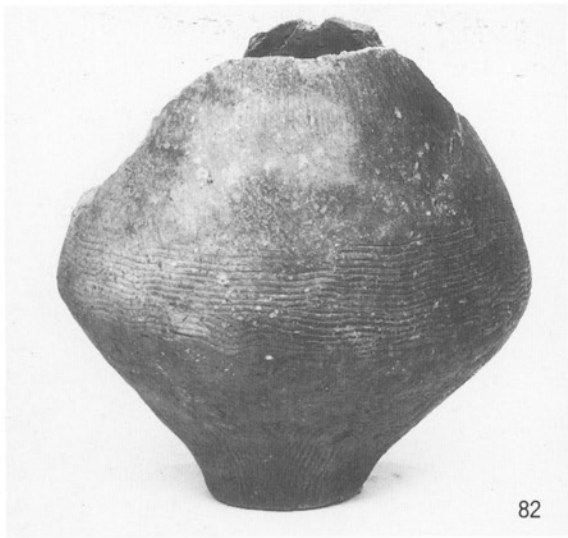
縄文後期～弥生前期の土器

P L11

松ノ木遺跡

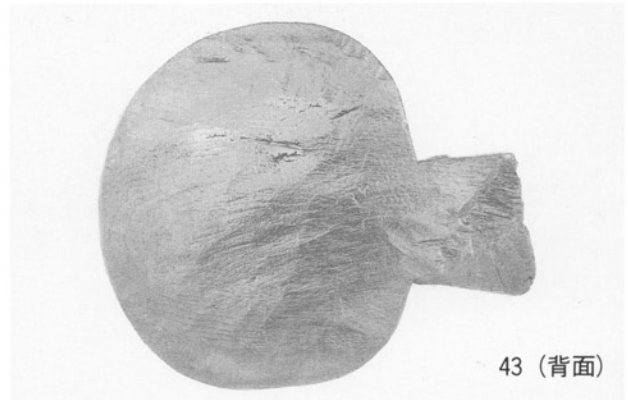


43 (腹面)



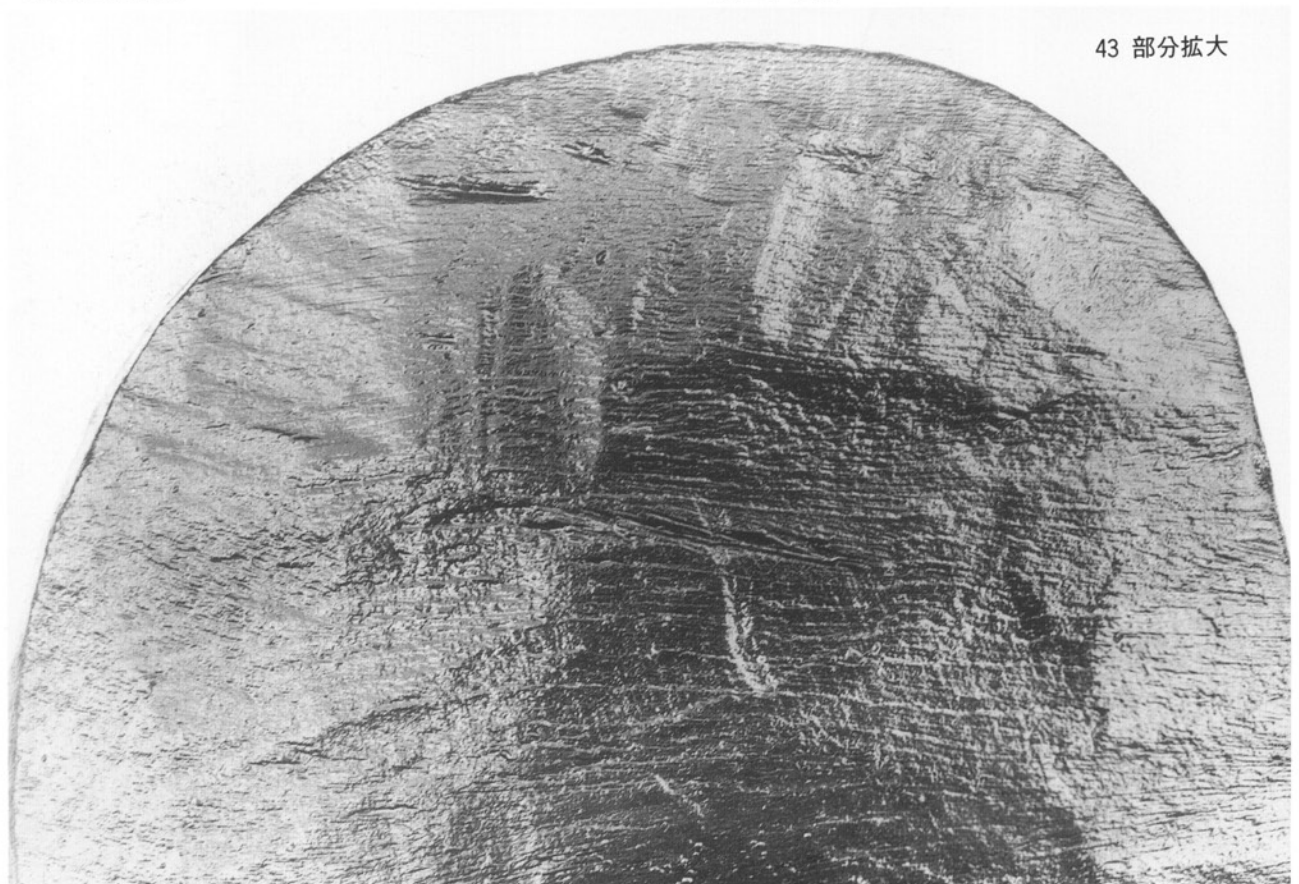
82

S X10出土土器



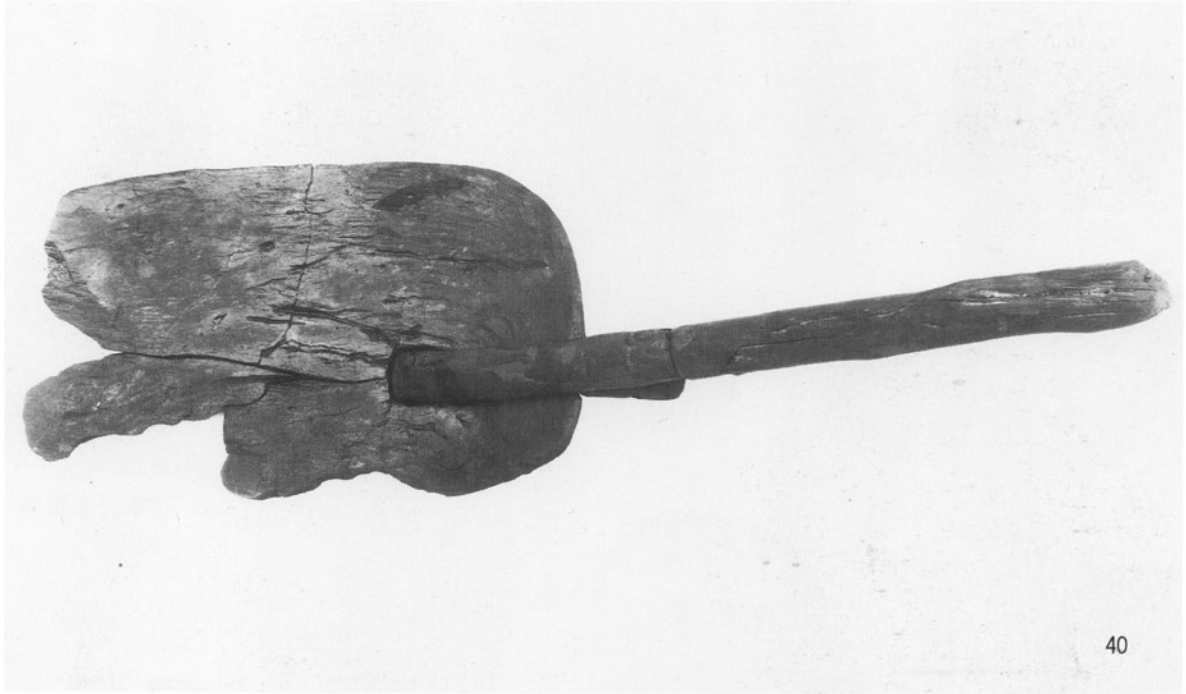
43 (背面)

S X10出土木製品



43 部分拡大

S X10出土木製品調整痕



S X 10出土木製鋤



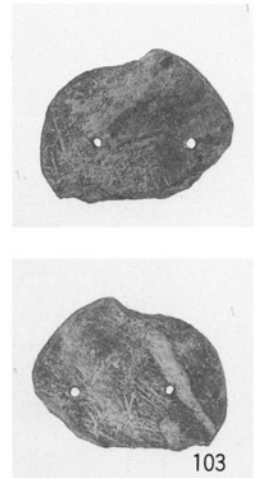
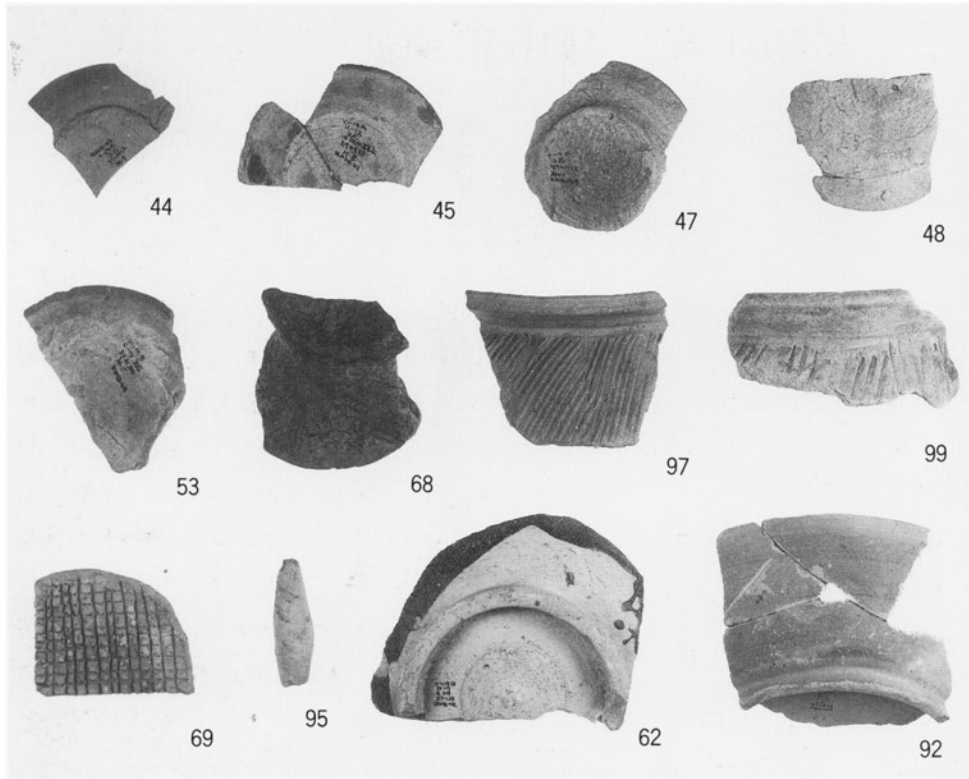
S X 10出土木製鋤 (腹面)



同 (背面)

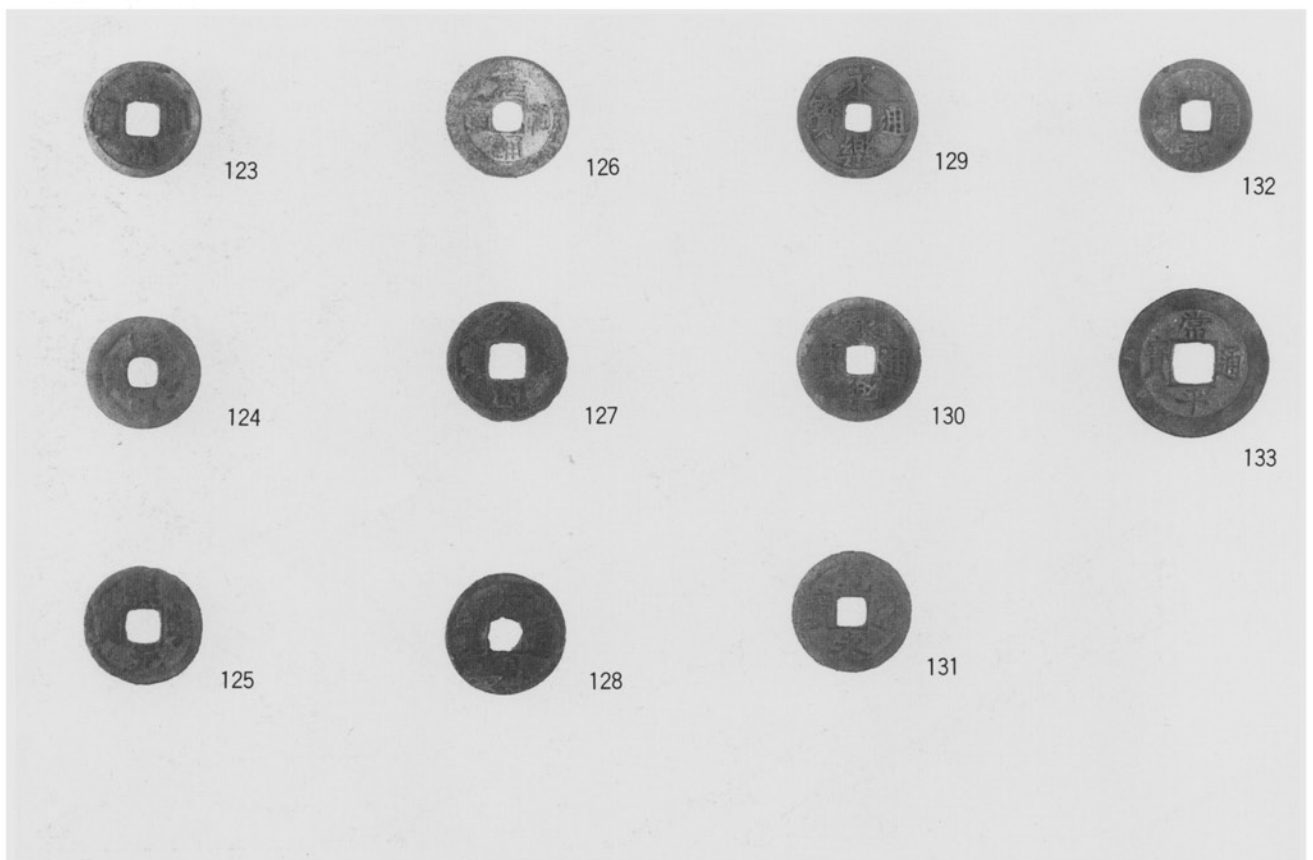
P L 13

松ノ木遺跡



S D 13出土石製品

古墳時代以降の土器



銭貨類

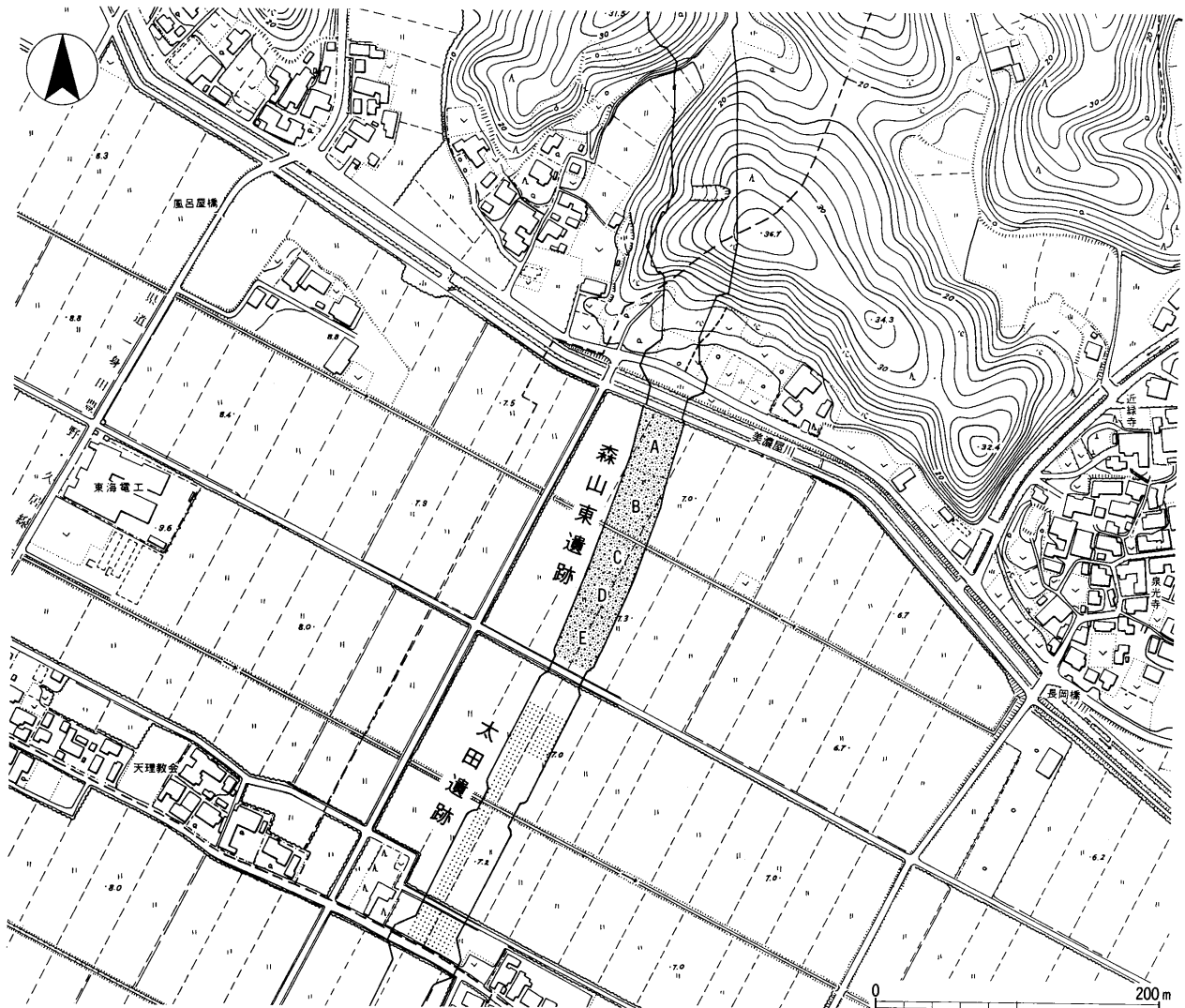
Ⅳ．津市長岡町 森山東遺跡

1. 位置と地形

森山東遺跡は、行政上津市長岡町に属し、現況は標高7.2m前後の水田である。遺跡の北辺には美濃屋川が流れている。この川は昭和47年度の県営ほ場整備事業により、その流路を北に変更した。その北には見当山丘陵の支尾根が伸びてきている。丘陵の南斜面には縄文時代以降の複合遺跡である宮ノ前遺跡があり、森山東遺跡の弥生時代水田遺構と関連する時期の竪穴住居も検出されている^①。また見当山丘陵上には長遺跡^②・山籠遺跡^③があり、畿内第Ⅳ様式の

土器が出土している。

森山東遺跡の西方500mには、かつて昭和45年度の県営ほ場整備事業時に発掘調査された森山遺跡^④があった。標高10～15mの独立小丘陵上に立地し、周囲の田面との比高は5～6mであった。A地区、B地区に分けて調査され、A地区では、弥生時代後期の土器が出土したV字溝が、また丘陵の北辺にあたるB地区では幅1m前後、長さ2～6mの溝状土坑が検出されている。時期は弥生時代後期の欠山期の



第32図 森山東遺跡・太田遺跡発掘調査区位置図（1：5,000）

ものが多く、一部、弥生時代前期の土器も出土している。発掘調査報告書^⑤によれば、A地区の発掘調査と時を同じくして、排水路の工事中に森山遺跡の東約100mで森山東遺跡を発見し、森山遺跡よりもこの遺跡の方に居住空間が求められると指摘がなされている。

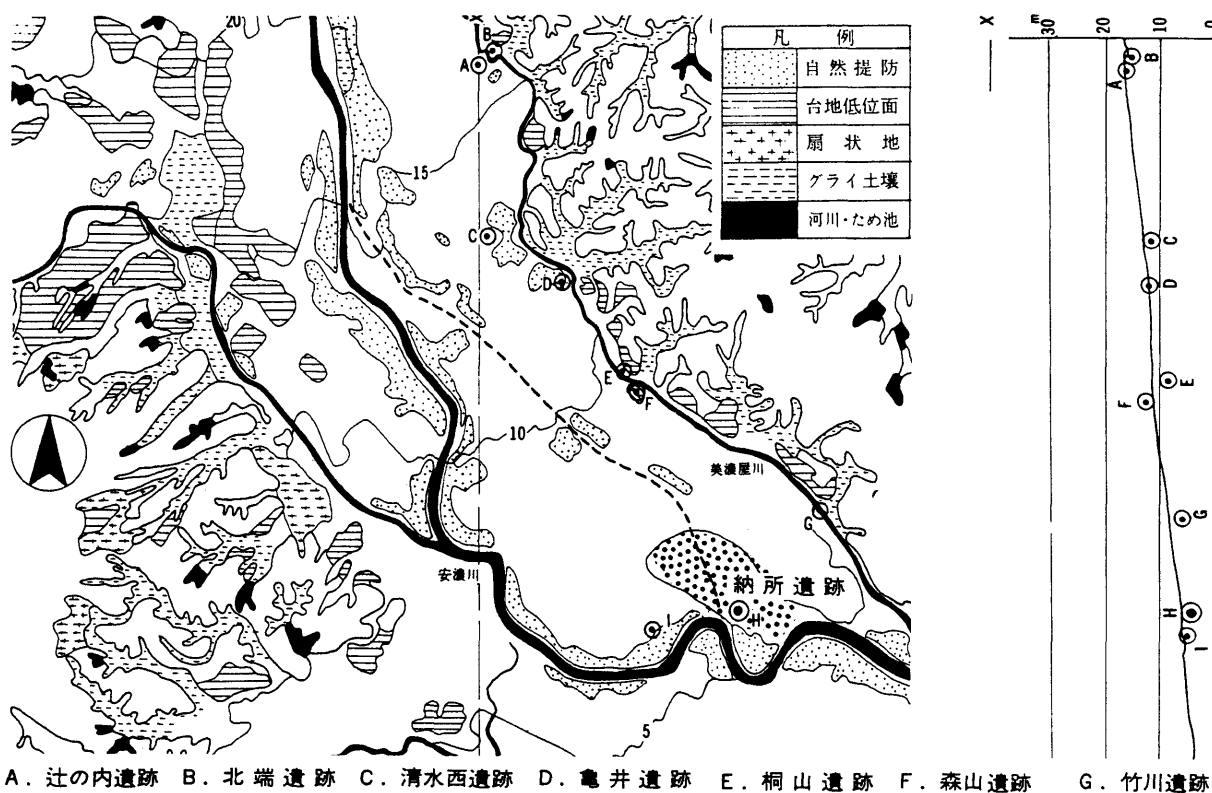
今回報告する森山東遺跡は、この森山東遺跡の東端に位置する。南東1.5kmには納所遺跡があり、弥生時代前期～後期にかけての拠点集落の一部が道路建設に伴い発掘調査された^⑥。納所遺跡が安濃川水系の低湿地を東西に調査したのに対し、今回の中勢道路の調査は南北に調査をすることになり、同水系の古環境復元にその成果が期待された。

納所遺跡の発掘調査と並行して実施された安田喜憲氏による遺跡周辺の古環境復元調査^⑦によれば、納所遺跡の地表下2m前後には暗青色有機質粘土層が広範囲に認められ、これは安濃川の氾濫以前の潟湖性の堆積物と考えられた。その上位には灰白色の砂礫層が1m前後の層序で堆積し、その上面は起伏に富み、凹みには、埋木を多量に含む泥炭層・有機質粘土層が認められた。弥生時代前・中期の遺構が検出されたのは、この砂礫層の上面である。この上

は褐色シルトの遺物包含層が堆積している。こうした土層堆積状況は、概ね森山東遺跡周辺の土層堆積状況にもあてはまり、河川の氾濫によって堆積した土砂が微高地をつくり、自然堤防を発達させ、この上に弥生時代以降の居住域が次第に広がっていったようである。

一方、森山東遺跡の南100mにある太田遺跡では、森勇一氏により、硅藻分析が行われている^⑧。採取された下層のシルトまたは粘土層は、納所遺跡で確認の暗青色有機質粘土層に対応すると考えられるもので、いずれも河川近くの低湿地を好む硅藻の出現率が高い。この上には森山東遺跡で確認された弥生水田の基盤層に対応すると考えられる黒灰色泥炭層が堆積する。この層にみられる硅藻には、*Eunotia*属の種群が多く、*Melosira granulata*の出現率も高いことから、湿地帯が形成され、冷涼な環境下で泥炭層の堆積が進行したものと推測されている。

太田遺跡の南200mにある松ノ木遺跡では、縄文時代晩期後半の竪穴住居を切る幅15m、深さ1.7～2.8mの縄文時代後期後半の自然流水路が検出された。その遺物出土状況から縄文時代晩期には、中跡部から松ノ木遺跡にかけての地域に自然堤防状の微



A. 辻の内遺跡 B. 北端遺跡 C. 清水西遺跡 D. 亀井遺跡 E. 桐山遺跡 F. 森山遺跡 G. 竹川遺跡

第33図 安濃川流域平野の地形図(1:50,000) 辻の内遺跡発掘調査報告書より転載^⑨

高地が形成されていたことが判明してきた。この自然流水路は等高線の曲がり方を考慮すると、下流方向1 kmに納所遺跡があり、納所遺跡の下層の流水路と何らかの関連がある可能性もある。

松ノ木遺跡の南1 kmにある蔵田遺跡では、自然流水路と弥生時代の堰が検出された^⑧。出土遺物は弥生時代後期の壺・高杯・甕等である。

上記の太田遺跡、松ノ木遺跡、蔵田遺跡の調査により、安濃川及びこれに伴う小河川の氾濫を経て、次第に弥生時代以降の遺跡が立地する空間が形成されてきた様相が明らかになってきている。

(増田安生)

〔註〕

- ① 「V 宮ノ前遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センターほか 1990
- ② 萱室康光ほか『長遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1989
- ③ 「Ⅲ 山籠遺跡」『同前掲書①』 1990
- ④ 下村登良男ほか『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告』三重県文化財連盟 1972
- ⑤ 同前掲書④
- ⑥ 伊藤久嗣『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会 1980
- ⑦ 安田喜憲「三重県津市納所遺跡の泥土の花粉分析的研究」『納所遺跡—その自然環境と自然遺物—』三重県教育委員会 1979
- ⑧ 「三重県津市太田遺跡における珪藻分析結果」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ 森山東・太田遺跡』三重県教育委員会 1989
- ⑨ 伊藤克幸『安芸郡安濃村・辻の内遺跡』安濃村遺跡調査会・安濃村教育委員会 1975
- ⑩ 米山浩之「Ⅲ 蔵田遺跡」『三重県産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報』津市教育委員会 1993

2. 調査の経過概要

発掘調査は、調査区北から順にA地区(1,200㎡)、B地区(1,170㎡)、C地区(1,050㎡)を対象として、昭和63年8月から開始した。A・B地区では第Ⅵ層の灰色砂混じりシルトの上面で、古墳時代と中世～近世の溝、土坑等を検出したが、C地区ではこれより下層の第Ⅹ層で黒灰色シルト(泥炭土)を基盤とする弥生時代の水田遺構が確認され、大畦畔や小畦畔により区画された小区画水田の広がり、B地区やC地区の南に及ぶことが明らかとなった。そのため、平成元年2月からB地区下層(1,170㎡)と

D地区(810㎡)の水田遺構の追加調査を実施した。また水田遺構は、さらに南部へも広がり、しかも2層にわたって存在することが次第に明らかとなったため、平成元年4月から6月にかけて新たにE地区(1,000㎡)の調査も2層に分けて実施した。

したがって実質的な調査面積は、A・B地区上層で2,370㎡、下層の水田遺構の調査としてB地区～E地区合わせて5,030㎡の計7,400㎡の調査を実施したことになる。(倉田直純)

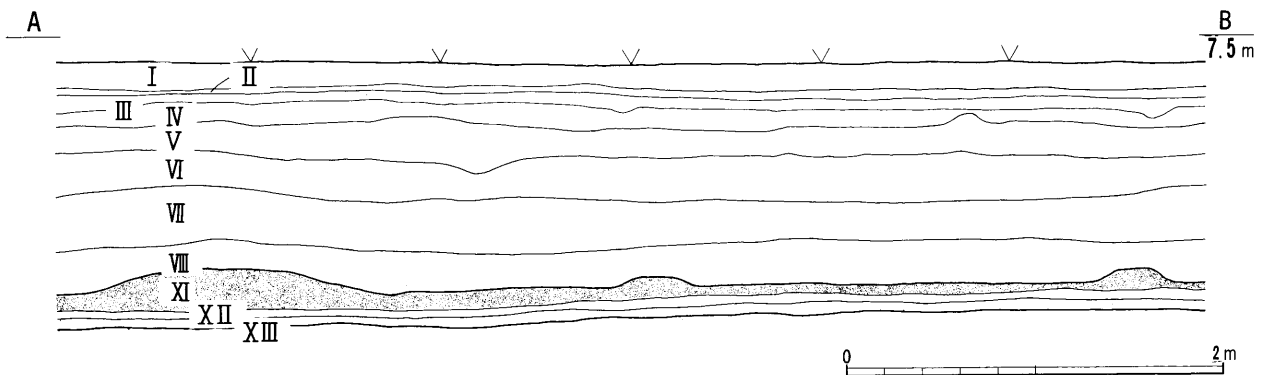
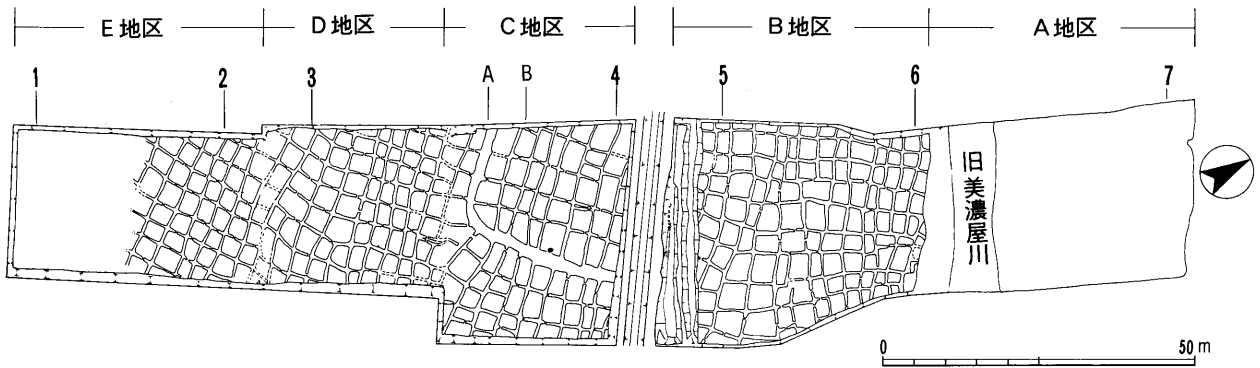
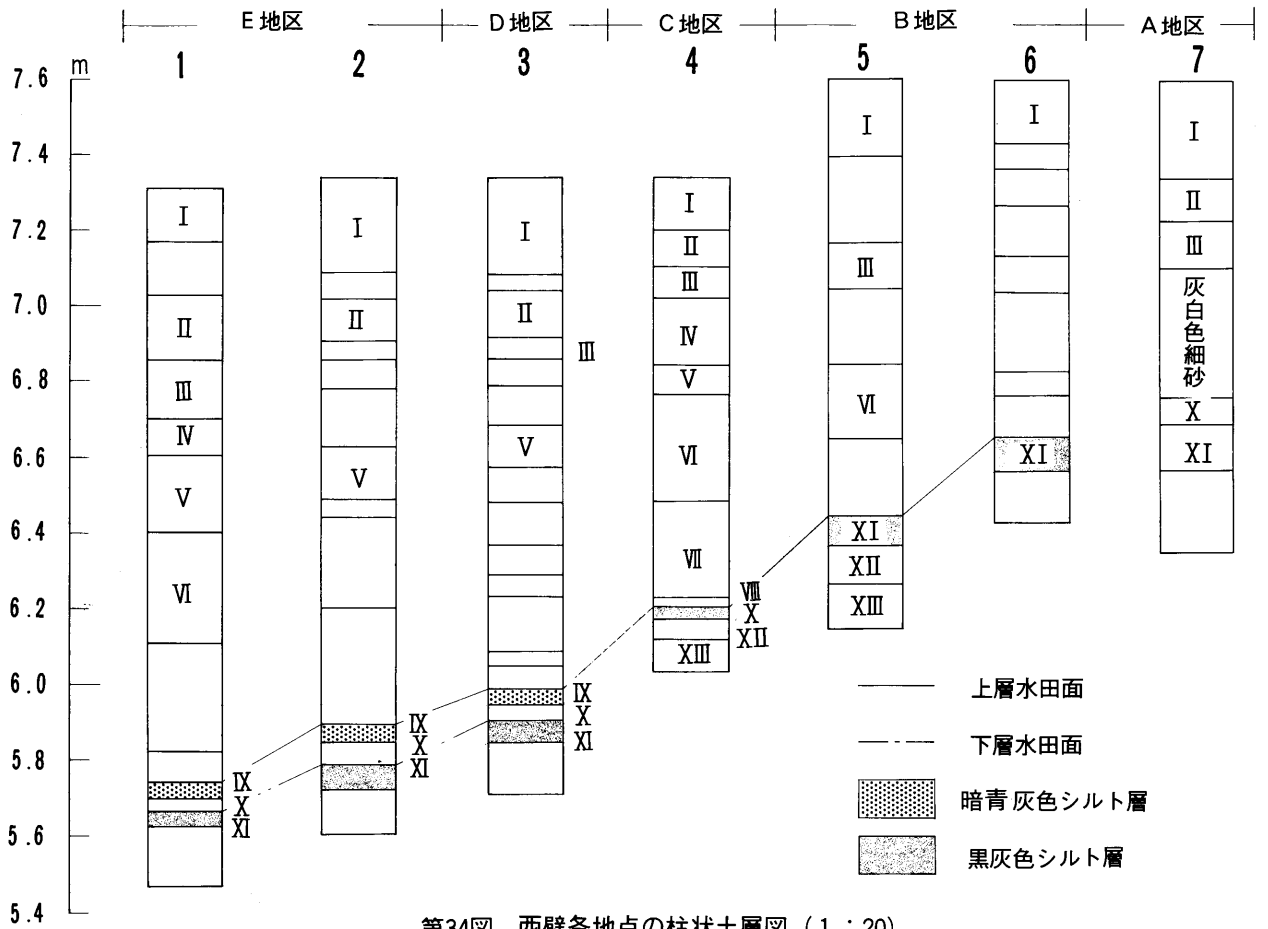
3. 遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は、第3表、及び第34図の柱状土層図、第36図のC地区大畦畔部分土層断面図に示したようにⅠ～ⅩⅢ層に分かれる。このうち、古墳時代以降の遺構が検出されたB地区での遺構検出面はⅥ層上面で、弥生時代の水田遺構が確認された基盤層は、Ⅸ層の暗青灰色シルト層ならびにⅩ層の黒灰色シルト層(泥炭)である。その下のⅩⅡ層、ⅩⅢ層では、遺構・遺物共に確認されず、また水田の存在を示す一つの根拠とされるイネのプラントオパールも確認されていない。なお旧美濃屋川以北(A地区)では、堆積層の乱れが確認された。即ち、Ⅲ層の下には灰白色細砂が40～60cmの幅で厚く堆積しており、Ⅳ～ⅩⅢ層は確認されなかった。おそらく、この層は、

灰白色細砂土内出土の遺物から判断して室町時代の一時期におこった激しい氾濫によって形成されたものと思われる。

当遺跡の位置する地形は、第32図が示しているように、北が高く、南へ向かって徐々に低くなっている。特にD地区以南では、傾斜が緩く、河川の氾濫や地下水位の上昇、下降の影響をより受けやすい状況にあったものと思われる。また東西方向の断面を図示しなかったが、C地区西部の大畦畔に囲まれた一画からB地区西部にかけては、周囲の田面よりやや高い微高地状となっており、E地区南部中央付近は、浅い窪地状を呈している。

さて、弥生時代の水田遺構は、冒頭でも触れたよ



第36図 C地区大畦畔部分 (A-B) 土層断面図 (1 : 40)

うに2層にわたって検出された。ここではその基盤層について若干触れておきたい。D地区南部からE地区にかけては、下層水田の基盤層であるXI層の上面でX層、IX層の堆積が認められた。この2層は南に向かって堆積層としての厚みを増す傾向にあるが、北に向かっては徐々に薄くなり、D地区北部から北では、全く見られない。D地区南部以南では、このIX層が上層水田の基盤層となっている。しかしこれより以北で検出された一連の上層水田遺構は、全地区にわたって認められたXI層を基盤層としている。従って土層の堆積状況から以下のような解釈ができよう。まず第1期の下層水田は、地形の傾斜が非常に緩やかな南部の低湿地帯に求められた。

ここには、地下水位の比較的高い泥炭土があり、初期の稲作栽培には、最も適していたためであろう。しかしある時期水田全面が河川の氾濫と思われる緑灰色細砂（X層）に覆われ、一旦下層水田は埋没し、さらにその後の滞水で第IX層が形成された。これを契機として新たに造成された第2期の上層水田は、南部のみならず、洪水の及ばなかった北部の微高地まで一気に開発が進んだものと思われ、上層水田の基盤層が南部と北部とで異なるのはこのためと考えられる。なお、調査区全面にわたって見られるXI層を下層水田の基盤層、IX層を上層水田の基盤層とみる見解も成り立つが、畦畔の走行、連続性、水田の規模等から否定的である。（倉田直純・清水正明）

層名	色調・土質	備考
I層	灰褐色土	耕土
II層	黄褐色砂質土	盛土
III層	褐灰色シルト質砂	
IV層	灰色砂質シルト	
V層	灰色シルト質砂	
VI層	灰色シルト（砂混入）	上面は、B地区遺構検出面（古墳時代以降）
VII層	灰色シルト質粘土	
VIII層	淡灰色シルト	
IX層	暗青灰色シルト（細砂混入）	D地区南～E地区上層水田基盤層
X層	緑灰色細砂	
XI層	黒灰色シルト（泥炭土）	B地区～D地区北上層水田基盤層・E地区下層水田基盤層
XII層	暗灰色シルト（細砂・腐植物混入）	
XIII層	黒灰色シルト	

第3表 基本層序

4. 遺構

(1) B地区の水田遺構

A. 水田の地形

水田面の標高は、北西部が最も高く6.70mを測り、西から東に、北から南に向かって徐々に低くなり、南端部が標高6.35mで最も低い。したがって水田は等高線が北東方向から南東方向に走る緩傾斜地に造られたことがわかる。また小畦畔で区画されたそれぞれの区画内においても若干の高低差があり、地形勾配と同様な傾向を示している。

B. 畦畔の走行と区画

緩勾配の傾斜面を整地することにより造られた個

々の水田は、遺構検出の際、東西畦畔が南北畦畔に比べて明瞭に確認されたという事実が示すように、等高線に概ね直交する東西方向の畦畔を基調としている。

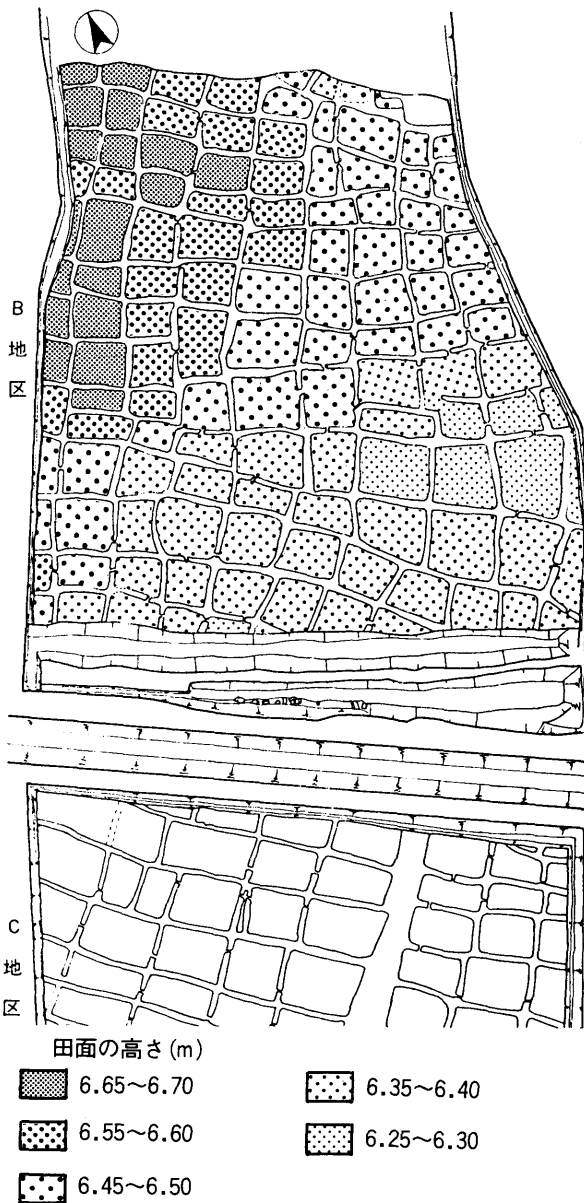
畦畔の規模は、幅が13cm～60cmで、水田面との比高差は1cm～3cmと低い。

畦畔の走行は基本的に東西畦畔、南北畦畔とも連続して貫くものであるが、地形に応じて設定されたため各畦畔は緩く蛇行している。なお畦畔が途切れる箇所が東西畦畔で4箇所、南北畦畔で1箇所認められた。

畦畔の走行間隔は、東西畦畔で1.5m～5.5m、南

北畦畔で1.5m～4.5mを測る。特に調査区南西部では、東西畦畔が東に向かって放射状に開き、南北畦畔も等高線に沿うように東へ脹らんでいるため区画の大きなものが集中している。こうした状況から水田No.74～80では中央に東西畦畔をもう一条設定することにより水田の小区画化が図られており当初の造成で大きくなり過ぎた区画については、調整が図られたものと見ることができよう。

隣合う各区画の高低差はたいてい5cm内外におさまり、明瞭な段差は認められない。むしろ自然地形の勾配に近く、水田開発にあたっては、微地形を巧みに利用した土量をあまり動かさなくてもよい省力化された土木工事であったものと推察される。



第37図 B地区水田遺構平面図 (1:500)

C. 水田の面積

畦畔によって区画された水田は、後世の溝に切られたり、調査区外へ延び形状の不明なものも含め、124面が検出された。各水田の規模については、第4・5表に示した。

水田の面積は、No.26の3.1㎡という小さなものからNo.88の19.1㎡という大きなものまでかなりばらつきが認められた。これは先にも述べたように水田の造成が地形の制約を受けたことに起因するものと考えられる。水田の平均面積は8.8㎡で、1区画7㎡～8㎡のものが多い。

区画の形状は、畦畔の走行との相関関係より台形状を呈するものが他地区に比べて多く認められた。

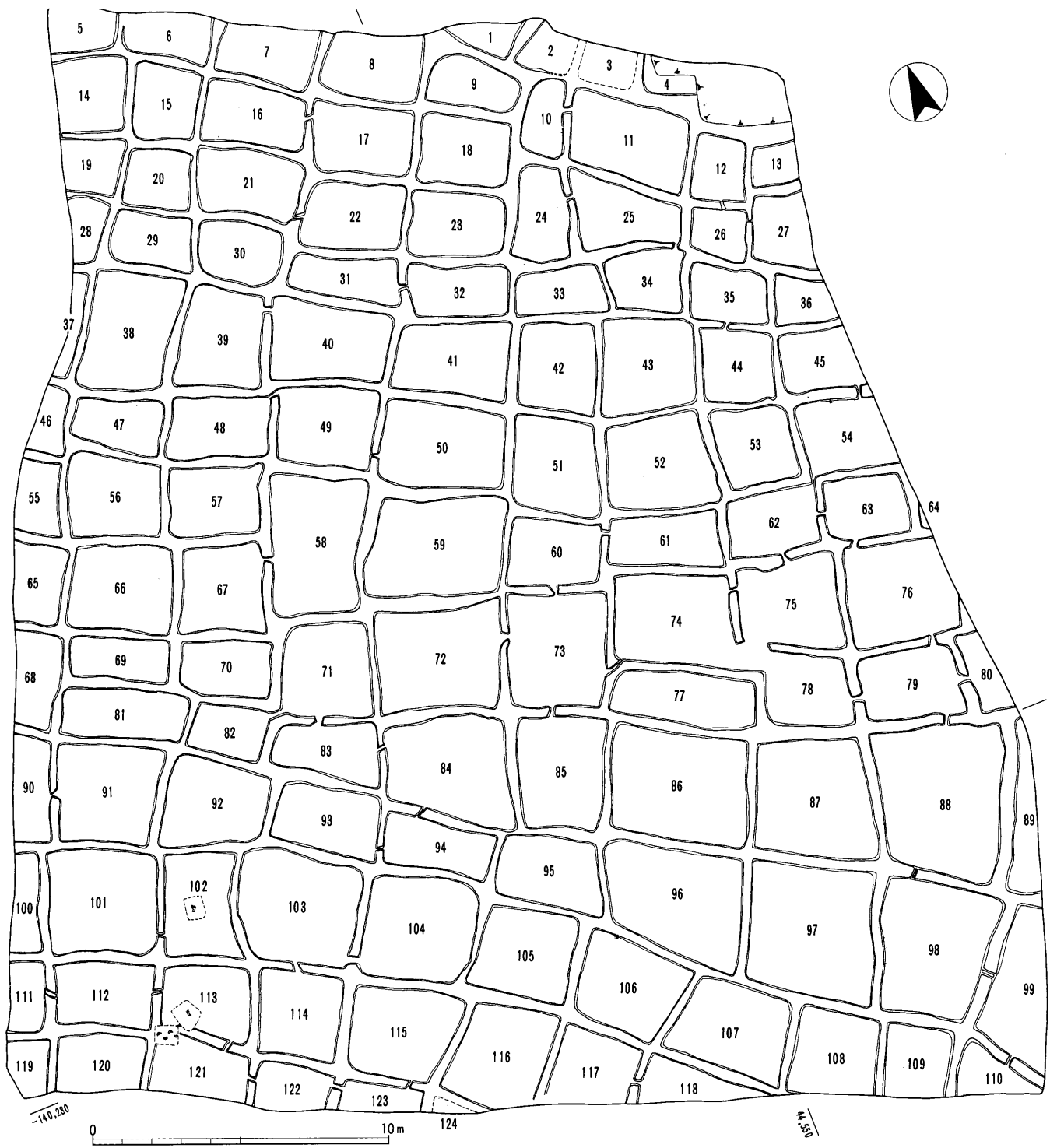
D. 取配水

灌漑用水路は確認されていないが、地形上、取水は調査区北西部から行われたものと思われ、一旦区画内で湛水した後、順次南北畦畔あるいは東西畦畔上の水口より東方および南方へと田越しに掛け流されたものと推察される。水口は畦畔を10cm～20cm程切っただけの構造で、西側の南北畦畔の中央部にあるものが最も多く、北西隅や南西隅が切られたものも合わせて31箇所確認された。また水田No.73・75・79・94・123のように西口、北口の両方から取配水するものも認められた。

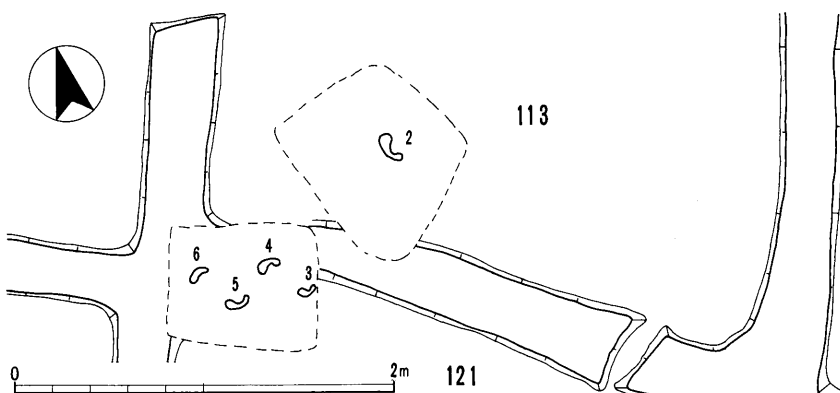
E. 小穴と足跡

各水田面で径4cm～6cm、深さ3cm～5cm、埋土が灰白色シルトを呈する小穴が多数検出された。その数は、一田面につき少ないところで82個、多いところで215個が確認されている。なお一田面の中でも密集する箇所と希薄な箇所があり、特にその検出状況に規則性はなく、人為的な配列状況を示すものではない。稲株痕とされた岡山県百間川原尾島遺跡^①のものに似ているが、稲株痕に異質な埋土が入り込む状況は理解し難く、むしろモグラの穴、あるいはザリガニの穴の痕跡と見たい。

一方、水田面に残されたもう一つの痕跡として人間の足跡がある。足跡は水田No.102・113・121でかなり明瞭に確認された。特にNo.121の北西隅で畦畔に沿って確認された4個の足跡は、東から西へ向かって歩いた連続歩行の跡である。



第38図 B地区水田遺構平面図 (1 : 200)



◀第39図 足跡実測図 (1 : 40)

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
1	—	—	—	—	6.45	—	40	長方形	4.0	2.5	10.0	6.60	北西隅
2	—	(1.6)	—	—	6.40	—	41	台形	3.9	2.0~2.8	9.4	6.55	—
3	—	(1.9)	—	—	6.45	—	42	方形	2.7	3.0	8.1	6.50	—
4	—	—	—	—	6.45	—	43	台形	3.2	2.8~3.3	9.8	6.50	—
5	—	—	—	—	6.70	—	44	方形	2.4	2.5	6.0	6.50	北(西寄り)
6	—	3.1	—	—	6.65	—	45	長方形	—	2.0	—	6.50	—
7	—	3.3	—	—	6.60	—	46	—	—	2.3	—	6.70	—
8	—	3.4	—	—	6.60	—	47	台形	3.0	1.3~2.0	5.0	6.70	—
9	略長方形	3.2	1.6	5.1	6.50	—	48	長方形	3.3	2.0	6.6	6.60	—
10	略長方形	1.4	2.6	3.6	6.45	—	49	長方形	3.4	2.7	9.2	6.60	北西隅
11	長方形	4.0	2.4	9.6	6.45	西(北寄り)	50	長方形	4.2	2.8	11.8	6.50	南西
12	方形	1.8	2.2	4.0	6.45	—	51	方形	2.9	3.2	9.3	6.50	—
13	長方形	—	1.4	—	6.50	—	52	台形	3.2~3.9	2.8~3.3	9.9	6.50	—
14	—	—	2.6	—	6.70	—	53	方形	2.6	2.6	6.8	6.50	—
15	方形	2.2	2.5	5.5	6.65	—	54	長方形	—	2.4	—	6.50	北(東寄り)
16	長方形	2.0	3.6	7.2	6.60	—	55	—	—	2.6	—	6.70	—
17	長方形	3.4	2.3	7.8	6.60	西(北寄り)	56	方形	3.2	2.7	8.6	6.65	—
18	長方形	3.1	2.3	7.1	6.55	—	57	長方形	3.0	2.3	6.9	6.60	—
19	—	—	1.8	—	6.70	—	58	長方形	3.1	4.6	14.3	6.55	西(南寄り)
20	方形	2.2	2.0	4.4	6.65	—	59	長方形	4.4	3.3	14.5	6.50	—
21	長方形	3.6	2.2	7.9	6.65	—	60	長方形	3.2	2.3	7.4	6.50	—
22	長方形	3.4	2.2	7.5	6.65	西(南寄り)	61	台形	3.8	1.6~2.0	6.8	6.45	西(北寄り)
23	長方形	3.3	2.2	7.3	6.55	—	62	長方形	3.2	2.1	6.7	6.50	北東隅
24	長方形	1.8	3.2	5.8	6.50	—	63	長方形	2.8	2.2	6.2	6.50	西(中央)
25	台形	3.5	1.3~3.0	7.5	6.50	西(北寄り)	64	—	—	—	—	6.50	—
26	台形	2.0	1.3~1.8	3.1	6.45	北(中央)	65	—	—	2.7	—	6.70	—
27	台形	—	2.2~2.7以上	—	6.45	西(中央)	66	長方形	3.4	2.8	9.5	6.70	—
28	—	—	2.4	—	6.60	—	67	方形	2.7	2.8	7.6	6.60	—
29	長方形	2.8	1.7	4.8	6.60	—	68	—	—	3.2	—	6.60	—
30	長方形	3.0	2.1	6.3	6.65	—	69	長方形	3.4	1.4	4.8	6.65	—
31	長方形	3.8	1.4	5.3	6.60	—	70	長方形	3.0	1.9	5.7	6.55	—
32	長方形	3.4	1.8	6.1	6.55	西(中央)	71	方形	3.1	3.3	10.2	6.50	—
33	長方形	3.1	1.6	5.0	6.50	—	72	長方形	4.2	3.4	14.3	6.45	—
34	台形	2.5	1.7~2.2	4.9	6.45	北東隅	73	方形	3.4	3.8	12.9	6.45	北(中央) 西(北寄り)
35	長方形	2.7	1.9	5.1	6.45	—	74	長方形	3.5	3.0	10.5	6.40	南西隅
36	長方形	—	1.6	—	6.45	—	75	台形	3.4	2.4~3.3	9.7	6.40	北(中央) 西(北寄り)
37	—	—	3.7	—	6.65	—	76	方形	3.8	3.4	12.9	6.35	北西隅
38	長方形	2.8	4.1	11.5	6.65	—	77	長方形	4.9	1.8	8.8	6.35	—
39	長方形	2.8	3.2	9.0	6.60	—	78	方形	2.9	2.5	7.3	6.30	北西隅

第4表 B地区水田遺構一覽表(1)

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
79	台形	3.1~3.4	2.4	7.8	6.30	北東陽 西(南寄り)	102	不整形	2.4	3.4	8.2	6.40	西(南寄り)
80	—	—	2.8	—	6.30	西(中央)	103	不整形	4.2	3.7	15.5	6.40	—
81	長方形	4.3	1.7	7.3	6.55	—	104	方形	3.8	3.6	13.7	6.40	南西隅
82	長方形	2.5	1.8	4.5	6.45	北西隅	105	方形	3.2	3.0	9.6	6.40	—
83	台形	3.6	1.4~2.2	6.5	6.40	北(西寄り)	106	台形	2.9~3.8	2.9	9.7	6.40	—
84	台形	4.4	2.4~3.8	12.7	6.40	西(北寄り)	107	台形	3.2~4.3	2.9	10.9	6.40	—
85	長方形	3.0	3.9	11.7	6.35	北(西寄り)	108	方形	2.9	3.0	8.7	6.35	—
86	長方形	4.6	3.7	17.0	6.30	—	109	方形	2.3	—	—	6.35	—
87	台形	3.4~4.4	3.6~4.2	14.6	6.30	—	110	—	—	—	—	6.35	北
88	台形	3.7~4.5	4.4~5.5	19.1	6.30	北(中央)	111	—	—	2.4	—	6.55	—
89	—	—	6.0	—	6.30	—	112	長方形	3.4	2.1	7.1	6.45	西(中央)
90	—	—	3.8	—	6.50	—	113	台形	3.0	2.0~2.6	6.9	6.35	西(中央)
91	方形	3.4	3.4	11.6	6.45	西(中央)	114	方形	2.8	2.8	7.8	6.35	北(中央)
92	台形	3.5	2.1~3.4	9.6	6.40	—	115	台形	2.8~3.8	3.0	9.9	6.35	—
93	長方形	3.6	2.1	7.6	6.40	—	116	台形	3.0	3.1~3.7	10.2	6.35	—
94	長方形	3.7	1.6	5.9	6.40	北(西寄り) 西(西寄り)	117	長方形	2.8	—	—	6.35	—
95	台形	3.0~3.8	2.0~2.5	7.3	6.35	—	118	—	(4.5)	—	—	6.35	西
96	台形	4.7	2.9~4.0	16.2	6.35	—	119	—	—	—	—	6.45	—
97	台形	4.2	4.0~4.6	18.1	6.40	—	120	—	3.0	—	—	6.35	—
98	台形	3.0~4.1	4.5	16.0	6.35	—	121	—	3.4	—	—	6.35	北(東寄り)
99	台形	—	4.6~5.7以上	—	6.35	西(中央)	122	—	2.5	—	—	6.35	西(北寄り)
100	—	—	3.4	—	6.50	—	123	—	2.7	—	—	6.30	—
101	方形	3.7	3.4	12.6	6.45	—	124	—	—	—	—	6.40	—

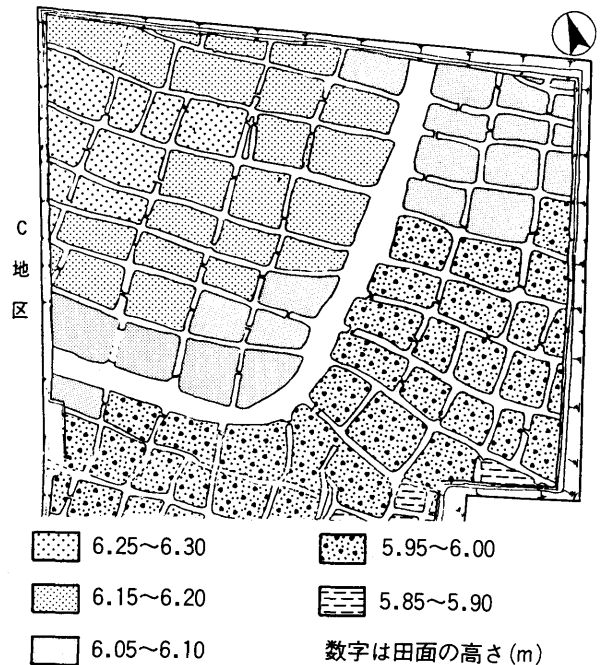
第5表 B地区水田遺構一覧表(2)

(2) C地区の上位水田遺構

本来、水田遺構としては前述のB地区も含めC地区からE地区まで一連の広がりがあり、まとめて記述すべきであるが、ここでは特に逆L字形に曲がる大畦畔により区画されたC地区西半部の水田遺構について述べることにする。また大畦畔の内側と外側とでは、田面の高さが全体的に5cm~10cm程内側が高く、大畦畔の内側の水田を上位水田、外側、つまり大畦畔の東側と南側に広がる水田を下位水田と呼ぶことにする。

A. 水田の地形

水田の標高は、調査区西側中央部が最も高く、6.25mを測り、北、東、南に向かって等高線に沿い、徐々に低くなっている。最も低い田面は、大畦畔の南東隅にあたるNo.162・163で6.05mを測る。



第40図 C地区水田遺構平面図(1:500)

B. 畦畔の走行と区画

上位水田を区画したと見られる大畦畔は、上幅が80cm～210cm、下幅が130cm～250cmで、水田面との比高は上位水田側で1cm～4cm、下位水田側で4cm～10cmを測る。大畦畔の南北方向の走行方位は、N40°Eで、南東のコーナーが隅丸となるもののほぼ直角に西へ曲がる。

小畦畔は、上幅20cm～40cm、下幅40cm～60cmで、水田面との比高は2cm～3cmである。東西畦畔の走

行は多少弯曲するものの途中で途切れることなく、ほぼ直線的に走るが、南北畦畔は2～3区画までは連続してまっすぐに通るものの2～3区画を単位として多少のずれが認められた。これはB地区と同様に東西畦畔を基調としながら南北畦畔が設定されたものと思われる。

小畦畔の走行間隔は、東西方向が2.4m～4.0m、南北方向が2.2m～5.9mで東西に長い格子目状の方形区画を形成している。但し南東隅のNo.163は大畦



第41図 C地区上位水田遺構平面図(1:200)

畔のコーナーが隅丸となるため区画は三角形である。このほか特殊な区画としてNo.135・136のように本来1区画であるところを南北畦畔により、さらに小さな区画に二分したもののや、No.138の西畦畔のように畦畔の付け替え作業が実施されたものもある。

東西小畦畔の走行方位は、E40° Sで概ね東西大畦畔の走行方位に揃う。

C. 水田の面積

大畦畔に囲まれた上位水田は、163面が確認された。各区画の面積は第6表に示した通りである。

水田の面積は小さなものでNo.136の6.5㎡、大きなものでNo.144の19.0㎡である。平均面積は11.2㎡で他地区の水田に比べ比較的大きな区画が揃っている。

なお上位水田の北への広がり、B地区とC地区との境に平安時代末期以降の溝や現行水路が走っており、大畦畔の行方やB地区水田との関連共々明らかにすることができなかった。

D. 取配水

取水はまず地形的に高い調査区西方で行われたものと思われる。その後の各田面への水がかりは、西畦畔及び一部北畦畔上に設けられた水口を通して順次西から東へ、またオーバーフロー等により北から南へと掛け流しされたものと思われる。No.162水田の南東隅からは、大畦畔をオーバーしてNo.201・202水田へ水が流れ出た痕跡が畦畔上に認められたことから下位水田への水がかりは、この大畦畔を越えて供給された可能性が高い。

E. 小穴とひび割れ

B地区同様、各田面においてモグラ穴(?)と思われる多数の小穴を検出した。1区画につき少ないものでNo.136の109個、多いものでNo.144の358個である。この痕跡は畦畔上でも認められた。

田面に残されたもう一つの痕跡としてひび割れ痕がある。埋土は灰色シルトで田面上を不規則に走る筋として確認された。このことは、夏から秋にかけてのある時期に水田が一挙に埋没したことを物語る。

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
125	—	—	—	—	6.20	—	145	—	—	2.3	—	6.25	—
126	—	4.0	—	—	6.15	—	146	長方形	5.0	2.0	10.0	6.25	南西隅
127	—	4.5	—	—	6.15	—	147	長方形	4.5	2.2	9.9	6.20	西(南寄り)
128	—	4.4	—	—	6.10	西(南寄り)	148	長方形	3.8	2.3	8.7	6.20	南西隅
129	—	5.4以上	—	—	6.20	—	149	台形	4.4	1.5~2.3	8.4	6.15	西(中央)
130	方形	(3.1)	3.1	9.6	6.20	—	150	—	—	(2.1)	—	6.25	—
131	長方形	5.6	2.9	16.2	6.20	西(中央)	151	長方形	5.0	2.2	11.0	6.20	西(南寄り)
132	長方形	3.9	2.8	10.9	6.20	西(南寄り)	152	長方形	4.4	2.0	8.8	6.20	西(中央)
133	長方形	4.7	2.6	12.2	6.15	—	153	長方形	3.5	2.0	7.0	6.15	西(中央)
134	長方形	—	3.4	—	6.25	—	154	台形	4.0~4.8	2.3~3.4	11.1	6.10	西(北寄り)
135	台形	2.0~2.5	3.3	7.4	6.25	西(南寄り)	155	—	—	—	—	6.20	—
136	長方形	1.9	3.4	6.5	6.25	西(中央)	156	長方形	4.1	2.9	11.9	6.20	西(中央)
137	長方形	4.1	3.4	13.9	6.25	西(2ヶ所)	157	長方形	4.2	3.1	13.0	6.15	西(中央)
138	方形	3.4	3.1	10.5	6.20	西(北寄り)	158	台形	3.5	2.5~3.0	9.6	6.10	西(中央)
139	長方形	5.0	3.2	16.0	6.15	西(北寄り)	159	台形	3.7	1.7~2.3	7.4	6.10	西(中央) 北(中央)
140	長方形	—	3.0	—	6.25	—	160	長方形	—	3.5	—	6.10	—
141	長方形	4.8	3.2	15.4	6.25	西(中央)	161	長方形	3.8	3.2	12.2	6.10	—
142	長方形	4.3	3.1	13.3	6.20	西(南寄り)	162	方形	3.6	3.9	14.0	6.05	西(南寄り)
143	方形	3.4	3.6	12.2	6.20	西(北寄り)	163	三角形	4.0	4.1	8.2	6.05	西(中央)
144	長方形	5.0	3.8	19.0	6.15	西(南寄り)							

第6表 C地区上位水田遺構一覧表

(3) C地区～E地区の下位水田遺構

A. 水田の地形

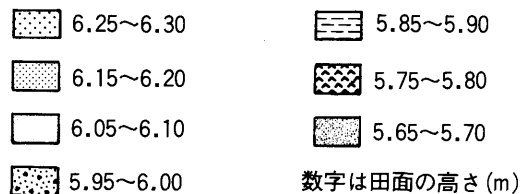
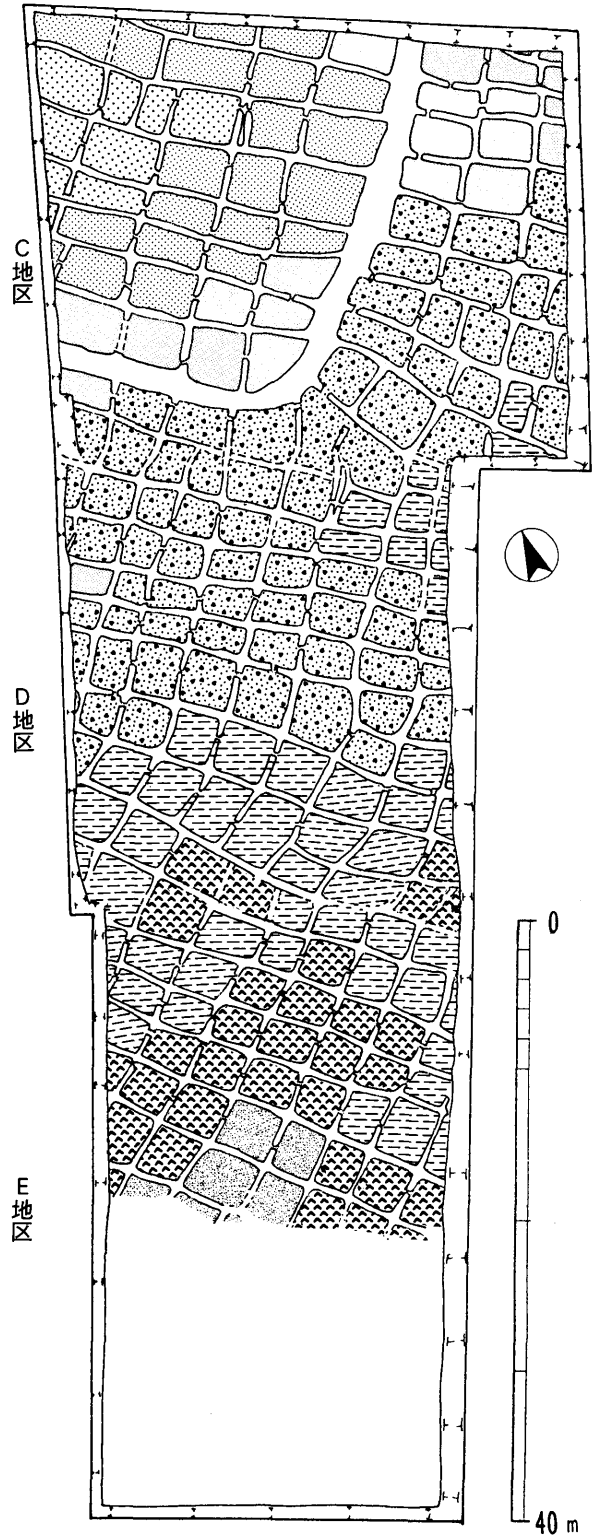
前述のように大畦畔に囲まれた上位水田とその区画の外側に広がる下位水田とは、約5cm～10cmの比高差がある。下位水田のなかで最も高い田面はC地区北東部の6.10m、最も低い田面はE地区南端中央部の5.70mである。基本的には北および西側が高いが、南北方向の地形の勾配は0.5%と非常に緩やかで、見た目には平坦地に近い。水田基盤層である黒灰色シルト（泥炭土）層は、B地区からD地区北半まで認められたが、D地区南半からE地区にかけては、黒灰色シルト（泥炭土）層の上に堆積した淡灰色砂質混じりシルト層を水田基盤層としている。なおE地区南半分については、水田基盤層は存在するものの畦畔は氾濫等による攪乱で検出することができなかった。

B. 畦畔の走行と区画

小畦畔は東西、南北方向とも概ね上位水田の畦畔の延長線上にある。しかし、C地区東部の東西畦畔は完全には連続しておらず、若干のずれが生じている。これは、東西畦畔を構築する際、大畦畔の内と外とで畦畔の走行を意識しながらも連続して作業が行われなかったことを示しているものと思われる。

このことは、南北畦畔の走行方位が上位水田では大畦畔の南北方向に一致しないのに対し、下位水田では大畦畔の方向が意識されており、特に大畦畔東側に隣接する一列目の区画の南北畦畔の走行方向が、大畦畔の方向に沿って緩やかに弧を描くことから理解できよう。

畦畔の走行間隔は、東西方向で2.1m～5.4m、南北方向で2.2m～4.2mとかなり差異があり、全体的に面積の小さい区画を形成しているものの区画の規模は大小様々である。こうした中、E地区の水田は畦畔の走行間隔が東西、南北とも3m前後で、比較的規模の揃った基盤目状の小区画が形成されている。なお、東西畦畔のうちC地区南東部やD地区南部では、それぞれ大畦畔の走行や地形に規制され、畦畔が西から東に向かって放射状に開いている。このため各区画の規模も同様に西から東へと大きさを増すが、水田No.255およびNo.274の東側の区画のように大



第42図 C地区～E地区水田遺構平面図（1：500）

きくなりすぎた区画については、東西畦畔をさらに一本設け、敢えて区画面積の小区画化、平均化が図られたと思われる箇所が認められた。南北畦畔についてもNo.201の南列で同様な箇所が認められた。

東西畦畔の走行方位は、C地区東部でE35° S前後、D地区北半部でE32° S前後、E地区北半部でE45° S前後である。畦畔の幅は30cm～40cm、水田との比高は1cm～3cmのものが多い。

C. 水田の面積

C地区からE地区にかけて検出した下位水田の小区画は、合計178面である。最も小さい区画はNo.205の3.2㎡、最大はNo.196の17.2㎡で大小様々であるが、6.5㎡～8.5㎡の区画が最も多く、全体の約27%を占める。平均面積は8.7㎡で、B地区の平均面積とほぼ同じである。

D. 取配水

各区画への水がかりは、南北畦畔の一部を切って設けられた水口を通して基本的に西から東へと、またオーバーフローした水は地形に応じて北から南へ

と田越しに掛け流されたと考えられる。

E. 耕作痕と足跡

水田面には多数のモグラ穴(?)のほか、僅かながら足跡と思われる窪みや耕作痕が確認された。

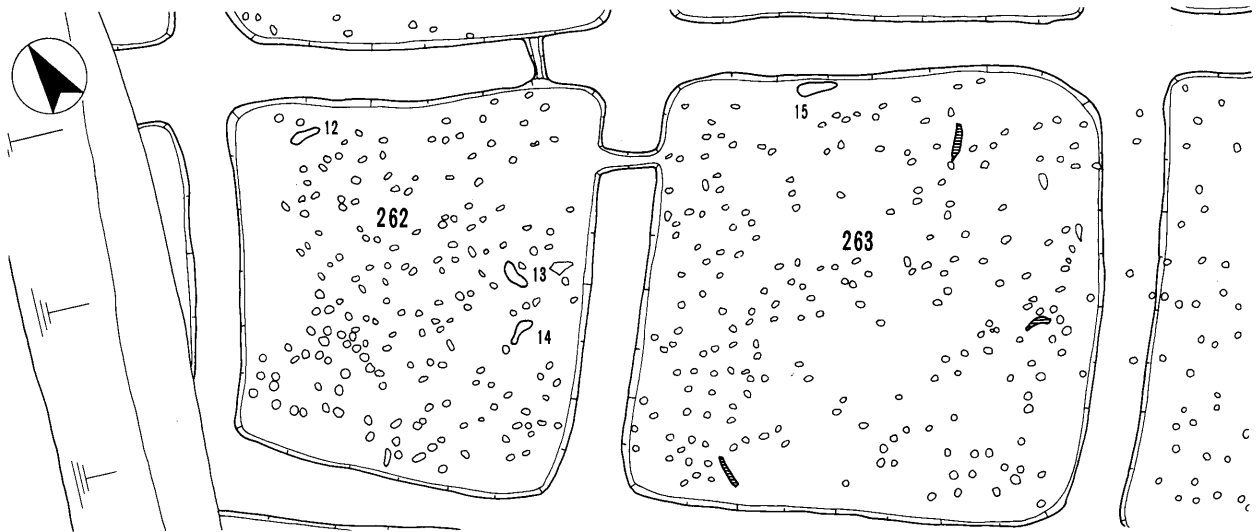
耕作痕には幅15cm前後の三日月形のもの(A類)と幅4cm～10cm、長さ15cm～30cmの筋状のもの(B類)が見られた。A類はNo.258の南西部で4個、No.265の南西部で1個を確認し、B類はNo.212で3個、No.258で1個、No.263で3個、No.271の南部で1個を確認した。おそらくこれらの痕跡は鍬、鋤等の木製農耕具によるものであろう。

人間の足跡はC地区で3個、D地区で22個、E地区で5個を検出した。詳細は第7表に示した通りである。このうちNo.265で確認の7個の足跡は、田面の北東隅から東に向かって歩き出したと思われる連続歩行の痕跡である。歩幅は田面がぬかるんでいたためか15cmと狭く、ゆっくりとした歩行が推定された。

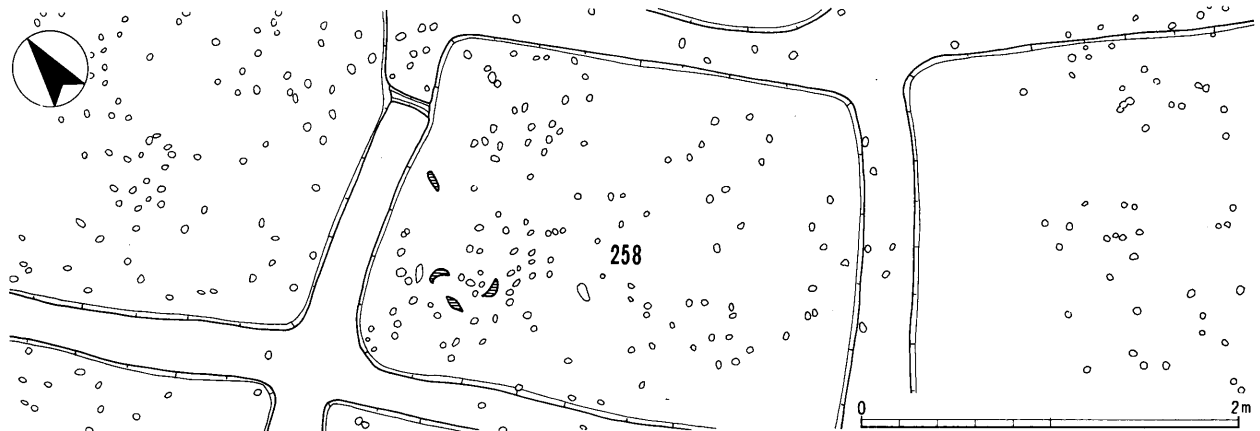
足跡	地区	検出地点	左右の別	方向	長さ	幅	深さ	備考	足跡	地区	検出地点	左右の別	方向	長さ	幅	深さ	備考
1	B	No.102	右	N	18.7	8.3	3.2		19	D	No.265	左	W	21.0	8.0	2.0	連続歩行
2	B	No.113	左	N	19.6	8.3	4.5		20	D	〃	右	W	21.0	8.0	1.6	〃
3	B	No.121	左	W	17.1	6.9	4.3	連続歩行	21	D	〃	左	W	21.0	8.0	1.2	〃
4	B	〃 アゼ	右	W	17.1	6.9	4.3	〃	22	D	〃	右	W	21.0	8.0	2.0	〃
5	B	〃	左	W	17.1	6.9	2.2	〃	23	D	〃	左	W	21.0	8.0	0.8	〃
6	B	〃 アゼ	右	W	17.1	6.9	5.2	〃	24	D	〃	右	W	21.0	8.0	2.0	〃
7	C	No.196	左	N	20.0	9.0	2.8		25	D	〃 アゼ	右	S	18.2	8.0	—	
8	C	〃	右	E	21.2	7.2	—		26	D	〃	右	S	21.5	8.5	1.5	
9	C	No.203	右	S	20.2	8.9	—		27	D	No.267	右	E	22.5	10.5	1.0	
10	D	No.254	右	S	24.5	10.0	—		28	D	No.268	左	N	20.5	9.5	2.1	
11	D	No.255	右	E	22.5	10.0	2.6		29	D	No.272アゼ	右	NE	20.0	8.2	—	
12	D	No.262	右	W	22.5	8.0	—		30	D	〃	右	W	20.6	8.1	—	
13	D	〃	左	N	20.6	7.6	—		31	D	No.275	右	S	19.6	9.5	2.8	
14	D	〃	左	E	18.7	6.0	—		32	E	No.303	右	N	23.0	10.2	2.4	
15	D	No.263	右	W	25.6	8.2	—		33	E	No.313	左	W	24.0	9.8	1.0	
16	D	No.265	右	W	20.5	7.8	1.0		34	E	〃	右	N	22.4	10.2	1.8	
17	D	〃	左	S	18.2	6.8	—		35	E	No.322	左	S	22.2	10.0	2.0	連続歩行
18	D	〃	右	W	21.0	8.0	1.0	連続歩行	36	E	〃	右	S	22.2	10.0	2.6	〃

第7表 足跡計測表

単位 (cm)



第43図 水田No.262・263の足跡と耕作痕 (1:40)



第44図 水田No.258の耕作痕 (1:40)



第45図 水田No.265・272の足跡 (1:40)



第46図 C地区～E地区水田遺構平面図 (1:200)

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
164	—	—	—	—	6.10	—	203	—	—	—	—	5.95	西(北寄り) 北(西寄り)
165	—	—	—	—	6.10	—	204	—	—	—	—	5.95	北西隅
166	—	4.1	—	—	6.10	—	205	長方形	2.0	(1.6)	3.2	5.90	—
167	台形	3.3	1.6~2.5	6.8	6.10	—	206	—	—	(1.6)	—	5.90	—
168	—	—	1.7	—	6.10	南西隅	207	長方形	—	3.0	—	6.00	—
169	長方形	4.2	1.8	7.6	6.10	北(中央)	208	方形	3.0	3.0	9.0	6.00	西(北寄り)
170	長方形	3.7	1.6	5.9	6.10	西(中央)	209	台形	2.0~2.6	2.7	6.2	6.00	—
171	—	—	1.5	—	6.10	南西隅	210	方形	2.1	2.5	5.3	5.95	—
172	長方形	4.2	2.6	10.9	6.10	北(西寄り)	211	長方形	3.6	2.7	9.7	5.95	—
173	長方形	3.6	2.8	10.1	6.10	西(中央)	212	方形	3.0	2.7	8.1	5.95	—
174	—	—	2.9	—	6.10	西(中央)	213	台形	3.0	1.7~2.6	6.5	5.90	西(中央)
175	台形	4.0	2.2~2.6	9.6	6.05	北(西寄り)	214	台形	1.8~2.4	2.6	5.5	5.90	—
176	長方形	4.2	3.3	13.9	6.05	南西隅	215	—	—	2.5	—	5.90	—
177	台形	—	3.3~	—	6.00	西(南寄り)	216	—	—	2.7	—	6.00	—
178	略方形	3.9	3.0	11.7	6.00	—	217	方形	3.1	2.7	8.4	6.00	西(中央)
179	台形	4.3	2.6~3.1	12.3	6.00	南西隅	218	台形	2.4	2.2~2.7	5.9	6.00	—
180	—	—	2.8	—	6.00	南西隅	219	方形	2.6	2.6	6.8	5.95	西(南寄り)
181	長方形	4.4	2.3	10.1	6.00	北西隅	220	長方形	3.2	2.4	7.7	5.95	西(北寄り)
182	長方形	4.5	2.7	12.2	6.00	西(南寄り)	221	長方形	2.8	2.0	5.6	5.95	西(中央)
183	長方形	2.2	3.1	6.8	6.00	南西隅	222	長方形	4.1	1.7	7.0	5.90	西(中央)
184	—	—	3.2	—	6.00	南西隅	223	長方形	2.6	2.1	5.5	5.90	西(北寄り)
185	台形	4.7	2.1~2.8	11.5	6.00	北西隅	224	—	—	2.2	—	5.90	—
186	台形	3.1	2.1~2.6	7.3	6.00	西(南寄り)	225	—	—	(2.9)	—	6.00	—
187	方形	3.0	3.5	10.5	6.00	北西隅	226	方形	2.8	2.9	8.1	6.00	西(中央)
188	方形	2.8	3.2	9.0	5.95	北西隅	227	台形	2.4	2.5~2.9	6.5	6.00	西(中央)
189	—	—	3.5	—	5.95	北西隅	228	台形	2.4~2.8	2.6	6.8	6.00	西(北寄り)
190	長方形	5.0	2.2	11.0	6.00	北西隅	229	長方形	3.4	2.1	7.1	6.00	—
191	台形	3.0	2.3~2.7	7.5	5.95	西(中央)	230	長方形	3.1	2.3	7.1	5.95	—
192	方形	3.0	2.7	8.1	5.90	南西隅	231	長方形	3.7	2.1	7.8	5.95	西(北寄り)
193	長方形	1.7	3.2	5.4	5.90	西(北寄り)	232	台形	2.8~3.1	2.4	7.1	5.95	西(中央)
194	台形	—	3.6~	—	5.95	西(北寄り)	233	—	—	2.7	—	5.90	西(中央)
195	方形	3.1	3.4	10.5	6.00	—	234	台形	2.8	1.7~2.1	5.3	6.05	—
196	長方形	4.4	3.9	17.2	5.95	北西隅	235	方形	2.0	2.1	4.2	6.00	—
197	台形	(3.3)	3.2~(4.5)	12.7	5.95	—	236	台形	3.1	1.6~2.0	5.6	6.00	南西隅
198	台形	~3.7	—	—	5.90	北西隅	237	長方形	3.3	2.1	6.9	6.00	西(中央)
199	長方形	—	2.4	—	6.05	—	238	台形	3.0~3.4	2.1	6.7	5.95	西(北寄り)
200	長方形	3.5	2.6	9.1	6.00	西(中央)	239	台形	3.5~3.8	2.1	7.7	5.95	西(中央)
201	台形	3.9	2.6~3.4	11.7	5.95	北西隅	240	台形	3.0~3.4	2.4	7.7	5.95	—
202	台形	4.3	3.0~(3.8)	14.6	5.95	西(北寄り)	241	台形	—	2.2~	—	5.95	西(中央)

第8表 C地区~E地区下位水田遺構一覧表(1)

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
242	長方形	—	1.9	—	6.00	—	281	—	—	2.6	—	5.80	—
243	長方形	2.2	1.8	4.0	6.00	—	282	長方形	3.7	3.3	12.2	5.85	—
244	長方形	3.1	1.7	5.3	6.00	西(中央)	283	方形	3.4	3.3	11.2	5.85	—
245	長方形	3.4	1.9	6.5	6.00	西(中央)	284	長方形	(3.4)	2.7	9.2	5.80	西(中央)
246	台形	3.1	2.1~2.5	7.1	5.95	西(中央)	285	長方形	(3.9)	2.7	10.	55.80	—
247	長方形	3.3	2.5	8.3	5.95	西(中央)	286	長方形	1.8	(2.1)	3.8	5.90	—
248	長方形	3.9	2.3	9.0	5.95	—	287	長方形	3.2	(2.1)	6.7	5.90	—
249	台形	—	~1.8	—	5.95	西(中央)	288	方形	2.9	2.5	7.3	5.90	西(北寄り)
250	—	—	3.4	—	6.00	—	289	—	—	(2.4)	—	5.90	—
251	長方形	2.5	3.5	8.8	6.00	—	290	—	—	—	—	5.85	—
252	長方形	2.8	3.6	10.1	6.00	西(中央)	291	方形	3.8	3.9	14.8	5.85	—
253	方形	3.4	3.5	11.9	6.00	西(中央)	292	方形	3.7	3.4	12.6	5.75	—
254	方形	3.3	3.5	11.6	5.95	—	293	台形	3.9	2.3~2.9	10.1	5.85	西(南寄り)
255	五角形	4.1	4.2	15.6	5.95	—	294	方形	2.2	2.6	5.7	5.85	西(中央)
256	台形	2.6~3.5	2.6	7.9	5.95	—	295	方形	3.0	2.8	8.4	5.85	西(中央)
257	台形	—	3.0	—	5.95	—	296	台形	2.7	2.9	7.8	5.85	西(中央)
258	台形	2.7~3.3	2.4	7.2	5.95	西(北寄り)	297	台形	3.1	2.8~3.4	9.6	5.85	—
259	方形	3.2	2.8	9.0	5.90	—	298	—	—	—	—	5.85	—
260	—	—	(2.8)	—	5.85	—	299	—	—	2.3	—	5.90	—
261	—	—	(2.1)	—	5.95	—	300	長方形	3.4	2.4	8.2	5.90	西(北寄り)
262	台形	2.3	2.2~2.7	—	6.00	北(東寄り)	301	長方形	3.3	2.6	8.6	5.85	西(中央)
263	方形	3.0	3.0	9.0	5.95	西(北寄り)	302	長方形	2.9	2.4	7.0	5.80	西(中央)
264	長方形	2.8	3.3	9.2	5.90	—	303	長方形	3.2	2.4	7.7	5.80	西(中央)
265	方形	3.5	3.5	12.3	5.90	西(中央)	304	台形	2.7	2.1~2.5	6.2	5.80	西(中央)
266	方形	3.3	3.4	11.2	5.90	西(北寄り)	305	方形	2.8	2.5	7.0	5.80	西(中央)
267	台形	3.8	2.7~3.4	11.6	5.90	—	306	台形	—	~2.4	—	5.85	西(中央)
268	長方形	3.2	2.6	8.3	5.85	北東隅 北西隅	307	—	—	—	—	5.90	—
269	台形	—	2.4~	—	5.85	—	308	長方形	3.2	2.0	6.4	5.90	西(北寄り)
270	—	—	(2.9)	—	5.95	—	309	長方形	2.9	2.2	6.4	5.85	西(中央)
271	台形	3.1	2.9~3.2	9.5	5.90	—	310	長方形	3.0	2.4	7.2	5.80	西(中央)
272	台形	3.1	3.2~3.8	10.9	5.90	西(中央)	311	長方形	3.5	2.4	8.4	5.80	西(中央)
273	台形	2.9	4.0~4.6	12.5	5.90	西(中央)	312	方形	2.8	2.5	7.0	5.80	西(北寄り)
274	長方形	3.3	5.0	16.5	5.85	西(南寄り)	313	台形	3.1	1.9~2.4	6.7	5.80	西(南寄り)
275	台形	3.1~4.2	2.8	10.2	5.85	西(中央)	314	長方形	2.6	1.9	4.9	5.85	西(中央)
276	台形	3.6~4.5	2.9	11.7	5.85	—	315	—	—	—	—	5.80	—
277	台形	—	2.5	—	5.80	西(中央)	316	長方形	—	2.4	—	5.90	—
278	台形	3.1~3.6	2.1	7.0	5.85	—	317	台形	3.0	2.2~2.6	7.2	5.80	西(北寄り)
279	台形	3.6~4.6	1.9	7.8	5.85	—	318	方形	3.0	2.8	8.4	5.80	北西隅
280	菱形	2.4	2.4	5.1	5.80	—	319	長方形	3.3	2.8	9.2	5.75	西(中央)

第9表 C地区~E地区下位水田遺構一覧表(2)

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
320	方形	2.9	3.0	8.7	5.80	西(北寄り)	331	—	—	3.1	—	5.80	西(中央)
321	台形	2.5	3.0~3.4	8.0	5.85	西(中央)	332	長方形	3.0	3.6	10.8	5.80	—
322	長方形	3.1	3.8	11.8	5.85	西(中央)	333	台形	3.0	2.9~3.3	9.3	5.75	—
323	—	—	—	—	5.85	—	334	長方形	4.0	3.2	12.8	5.70	—
324	—	—	2.6	—	5.80	—	335	方形	2.9	—	—	5.70	—
325	長方形	3.0	2.7	8.1	5.80	北西隅	336	—	(2.7)	—	—	5.75	—
326	方形	3.3	3.1	10.2	5.80	西(中央)	337	—	(2.8)	—	—	5.80	—
327	方形	3.5	3.2	11.2	5.70	西(中央)	338	—	—	—	—	5.80	—
328	長方形	2.7	3.4	9.2	5.70	西(中央)	339	—	—	—	—	5.75	—
329	長方形	2.5	3.1	7.8	5.80	—	340	—	3.0	—	—	5.70	—
330	方形	3.0	3.2	9.6	5.80	—	341	—	3.3	—	—	5.70	—

第10表 C地区～E地区下位水田遺構一覧表(3)

(4) E地区下層の水田遺構

E地区上層の水田遺構の調査の際、土層断面の観察の結果、上層水田の基盤層である淡灰色砂質混じりシルトの下に緑灰色細砂の間層を挟んで、D地区から続く黒灰色シルト(泥炭土)が検出され、この層にも畦畔状の高まりが認められた。そのためE地区下層遺構の調査を実施し、確認された水田を下層水田遺構とした。

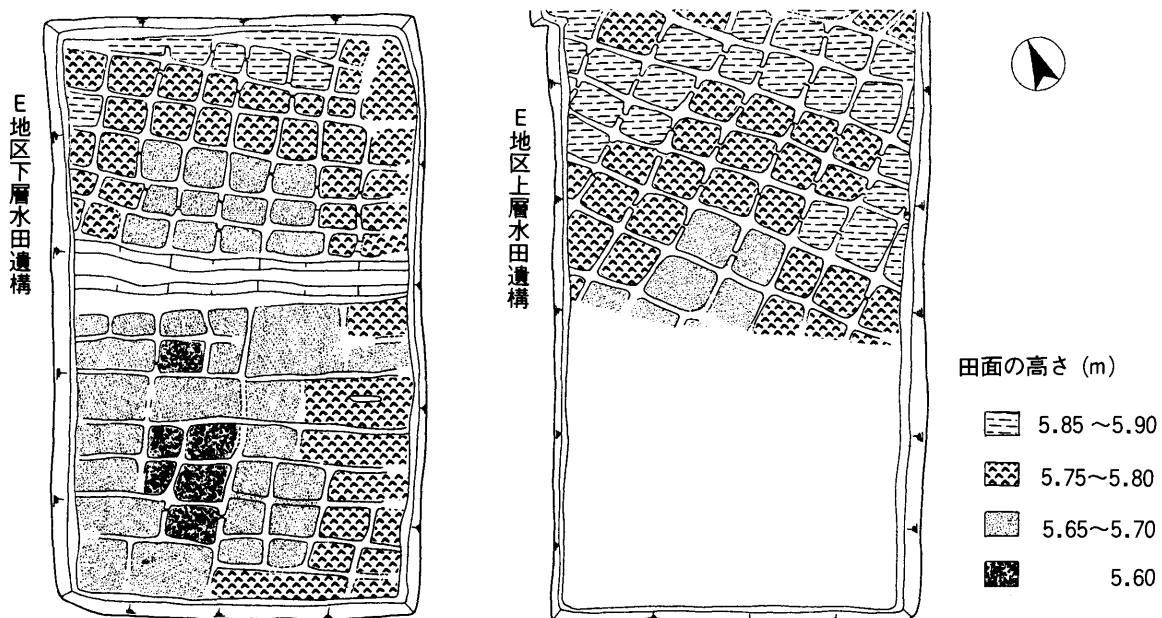
A. 水田の地形

下層水田遺構は現地表下約1.65mで検出された。水田の標高は、最も高い所で調査区北辺部の5.85m、

最も低い所で調査区中央部の5.60mで、調査区の北及び東側から中央部に向かって徐々に低く、当初、中央部が浅い谷地形であったことが判る。水田基盤層の断ち割りの結果、これより下層は遺構・遺物の認められない自然堆積層となっており、初期の水田が浅い谷が入り込んだ低湿地に求められたことがわかる。なお下層水田の北への広がり、調査できなかったが、D地区南半部まで及ぶことが土層断面から確認されている。

B. 畦畔の走行と区画

調査区中央部を東西に走る水路の南側に接し、これと並行する大畦畔を検出した。幅は40cm～190cm



第47図 E地区下層・上層水田遺構平面図(1:500)

で西に向かって広がる。南側の水田面との比高は1 cmである。大畦畔の走行方向はE24° Sで、特に東西方向の小畦畔と方位を揃えているようには見られなかった。

東西の小畦畔は、調査区南東部において一部連続

しない箇所が認められるものの、基本的には区画を越えて連続する。従って上層水田と同様、水田の造営にあたっては、言わば東西畦畔が主、南北畦畔が従の関係にあったものとみられる。

小畦畔の走行間隔は、調査区北半部では東西1.7



第48図 E地区下層水田遺構平面図 (1:200)

m～2.7m、南北2.1m～4.0mを測り、比較的整った基盤目状の小区画を形成するが、大畦畔より南側では畦畔の残りが悪く検出できなかつたものも多い。そのため一見大きく見える区画は細分の可能性があるものと考えている。

小畦畔の走行方向は、東西畦畔については水路より北と南で若干の差異があり、北側ではE31° S、南側ではE27° Sを測るが、南北畦畔については概ね同じN34° Eを示す。なおE地区上層水田の東西畦畔の方向はE45° Sであるので、下層水田の方向とは一致していない。

C. 水田の面積

完全な区画を呈していないものも含め、87面が検出された。このうち計測に耐え得る信頼性のある区画は53面である。各区画の面積については第11・12表に示した。水田の規模は小さなものでNo.356の2.5㎡、大きなものでもNo.402の9.5㎡と全体に小規模な区画が多く、平均面積が5.6㎡であることからこれまでの上層水田に比べて一回り小さな区画を呈していることが特徴的である。

D. 取配水

大畦畔の北側で幅2.2m～3.2m、深さ数cmの東西溝を検出した。埋土は青灰色シルトである。溝の東部は攪乱を受け不明であるが、溝底の絶対高は東側が低く、水は西から東に流れたようである。また溝底と周囲の田面とのレベル差はほとんどないことから、おそらくこの水路は排水路ではなく、灌漑水路としての機能を果していたものとみられる。取配水はこの水路のほか、各区画の西側に設けられた水口より順次掛け流しが行われたものと思われる。

E. 小穴

モグラ穴、もしくはザリガニ穴と思われる小穴は調査区北部で顕著に認められた。1区画につき150個前後で、畦畔上にも多く認められた。このことから、田面は、前者であれば乾燥状況、後者であれば湿地状況を呈していたものと考えられる。

(倉田直純・増田安生)

〔註〕

① 正岡陸夫・高畑知功ほか『百間川原尾島Ⅱ』岡山県教育委員会 1984年

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
342	長方形	—	—	—	5.85	—	361	長方形	2.2	2.5	5.5	5.75	—
343	方形	1.6	—	—	5.80	—	362	方形	2.7	2.5	6.8	5.75	—
344	長方形	—	—	—	5.85	—	363	長方形	2.5	2.8	7.0	5.75	—
345	—	2.7	—	—	5.85	西(中央)	364	方形	2.9	2.6	7.5	5.80	—
346	方形	2.0	1.9	3.8	5.85	西北(寄り)	365	—	—	—	—	5.80	—
347	長方形	2.7	2.2	5.9	5.85	西(中央)	366	—	—	2.4	—	5.80	—
348	台形	2.6	1.7～2.1	4.9	5.85	南西隅	367	方形	2.6	2.7	7.0	5.75	—
349	方形	(1.7)	1.5	2.6	5.80	—	368	方形	2.5	2.6	6.5	5.70	西(中央)
350	—	—	2.5	—	5.80	—	369	方形	2.7	2.5	6.8	5.70	北西隅
351	長方形	3.2	2.5	8.0	5.80	—	370	台形	2.5	2.2～2.6	6.0	5.70	北西隅
352	方形	2.6	2.3	6.0	5.80	西北(寄り)	371	長方形	2.8	2.1	5.9	5.75	西(中央)
353	方形	2.1	2.0	4.2	5.80	—	372	長方形	2.7	2.2	5.9	5.75	西(南寄り)
354	長方形	3.2	1.7	5.4	5.80	西(中央)	404	長方形	—	2.0	—	5.65	—
355	長方形	1.9	1.5	2.9	5.80	西北(寄り)	405	方形	2.2	2.1	4.6	5.60	—
356	長方形	1.8	1.4	2.5	5.80	—	406	台形	3.1～3.5	2.4	7.9	5.60	—
357	—	—	—	—	5.80	—	407	台形	3.2～3.6	2.2	7.5	5.70	—
358	—	—	2.7	—	5.85	—	408	長方形	—	2.3	—	5.75	—
359	長方形	2.8	2.1	5.9	5.80	—	409	長方形	—	2.2	—	5.65	—
360	方形	2.7	2.4	6.5	5.75	—	410	台形	1.8～2.3	2.3	4.7	5.60	—

第11表 E地区下層水田遺構一覧表(1)

田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口	田面No.	形状	規模		面積 (㎡)	田面高 (m)	水口
		東西(m)	南北(m)						東西(m)	南北(m)			
411	長方形	3.3	2.4	7.9	5.60	—	380	台形	2.2~2.5	1.7	4.0	5.75	西(北寄り)
412	方形	2.3	2.4	5.5	5.70	—	381	—	—	1.8	—	5.75	西(中央)
413	長方形	3.3	2.4	7.9	5.70	—	382	—	1.8	—	—	5.75	—
414	長方形	—	2.1	—	5.75	—	383	方形	2.3	2.1	4.8	5.75	—
415	長方形	—	2.6	—	5.65	—	384	長方形	3.0	1.9	5.7	5.70	—
416	長方形	3.4	2.3	7.8	5.60	西(北寄り)	385	長方形	2.8	2.0	5.6	5.65	西(中央)
417	方形	2.5	2.3	5.8	5.70	西(中央)	386	長方形	2.6	—	—	5.65	北西隅
418	長方形	3.1	2.1	6.5	5.70	—	387	長方形	3.7	1.7	6.3	5.70	—
419	長方形	3.2	2.1	6.7	5.75	—	388	方形	1.7	1.5	2.6	5.75	—
420	—	—	2.4	—	5.75	—	389	—	—	1.5	—	5.75	西(中央)
421	—	—	—	—	5.65	—	390	長方形	—	1.5	—	5.70	—
422	—	5.4	—	—	5.65	—	391	長方形	2.8	1.5	4.2	5.65	—
423	長方形	2.9	1.7	4.9	5.70	—	392	台形	2.5~3.0	1.3	3.6	5.65	—
424	長方形	2.6	1.9	4.9	5.75	—	393	台形	2.1~2.6	1.8	4.2	5.65	—
425	長方形	2.7	1.9	5.1	5.75	—	394	長方形	(6.0)	(4.7)	—	5.70	—
426	長方形	—	1.7	—	5.75	—	395	長方形	—	2.5	—	5.75	—
427	—	—	—	—	5.75	—	396	長方形	—	1.9	—	5.70	—
428	—	—	—	—	5.75	—	397	長方形	—	2.0	—	5.65	—
373	—	—	1.9	—	5.80	南西隅	398	長方形	2.8	2.1	5.9	5.60	西(南寄り)
374	—	—	1.6	—	5.80	—	399	方形	2.2	2.0	4.4	5.65	—
375	台形	2.7	1.6~1.9	4.7	5.75	—	400	—	—	3.1	—	5.65	—
376	方形	2.0	1.8	3.6	5.70	北西隅	401	長方形	5.9	2.9	—	5.65	—
377	長方形	2.4	1.7	4.1	5.70	西(南寄り)	402	長方形	3.5	2.7	9.5	5.65	—
378	長方形	2.9	1.8	5.2	5.70	西(北寄り)	403	長方形	—	3.1	—	5.75	—
379	長方形	2.8	1.7	4.8	5.70	—							

第12表 E地区下層水田遺構一覧表(2)

(5) A・B地区 上層の遺構

弥生時代の水田の調査に先駆けてA・B地区の上層の調査を行った。古墳時代に属する遺構として、溝3条・土坑4基、平安時代に属する遺構として、掘立柱建物1棟・溝5条・土坑2基、鎌倉時代に属する遺構として溝4条・土坑1基・井戸2基、室町～江戸時代に属する遺構として溝1条と旧美濃屋川を確認した。また、旧美濃屋川を境に北半部には、灰白色細砂が広がり示して、遺構を伴う層はほとんど検出することができず、旧美濃屋川を境としてある一時期に激しい氾濫によって遺構検出層が削平され、砂層が形成されたものと考えられる。北半部

では、黒色泥炭土に切り込む遺構が検出されたのみである。

A. 古墳時代の遺構

ア. 溝

SD6 B地区の北西部で検出された南西から北東にかけて流れたと推定されるもので、幅80cm、深さは検出面から30cm前後である。埋土中から甕(6~12)、壺(13・14)、須恵器甕(19)などが出土した。

SD7 SD6と同様に南西から北東にかけて流れたと推定されるもので、SD6との前後関係は不明であるが、SD9に切られる形で検出された。幅50cm、深さは検出面から14cm前後とSD6よりひとま

わり小さい。出土遺物は須恵器片・土師器片が少量である。

SD 8 SD 6・SD 7の東側を南西から北東にかけてやや弧を描きながら蛇行する。幅は100cm前後と前の2条に比べて広いが、深さは検出面から15cm前後と浅い。出土遺物は須恵器中心（20～25）で、土師器を多く出土するSD 6との時期差も考えられるがいずれも溝の一部を確認したに過ぎず、投棄状況の側面を示しているものと理解したい。

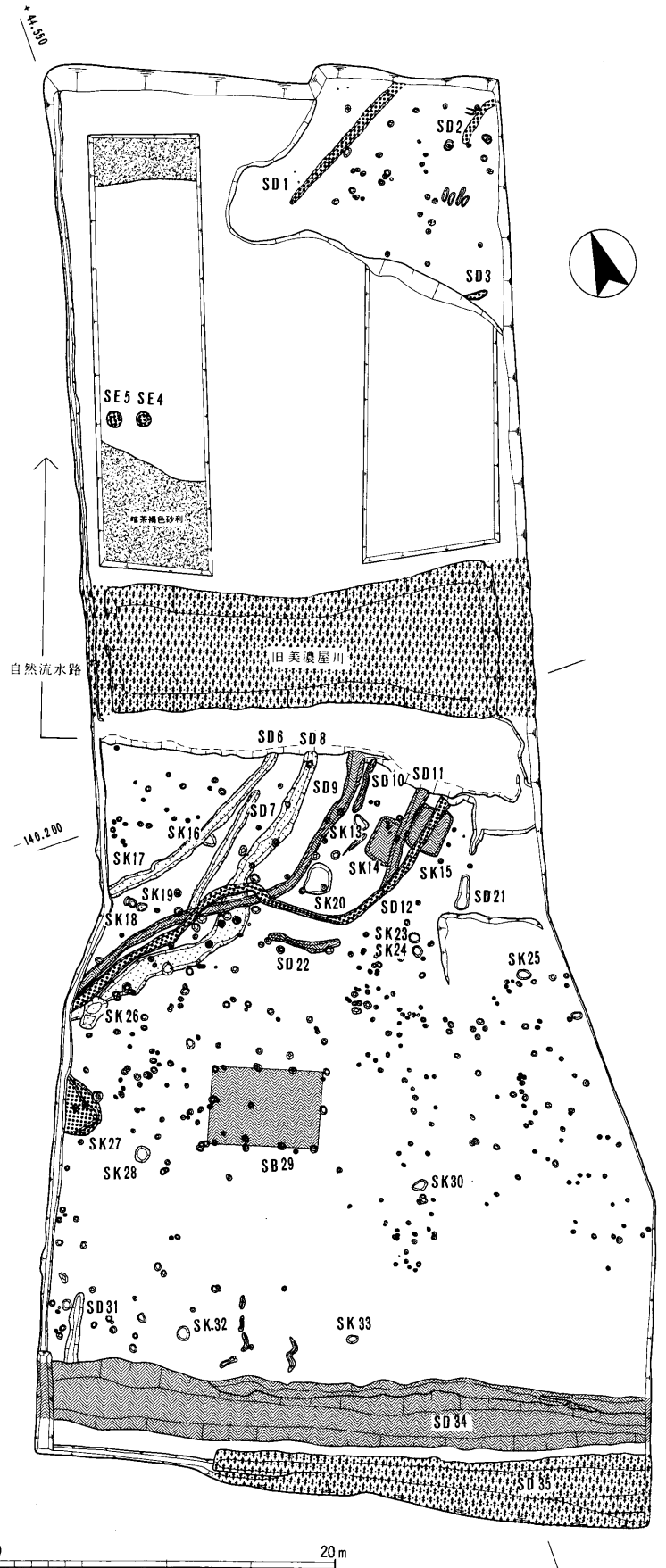
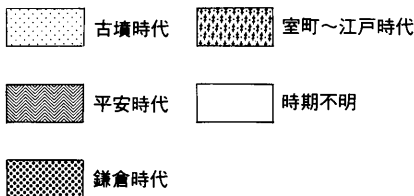
イ. 土坑

SK 17 SD 6とSD 7の間に位置する3基の土坑のひとつで、長軸48cm、短軸40cm、検出面からの深さ10cmのほぼ円形プランである。須恵器甕や土師器片などと共に山茶碗底部も出土しているが、SK 18との切り合いと出土遺物から古墳時代と判断した。

SK 18 SK 17との切り合いから時期的に下る円形プランの土坑で、長軸58cm、短軸48cm、検出面からの深さ12cmを測る。S字甕の体部片や土師器片が出土した。

SK 19 長軸90cm、短軸48cm、検出面からの深さ10cmの楕円形プランである。須恵器の杯蓋片と土師器片が出土している。

SK 26 SD 8と切り合っており、時期的に下る土坑である。長軸198cm、短軸101cm、検出面からの深さ24cmで二段掘りになっており、須恵器や土師器の小破片が多く出土する。



第49図 A・B地区上層遺構配置図（1：400）

B 平安時代の遺構

ア. 掘立柱建物

SB 29 SD 3 4 の15m北側で検出されたSD 3 4 とほぼ平行する3間×2間の東西棟建物である。桁行6.6m、梁行4.6mで、柱間は桁行2.2m、梁行2.3mである。柱掘形は径40cmの小さなもので、西から1間目の中央には、床束柱と思われる掘形も確認された。建物の方向はE19° Sである。柱掘形出土遺物に平安時代に位置づけられる土師器甕がみられる。

イ. 溝

SD 9 SD 6 やSD 8 と同様にB地区の北西部を南西から北東にかけてやや蛇行気味に延びており、幅80cm、深さは検出面から20cm前後である。出土遺物の時期はかなり幅があり、山茶碗(130)や土師器皿(128・129)のほか、須恵器もみられる。SD 1 2 との切り合いから一応平安時代に位置づけた。SD 1 0 SD 9 と隣接して平行する溝で、その位置関係からSD 9 と同時期に位置づけた。出土遺物は土師器片がごく少量である。幅40cm、検出面からの深さ13cmである。

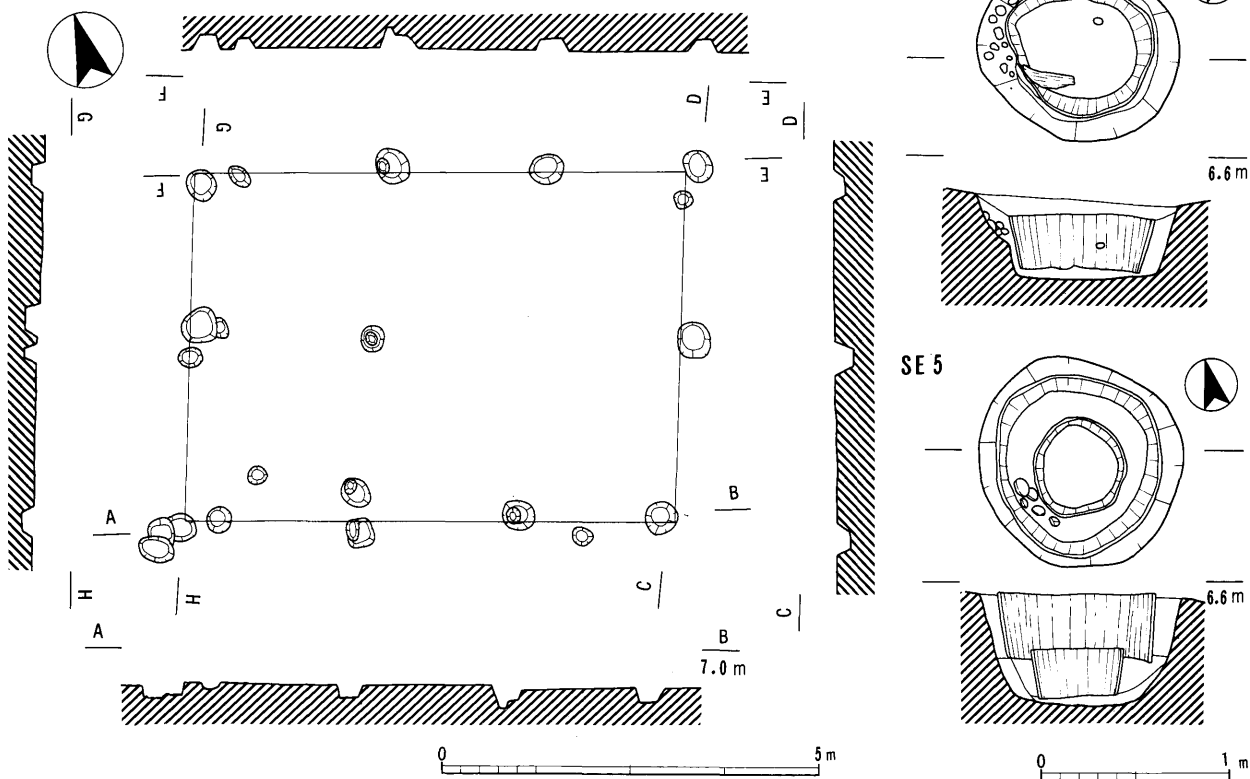
SD 1 1 出土遺物に須恵器片・土師器片が多いが切り合いからSK 14より下ることからこの時期に位置づけた。幅40cm、検出面からの深さ13cmを測る。SD 2 2 幅42cm、検出面からの深さ17cmの西～東に流れるもので、位置関係からSD 11に連なるものと推定した。

SD 3 4 調査区の南端を東西に走る大溝。幅420cm、検出面からの深さ160cmである。この大溝は二段に掘り込まれた形状を呈する。出土遺物は多少時期幅があるものの、12世紀代の猿投産山茶碗^①(155) [藤澤編年Ⅱ段階4型式に相当^②]・山皿が主体を占めており、この時代に位置づけた。他にも灰釉陶器(170・171)、ロクロ土師器花瓶(143)、陶器鉢(172)などが出土している。

ウ. 土坑

SK 1 4 東辺がSD 11に切られる形で検出された長軸268cm、短軸180cm、検出面からの深さ23cmの長方形プランである。壁面は垂直に立ちあがる。一部に焼土が含まれ、柱穴と思われるピットを伴っている。出土遺物には灰釉陶器片、高台付きの山皿、山茶碗(174)、土師器鍋(173)等があり、平安時代末

SB 29



第50図 SB 29遺構実測図(1:100)、SE 4・SE 5遺構実測図(1:40)

期に位置づけられよう。

SK15 SK14の北東に隣接し、規模・形態とも非常によく似た長方形の土坑で、長軸270cm、短軸205cm、検出面からの深さ18cmを測る。山茶椀片や土師器片が出土し、SK14とほぼ同時期と考えられる。

C 鎌倉時代の遺構

ア. 溝

SD1 調査区北東部に位置し南西～北東にかけて蛇行する。幅50cm、検出面からの深さ40cmを測る。当遺跡の南西～北東に流れる溝のなかでは最も深く、底部は比較的フラットで断面は台形状を呈する。山茶椀が点在する形で9個体分出土した。山茶椀は藤澤編年のⅢ段階5型式～6型式のものが主体的である。渥美産と思われるもの(69)と常滑産と思われるもの(73・76)がみられる^⑧。

SD2 調査区北東端にSD1と平行に位置するもので、幅50cm、検出面からの深さ10cmである。SD

1の位置関係や埋土の状況から、この時期として記述しておくが、出土遺物がなく時期決定の根拠に乏しい。

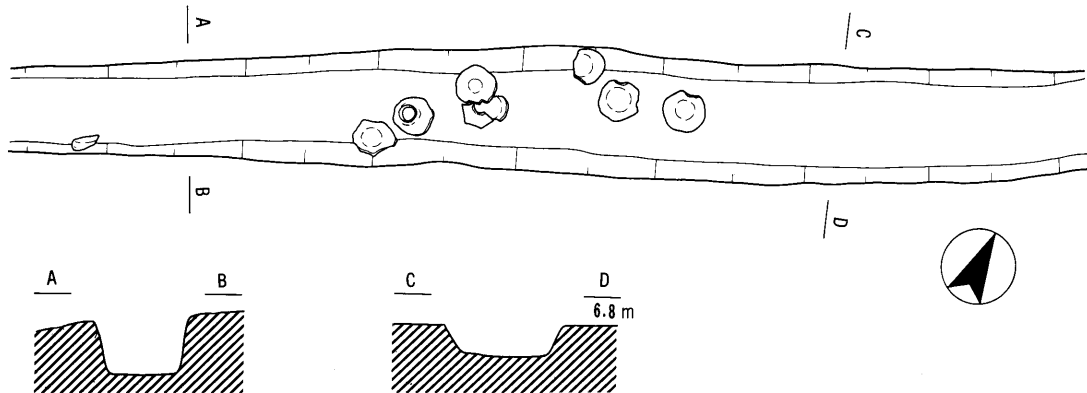
SD3 幅40cm、検出面からの深さ8cmである。SD2と同様にこの時期に位置づけるが、出土遺物がなく根拠に非常に乏しい。

SD12 B地区の北部を南西から北東にかけてかなり蛇行するもので、幅58cm、深さは検出面から20cm前後である。SK15、SD9との関係から、これらよりも時期は下ると考える。出土遺物は、山茶椀片や糸切り痕の残るロクロ土師器などが見られ、平安末～鎌倉時代には埋没したものと考えられる。

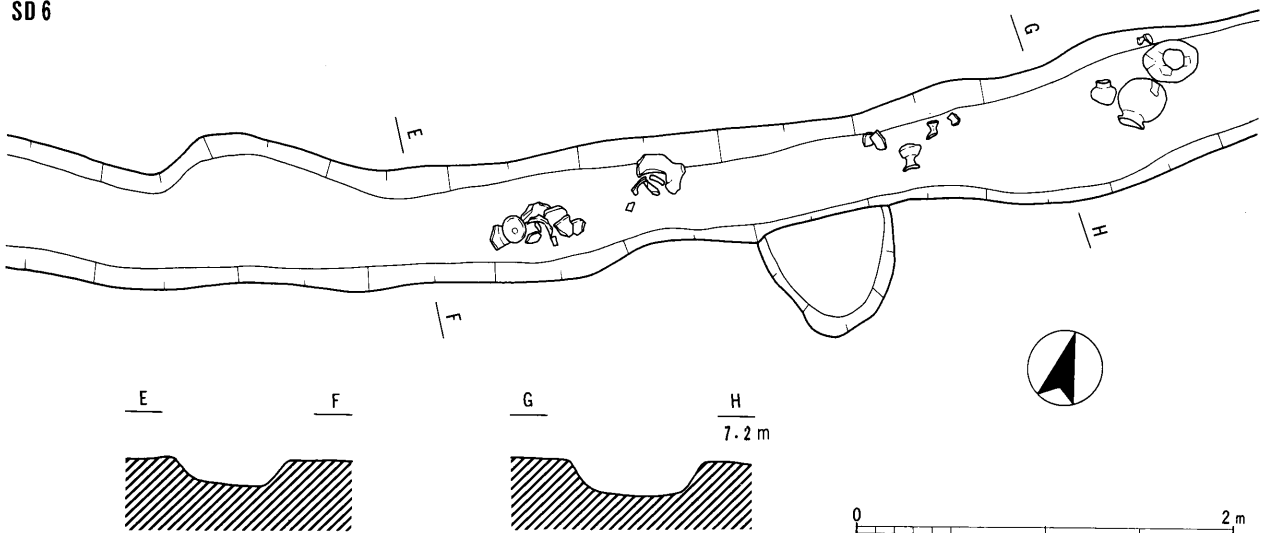
イ. 土坑

SK27 長軸352cm、短軸220cm、検出面からの深さ18cmを測る。不定形を呈し、内側は二段に掘りこまれている。山茶椀(184～187)・土師器鍋(183)・鉄釘(182)などが出土した。

SD1



SD6



第51図 SD1・SD6遺物出土状況(1:40)

ウ. 井戸

SE 4 旧美濃屋川以西の砂層堆積層の下、約1m(標高6.35m)で検出されたものであり、掘形はやや楕円形を呈する。直径38cm、検出面からの深さ22cmである。上部分は欠損し、わずかに曲物のみが残存する。

SE 5 SE 4の西側に位置し、直径48cm、検出面からの深さ21cmである。井戸底に曲物が2段残存しており、掘形から山茶碗が出土した。

D 室町～江戸時代の遺構

ア. 溝

SD 35 調査区の最南端にあり、SD 34の南を並走する大溝。幅350cm、検出面からの深さ84cm以上である。山茶碗(247～251)・常滑甕(252)・天目茶碗(253)などが出土している。江戸時代の溝が室町時代の溝を切りこんで形成されたものと思われる。

イ. 河川

旧美濃屋川 昭和47年のほ場整備前の美濃屋川で、阿漕焼の徳利(272)や肥前産染付碗(264～269)などが出土した。現在の美濃屋川は調査区北側に直線的に改修されている。なお、森山B遺跡の調査時の遺跡遠景航空写真^④に、この川の痕跡がよく表れている。

E 時期不明の遺構

ア. 溝

SD 21 幅62cm、検出面からの深さ15cmで、一部削平されている。

SD 31 幅58cm、検出面からの深さ15cmで、SD 34に伴うものとも考えられる。

イ. 土坑

SK 13 長軸120cm、短軸60cmの不整楕円形で、検出面からの深さ14cmである。土師器の小片が出土した。

SK 16 長軸98cm、短軸72cmの楕円形で、検出面からの深さ13cmである。土師器の小片が出土する。SD 6よりも時期は下る。

SK 20 長軸190cm、短軸150cmの不整楕円形で、検出面からの深さ17cmである。

SK 23 SK 24と二つ並びで検出された長軸62cm、短軸60cmの円形で、検出面からの深さ14cmである。

SK 24 長軸72cm、短軸60cmの不整楕円形で検出面からの深さ11cmである。

SK 25 長軸90cm、短軸68cmの楕円形で、検出面からの深さ13cmである。土師器片・山茶碗片が出土した。

SK 28 長軸98cm、短軸90cmの円形で、検出面からの深さ20cmである。

SK 30 長軸98cm、短軸60cmの不整楕円形で、検出面からの深さ12cmである。

SK 32 長軸78cm、短軸78cmの円形で、検出面からの深さ20cmである。

SK 33 長軸68cm、短軸48cmの不整楕円形で、検出面からの深さ10cmである。僅かに土師器細片が出土した。

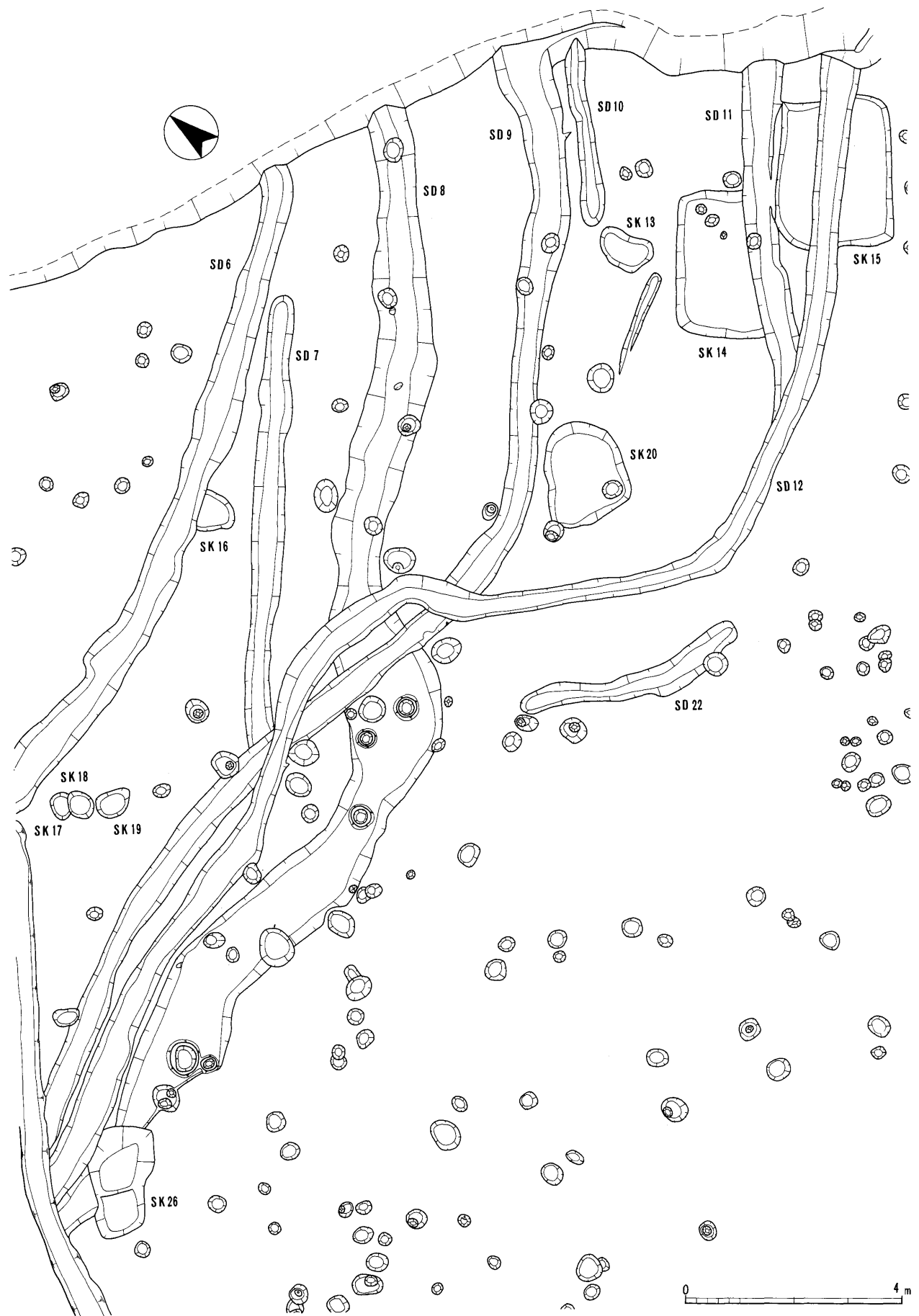
ウ. その他

自然流水路 旧美濃屋川以北の砂堆積層は室町時代以降における氾濫によるものと考えられる。須恵器・土師器をはじめ山茶碗・近世陶磁器に至るまでの幅広い時期の遺物が出土している。

(小菅文裕)

〔註〕

- ① 山茶碗胎土分析プロジェクト「中世土器の生産と流通」『研究紀要第1号』三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ② 藤澤良祐「瀬戸古窯跡群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982年
- ③ ①に同じ
- ④ 下村登良男『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告』三重県文化財連盟 1972年



第52图 B地区北部遺構平面図 (1 : 100)

5. 遺物

(1) 弥生・古墳時代の遺物

A. E地区水田面出土遺物(1)

いわゆる「前期遠賀川式」とされる弥生時代前期の壺形土器である。口縁部は欠損しているが、胴部は比較的良く残る。体部の調整は風化のためいまひとつ明瞭でないが、おそらくヘラミガキであろう。頸部と胴上部に篋描きの沈線が巡るが、遺存状況が良い胴上部のものは6本で1単位と多条化してきている。胴部の張りも大きい。以上の特徴から、I様式の新段階でも新しい所産であろう。

B. C地区水田面出土遺物(2~5)

2は、水田No.204からの出土である。壺形土器の底部片で、底部から体部がかなり外開きに立ち上がる。外面斜方向、内面横方向のヘラミガキを施している。前期のものであろう。

3~5は、水田は特定できないが、C地区の水田覆土からの出土である。

3は小破片であるが、甕形土器の口縁部である。口縁部外斜面に面をもち、そこに横方向の刷毛状工具によるナデを施し、その下にも同様のものが痕跡的に残る。内面は横方向の工具によるハケまたはナ

デである。弥生時代中後期の所産であるが、時期は特定できない。

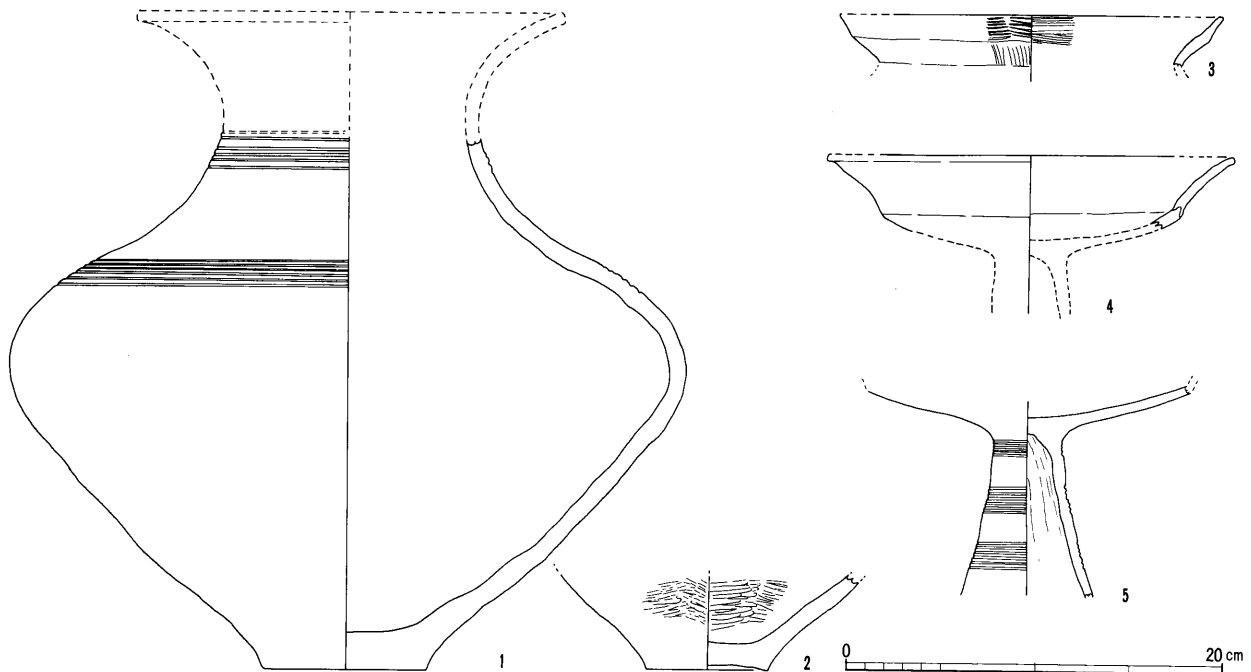
4~5は高杯片である。4は、杯部が屈折して外開きになるものである。5は、脚部は外側へ開きながらそこに櫛描横線文を施したもので、杯部は上部を欠損するものの、ほぼ4と同様になるであろう。伊勢湾西岸では「山中期」と呼称されるもので、弥生時代後期の所産である。

C. SD6出土遺物(6~19)

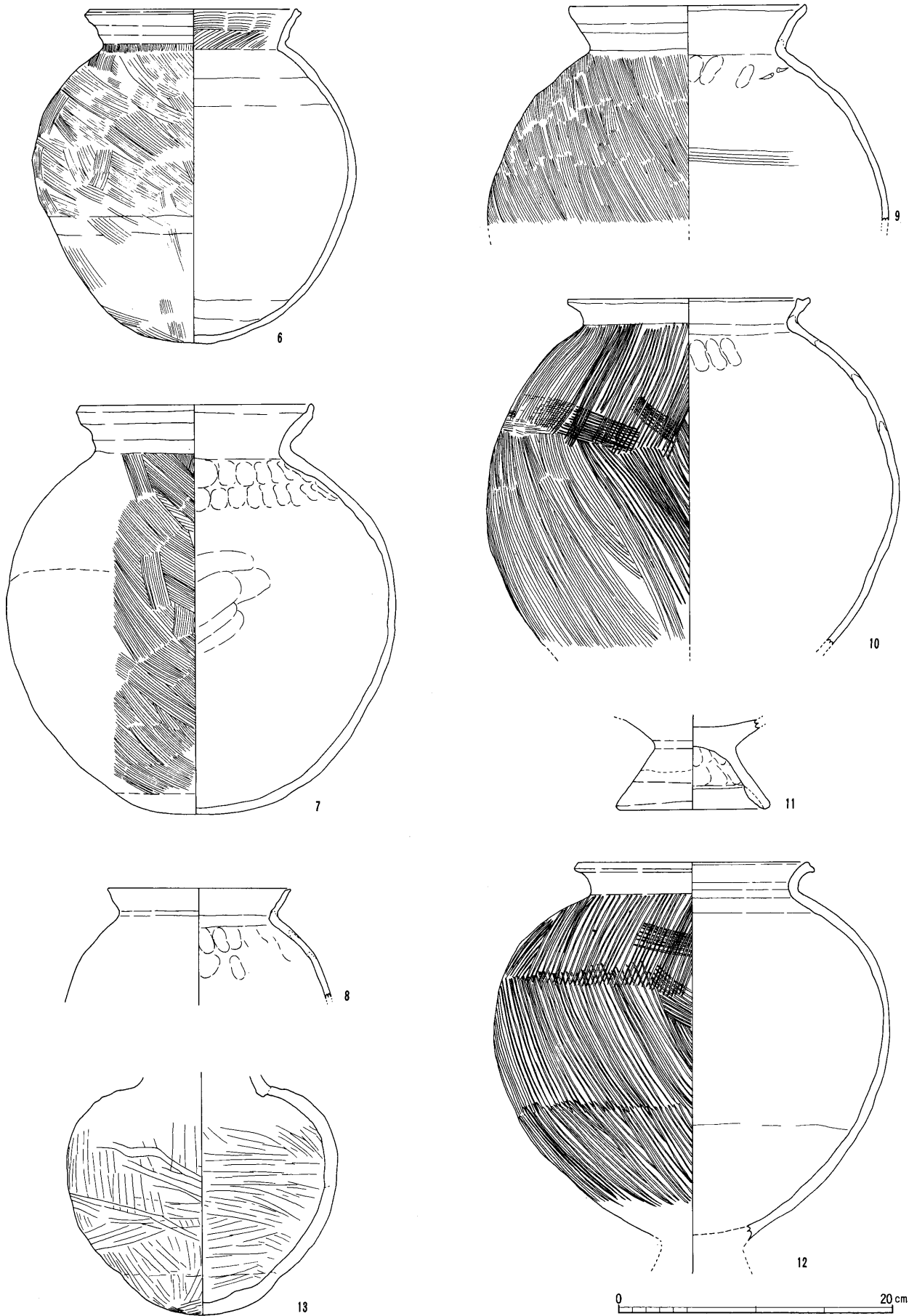
ほとんどが土師器であるが、1点だけ須恵器腿が入る。

甕形土器には、口縁部が外反するもの(6~9)とS字甕(10~12)がある。外反系のものは、口縁端部の形状が、外斜面に面をもつもの(6・9)、やや立ち上がって外面に面をもつもの(7)、上端部に面をもつもの(8)がある。S字甕は、10が口縁内面に強いヨコナデを施すことによってその名残をとどめているものの、12は内面のヨコナデすら明確でなく、外反系のものと何ら変わりのないものとなっている。

壺形土器は数少ない。丸底で粗いハケメを残す13と、小形壺14がある。



第53図 水田西及び覆土出土の弥生土器(1:4)



第54図 SD 6 出土遺物 (1 : 4)

高杯は、いずれも脚部が緩く屈折して外側へ開くものである。杯部は屈折部をもたず緩く椀状に立ち上がる15・16と、僅かに屈折し、口縁部上面に強いヨコナデを施して端部内面に稜をもつ17がある。

須恵器壘19は、やや偏平な器形を呈するもので、円孔の直下にあまりスピード感のない波状文を施すものである。(穂積裕昌)

D. SD 8 出土遺物 (20~25)

出土遺物の大半が須恵器である。

20~22は、杯身である。20はたちあがりやや内傾し、僅かに外反する。口縁端部は丸い。口縁部が受部はシャープな感を受ける。21は、たちあがり低く内傾し、底部外面はヘラ切り未調整である。22は、口縁部は内傾し、底部は欠けるが杯部は浅いものである。これらの杯身は時期的に若干の隔たりが感じられる。田辺編年^①では20はTK10型式に、21・22はTK209 型式に比定できる。

23は溝上層出土の杯蓋で宝珠つまみをもつ。天井部の3/5はロクロケズリがなされている。時期的にかなり下のものであるが上層出土のため溝の時期を示すものではなからう。

24は壘で、体部上面が窪んでいてへしゃげている。底部にタタキが施されているが、かなり凸凹である。体部中央上方には波状文が施されている。

25は高杯で、脚上部のみの残存である。脚最上部径4.5cmとかなり太い。また接合部内面が面をなし、杯部からまっすぐ脚がのびる。

なお、このSD 8には、小片のため図示していないが、口縁端部に段を持つTK23・47型式にのぼるものもみられた。(小菅文裕)

E. 自然流水路出土遺物 (26~46)

自然流水路出土の遺物は、全体にローリングを受け、小片が多く、遺存状態はあまり良くない。弥生時代から近世に至るまでの遺物が出土しているが、ここではまず、弥生・古墳時代のものについて、比較的残りの良いものを中心に報告する。

a. 石鏃(26)

サヌカイト製である。

b. 弥生土器 (27~31)

すべて、壺形土器である。27は、器形の特徴から弥生時代前期のものと思われる。28は、小片で遺存

状態は悪いが、口縁部の下端に刻目隆帯を貼付したもので、上端は欠損して不明であるが、下端と同様であった可能性もある。中期前半頃の所産であろうか。29・30は、口縁端部を下方に拡張した中期の土器である。31は、口縁端部外斜面に刻みを施したもので、後期の広口壺であろう。

c. 古墳時代の土師器 (32~40)

32~35は、甕形土器である。32はS字甕で、S字甕特有の口縁部の屈曲はかなり退化しているが、SD 6 出土のものよりはまだその名残を止めている。33は口縁部が外反し、体部内外面ハケ調整の甕で、後期以降のものであろう。34・35はともに台付甕の脚部であるが、内面への折り返しはない。

36は、小形器台である。杯部は緩く上方へ屈曲する程度で、あまり立ち上がらず、脚部には円孔をもつ。

37~40は、高杯である。37は、脚部の内弯傾向が不明瞭となったものである。39は、器壁が薄いがしっかりとした作りで円孔をもつ小形高杯である。杯部片である40は、屈折せずに緩やかに内弯気味に立ち上がるもので、口縁部は上端面にヨコナデによる面をもつ。(穂積裕昌)

d. 古墳時代の須恵器 (41~46)

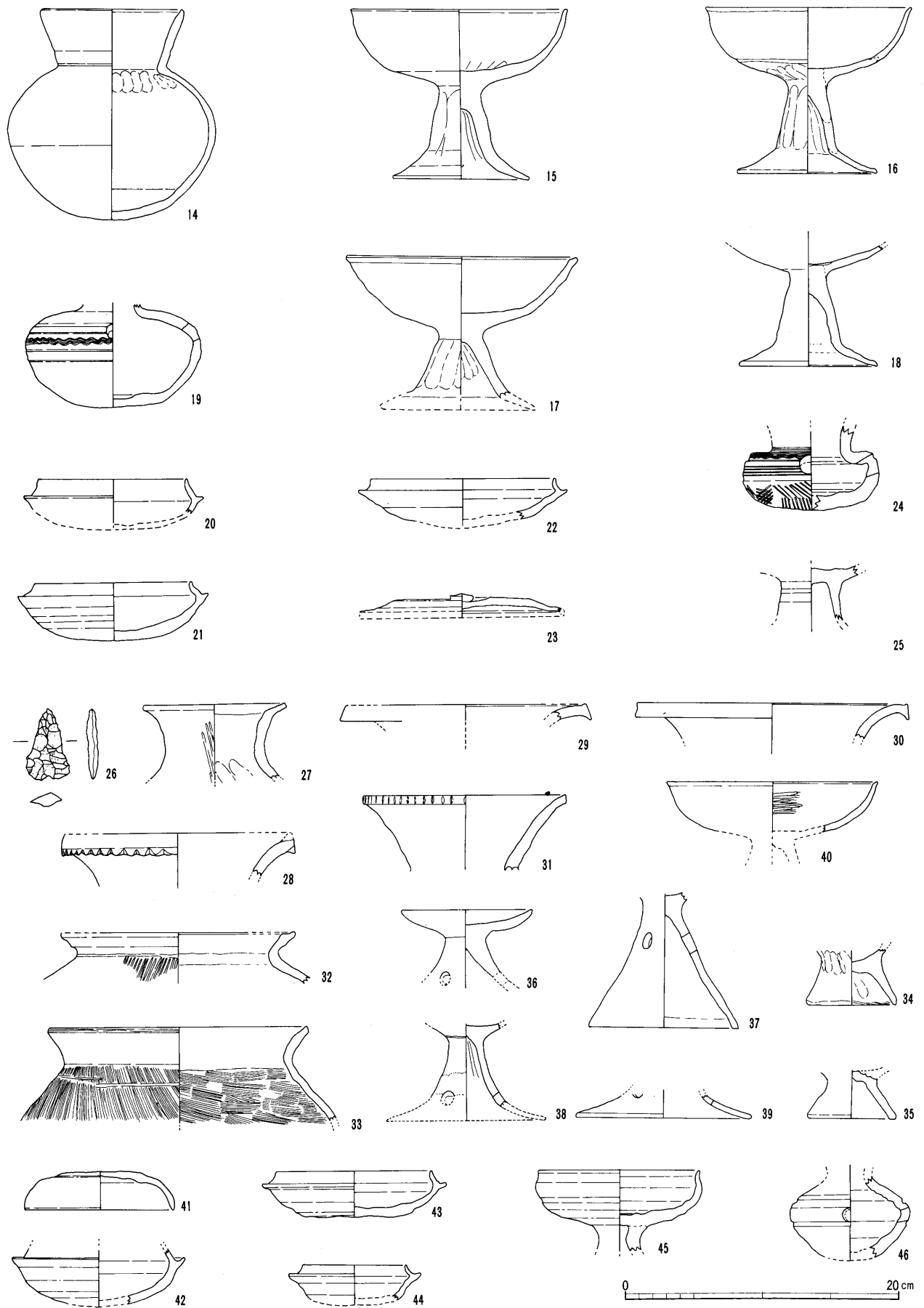
杯蓋41は、稜が認められず、口縁部内弯し、端部は丸い。42~44は杯身である。42は、受け部が立ち上がりに比べ非常に薄い。底部外面のケズリは2/3ほど認められる。TK47型式に併行する。43は、口径に比べて器高がかなり低い。たちあがり短く内傾している。底部ヘラ切りでナデ調整がやや雑である。44は小振りで、受部に比べたちあがり薄い。底部から受部まで直線的に逆「八」字的に引き出されている。TK217 型式に併行する。45は脚付短頸壺で、口縁部はややすばみ、端部は外反し丸くおさまる。県内では、鈴鹿市域に出土例が多い。46は、壘である。胴部は丸底で頸部が細く締まる。孔が体部最大径部に穿かれ、その上下に沈線が巡る。

(小菅文裕)

F. 包含層出土の遺物

a. 弥生土器 (47~48)

いずれも壺形土器である。47は、受口状の口縁部に鋸歯状の文様を施す。48は、口縁端部の上下に細



第55図 SD6・SD8・自然流水路出土遺物（1：4、26のみ1：2）SD6；14～19、SD8；20～25、
自然流水路：26～46

かい刻みをもつ。47は中期後半、48は後期の所産であろう。

b. 古墳時代の土師器 (49~60)

49は、小型丸底壺である。頸部の締まる新しいもので、口縁部は欠損しているが、あまり開かないであろう。

50~52は台付甕の脚台部である。50と51は脚底部を内面に折り返すものである。

53~60は高杯である。杯部片である53は、溝4出土の高杯同様、屈曲部がさほど明瞭でなく、口縁端部は上端をヨコナデすることによって内面に稜をもつ。54以下は脚部片で、54・55・57・58は円孔を有する。
(穂積裕昌)

c. 古墳時代の須恵器 (61~67)

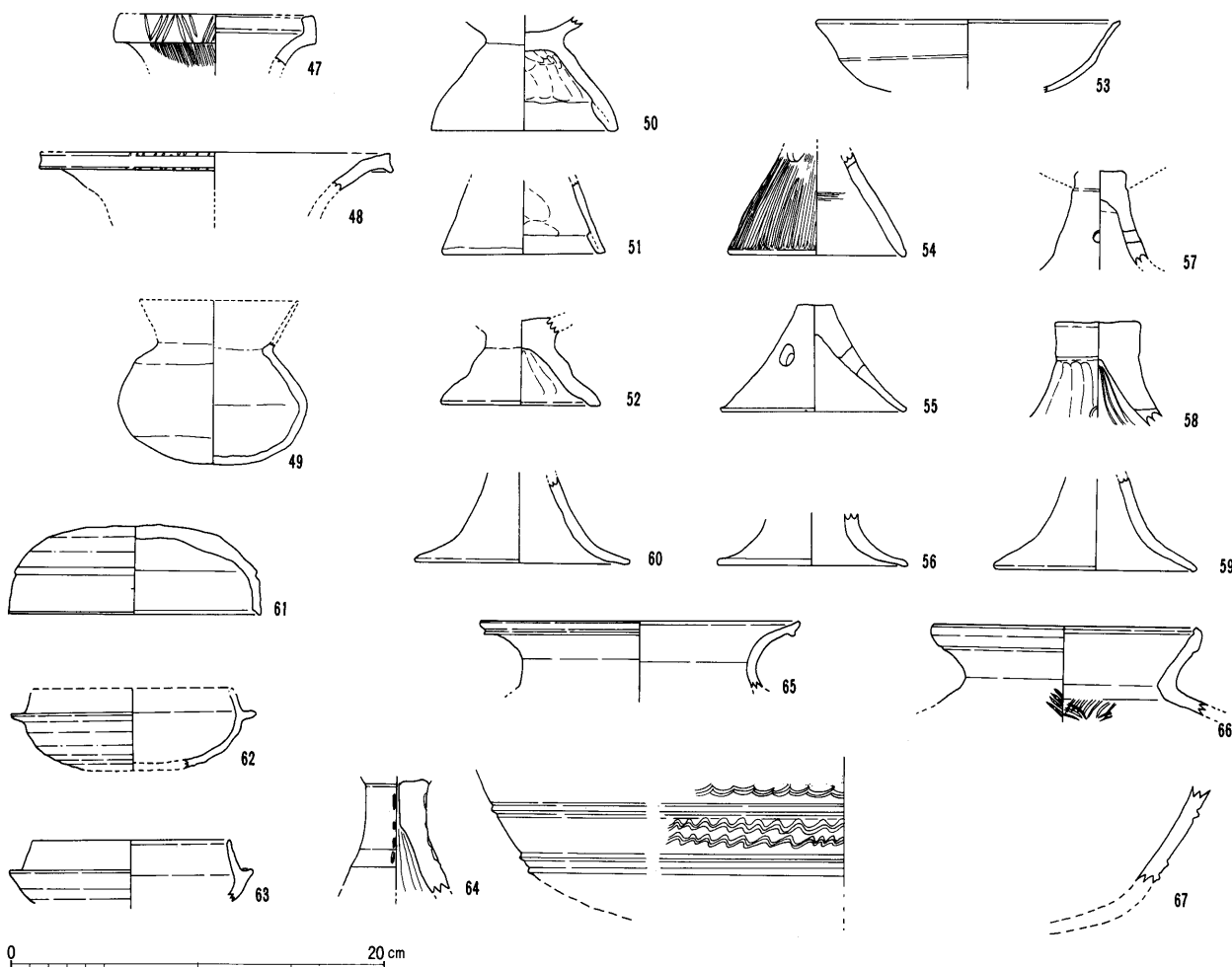
61は杯蓋で、比較的平らな天井部から垂直ぎみに下がる口縁部で端部に内面に弱い段をもつ。天井部外面はヘラ切りのあと一定方向にナデている。MT15~TK10型式に併行する。62・63は杯身で、62は

受部が水平ぎみにのび、端部は丸くおさまる。受部から底部にかけては非常に丸みをもつ。胎土は堅緻でナデも丁寧に見える。63は、やや内傾気味の立ち上がりが比較的長めにのび、端部は丸くおさまる。受部は斜め上方にでて端部は尖りぎみである。TK43型式に併行する。64は高杯の脚体部である。3方向に楕円形の刺突列点文が施されている。65・66は甕である。66は一条の凸線が巡り口縁端部は丸く仕上げられている。66は体部内面に同心円状の叩き目が残る。67は、2段の波状文が施されている。器台と思われる。
(小菅文裕)

(2) 平安時代~室町時代の遺物

A. S D 1 出土遺物 (68~76)

山茶椀 (68~76) 全体に口径が小さく体部の形態は直線的である。高台はつぶれたものが多くモミガラ痕がみられる。



第56図 包含層出土遺物 (1 : 4)

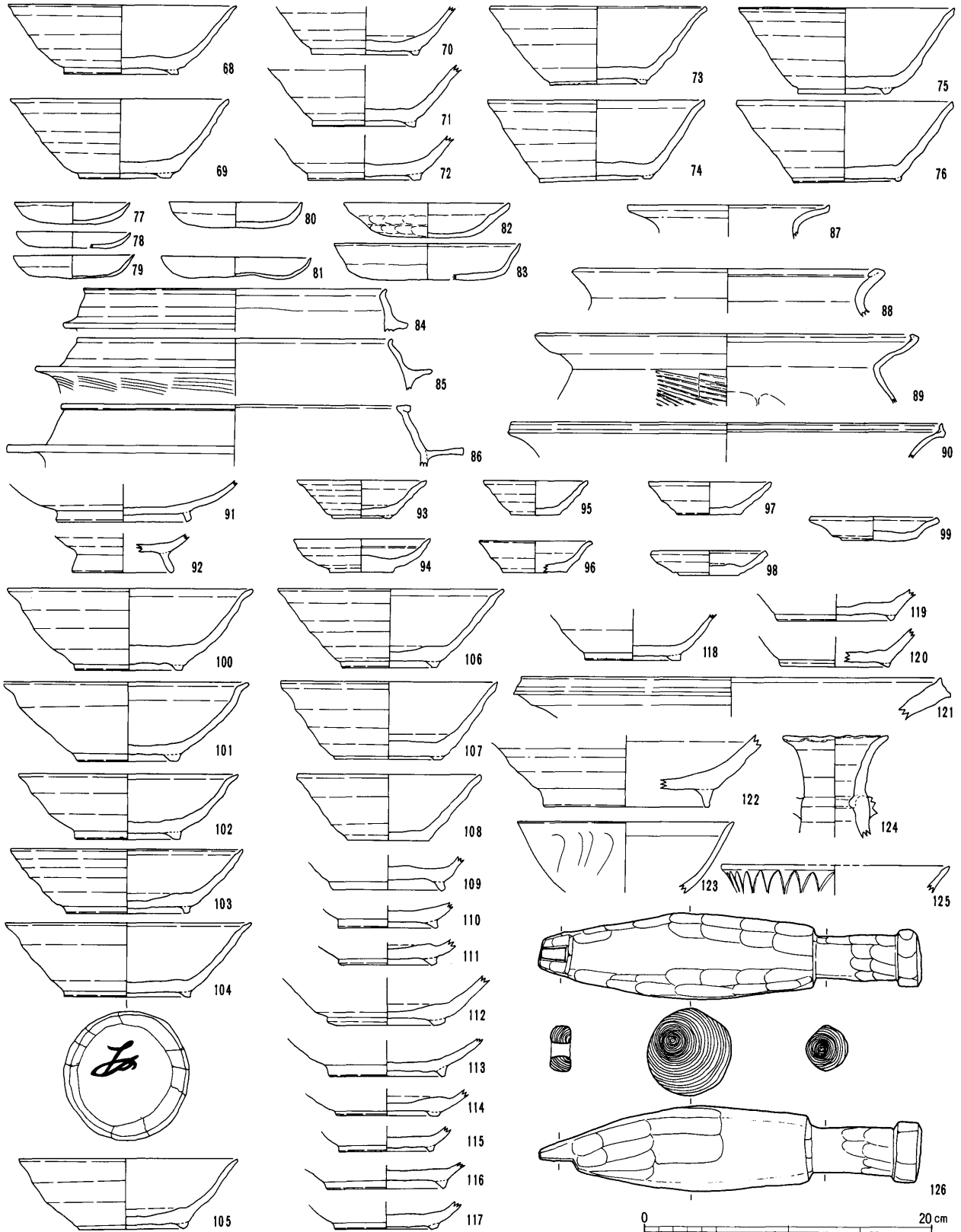
B. 自然流水路出土遺物 (77~126)

土師器皿 (77~82) 82は口縁部が強くヨコナデされ、内面に段がみられる。

土師器杯 (83) 口縁部が強くヨコナデされ、外反

気味に開く。腰部の屈曲は強い。

土師器羽釜 (84~86) 84は器壁が厚く、鐔は短い。口縁端部は外側へ屈曲する。85は器壁がやや薄く、鐔はやや長い。86は鐔が長く口縁端部は外側へ折り



第57図 A地区 SD1・自然流水路出土遺物 (1:4) SD1: 68~76. 自然流水路: 77~126

返される。

土師器鍋 (88~90) 88は器壁が厚く、口縁端部は内側へ折り返される。89は器壁が薄く、口縁端部は内側へ折り返され、さらに上方へつまみ上げられる。

灰釉陶器 (91・92) 91は低いハリツケ高台で内面外傾、外面は上半部外傾下半部内傾で底部は水平である。92は高いハリツケ高台でやや外反ぎみである。

山皿 (93~99) 93はハリツケ高台をもち器高も高い。94~95は糸切りの底部が高台状に残る。94は体部が内弯する。96~97は底部は糸切りのみである。体部は直線的でやや偏平である。98~99は器高が低く、調整も粗雑である。

山茶椀 (100~120) 100~102は口径が大きく体部に張りがあり、口縁部は若干外反する。100・102は高台にモミガラ痕がみられる。103~105は口径・高台径共に大きく偏平である。体部の張りは弱く、口縁部の外反はわずかである。104は底部外面に墨書がみられる。106~108は口径が小さく、体部は直線的である。100は高台が無く、糸切り痕のみが残る。109~120は底部のみの破片であり、詳細は不明である。

陶器鉢 (121・122) 121は口縁部のみの破片であり、122は捏鉢である。高台が直立気味に張りつけられ、外面下部は回転ヘラケズリ調整される。

白磁椀 (123) 体部にわずかに張りがあり、口縁部は外反する。外面には口縁部から体部にかけて細い曲線の陰刻が反復して施される。また、口縁部内面には沈線が一条みられる。

青磁 (124・125) 124は口縁部が外反し端部は波形に装飾されている。頸部には一対の把手の痕跡がみられる。125は椀である。外面には蓮弁文が施される。鍋はみられない。

木製品 (126) 一方の端部は握り状に、もう一方は柄穴状に加工され、表面にはケズリの痕跡がみられる。

C. S D 9 出土遺物 (127~131)

須恵器高杯 (127) 脚部の破片である。端部はくびれて段をもち、外面に粗い波状文が施される。

土師器皿 (128・129) 口縁部はヨコナデされ、わずかに外反する。外面下部はユビオサエされる。

山茶椀 (130・131) 130は体部の張りがほとんど

無く、高台部にはモミガラ痕がわずかにみられる。糸切り痕はナデ消しされている。

D. S D 34 出土遺物 (132~172)

土師器皿 (132~136) 132~134は小型の皿で口縁部はヨコナデされ、底部外面はユビオサエされる。135は口縁部が内外共にヨコナデされ、内面にはナデによる段がみられる。

土師器杯 (136) 口縁端部がくびれて外反する。**ロクロ土師器** (137~143) 137~139は杯、140~143は台部である。

土師器鍋 (144) 口縁端部は折り込まれる。断面形は丸く器壁は厚い。

山皿 (145~148) 145は口径が大きく器高も高い。体部には張りがあり、口縁端部はわずかに外反する。高台は高く外面がほぼ直立する。146・147は口径・器高共にやや小さく、偏平である。体部に張りはなく、高台も低い。148は器高が低く偏平である。高台はなく、糸切りの底部が高台状に残る。147のみ糸切り痕をナデ消している。

山茶椀 (149~169) 149~153は高台が高く、外面がほぼ直立する。149~151は体部に張りがみられる。154~156は高台がやや低く、外面がわずかに外傾する。155・156は体部にわずかに張りがあり、口縁部は緩やかに外反する。157~162は口径が大きく体部が強く張り出し、口縁部も強く外反する。高台は低くつぶれ気味で、高台径もやや大きめである。163~165は口径・底径共に大きい器高は低く偏平である。体部の張りは弱く、口縁部はわずかに外反する。165は高台径が大きく、体部から口縁部にかけての形態は直線的である。

灰釉陶器 (170~171) 170は体部にやや丸みを帯び、外面は回転ヘラケズリ調整される。高台は端部がつまみ出されて外面が外傾する。171は体部が直線的である。高台はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平らでモミガラ痕がみられる。

陶器鉢 (172) 内外共に粗いヨコナデが施されている。

E. S K 14 出土遺物 (173・174)

土師器鍋 (173) 口縁端部は折り込まれてヨコナデされる。断面形は丸く器壁はやや厚い。

山茶椀 (174) 口縁端部がわずかに外反する。

F. S K 27出土遺物 (175~187)

須恵器杯蓋 (175) 稜は消滅しており、天井部から口縁部にかけてなだらかにカーブする。

須恵器甕 (176) 2段の波状文が施されている。

土師器皿 (177~179) 177~178はロクロ土師器である。

陶器皿 (180) 口縁部内面がくびれ、灰褐色釉が施される。

花瓶 (181) 土師質で底部に糸切り痕が残る。

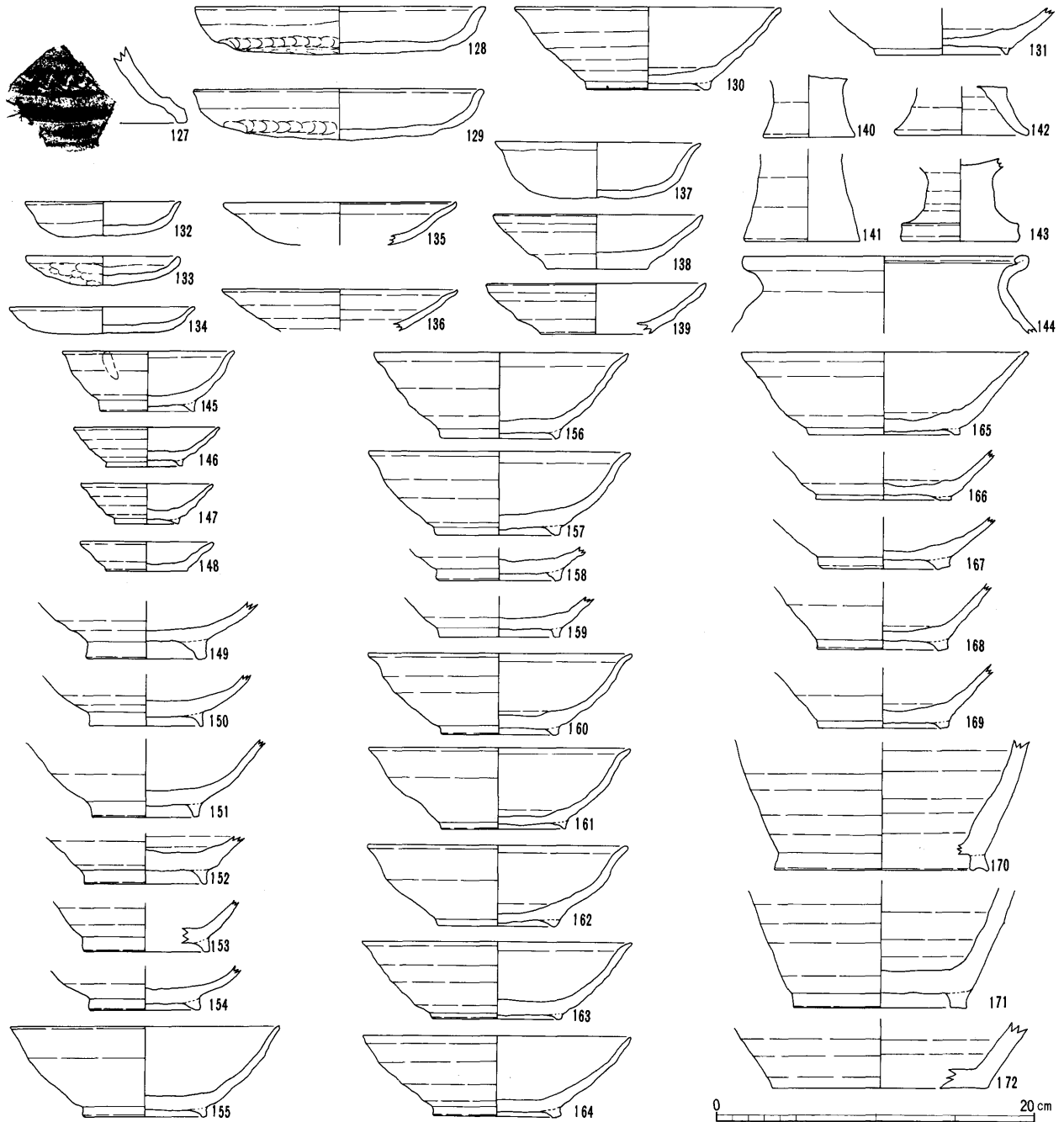
鉄製品 (182) 釘状の鉄製品である。

土師器鍋 (183) 口縁端部が丸く内側へ折り込まれる。器壁は厚く、体部にユビオサエがみられる。

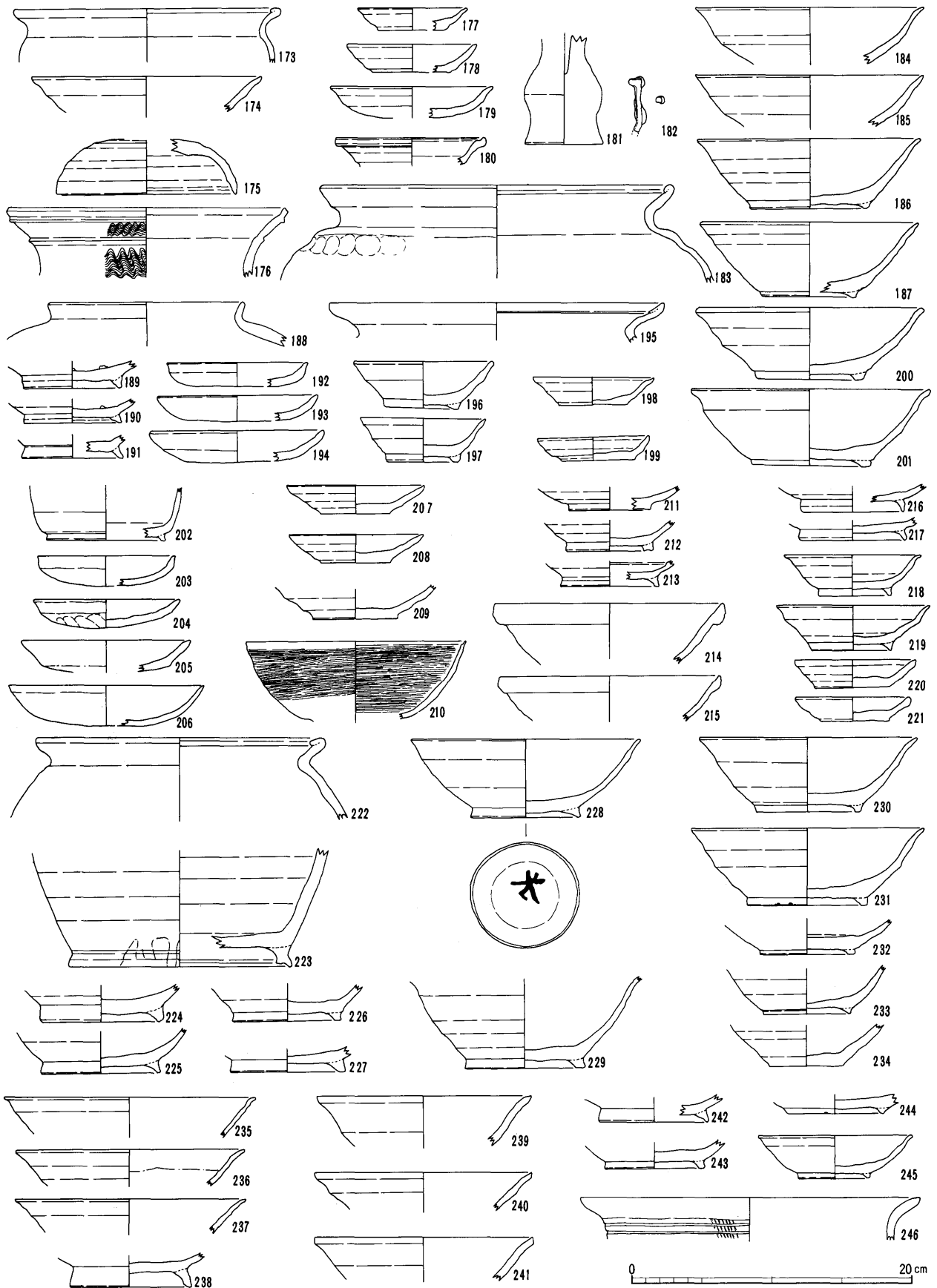
山茶椀 (184~187) 184~185は体部に張りがあり、口縁部がわずかに外反する。186~187は体部に張りがなく、直線的である。186は口縁部がわずかに外反し、高台径が大きい。187は高台径が小さく高台にはモミガラ痕がみられる。

G. 包含層出土遺物 (188~246)

包含層出土遺物にも各時期のものがあり、完形あるいはそれに近いものもいくつかみられる。



第58図 S D 9・S D 34出土遺物 (1 : 4) S D 9 : 127~131、S D 34 : 132~172



第59図 SK14・SK27・包含層出土遺物(1:4) SK14; 193・174、SK27; 175~127、包含層; 188~246

A 地区

須恵器短頸壺 (188)、緑釉陶器皿 (189~191) のほか、土師器小皿 (192~194)、土師器鍋 (195)、山皿 (196~199)、山茶椀 (200・201) などが出土している。

B 地区

須恵器杯 (202)、土師器皿 (203~206) のほか口クロ土師器 (207~209)、瓦器椀 (210)、緑釉陶器 (211~213)、白磁椀 (214・215)、灰釉陶器 (216・217・223)、山皿 (218~221)、土師器鍋 (222)、山茶椀 (224~234) などが出土している。

C 地区

灰釉陶器椀 (235~238)、山茶椀 (239~244) などが出土している。

D 地区

弥生土器 (246)、山皿 (245) などが出土している。
(山口 格)

(3) 近世の遺構出土遺物

A. S D 3 5 出土遺物 (247~255)

S D 3 5 は、室町時代以前の溝と重複する江戸時代の溝であるため、両時期の遺物が混在する。

山茶椀 (247~251) 247は口径16.5cm、高台径8.8cm、器高5.6cm と全体にやや大きめで、腰部にやや丸みをもち口縁部が外反する。248~251は、口径約15cm、高台径約6.5cm、器高約5cm で体部が直線的に立ち上がる。前者は藤澤編年のII-4にあたり12世紀中頃のものである。また、後者は、III-5 (248

・249)~III-6 (250・251)にあたり12世紀終わりから13世紀初めのものである^③。

陶器甕 (252) 常滑産である。外面は縦方向のケズリが施される。15世紀代のものである。

天目茶椀 (253) 体部から底部にかけてヘラケズリ調整される。底部周辺は無釉だが、その他の部分には漆黒色の鉄釉がかかる。瀬戸本業焼の製品で17世紀後葉のものである。

陶器鉢 (254) 唐津産陶器である。茶色の地に白泥釉がハケ塗りされる。18世紀代か。

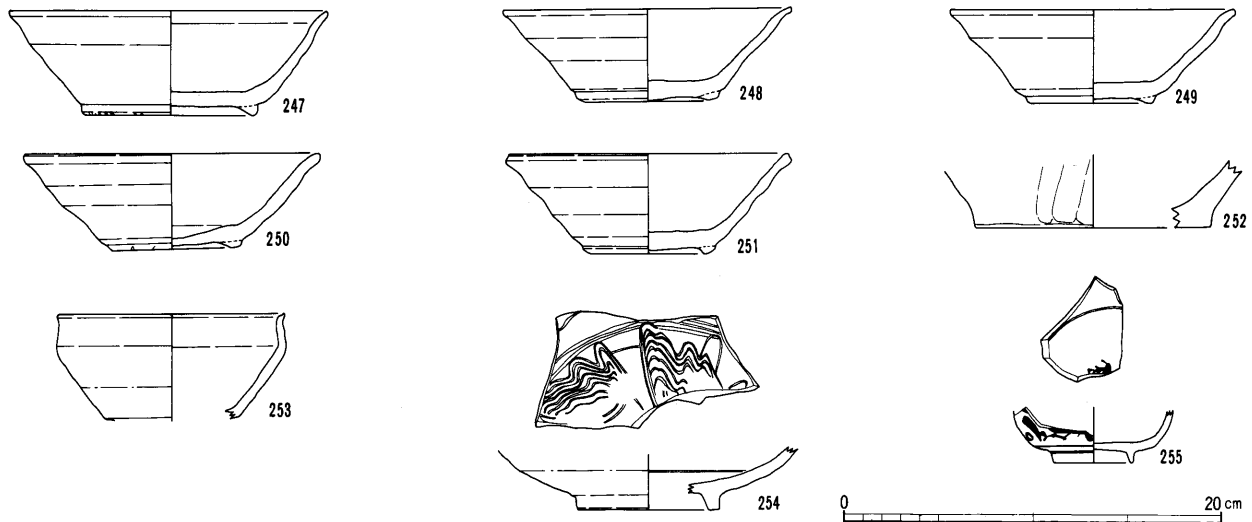
椀 (255) 瀬戸産の磁器である。腰部が張り、体部が直線的に立ち上がる。外面と見込みに呉須による絵が描かれる。19世紀のものである。

B. 旧美濃屋川出土の遺物 (256~282)

すべて近世の遺物である。ほとんどが陶磁器類で産地別では、瀬戸あるいは瀬戸美濃産が最も多く、次いで肥前産、阿漕焼、常滑産などとなっている。

蓋 (256・257) いずれも瀬戸美濃産で上面に5本の横線をめぐらせた径の比較的大きなもの (256) と上面に浅い段をもつ径の小さなもの (257) がある。

椀 (258~270) 器種の中では最も多く形態も多様である。天目茶椀 (258) は瀬戸産で底部のみであるがこれらの椀の中では最も古く17世紀第2四半期のものである。腰部以上に漆黒色の鉄釉がかかる。259は瀬戸美濃産陶器の丸椀で灰白色の灰釉がかかる。261は瀬戸産陶器の端反椀で淡黄色の釉がかかる。260・262はいずれも陶器の広東茶碗である。260は瀬戸産で外面には呉須による竹林文 (体部)、横



第60図 S D 35出土遺物 (1:4)

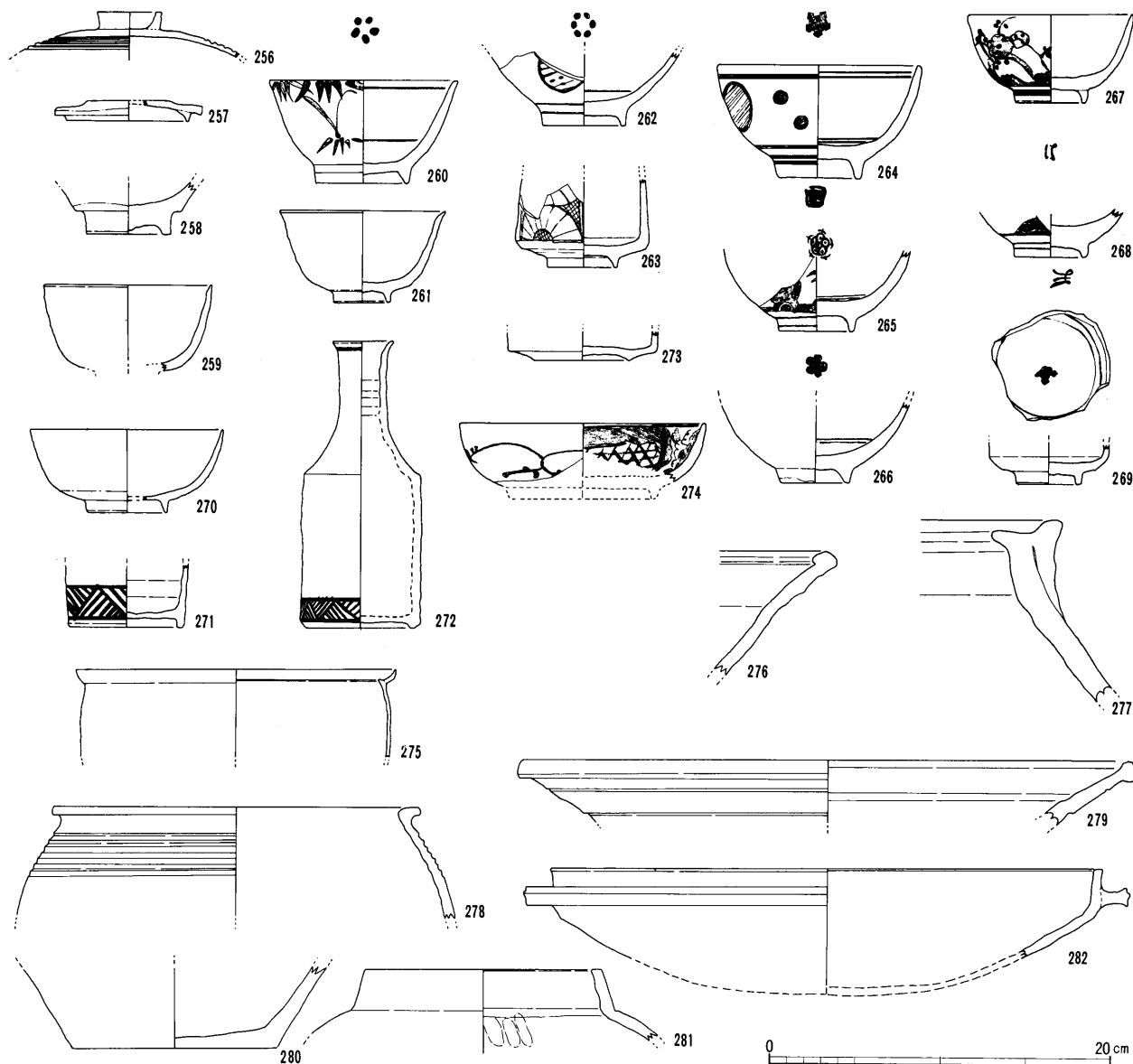
線（高台部）が内面には横線（体部）、五弁花（底部）が描かれる。口縁端部と高台端部は磨滅する。262は美濃産で炆器質である。外面には呉須による丸文（体部）と横線（高台部）が、内面には六弁花（底部）と横線（体部）が描かれる。263は瀬戸産陶器の染付箱型湯呑で、外面には菊花や武田菱などが描かれる。

264～269は肥前産磁器の椀である。264～268は腰部からゆるやかに体部が立ち上がるのに対し、269は腰部が張る箱型になると思われる。呉須による丸文、梅花、五弁花、横線などが描かれる。釉は265と269の外面が明緑灰色である以外は灰白色ないしはその近似色である。高台端部の釉は拭い去られている。264・266・269の高台部には砂が付着する。

270の椀は器高に対し口径が大きくやや偏平な印象を受ける。暗オリーブ褐色の釉が内面と外面の腰部までかかる。

なお、270～272と275は阿漕焼である。阿漕焼は古安東（安東焼 寛保年間に始まったという説^④や安永6年頃という意見^⑤がある）に対し再興安東とも呼ばれ嘉永年間（一説に嘉永6年^⑦）に現在の津市愛宕山で開窯し、文久2、3年頃船頭町に窯を移した^⑧。このころから阿漕焼と呼ばれるようになり、明治8、9年頃からは「阿漕」の印を用いるようになった。当遺跡の出土品はその頃のものであろう。阿漕焼はその後、廃絶と復興を繰り返し、窯の場所も移動しながら現在に至っている。

徳利（271・272） 271は底部の破片であるが、完



第61図 旧美濃屋川出土遺物（1：4）

形の272と同じ筒型の体部をもつものであろう。体部の最下部には複合鋸歯文が描かれる。いずれも断面方形の高台をもつ。272の高台底面には「阿漕」の印が押される。

香炉 (273) 瀬戸美濃産陶器である。くぼみ底だが三足が付くかどうかは不明。底部外面は無釉である。ローリングを受けている。

皿 (274) 肥前産磁器であろう。染付である。口縁は輪花状になる。

水指 (275) 口縁内側とかえり部には釉がかからず蓋がつくものと思われる。器壁は大変薄い。

播鉢 (276・279・280) 瀬戸(美濃)産である。279の内面の印は⊕であろう。錆釉が施されるがやや光沢のあるもの(279)と光沢がほとんどもしくは全くないもの(276・280)がある。

大甕 (277) 常滑産であろう。土師質であるがよく焼き締まる。

甕 (278) 体部に7条の横線がめぐる。暗赤褐色の鉄釉が施される。瀬戸産である。

瓦質土器 (281・282) 生産地は不明。281は短頸壺で肩部内面にユビオサエ痕が残る。282は短い鏝のある焙烙であろう。いずれも内外面とも均質に燻され、銀灰色を呈する。

C. 自然流水路・包含層出土の遺物 (283~307)

283~288がA地区の自然流水路から出土したもの、289~307が包含層から出土したものである。

皿 (283~285) 3個体とも量法はよく似ている。283と285は瀬戸美濃産で283には灰釉、285には錆釉が施される。285は灯明皿であろう。284はやや薄手で乳白色の釉がかかる。産地は不明である。湯釜(286) 把手部分の破片で、釣輪部は穿孔される。外面はハケによる調整がなされる。

鉢 (287・288) どちらも土師質でよく焼き締まっている。287は内面が滑らかで、捏鉢であろう。

椀 (289~293) 289~291は瀬戸美濃産の椀と同じ器形である。高台は付け高台であるが、289(17世紀中頃)に比べ290(18世紀)、291(18世紀後半)としたいに作りが粗雑になる。いずれも灰釉系の釉がかかるが、高台とその周辺は無釉である。292も瀬戸産陶器であるがケズリ出し高台である。腰部が張り体部は直線的に立ち上がる。釉はクリーム色に近く内面は一部茶褐色に変色する。高台とその周辺はやはり無釉である。293は阿漕焼で、口縁端部が外反する端反椀の形態をもつやや大型のものである。口縁部は内外面とも2本の横線の下に曲線による連続文様が、腰部には馬鍬状の文がありその下に2本さらに高台部に1本の横線が、内面底部には2本の横線の内側に唐草文が描かれる。

皿 (294~298) 294は白色の釉のかかった薄手のものである。295・296は磁器に灰オリーブ色の釉(青磁釉?)が施されたものである。底部の釉は拭い去られる。297は磁器の染付皿で、中国産であろうか。298は瀬戸美濃産陶器の反り皿で、内面底部にはトチンの痕がみられる。高台端部も含め内外面ともに灰釉がかかる。

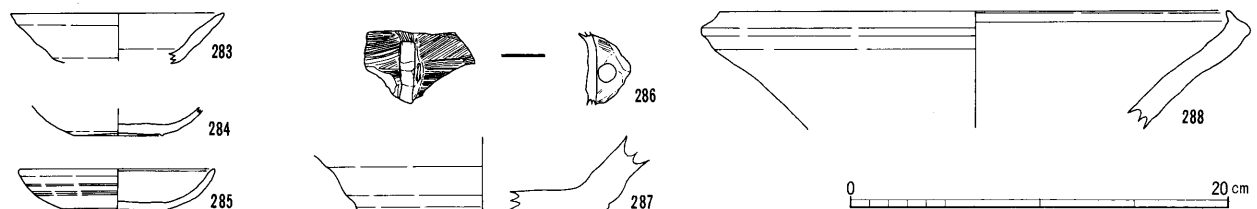
花瓶 (299) 底面以外に暗オリーブ色の釉がかかる。底面には糸切り痕が残る。古瀬戸中期様式、14世紀代のものである⁹⁾。

片口 (300) 瀬戸産陶器である。黄褐色の鉄釉系釉薬が施される。18世紀前半のもの。

桶 (301) 瀬戸産陶器である。黒褐色の鉄釉が施される。古瀬戸後期様式第4小期のもので、15世紀第3四半期にあたる¹⁰⁾。

播鉢 (302・303) いずれも瀬戸美濃産で、光沢のない錆釉が施される。302は口縁に段をもつ17世紀後半のもの、303は口縁が玉縁状になる19世紀のものである。

甕 (304・305・307) いずれも口縁部であるが形



第62図 自然流水路出土遺物 (1:4)

態は異なる。304・307は常滑産である。305は産地不明。赤色でよく焼き締まる。

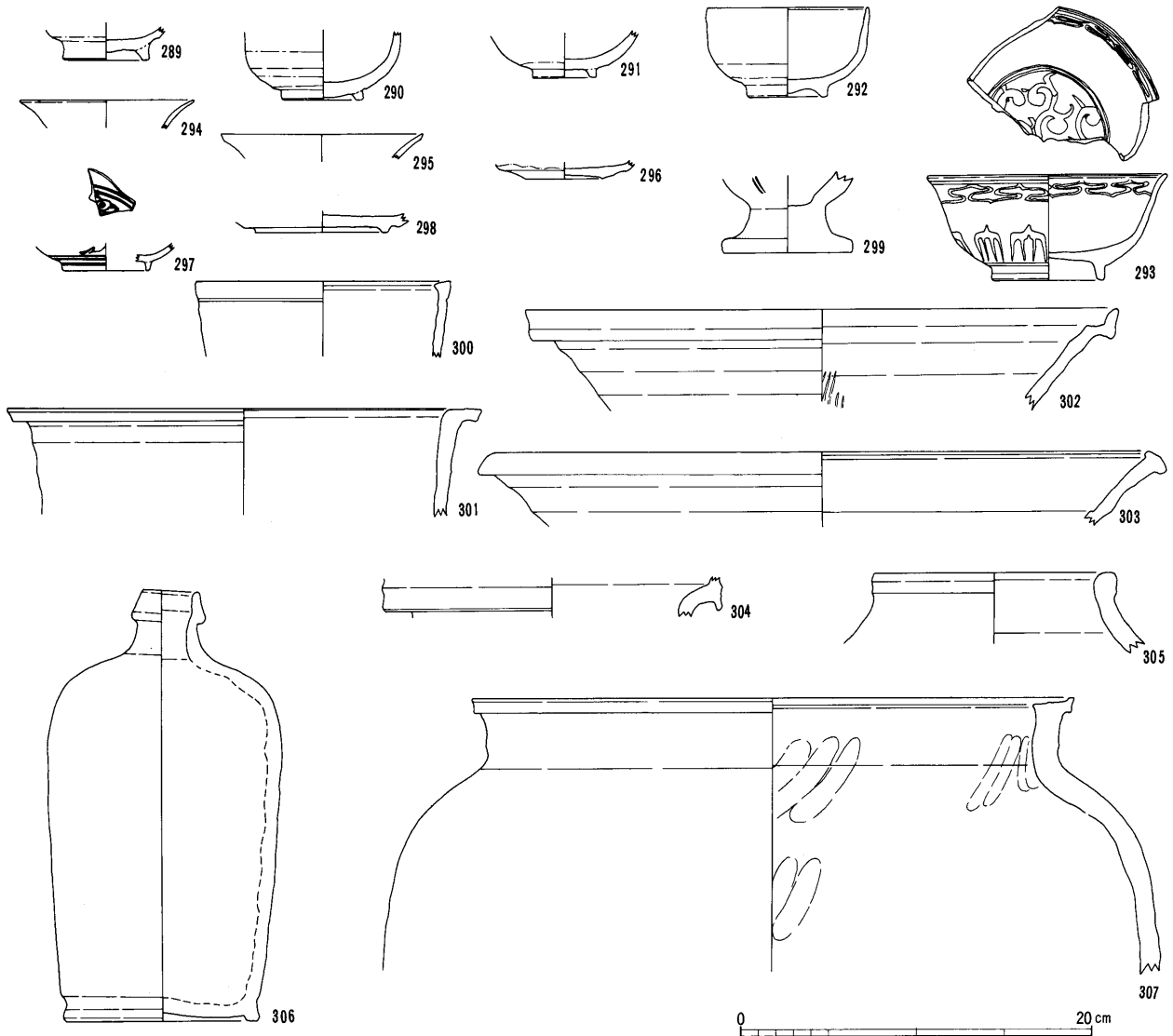
徳利(306) 19世紀代のものであろう。産地は不明。全体に灰色の釉が施される。底部の釉は拭い去られている。底部は断面方形の低い高台がめぐる。

口縁は外に折り返され、頸部中央付近が最も厚くなる。なお、図化したものはこれ1点だけだが、同じ器種は他に7点出土している。体部外面に「木屋」等の文字が入ったものもある。

(本堂弘之)

〔註〕

- ① 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年 以下須恵器については同書による
- ② 藤澤良祐「瀬戸古窯跡群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982年
- ③ 同上
- ④ 田中繁三「津のやきもの」『津市民文化6』津市教育委員会 1979年
- ⑤ 水谷英三「伊勢のやきもの」『日本やきもの集成 6 近畿Ⅰ』平凡社 1981年
- ⑥ 同前掲書④
- ⑦ 同前掲書⑤
- ⑧ 同上
- ⑨ 瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐氏のご教示による。
- ⑩ 同上



第63図 包含層出土遺物

6. 結 語

森山東遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であるが、2ヵ年にわたり実施した調査の主眼は弥生時代の水田遺構に注がれた。確認された水田は、中勢道路計画路線敷内だけでも約4,000㎡の広がりがあり、所謂小区画水田は、上層水田で341面、下層水田で87面に達した。これまでも弥生水田の存在の可能性が津市納所遺跡^①や鈴鹿市上箕田遺跡^②等の調査で指摘されていたが、この時期の本格的な調査例としては、県下で初めてのものである。以下、水田遺構について若干の考察を加え、結語としたい。

(1) 水田の時期について

時期決定の根拠となった出土土器はわずかに5点である。しかもこれらが直接水田を耕作した人々によってもたらされたものとするのか、あるいは洪水等による流れ込みにより前代のものが混入したものと考えるかで必ずと年代観も違ってこようし、時期決定は非常に困難な状況であることをまず初めに断っておきたい。とりあえず事実関係を列挙すると、

- ① C地区下位水田N o. 204の足跡検出付近の耕作土中から水田基盤層にくい込んだ状態で、弥生前期の壺底部片（第53図、2）が出土。
- ② C地区東西方向の大畦畔の西端上面の水田覆土から弥生後期後半の高杯が2点（第53図、4・5）が出土。器面はローリングを受けかなり磨耗。
- ③ D地区南東隅の水田耕作土中から弥生前期新段階の甕口縁部細片が出土。器面はかなり磨耗。
- ④ E地区上層水田の耕作土中から弥生前期新段階の壺体部片（第53図、1）が出土。
- ⑤ E地区南部に隣接する太田遺跡の調査で確認の大溝（旧河道）は、上限が弥生時代中期と思われ、層位的には黒色泥炭土の上に堆積した青灰色粘土（森山東遺跡の第Ⅸ層に対応）を切り込み形成されている。

以上のことから判断し、②の事実を重視すれば、上層水田遺構の時期は、弥生時代後期と考えられるが、③・④から弥生時代前期まで遡る可能性も一概に否定できない。ただ①の事実から弥生前期の土器

は、水田基盤層の生成時期にかかわる遺物と考えることもでき、一応ここでは前者の時期を考えておきたい。なお、D・E地区の下層水田遺構については、⑤の事実から弥生時代中期以前の可能性が高いと考えられるが、遺物が伴っていないので明確な時期は不明である。

(2) 水田の立地について

森山東遺跡の水田は、森山遺跡から東方に舌状に延びた微高地の東縁部にあたる緩斜面およびその南に広がる河川沖積地の低地部に位置し、黒灰色シルト（泥炭土）を水田基盤層としている。

このような立地条件下にある水田遺構は、工楽善通氏による分類^③に従えば「微高地縁部から低湿地に向かったの緩傾斜面を利用して水田化したもの」とされる第2分類に相当する。

一方、八賀晋氏は水田土壌の分析を通じて古代の水田開発における土壌の選択および土地利用の展開過程について3つの段階を設定された^④。第1段階は地下水位の高い湿潤な地域への開発（湿田）、第2段階は地下水位の影響を大きくもちながらも、灌漑用水の導入を必要とする地域への開発（半湿田ないし半乾田）、第3段階は大規模な灌漑用水の導入なくしては、開田不可能な地域への開発（乾田）。そしてその時期は、第1段階が弥生前期頃、第2段階が弥生時代中期以降、第3段階が古墳時代の4～5世紀にかけてであるとされた。

これに対し、広瀬和雄氏は北部九州の菜畑遺跡や板付遺跡の水田を例にとり、稲作初期の段階から堰や水路を伴う灌漑水田の技術は体系化されたものとして伝播したと考え、当初から湿田を指向したものではなく、湿田→半湿田・半乾田→乾田という発展段階の図式そのものに問題を投げかけられた^⑤。

こうした農耕技術論の面から水田の立地も含めその発展段階を見直すという考え方もあるが、あくまで土壌分析を通じて確認された初期水田の立地は、その基盤が黒色泥炭土であったり灰色シルト質であったりして湿潤な場所に造られた場合が多く、灌漑

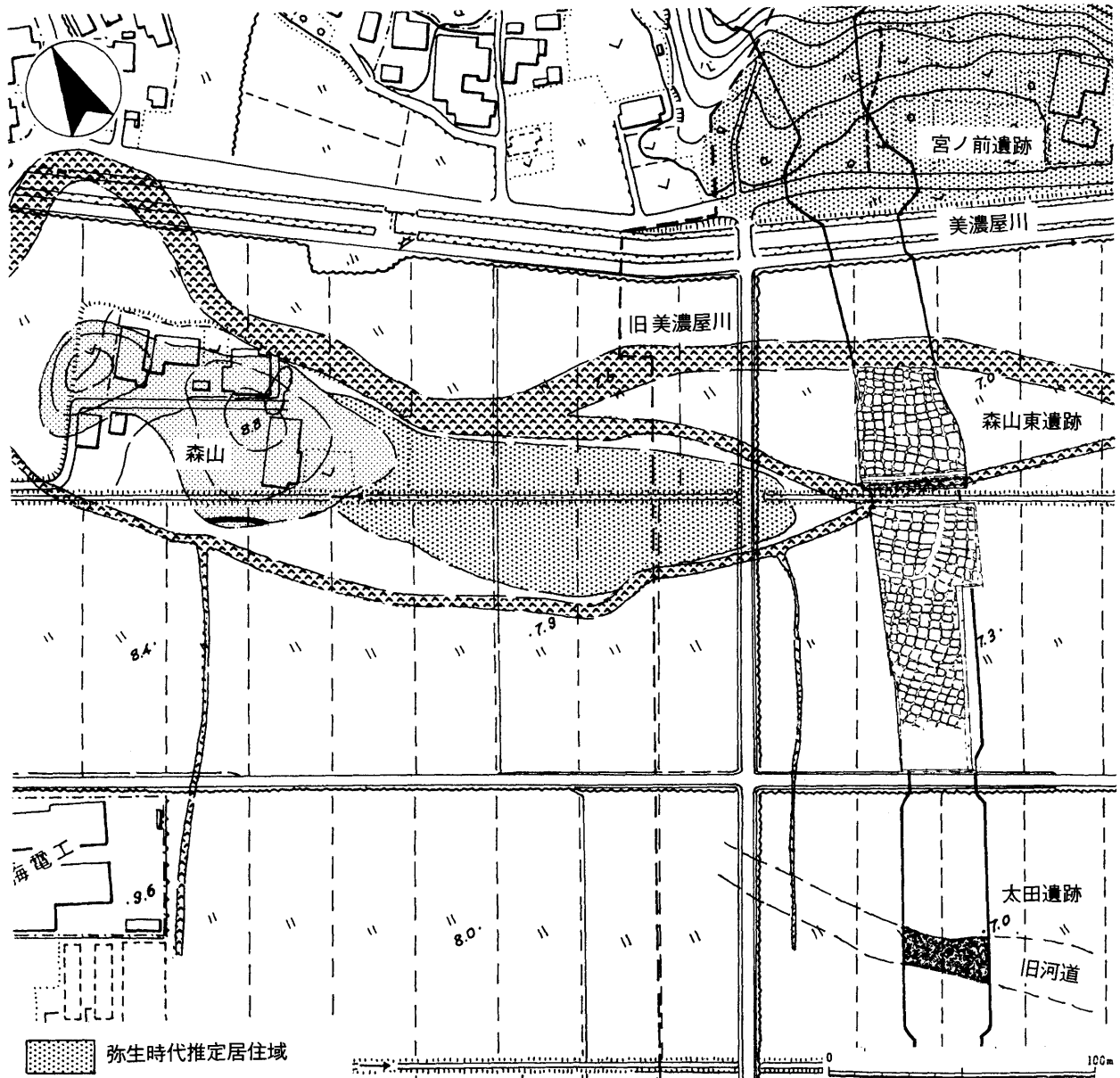
水の導入は第1段階から認められるにしても、水田立地の展開は大局的にみて八賀論から大きく変わるものではないと考えられる。森山東遺跡の水田遺構は、まさに八賀氏の言う第2段階に相当し、半湿田の様相を呈していたものと思われる。

(3) 小区画水田について

検出した水田の個々の区画面積について、地区別あるいは上層と下層、上層水田の中でも上位水田と下位水田とを比較するために表したのが、第64図の水田区画面積のヒストグラムである。なおこの図の中で右欄のE地区下層水田以外がB地区～E地区の上層水田にあたる。

これによれば、大畦畔に囲まれたC地区上位水田を除いたB地区～E地区上層水田の区画の大きさは $3.1\text{m}^2 \sim 19.1\text{m}^2$ とかなりばらつきが認められたが、平均面積は 8.8m^2 前後でよく似た度数分布状況を示している。従って水田開発は一連の土木作業により一気に造成された可能性をもつ。

これに対し、同じ上層水田の中でも上位水田では 6m^2 以下の小さな区画はなく、平均面積は 11.2m^2 と比較的大きな区画が揃っている。また水がかりの上でも優位性が窺われ、大畦畔に区画された水田は、他の生産集団（ここでいう生産集団とは集落において数棟の住居に居住している単位集団を想定）よりも優位に立っていた生産集団により経営されていた



第65図 水田と居住域

可能性も想定できよう。

一方、下層水田の区画は、平均面積が5.6㎡とさらに小区画である。これほど小さな区画は全国的に見ても弥生時代水田に限ると類例が少なく、弥生時代初期に位置付けられている神戸市戎町遺跡^⑥の水田区画が3㎡～10㎡で、面積的には最も近い数値を示している。弥生時代初期～前期の小区画水田の規模は、中期～後期のものに比べて小さい傾向にあり、あるいは時期不明とした下層水田の時期が弥生時代前期まで遡ることも考えられる。

さて、水田が小区画化する意味について工楽氏は「現地地形にそれほど多くの手を加えることなく、小さく区切って水田一枚一枚にわずかつつの段をつけることによって水田の管理が容易なように配慮し、土木作業の省力化の点でも利点がある^⑦」と考えられている。こうした視点は、森山東遺跡の小区画水田の造成のあり方を見ても同様なことが考えられる。即ち、まず東西方向の小畦畔を造り、これを基調として地形に応じて順次南北畦畔を設定したようすが看取され、造成前の設計の段階から自然地形を巧みに利用したなるべく切り盛りが少なく済むような配慮がなされていたようである。隣合う田面の段差はせいぜい5cm内外におさめられており、水口は基本的に西側に設けられているなど、当初から西方からの灌漑水を考慮に入れた計画的な小区画水田の造成であったことが窺われる。なお地形等の制約から区画が大きくなり過ぎた水田については、畦畔を増やし、敢えて小区画化を図ったと思われる区画がいくつかの箇所で見られるが、これは単に農耕技術上の問題だけでなく、別の要素も考慮する必要があるだろう。

(4) 水田の広がりとう居住区

従来より、安濃川流域における稲作農業の展開は、まず弥生時代前期の拠点集落として位置付けられている納所遺跡を中心として始まり、次第に分村という形で弥生時代中期末以降、北西部の美濃屋川流域沿いに拡大していったものと考えられており、竹川遺跡^⑧、森山遺跡^⑨、桐山遺跡^⑩、養老遺跡^⑪など小規模な遺跡の登場は氾濫平野の開拓が一段と進んだ結果と言われてきた。今回森山東遺跡において水田遺構が

確認されたことにより、あらためてこのことを裏付けたものと言えよう。

さてその広がりについては、調査範囲が中勢道路の路線敷内に限られ、また周辺のボーリング調査等も実施できなかったので推定が難しいが、北は旧美濃屋川付近、南は太田遺跡^⑫の調査で確認した大溝の北部付近、西は森山遺跡から東へ舌状に延びた微高地縁辺部周辺が一応の想定範囲として考えられる。

この水田耕作に従事した弥生人の居住区は、おそらく近くでは舌状の微高地上や遺跡北部の低丘陵南裾部に位置する宮ノ前遺跡に求められるであろう。

(倉田直純)

[註]

- ① 伊藤久嗣『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会 1980年
- ② 『上箕田』三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ 1961年
- ③ 工楽善通「西日本の水田遺構」『考古学研究 第29巻 第2号』考古学研究会 1982年
- ④ 八賀晋「発掘調査からみた古代水田の土壌環境」『地理 Vol. 28, No. 10』古今書院 1983年
- ⑤ 広瀬和雄「堰と水路」『弥生文化の研究2 生業』雄山閣 1988年
- ⑥ 山本雅和『戎町遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会 1989年
- ⑦ 同前掲書③
- ⑧ 下村登良男ほか『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告—付・竹川遺跡—』三重県文化財連盟 1972年
- ⑨ 同上
- ⑩ 同上
- ⑪ 同上
- ⑫ 本報告書所収「V 太田遺跡」

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
1	040-01	E地区下層水田	弥生土器 壺	底径 15.6 胴部径35.7	-	内外 ヘラミガキか?	にぶい褐	並 長石・石英粒多	口縁部欠	
2	058-03	C地区 №204水田	壺	底径 6.4	-	内外 ヘラミガキ	外 淡褐 内 黒	やや粗 ~2cm長石・石英多	底部	外面黒斑有
3	058-01	水田覆土	甕	-	外 タテハケ・ヨコハケ 内 ヨコハケ	-	淡橙褐	やや密 長石・雲母粒含	口縁小片	
4	058-02	〃	高杯	脚上部径3.8	不明	不明	淡褐	やや粗 長石・石英粒多	口縁小片	
5	058-04	〃	〃	-	〃	〃	〃	〃	脚柱で1/2	
6	013-01	SD6	土師器 甕	口径 15.0 高さ 24.1	外 ヨコナデ 内 ヨコハケ・斜ハケ	外 斜ハケ 内 ナデ	明赤褐	やや密 ~5cm砂粒少	完形	粘土接合痕顯著 丸底
7	056-01	〃	〃	口径 17.0	内外 ヨコナデ・ナデ	内外 斜ハケ 内 ユビオサエ・板ナデ	にぶい褐	やや密 ~1cm砂粒	底部欠	
8	012-02	〃	〃	口径 13.2	〃	内外 ナデ	〃	やや粗 ~3cm長石・長石多	口縁1/4	
9	039-01	〃	〃	口径 17.0	〃	外 斜ハケ 内 ユビオサエ・板ナデ	淡褐	やや粗 ~3cm長石・雲母多	口縁4/5	
10	041-01	〃	〃	口径 17.6	〃	外 ハケ 内 ユビオサエ・ナデ	褐	やや粗 ~2cm長石等多	体下部欠	
11	014-03	〃	〃	底径 11.2	-	外 ナデ 内 ユビオサエ・ナデ	明赤褐	やや粗 ~5cm長石・雲母多	底部のみ完形	
12	055-01	〃	〃	口径 17.0	内外 ヨコナデ・ナデ	外 ハケ 内 ユビオサエ・ナデ	〃	やや密 ~1cm砂粒	底部欠	
13	067-05	〃	壺	胴部径19.5	-	外 粗いハケ 内 ハケ・ナデ	にぶい橙	粗 ~6cm長石等多	口縁部欠	丸底、黒斑有
14	014-04	〃	小形壺	口径 10.0 高さ 15.2	内外 ヨコナデ・ナデ	外 不明 内 ユビオサエ・ナデ	明赤橙	密 ~0.5cm砂粒小	完形	
15	058-06	〃	高杯	口径 15.8 高さ 12.5	〃	内外 ヨコナデ・ナデ	〃	やや密 ~2cm雲母等含	〃	
16	014-01	〃	〃	口径 15.4 高さ 12.1	外 ヨコナデ・ナデ・オサエ 内 ヨコナデ・ナデ	内外 ヨコナデ・ナデか	暗橙褐	密 長石微粒少	4/5	
17	066-06	〃	〃	口径 16.5	〃	内外 ヨコナデ・ナデ	橙	やや密 ~2cm長石・クサリ礫	口縁で1/2	
18	014-02	〃	〃	底径 10.0	〃	〃	にぶい橙	やや密 雲母等含	脚部完形	
19	012-03	〃	須恵器 甕	体最大径26 最下部径4.0	内外面:ロクロナデ	内外 ロクロナデ 胴部下外面:ロクロケズリ	青灰褐 色	密0.5mm の小石	体部ほぼ 完存	
20	047-03	SD8	須恵器 杯身	口径 10.9	内外面:ロクロナデ	内外 ロクロナデ	灰色	わずかに 砂含	口縁1/10	
21	066-01	SD8	須恵器 杯身	口径 11.2 器高 4.2	内外面 ロクロナデ	外 ロクロナデのちロクロケズリ 内 ロクロナデ	灰色	密	底部完存	
22	062-07	〃	須恵器並 杯身	口径 15.2	内外面:ロクロナデ	内外面:ロクロナデ	灰色	白色砂含	口縁片	
23	047-08	〃	須恵器 杯蓋	口径 14.8	〃	外 ロクロナデのちロクロケズリ 内 ロクロナデ	淡灰白 色	密	天井部 1/4	
24	047-01	〃	須恵器 甕	体最大径10.0 頸最下部径5.0	〃	外 ロクロナデのち底部ヘラタキ 内 ロクロナデ	灰色	密	体部1/3	
25	047-02	〃	須恵器 高杯	〃	内外 ロクロナデ	〃	灰色	密	脚上部の み完存	
26	058-07	自然流水路	石鎌	長幅 2.6 1.7	-	-	赤茶	-	完存	チャート製
27	030-01	〃 A地区 D-11	弥生土器 壺	口径10.4	内外 ヨコナデ・ミガキ	外 ミガキ 内 不明	灰白~淡橙	密 長石・クサリ礫微粒	口縁で1/2	
28	054-03	〃 U-12	〃	-	外 ヨコナデ・オサエ 内 ナデ	〃	褐	密	口縁小片	口縁部指頭による 凹凸
29	054-06	〃 ?	〃	-	外 ヨコナデ・刺突 内 ナデ	-	淡褐	密	口縁で1/6	
30	051-09	〃 ?	〃	口径 20.0	外 ヨコナデ・ナデ 内 ナデ	-	橙	やや密 ~3mm長石等少	口縁で1/6	
31	028-01	〃 K-10	〃	口径 14.8	〃	-	〃	密	口縁で1/6	口縁外端面に キザミ
32	044-01	〃 D-11	土師器 甕	口径17前後	内外 ヨコナデ	外 ハケ 内 ナデ	にぶい橙	やや粗 ~2mm長石・雲母多	口縁で1/8	
33	044-03	〃	〃	口径 18.4	内外 ヨコナデ・ナデ	外 タテハケ 内 ヨコハケ	にぶい黄橙	やや密 ~2mm長石・雲母	口縁で1/4	
34	033-06	〃 ?	〃	底径 6.4	-	外 オサエ・ナデ 内 オサエ・ナデ・ハケ	〃	やや粗 ~7mm小石含	脚部完存	
35	030-08	〃 F-12	〃	底径 7.4	-	内外 ヨコナデ・ナデ・オサエ	淡黄褐	密	底部1/2	
36	029-03	〃 C-11	器台	口径 9.6	外 ミガキか 内 ミガキ	外 ミガキか 内 不明	灰白~淡橙	やや密 長石・雲母微粒	2/3	円孔有

第13表 遺物(土器・陶器)観察表(1)

遺物 番号	登録番号	遺 構 (出土位置)	器 種	法 量 (cm)	調整技法の特徴		色 調	胎 土	残存度	備 考
					口縁部 (杯部)	体部 (脚部・底部)				
37	054-01	自然流水路 A地区 F-15	土師器 高杯	底径 11.0	—	外 タテミガキ 内 ヨコナデ・ナデ	淡黄橙	密 雲母微粒含	脚部1/2	円孔有
38	029-02	〃 E-15	〃	—	—	外 工具によるナデ? 内 ナデ	橙～明褐	やや密 ～1mm長石・雲母	脚部1/3	円孔有 工具あてた痕跡有
39	030-04	〃 B-11	〃	底径 12.8	—	不明	にぶい黄橙	密 ～3mm小石少	脚部1/5	円孔有
40	031-06	〃 A-12	〃	口径 12.5	外 ナデか? 内 ミガキ	—	橙	密 ～2mm長石・クサリ礫	口縁1/8	
41	030-05	〃 F12	須恵器 杯蓋	口径 10.2	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	灰色	密	口縁1/8	
42	030-05	〃 F12	須恵器 杯身		内外 ロクロナデ	外 ロクロナデのちロクロズリ 内 ロクロナデ	灰色	密	受部1/8	
43	019-02	〃 C11	須恵器 杯身	口径 11.2 器高 3.4	内外 ロクロナデ	外 ロクロナデのちロクロズリ 内 ロクロナデ	灰白色	並 0.5mm程砂含	口縁1/3	
44	032-03	〃 B10	須恵器 杯身	口径 7.6	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	灰色	密	受部1/5	
45	019-01	〃 西トレンチ	須恵器 脚付短頸壺	口径 11.6	外 ロクロナデのちロクロ ケズリ内 ロクロナデ		灰白色	並 0.5mm程砂含	杯部ほぼ 完存	焼成やや悪い
46	028-02	〃 K10	須恵器 甕	体部最大径8.8 最下部径3.3		外 ロクロナデ・ロクロズリ 内 ロクロナデ	灰色	密	体部1/3	焼成やや悪い
47	051-06	包含層 F-11	弥生土器 壺	口径10前後	外 不明 内 ヨコナデ	頸部 外 ハケ後ナデ 内 ナデ	にぶい黄橙	やや粗 ～2mm石英・長石・雲母	口縁1/8	口縁外端面に 櫛描篋文
48	051-03	〃 B-10	〃	—	不明	—	灰白～暗灰	やや粗 ～4mm石英・長石多		口縁小片口縁 端部刺突列
49	052-09	〃 E-10	土師器 壺	胴部径10.2	—	内外 ナデ	灰白	やや粗 ～2mm長石・雲母多	体部完形	黒斑有
50	057-03	〃 L-12	〃 壺	底径 10.0	—	外 ナデ 内 オサエ・ナデ	にぶい褐	やや粗 ～3mm長石・雲母等多	脚台部のみ	
51	042-10	〃 C-12	〃	底径 8.8	—	〃	灰白	やや密 ～2mm長石等	脚台部1/4	
52	034-01	〃 A-12	〃	底径 8.6	—	内外 オサエ・ナデ	暗赤褐	やや粗 ～2mm長石等含	脚台部1/3	
53	034-05	〃 E-10	〃 高杯	—	内外 ヨコナデ・ナデ	—	外淡橙 内こぶい黄褐	密	口縁小片	
54	043-10	〃 C地区	〃	底径 9.6	—	外 タテミガキ・ヨコナデ 内 ヨコナデ・ナデ	橙	密	底部1/4	
55	051-04	〃 B-10	〃	底径 10.0	—	外 ミガキか? 内 ナデ	にぶい黄橙	密 長石微粒含	底部1/4	円孔有
56	042-06	〃 C地区 X12	〃	底径 11.0	—	外 不明 内 ナデ・オサエ	橙	密	底部1/4	
57	036-02	〃 F-11	〃	—	—	内 ナデか?	にぶい黄橙	雲母微粒含	脚部1/3	円孔有
58	034-04	〃 B-15	〃	—	—	内外 ナデ	浅黄橙	やや密 雲母微粒含	脚部1/3	円孔有
59	057-02	〃 M-11	〃	底径 11.3	—	内外 ヨコナデ・ナデ	橙褐	密	底部1/4	
60	037-01	〃 M-11	〃	底径 11.8	—	外 不明 内 ヨコナデ・ナデ・オサエ	橙	やや密 長石・クサリ礫微粒	底部1/5	
61	066-02	〃 14トレンチ	須恵器 杯蓋	口径 13.4 器高 4.8	内外 ロクロナデ	外 ロクロナデのちロクロズリ 内 ロクロナデ	灰白色	並 0.5mm程砂含	口縁1/3	
62	036-04	〃 112	須恵器 杯身	受部径12.5	内外 ロクロナデ	外 ロクロナデのちロクロズリ 内 ロクロナデ	淡灰色	密 金雲母含	受部1/4	
63	037-04	〃 K10	須恵器 杯身	口径 10.4	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	灰褐色	密 0.5mm程砂含	1/8	
64	034-03	〃 N7	須恵器 高杯		内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	明灰色	並 0.5mm程砂含	脚体部の み完存	
65	037-03	〃 K11	須恵器 壺	口径 (17.0)	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	明灰色	並 0.5mm程砂含	口縁 1/12	
66	035-02	〃 K10	須恵器 壺	口径 (14.2)	内外 ロクロナデ	外 タタキ 内 同心円タタキ	暗灰色	密 微量砂含	頸部 1/6	
67	035-01	〃 B11	須恵器 器台			内外 ロクロナデ	暗灰色	並 0.5mm程砂含	体部片	
68	006-09	SD1	山茶碗	口径 15.8 底径 7.8 器高 4.8	内外 ヨコナデ	糸切り痕 モミガラ痕、中央ナデ	外 灰白 内 〃	並 ～2mm	完形	
69	006-01	〃	〃	口径 15.2 底径 6.3 器高 5.4	〃	糸切り痕ナデ消し(残る)	〃	やや密 ～3mm	完形	
70	006-07	〃	〃	底 7.4	〃	糸切り痕 高台とれかけ モミガラ痕 中央ナデ	外 灰白 内 灰黄	やや粗 ～6mm	底部完形	
71	006-08	〃	〃	底 7.2	〃	糸切り痕	外 灰白 内 〃	並	底部完形	
72	006-06	〃	〃	底 7.8	〃	糸切り痕	外 〃 内 〃	やや粗 ～2mm	底部完形	

第14表 遺物(土器・陶器)観察表(2)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
73	006-02	SD1	山茶碗	□ 底 15.2 高 6.8 5.5	〃	モミガラ痕	外 灰 内 〃	並	ほぼ完形	
74	006-04	〃	〃	□ 底 15.2 高 7.7 5.6	〃	糸切りナデ消し	外灰白 内 〃	並 ~2mm	ほぼ完形	
75	006-05	〃	〃	□ 底 16.1 高 6.4 5.9	〃	糸切りナデ消し モミガラ痕	外 〃 内 〃	やや粗 ~10mm	完形	
76	006-03	〃	〃	□ 底 16.2 高 7.6 5.6	〃	糸切り痕ナデ消し(残る)	外 灰 内 灰	並 ~3mm	ほぼ完形	
77	050-02	自然流水路	土師器 小皿	□ 高 8.0 2.5	内外 ヨコナデ	ユビオサエ	外 〃 内 〃	並	口縁部 1/5	口縁部にスス 灯明皿?
78	046-02	〃	〃	□ 高 7.8 1.1	磨滅	ユビオサエ?磨滅	外浅黄橙 内 〃	並	〃	
79	049-06	〃	〃	□ 高 8.4 1.6	内外 ヨコナデ	ユビオサエ 内面中央ナデ	外 橙 内 〃	やや密	完形	口縁端部に スス灯明皿?
80	045-10	〃	〃	□ 高 9.2 1.8	〃	外 ユビオサエ 内 ナデ	外灰白 内 〃	並 ~3mm	1/2	〃
81	049-07	〃	〃	□ 高 10.4 1.4	〃	〃	外明褐灰 内 〃	やや密	2/3	〃
82	051-08	〃	皿	□ 高 11.6 2.3	〃	外 ユビオサエ 内 ユビオサエのちナデ	外灰白 内 〃	〃	1/5	
83	050-04	〃	〃	□ 高 13.2 2.5	〃	外 ユビオサエ 内 ナデ?磨滅	外浅黄橙 内 〃	並	1/6	
84	046-03	〃	羽釜	□ 21.0	〃	-	外 橙 内 〃	並	口縁部 1/10未満	
85	044-04	〃	〃	□ 21.6	端部のみヨコナデ ユビオサエ	外 ヨコハケ 内	外灰白 内 〃	やや粗 ~3mm	口縁部 1/10	
86	044-02	〃	〃	□ 24.0	内外 ヨコナデ	-	外淡黄 内灰白	並	口縁部 1/10未満	
87	031-04	〃	〃	□ 17.0	端部・内面ヨコナデ 外面ユビオサエ	-	外淡赤橙 内 〃	並 ~1.5mm	口縁部 1/8	
88	030-06	〃	鍋	□ 21.8	内外 ヨコナデ	-	外灰白 内 〃	やや粗 ~2mm	口縁部 1/10	
89	032-01	〃	〃	□ 26.0	〃	外 ヨコハケ 内 ユビオサエ	外淡黄並 内 〃	並 ~1.5mm	口縁部 1/10未満	
90	046-05	〃	〃	□ 30.2?	〃	-	外浅黄橙 内灰白	やや密	小片	
91	054-05	〃	灰釉陶器 碗	底9.2	-	外 ヘラケズリ、糸切りナデ消し 内ヨコナデ	外灰白 内 〃	並	高台部1/4	
92	054-07	〃 (灰砂利)	〃	底6.9	-	外 ヨコナデ?糸切り痕残る 内 ヨコナデ	外 〃 内 〃	〃	〃	
93	045-08	〃 (流水路)	山皿	□ 底 9.0 高 4.0 2.7	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外 〃 内灰オリブ	粗 ~4mm	1/3	内面全体に 自然釉
94	045-09	〃	〃	□ 底 9.6 高 4.4 2.3	〃	〃	外灰白 内 〃	並	2/3	焼成不良
95	050-08	A地区自然流水路	〃	□ 底 7.2 高 3.3 2.4	〃	〃	外 〃 内 〃	やや密	1/4	
96	050-07	〃	〃	□ 底 7.8 高 4.4 2.2	〃	〃	外 〃 内 〃	並	1/6	
97	045-07	〃 流水路	〃	□ 底 8.6 高 4.6 2.3	〃	〃	外 〃 内 〃	〃	ほぼ完形	
98	051-07	A 自然流水路 (灰砂利?)	山皿	□ 底 8.0 高 4.2 1.7	内外 ヨコナデ	糸切り痕 内面 中央ナデ	外灰白 内 〃	並	3/5	
99	045-06	〃 流水路	〃	□ 底 9.0 高 4.4 1.6	〃	糸切り痕	外灰 内 〃	並	完形	
100	045-01	〃	山茶碗	□ 底 17.2 高 7.4 5.7	〃	糸切り痕ナデ消し(残る) モミガラ痕	外灰白 内 〃	やや密	底部完形 口縁部一部	
101	030-03	〃 自然流水路	〃	□ 底 17.2 高 7.2 5.6	〃	〃 内面 中央ナデ	外 〃 内 〃	やや粗 ~2mm	1/2	
102	045-02	〃 流水路	〃	□ 底 15.4 高 7.2 4.5	〃	糸切り痕 モミガラ痕	外 〃 内 〃	並 ~3mm	1/3	口縁部内面に 重ね焼きのあと
103	049-05	〃 砂溝	〃	□ 底 16.2 高 8.4 4.5	〃	糸切り痕ナデ消し(残る)	外 〃 内 〃	並 ~2mm	2/3	
104	049-08	〃	〃	□ 底 17.2 高 9.0 5.1	〃	糸切り痕	外 〃 内 〃	並 ~2mm	底部完形 - 口縁部1/4	底部外面に 墨書
105	049-04	〃	〃	□ 底 15.6 高 7.6 5.0	〃	糸切り痕ナデ消し モミガラ痕	外 〃 内 〃	並 ~2mm	2/3	
106	045-03	〃 流水路	〃	□ 底 16.8 高 6.6 5.5	〃	糸切り痕 モミガラ痕内面中央ナデ	外 〃 内 〃	並 ~5mm	1/3	
107	049-0	〃 自然流水路	〃	□ 底 15.2 高 7.4 5.4	〃	糸切り痕 モミガラ痕内面中央ナデ	外 〃 内 〃	やや粗 ~5mm	1/2	底部内面に重 ね焼きのあと
108	045-04	〃 流水路	〃	□ 底 12.8 高 5.8 4.5	〃	糸切り痕 内面 中央ナデ	外 〃 内 〃	粗 ~5mm	ほぼ完形	

第15表 遺物(土器・陶器)観察表(3)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
109	030-02	A地区 自然流水路	◇	底 7.8	—	糸切り痕 モミガラ痕少し	外 〃 内 〃	並	底部完形	
110	031-03	◇	◇	底 6.8	—	糸切り痕 内面中央ナデ	外 〃 内 〃	やや粗 ~10mm	底部1/2	
111	031-01	◇	◇	底 7.0	—	糸切り痕?	外 〃 内 〃	密	◇	磨滅
112	029-01	◇	◇	底 8.3	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外 〃 内 〃	並 ~1mm	底部1/2	
113	031-02	◇	◇	底 8.0	—	糸切り痕	外 〃 内 〃	密	底部1/4	
114	029-04	◇	◇	底 7.2	—	糸切り痕 高台とれかけ	外 〃 内にぶい橙	やや粗 ~2mm	底部完形	
115	009-05	◇	◇	底 6.6	—	糸切り痕 モミガラ痕	外灰白 内 〃	やや粗 ~3mm	底部完形	
116	033-05	◇	◇	底 8.2	—	糸切り痕	外 〃 内 〃	やや粗	底部2/3	磨滅
117	009-07	◇	◇	底 7.2	—	糸切り痕	外 〃 内 〃	並	底部ほぼ完形	
118	033-03	◇	◇	底 6.7	内外 ヨコナデ	糸切り痕 モミガラ痕少し	外 〃 内 〃	並	底部完形	
119	032-04	◇	◇	底 7.8	—	糸切り痕 モミガラ痕少し 高台とれかけ	外 〃 内 〃	やや粗 ~3mm	底部1/4	
120	032-05	◇	◇	底 7.4	—	糸切り痕 高台とれかけ	外 〃 内 〃	並 ~3mm	底部1/2	
121	050-09	◇	陶器 鉢	口 29.4?	内外 ヨコナデ	—	内外暗褐	並	口縁部小片	
122	045-05	◇ 流水路	陶器 控鉢	底 11.4	—	モミガラ痕少し	外灰白 内 〃	並 ~3mm	高台部1/5	
123	033-02	◇	白磁 碗	口 15.4	内面上部に沈線一条	—	内外施釉 灰白	密		外面に線刻
124	051-01	◇ (オリーフ砂)	青磁	口 7.4	—	—	内外施釉 オリーフ灰	◇		
125	051-06	◇	青磁 碗	口 15.8?	—	—	内外施釉 オリーフ灰	◇		外面に蓮弁文
127	005-05	SD9	須恵器 高杯?		—	内外 ロクロナデ	灰白色	密	1/10	
128	059-06	◇	土師器 皿	口 18.0 高 3.0	内外 ヨコナデ	外 ユビオサエ 内 ナデ	外 橙 内 〃	並	ほぼ完形	
129	059-07	◇	◇	口 18.2 高 3.2	◇	◇	外 〃 内 〃	◇	2/3	
130	020-01	◇	山茶碗	口 16.7 底 7.7 高 5.2	◇	糸切り痕ナデ消し モミガラ痕少し	外灰白 内 〃	◇ ~2mm	完形	
131	020-02	◇	◇	底 7.2	◇	糸切り痕ナデ消し	外 〃 内 〃	密	底部小片	
132	003-02	SD34	土師器 小皿	口 9.8 高 2.1	◇	外 ユビオサエ 内 ナデ	外にぶい橙 内 〃	並	2/3	
133	001-07	◇	◇	口 9.6 高 1.8	◇	◇	外淡赤橙 内 〃	◇	◇	磨滅
134	001-09	◇	◇	口 11.6 高 1.7	◇	◇	外浅黄橙 内 〃	◇	小片	磨滅
135	004-07	◇	◇ 皿	口 14.7	◇	—	外灰白 内 〃	◇ ~2mm	◇	
136	004-10	◇	◇ 杯	口 13.0 高 3.5	—	外 ユビオサエ?	外 〃 内 〃	◇	小片	磨滅
137	001-08	◇	◇	口 14.8	◇	—	外 〃 内 〃	やや密	口縁部1/5	ロクロ土師器
138	004-01	◇	◇	口 13.2 底 6.2 高 3.4	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外淡橙 内 〃	並	1/5	◇
139	001-10	◇	◇	口 14.0 底 6.6 高 3.2	◇	—	外浅黄橙 内 〃	◇	小片	◇
140	004-09	◇	◇ 台付皿?	底 5.8	—	ヨコナデ 糸切り痕	灰白	◇	台部のみ	◇
141	002-01	◇	◇ 台付皿?	底 7.2	—	◇	浅黄橙	やや粗	◇	◇
142	005-01	◇	◇ 脚付?	底 8.4	—	ヨコナデ	灰白	並	脚部のみ	◇
143	005-03	◇	◇ 花瓶	底 7.3	—	◇ 糸切り痕	◇	やや粗	台部のみ	◇
144	001-01	◇	◇ 鍋	口 18.0	内外 ヨコナデ 端部オリコミ	外 ユビオサエ 内 ナデ?	外淡橙 内灰白	◇	口縁部1/5	
145	003-07	◇	山皿	口 10.8 底 5.8 高 3.8	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外灰白 内 〃	密	口縁部1/4 高台部2/5	

第16表 遺物(土器・陶器)観察表(4)

遺物 番号	登録番号	遺 構 (出土位置)	器 種	法 量 (cm)	調整技法の特徴		色 調	胎 土	残存度	備 考
					口縁部 (杯部)	体部 (脚部・底部)				
146	001-03	SD34	山皿	口 底 9.2 高 4.4 2.5	〃	糸切り痕	〃	やや密 ~2mm	完形	
147	004-04	〃	〃	口 底 8.2 高 4.0 2.5	〃	糸切り痕ナデ消し 高台部砂圧痕	〃	やや密	口縁部1/4 高台部2/3	
148	003-10	〃	〃	口 底 8.4 高 5.0 1.9	〃	糸切り痕	外 灰 内 〃	やや密	1/2	
149	002-05	〃	椀	底 7.4	—	糸切り痕	外灰白 内 〃	やや密	底部完形	
150	002-04	〃	〃	底 7.2	—	〃	〃	〃	底部1/2	
151	002-08	〃	〃	底 6.8	—	〃	〃	並 ~3mm	〃	
152	003-08	〃	〃	底 7.8	—	〃	〃	〃	底部完形	
153	001-04	〃	〃	底 7.9	—	—	〃	やや密	底部1/4	
154	003-05	〃	〃	底 7.0	—	糸切り痕	〃	密 ~1mm	底部完形	
155	002-02	〃	〃	口 底 16.8 高 7.8 5.7		糸切り痕 モミガラ痕少し	〃	やや密 ~11mm	口縁部3/5 高台部完形	
156	001-02	〃	〃	口 底 16.0 高 7.2 5.3	内外 ヨコナデ	糸切り痕ナデ消し モミガラ痕少し	外灰白 内 〃	並 ~1mm	3/5	
157	063-06	〃	〃	口 底 16.4 高 7.6 5.2	〃	糸切り痕	〃	密	口縁部1/5 高台部3/4	
158	003-06	〃	〃	底 7.0	—	糸切り痕	外灰白 内 〃	密	底部完形	
159	002-06	〃	〃	底 7.6	—	〃	〃	並 ~1mm	底部1/2	
160	001-06	〃	〃	口 底 16.6 高 7.2 5.1	内外 ヨコナデ	—	〃	並	1/2	
161	002-09	〃	〃	口 底 16.4 高 7.8 5.1	〃	糸切り痕ナデ消し	〃	やや密	2/3	
162	063-07	〃	〃	口 底 16.4 高 7.2 5.1	内外 ヨコナデ	糸切り痕ナデ消し (残る)	外灰白 内 〃	並	ほぼ完形	
163	003-01	〃	〃	口 底 17.0 高 8.2 4.9	〃	糸切り痕	外 灰 内 〃	〃	完形	
164	004-06	〃	〃	口 底 17.0 高 8.0 5.1	〃	糸切り痕 モミガラ痕	外灰白 内 〃	密 ~1mm	口縁部1/5 高台部1/2	
165	003-09	〃	〃	口 底 18.0 高 9.5 5.2	内外 ヨコナデ	糸切り痕ナデ消し モミガラ痕少し	外灰白 内 〃	やや粗 ~2mm	1/5	
166	002-03	〃	〃	底 8.4	—	〃	〃	〃	底部完形	底部内面に重 ね焼きのあと
167	001-05	〃	〃	底 8.2	—	糸切り痕	〃	〃	底部1/2	
168	003-03	〃	〃	底 8.1	—	〃	〃	並	底部完形	
169	002-10	〃	〃	底 8.2	内外 ヨコナデ	〃	〃	〃 ~8mm	〃	
170	004-05	〃	灰釉陶器 壺?	底 13.5	—	外 ヘラケズリ 内 ナデ	〃	並	底部小片	
171	003-04	〃	〃	底 10.9	—	〃 モミガラ痕	〃	〃	底部完形	
172	004-02	〃	陶器 甕?	底 13.8?	—	あらいヨコナデ	〃	〃	底部小片	
173	022-04	SK14	土師器 鍋	口 19.0	内外 ヨコナデ 端部 オリコミ	—	外灰白 内黒褐	並	口縁部 小片	
174	022-01	〃	山茶椀	口 16.4	内外 ヨコナデ	—	外灰白 内 〃	〃	〃	
175	061-06	SK27	須恵器 杯蓋	口 12.7	内外 ロクロナデ	外 ロクロナデのちロクロケズリ 内 ロクロナデ	明灰白	並 0.5mm程砂含	1/3	
176	061-07	〃	〃 広口壺	口 19.7	内外 ロクロナデ	内外 ロクロナデ	灰白色	並 0.5mm程砂含	1/12	
177	052-02	〃	土師器 小皿	口 底 7.9 高 6.7 1.6	内外 ヨコナデ	糸切り?	外灰白 内 〃	並	小片	ロクロ土師器 磨滅
178	061-05	〃	〃	口 底 9.2 高 5.6 2.0	〃	糸切り痕	外浅黄橙 内 〃	〃	〃	〃
179	061-04	〃	〃	口 高 11.6 2.3?	〃	ナデ?	外にぶい橙 内 〃	〃	〃	
180	061-08	〃	陶器 皿	口 10.6	〃	—	灰褐色釉	〃	1/8	
181	023-03	〃	土師器 花瓶	底 5.5	—	糸切り痕	浅黄橙	並	台部のみ	ロクロ土師器

第17表 遺物 (土器・陶器) 観察表 (5)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
183	023-04	〃	土師器 鍋	口 25.2	内外 ヨコナデ		浅黄橙	やや粗 ~2mm	口縁部1/5	磨滅
184	061-03	〃	山茶碗	口 16.4	〃	—	外灰白 内 〃	並	口縁部小片	
185	061-02	〃	〃	口 16.4	〃	—	〃	〃	〃	
186	023-01	〃	〃	口 16.0 底 8.4 高 4.9	〃	糸切り痕ナデ消し(残る)	外灰白 内 〃	やや密 ~3mm	口縁部2/3 高台部完形	
187	023-02	〃	〃	口 15.6 底 6.6 高 5.3	内外 ヨコナデ	糸切り痕 モミガラ痕	外灰白 内 〃	並 ~2mm	1/5	
188	018-03	包含層 A地区	須恵器 短頸壺	口 13.6	〃	—	外 灰 内 〃	並 ~2mm	口縁部1/5	
189	034-02	〃	緑釉陶器 皿	底 7.1						
190	024-05	〃	〃	底 6.9	—	糸切り痕、全面施釉 トチ痕3点、モミガラ痕	釉濃緑 素地灰白	並	底部完形	
191	024-06	〃	〃	底 7.1	—	糸切り痕ナデ消し、 高台内軸なし	釉濃緑 素地浅黄橙	並	底部1/4	
192	026-08	〃	土師器 小皿	口 10.0 高 1.7?	内外 ヨコナデ	外 ユビオサエ、ナデ? 内 ナデ	外灰白 内 〃	並	小片	
193	026-09	〃	〃	口 11.4 高 1.8?	〃	—	〃	〃	〃	
194	066-04	〃	〃	口 12.3 高 2.3?	〃	外 ユビオサエ 内 ユビオサエ、ナデ	〃	〃	1/5	
195	025-03	〃	〃 鍋	口 24.0?	〃 端部オリコミ	—	外灰褐 内におい橙	やや粗 ~2mm	小片	
196	066-03	〃	山皿	口 9.8 高 3.3	内外 ヨコナデ	糸切り痕 モミガラ痕	外灰白 内 〃	並	完形	
197	026-05	〃	〃	口 9.0 底 3.1 高 3.1	〃	〃 内面中央ナデ	〃	〃	1/3	
198	025-04	〃	〃	口 8.8 底 4.9 高 2.0	〃	糸切り痕 内面中央ナデ	〃	〃	1/2	
199	060-08	〃	〃	口 8.0 底 5.2 高 1.7	〃	〃	〃	やや粗 ~3mm	ほぼ完形	
200	067-02	〃	山茶碗	口 15.8 底 7.5 高 5.2	〃	糸切り痕 モミガラ痕少し	〃	並 ~2mm	〃	
201	066-05	〃	〃	口 16.8 底 8.3 高 5.5	〃	糸切り痕 モミガラ痕	〃	やや粗 ~3mm	〃	
202	036-01	〃 B地区	須恵器 杯身	底 8.4		内外 ロクロナデ	灰白色	密	底部1/10	
203	025-01	〃	土師器 小皿	口 9.6 高 2.1?	内外 ヨコナデ	外 ユビオサエ、ナデ 内 ナデ	外 橙 内 〃	並	小片	
204	016-07	〃	〃	口 10.4 高 2.0	〃	〃	外におい橙 内 〃	〃	ほぼ完形	
205	015-06	〃	〃	口 12.0 高 2.3?	〃	—	外浅黄橙 内 〃	〃	小片	磨滅
206	052-05	〃	〃 皿	口 13.9 高 2.9	〃	内外 ナデ?	外灰白 内 〃	〃	1/5	磨滅
207	015-08	〃	〃 小皿	口 9.8 底 5.0 高 2.0	〃	糸切り痕	外におい橙 内浅黄橙	やや粗	1/4	ロクロ土師器
208	016-08	〃	〃	口 9.6 底 4.8 高 2.0	〃	〃	外灰白 内 〃	並	ほぼ完形	〃
209	015-07	〃	土師器 杯?	底 6.0	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外 橙 内 〃	やや粗	1/4	ロクロ土師器
210	017-06	〃	瓦器 碗	口 15.8	ハラミガキ	—	外 黒 内 〃	並	小片	口縁部内面に沈線一条
211	024-04	〃	緑釉陶器 皿	底 5.8	—	ヨコナデ	釉オリーブ 素地灰白	〃	底部小片	全面施釉
212	024-03	〃	〃	底 6.1	—	糸切り痕ナデ消し?	釉オリーブ 素地浅黄橙	〃	〃	高台内軸なし
213	024-07	〃	〃 段皿?	底 7.0	—	糸切り痕ナデ消し	釉オリーブ 素地灰白	〃	〃	全面施釉
214	024-02	〃	白磁 碗	口 16.4	内外 ヨコナデ	—	外灰白 内 〃	密	口縁部小片	
215	024-01	〃	〃	口 15.8	〃	—	〃	やや粗	〃	
216	015-09	〃	灰釉陶器 碗	底 7.2	—	糸切り痕ナデ消し 内面中央ナデ	〃	粗	底部小片	底部内面に直接 重ね焼きのあと
217	015-10	〃	〃	底 7.5	—	糸切り痕ナデ消し、 中央ヘラケズリ?	〃	密	底部1/2	
218	017-05	〃	山皿	口 9.8 底 5.1 高 2.9	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外灰白 内 灰	並 ~5mm	ほぼ完形	内面全体に 自然釉

第18表 遺物(土器・陶器)観察表(6)

遺物 番号	登録番号	遺 構 (出土位置)	器 種	法 量 (cm)	調整技法の特徴		色 調	胎 土	残存度	備 考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
219	015-02	包含層 B地区	◇	口底高 11.0 5.6 3.2	内外 ヨコナデ	糸切り痕	外 灰 内 ◇	並 ~3mm	◇	
220	025-02	◇	◇	口底高 8.6 3.4 2.0	◇	◇ 内面中央ナデ	外灰白 内 ◇	やや粗 ~3mm	◇	
221	067-03	◇	◇	口底高 8.0 4.7 1.7	◇	◇	◇	◇	完形	
222	060-04	◇	土師器 鍋?	口 20.4	◇	外 ユビオサエ? 内 ナデ?	外浅黄橙 内 ◇	やや粗 ~4mm	小片	磨減
223	016-05	◇	灰釉陶器 壺?	底 16.0	—	外 ヘラケズリ 内 ナデ	外灰白 内 ◇	並	底部1/3	
224	016-04	◇	山茶碗	底 8.6	—	糸切り痕ナデ消し(残る) モミガラ痕少し	◇	◇	底部完形	
225	016-09	◇	◇	底 8.6	—	糸切り痕	◇	やや密	底部1/4	
226	016-10	◇	◇	底 7.6	—	糸切り痕ナデ消し	◇	並 ~2mm	底部完形	
227	017-03	◇	◇	底 8.0	—	糸切り痕	◇	やや粗 ~3mm	底部1/3	
228	015-01	◇	◇	口底高 16.2 7.8 5.7	内外 ヨコナデ	糸切り痕ナデ消し(残る)	◇	並 ~8mm	2/3	底部外面に 墨書
229	015-05	◇	◇	底 8.5	◇	◇	◇	◇ ~3mm	3/4	底部内面に直接 重ね焼きのあと
230	015-04	◇	◇	口底高 15.6 7.4 5.2	◇	糸切り痕	◇	やや密 ~3mm	1/4	
231	037-05	◇	◇	口底高 16.6 8.6 5.5	◇	◇ モミガラ痕	◇	粗 ~6mm	ほぼ完形	
232	053-05	◇	◇	底 6.8	—	糸切り痕ナデ消し(残る) モミガラ痕	◇	粗 ~3mm	底部2/3	
233	016-01	◇	◇	底mm 6.3	—	◇ 内面中央ナデ 高台とれかけ	◇	粗 ~4mm	底部1/2	
234	026-06	◇	◇	底 5.2	—	糸切り痕 内面中央ナデ	◇	粗 ~4mm	底部1/4	
235	042-05	◇ C地区	灰釉陶器 碗	口 18.0	内 外ヨコナデ	—	外 灰 内 ◇	並	口縁部小片	口縁部外面に 自然釉 (灰オリープ)
236	043-06	◇	◇	口 16.4	◇	—	外灰白 内 ◇	◇	◇	口縁部内面にハ ケ塗り釉(灰白)
237	042-03	◇	◇	口 16.6	◇	—	◇	◇	◇	
238	043-01	◇	◇	底 8.7	—	外 回転ヘラケズリ 内 ヨコナデ	◇	やや密	底部完形	
239	042-04	◇	山茶碗	口 15.4	内外 ヨコナデ	—	◇	やや粗	口縁部 小片	
240	043-07	◇	◇	口 15.6	◇	—	◇	並 ~1mm	◇	
241	042-08	◇	◇	口 15.6	◇	—	◇	やや粗	◇	
242	042-02	◇	◇	底 7.8	—	糸切り痕	◇	密	底部1/4	底部内面に直接 重ね焼きのあと
243	043-02	◇	◇	底 7.2	—	◇	◇	やや密	◇	
244	043-03	◇	◇	底 6.9	—	◇	外 灰 内 ◇	粗 ~5mm	底部小片	
245	060-07	◇ D地区	山皿	口底高 11.0 5.0 3.1	内外 ヨコナデ	糸切り痕ナデ消し残る	外灰白 内 ◇	並 ~5mm	1/3	
246	060-06	◇	弥生 甕	口 24.5	タテハケのち ヘラ描沈線	—	暗褐色	並 雲母含む	1/12	
247	063-05	SD35	山茶碗	口径 16.5 高台径 8.8 高さ 5.6		外面糸切り痕、スタ痕 高台モミガラ痕	灰白	並	ほぼ完形	
248	063-04	◇	◇	口径 15.1 高台径 6.4 高さ 4.9		糸切り後ナデ消し	白灰	密	2/3	
249	063-01	◇	◇	口径 14.9 高台径 6.3 高さ 5.0		外面糸切り後ナデ 内面自然釉	灰白	黒っぽい鉱物 やや密	3/4	
250	063-02	◇	◇	口径 15.4 高台径 6.8 高さ 5.1		外面糸切り痕 高台モミガラ痕 内面鉄分付着仕上げナデ	灰白	粗 8mmの小石	口縁部完形 高台部1/3	
251	063-03	◇	◇	口径 14.6 高台径 6.2 高さ 5.2		外面糸切り痕 内面自然釉	灰白	密	2/3	高台一部残存
252	010-03	◇	常滑焼甕	底径 12.2		外面ケズリ 無釉	暗赤褐		底部1/8	15c代
253	010-01	◇	瀬戸陶器 天目茶碗	口径 12	外面の口縁~体部下半 と内面全体に施釉	腰部ケズリ	胎土:灰白 釉:漆黒	並	口縁1/4	17c後葉
254	010-02	◇	唐津陶器 三鳥手	高台径 7.4		ケズリ出し高台 白泥釉ハケ塗り			底部1/2	18c?鉢?盤?

第19表 遺物(土器・陶器)観察表(7)

遺物 番号	登録番号	遺 構 (出土位置)	器 種	法 量 (cm)	調整技法の特徴		色 調	胎 土	残存度	備 考
					口縁部 (杯部)	体部 (脚部・底部)				
255	010-06	SD35	瀬戸磁器 染付碗	高台径4.1		ケズリ出し高台 高台内にも釉がかかる	胎土:白 釉:青白	密	底部1/4	19c
256	008-03	旧美濃屋川	瀬戸美濃陶器 行平鍋蓋	つまみ部径3.8		全体に施釉	胎土:灰白 釉:淡灰緑	並	つまみ部周辺 残存	19c
257	008-04	〃	瀬戸美濃陶器 蓋	最大径8.6	カエリ部ハリツケ	釉は側縁上方まで	胎土:灰白 釉:乳白	密	つまみ部を 欠く	19c
258	009-03	〃	瀬戸陶器 天目茶碗	高台径5.0		ケズリ出し高台 鉄釉 外面は腰部以下無釉	胎土:灰白 釉:漆黑	やや粗	底部完形	17c2/4
259	048-06	〃	瀬戸美濃陶器 碗	口径 9.8	ロクロナデ 灰釉		胎土: 明緑・灰 釉:灰白	やや密	口縁1/4	18c
260	008-01	〃	瀬戸陶器 広東碗	口径 11.0 高台径5.5 高さ 6.0	呉須絵 (外) 竹林文様 (内) 同心円、五弁花	高台端部は無釉	胎土:灰白 釉:灰白	やや粗	ほぼ完形	19c中頃
261	048-02	〃	瀬戸陶器 碗	口径 9.6 高台径2.2 高さ 5.6	貫入あり	高台部周辺無釉	胎土:淡黄 釉:灰白	やや密	1/3	19c中頃
262	007-06	〃	美濃陶器 広東碗	高台径4.8	呉須絵 (外) 丸文 (内) 六弁花	高台端部は無釉	胎土:灰白 釉:灰白	やや密	底部完形	19c 炆器質
263	048-04	〃	瀬戸陶器染付 箱形湯呑	高台径4.0	ロクロナデ 菊花文、武田菱文	腰部ケズリ	胎土:灰白 釉:明緑・灰	並	〃	19c 文:あい色
264	007-03	〃	肥前磁器 染付碗	口径 11.8 高台径5.0 高さ 6.6	呉須絵 丸文	見込に コンニャク判	胎土:灰白 釉:灰白	密	1/3	18c 文:灰青色
265	007-04	〃	〃	高台径4.4	呉須絵 文は不明	見込に コンニャク判	胎土:灰白 釉:明緑灰	密	底部完形	18c 文:暗青色
266	008-02	〃	〃	高台径4.2		見込に コンニャク判	胎土:灰白 釉:明緑灰	密	〃	18c 文:青緑色
267	048-05	〃	〃	口径 9.6 高台径4.0 高さ 5.2	外面 呉須絵 梅花文		胎土:灰白 釉:明緑灰	密	2/5	18~19c
268	007-05	〃	〃	高台径4.4		呉須絵文は不明	胎土:明青灰 釉:明緑灰	密	底部完形	18c
269	048-03	〃	〃	高台径3.6		外面青磁釉が厚くかかる	胎土:灰白 釉:外:灰緑色 内:灰白	やや密	〃	18~19c
270	007-01	〃	阿漕焼陶器 碗	口径 11.6 高台径4.6 高さ 4.9	腰部ケズリ	付高台 外面腰部以下無釉	胎土:赤橙 釉:暗赤・灰	〃	1/3	19c
271	007-02	〃	阿漕焼陶器 徳利	底径 6.6		高台部ケズリ 底部無釉	胎土:橙 釉:外:灰 釉内:黄橙	〃	底部 ほぼ完形	19c 文様:オリ・黒
272	007-08	〃	〃	口径 3.5 底径 6.4 高さ 16.8	ロクロナデ	高台部ケズリ 高台部に「阿漕」印 底部無釉	胎土:オリ・灰 釉:オリ・黄	並	完形	19c 文様:黒
273	008-06	〃	瀬戸美濃陶器 香炉	底径 5.4		底部ケズリ灰釉 底部無釉	胎土:灰白 釉:灰白	並	底部1/2	18~19c
274	009-04	〃	肥前磁器 染付皿	口径 14.4	外面唐草文 内面草花文		胎土:白 釉:乳白	密	1/4	19c 文:暗青色
275	008-05	〃	阿漕焼陶器 水指	口径 18.6	口縁内側、カエリ部無釉 ロクロ成形		胎土:淡黄 釉:明黄・樹 乳白	やや密	口縁1/7	19c
276	009-02	〃	瀬戸陶器 挿鉢		外面ケズリ 内面ヨコナデ	播目12条/2.8cm 錆釉	胎土:灰白 釉:暗赤褐	やや粗	口縁 1/10以下	19c
277	025-05	〃	常滑 大甕		口縁ヨコナデ		灰白	粗	口縁 1/10以下	18~19c
278	008-07	〃	瀬戸陶器 甕	口径 21.0	ロクロ成形 全体に鉄釉		胎土:灰白 釉:暗赤褐	並	口縁1/12	19c
279	007-07	〃	瀬戸美濃陶器 挿鉢	口径 35.8	ヨコナデ錆釉 内面に大印 (?)		胎土:浅黄 釉:暗赤褐	並	口縁1/12	19c
280	009-06	〃	瀬戸美濃陶器 挿鉢	底径 12.0		外面ケズリ底部糸切り痕 播目9条/2cm	胎土:灰白 釉:暗赤褐	やや粗	底部1/2	18c以降
281	008-08	〃	瓦質 短頸壺	口径 13.8	ヨコナデ	内面ユビオサエ	表面:銀灰 断面:灰白	並	口縁1/4	近世
282	009-01	〃	瓦質 焙烙?	口径 32.2	ヨコナデ	体部ナデ 頸部ハリツケ	表面:銀灰 断面:灰白	並	口縁1/4	〃
283	049-02	自然流水路	瀬戸美濃陶器 皿	口径 11.2	灰釉		胎土:明緑灰 釉:灰・オリ	やや密	1/8	17c
284	032-06	〃	白磁? 皿	底径 4.7		貫入あり 外面、底部は無釉	胎土:灰白 釉:乳白	密	底部完形	時期不明
285	033-01	〃	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径 10.4 底径 5.1 高さ 2.2		ロクロナデ・底部ヘラケズリ 全体に錆釉	胎土:灰白 釉:暗赤褐	やや密	底部完形 口縁1/5	18c後半
286	049-01	〃	土師質 湯釜			外面ハケ つり輪部分穿孔	明赤褐	やや密	把手部のみ	江戸
287	046-01	〃	土師質 捏鉢	底部 13.0		ヨコナデ 粘土を練いた部分には 板状工具でタテナデ 内面滑らか (捏ねたあと)	灰白	粗3mm以下 の石英を含む	底部1/4	15c末~16c初 地元産?
288	046-04	〃	土師質 鉢	口径 26.8		外面ロクロナデ	浅黄橙	粗0.2~1.0mm の石英を含む	口縁1/8	〃
289	048-08	包含層 A地区	瀬戸美濃陶器 碗	高台径4.7		ハリツケ高台 腰部以下無釉	胎土:灰白 釉:明緑・灰	やや密	底部のみ	17c中頃
290	048-07	〃	〃	〃 4.4		〃 〃 腰部ケズリ	胎土:灰白 釉:明緑・灰	やや粗	底部2/3	18c

第20表 遺物 (土器・陶器・磁器) 観察表 (8)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
291	048-01	包含層 A地区	瀬戸美濃陶器 椀	高台径3.6		腰部以下無釉	胎土:灰白 釉:灰白	並	底部のみ	18c後半
292	026-02	包含層 B地区	瀬戸陶器 椀	口径 9.0 高台径4.6 高さ 6.0	ヨコナデ	ケズリ出し高台。腰部以下無釉 内面一部茶褐色に変色	胎土:灰白 釉:クリーム	並	2/3	19c前半
293	060-02	包含層 A地区	阿漕陶器 椀	口径 13.5 高台径6.2 高さ 6.0		ハリツケ高台 高台端部のみ無釉	胎土:オリブ 釉:灰	並	1/3	19c
294	021-05	注記なし	磁器 皿	口径 9.7		外面貫入あり 白色の釉	胎土:灰白 釉:白色	密	口縁部 1/10	時期不明
295	043-04	包含層 C地区	磁器 皿	口径 11.4	ヨコナデ 青磁釉		胎土:灰白 釉:灰オリブ	密	口縁部 1/3	〃
296	043-05	〃	〃	底径 4.6		外面ケズリ青磁釉 底部と体部下半は無釉	胎土:灰白 釉:灰オリブ	密	底部2/3	〃
297	051-02	包含層 A地区	中国産?磁器 染付皿	高台径4.8		ケズリ出し高台	胎土:淡黄 釉:明緑灰	やや密	底部 1/12以下	〃
298	018-04	〃	瀬戸美濃陶器 そり皿	高台径7.4		ケズリ出し高台、全面に施釉 高台内部にトチあと	胎土:オリブ 釉:灰オリブ	密	底部1/2	17c前半
299	010-07	〃	古瀬戸陶器 花瓶	底径 7.3		底面のみ無釉 底部糸切り痕	胎土:灰白 釉:暗オリブ	やや密	底部完形	古瀬戸中期 室町初 (14c)
300	026-03	〃	瀬戸陶器 片口	口径 14.4	ヨコナデ	ロクロナデ	胎土:灰白 釉:黄褐	密	口縁部 1/8	18c前半
301	026-01	〃	瀬戸陶器 桶	口径 26.8	ロクロナデ 鉄釉		胎土:灰白 釉:黒褐	やや密	口縁部 1/8	古瀬戸後IV 15c3/4
302	018-02	〃	瀬戸美濃陶器 播鉢	口径 33.4	ヨコナデ	体部ロクロナデ錆釉 播目1単位5条	胎土:淡黄 釉:暗褐	やや密	口縁部 1/10	17c後半
303	025-06	〃	瀬戸陶器 播鉢	口径 37.0	ヨコナデ	ロクロナデ	胎土:明黄褐 釉:暗赤	粗	口縁部 1/12	19c
304	046-06	〃	常滑陶器 甕	口径 19.2	ロクロナデ 無釉		黒	やや粗	口縁部 1/8	
305	026-04	〃	陶器 甕	口径 13.6	ヨコナデ 無釉		赤	粗 0.3mmの白砂含	口縁部 1/8	
306	057-01	注記なし	陶器 徳利	口径 3.2 底径 11.1 高さ 24.6	ヨコナデ	ロクロ成形 灰色の釉	胎土:灰白 釉:灰	やや密	完形	
307	018-01	包含層 A地区	常滑陶器 甕	口径 34.0	ヨコナデ	内面ユビオサエ 無釉	暗赤褐	粗 直径5mmの 石英・長石を含む	1/4	

第21表 遺物(土器・陶器・磁器)観察表(9)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	名称	cm			木取り	樹種	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ				
126	027-01	自然流水路 A地区		26.5	6.0	6.0	芯取り	イヌガヤ	一方の端は握状に加工され、もう 一方の端は杓状に加工されている	

第22表 木製品観察表

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	名称	cm			重量	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ			
182	023-05	SK27	釘状鉄製品	3.8	0.4	0.4	約5g	一方の端が釘の頭状にふくらむ	

第23表 鉄製品観察表



森山東・太田遺跡遠景（南東上空から）



A・B・C地区全景（東上空から）



A・B地区上層遺構（南から）



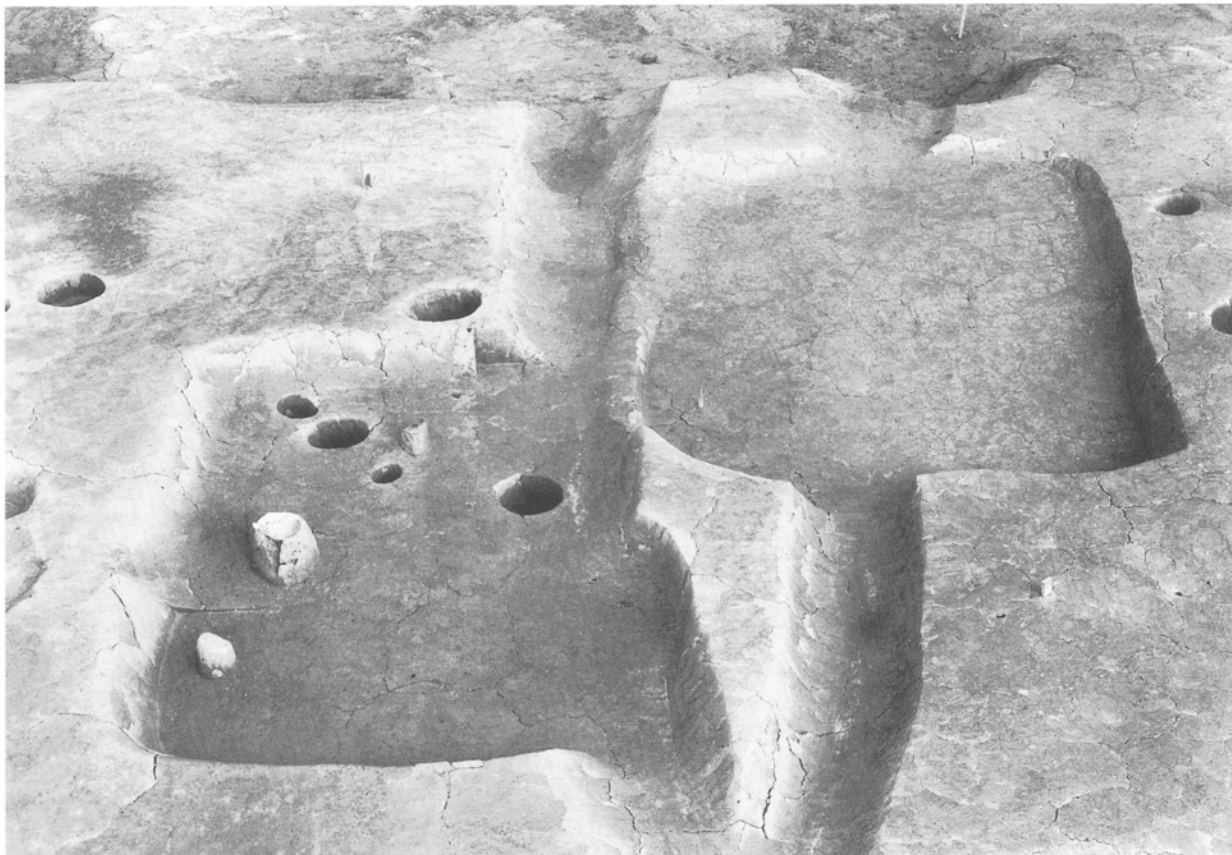
溝SD 6・12、土坑SK 17~19（西から）



溝 S D 6 遺物出土状況



掘立柱建物 S B 29 (西から)



土坑S K14・15 (南西から)



溝S D34・35 (東から)



井戸SE5



B地区水田遺構（北から）

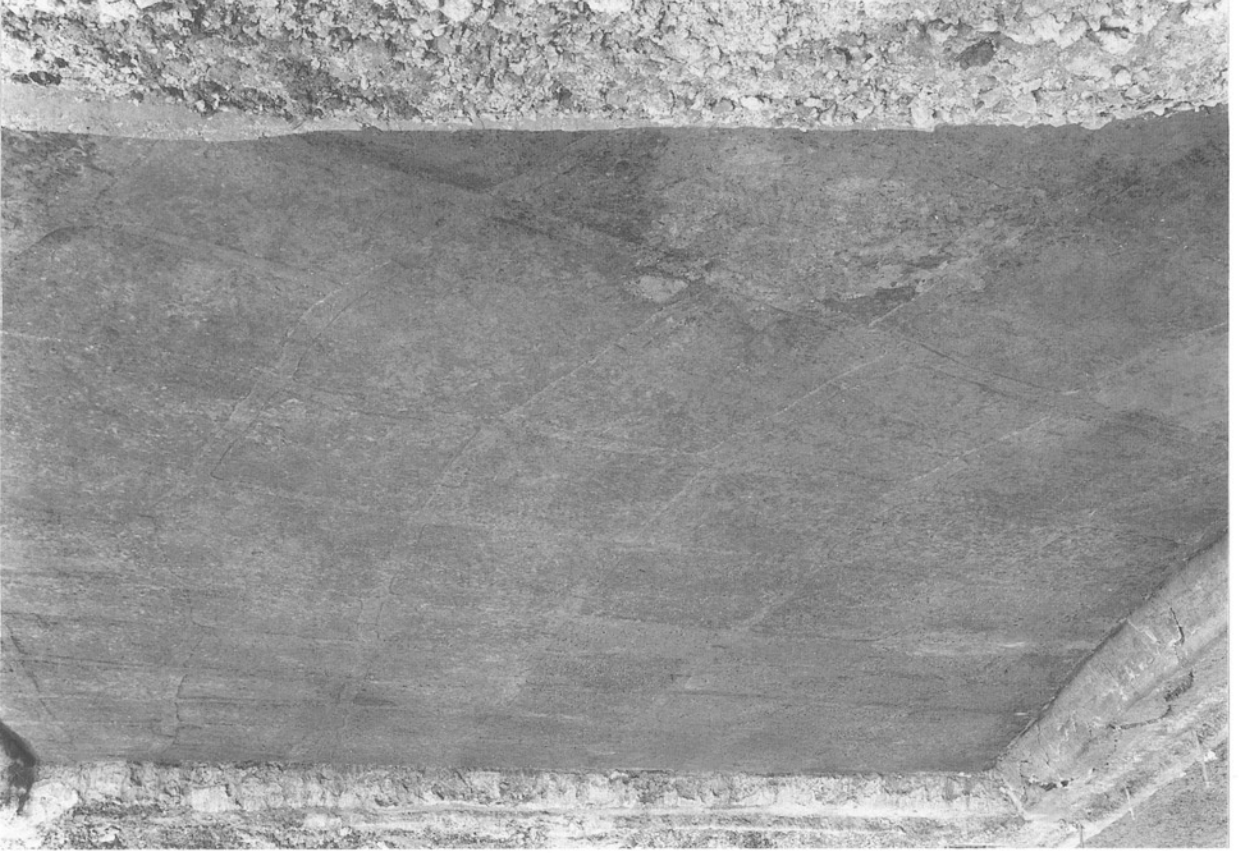


C地区水田遺構(西から)

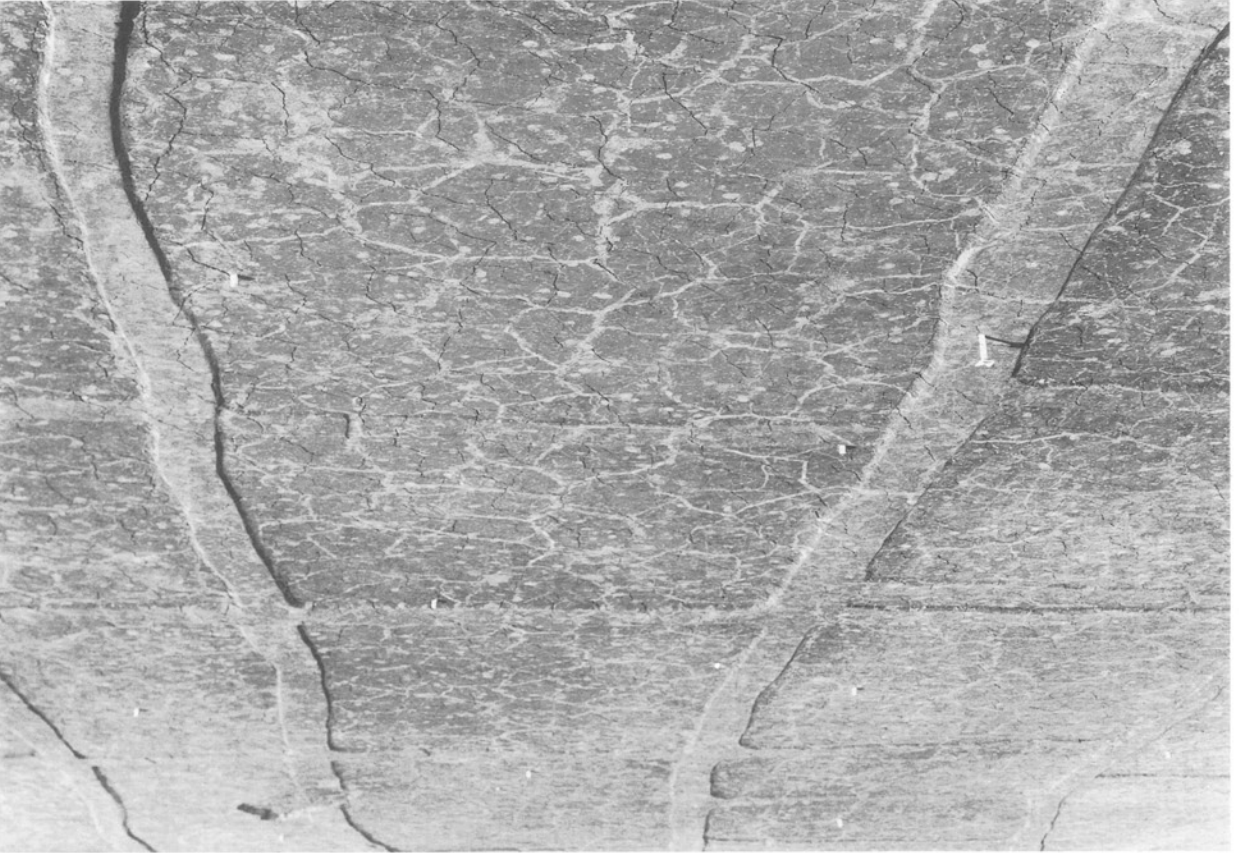


森山東遺跡

D地区水田遺構(南から)



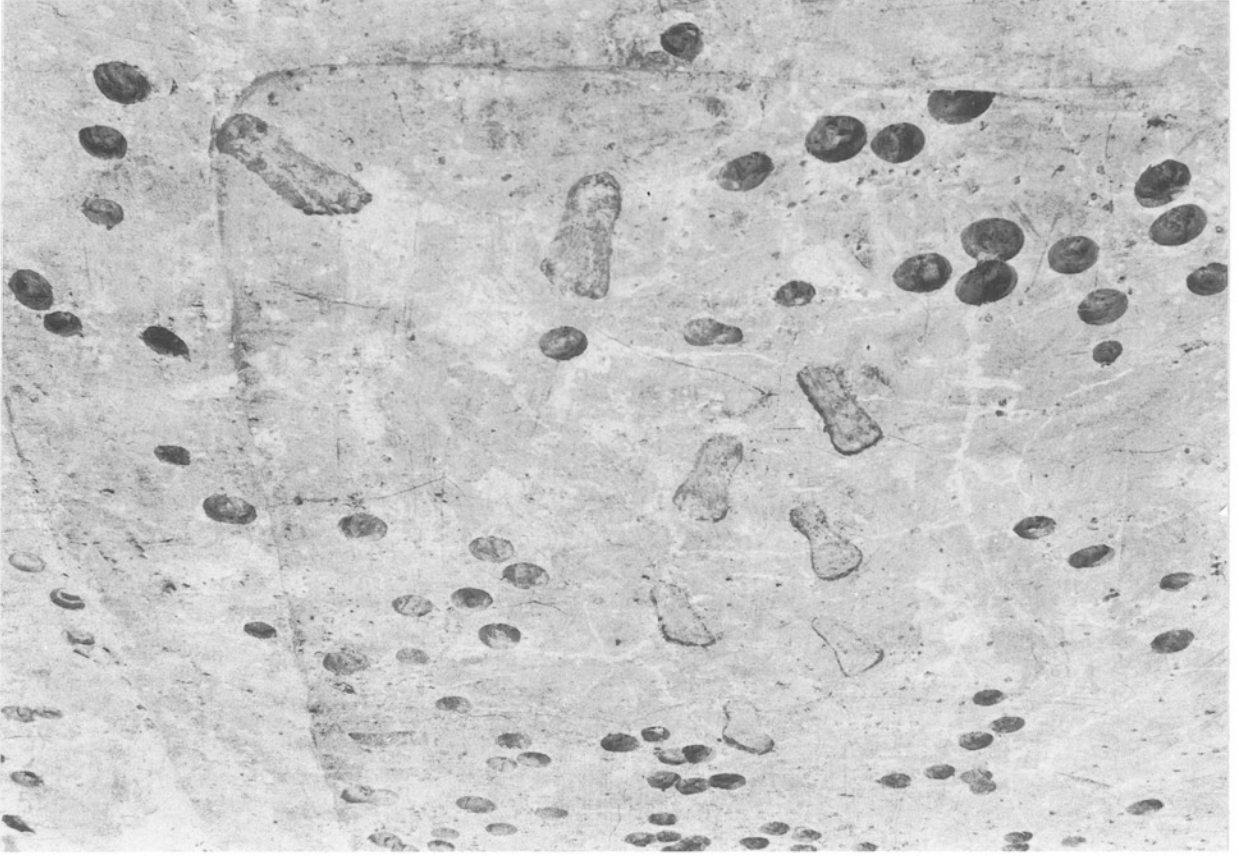
C地区水田面の小穴とひび割れ



森山東遺跡

P L 20

足跡 (No.265水田面)



D地区水田遺構部分 (南東から)



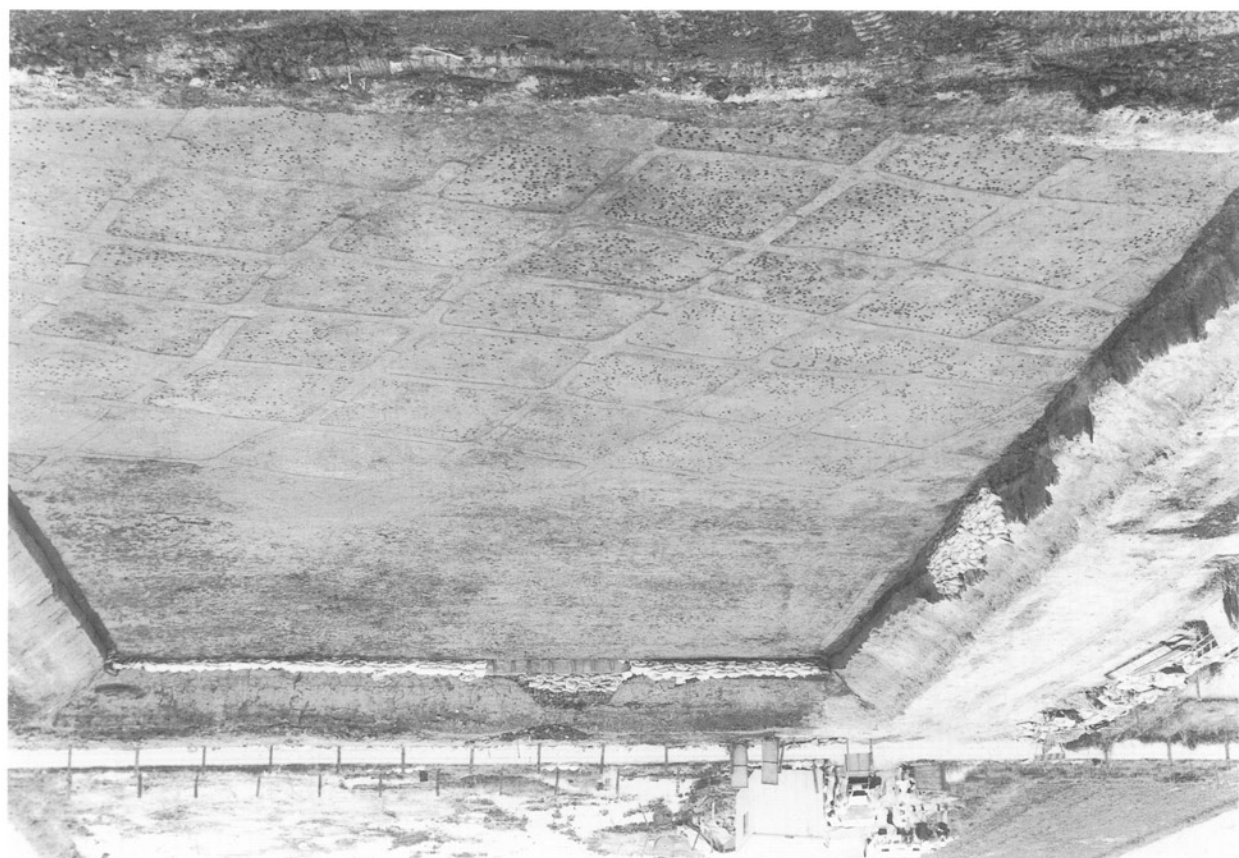
森山東遺跡

P L 21

E地区上層水田面の遺物出土状況



E地区上層水田遺構(北から)



森山東遺跡



E 地区下層水田遺構（北から）



E 地区下層水田遺構部分（南東から）



1



14



13



7



6



15



16



11

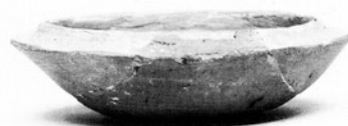
出土遺物 (1 : 4、11・15・16は1 : 3)



19



24



21



68



74



75



43



45



104



79



93



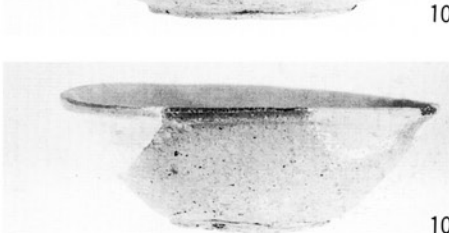
103



80



94



107



81



99



82

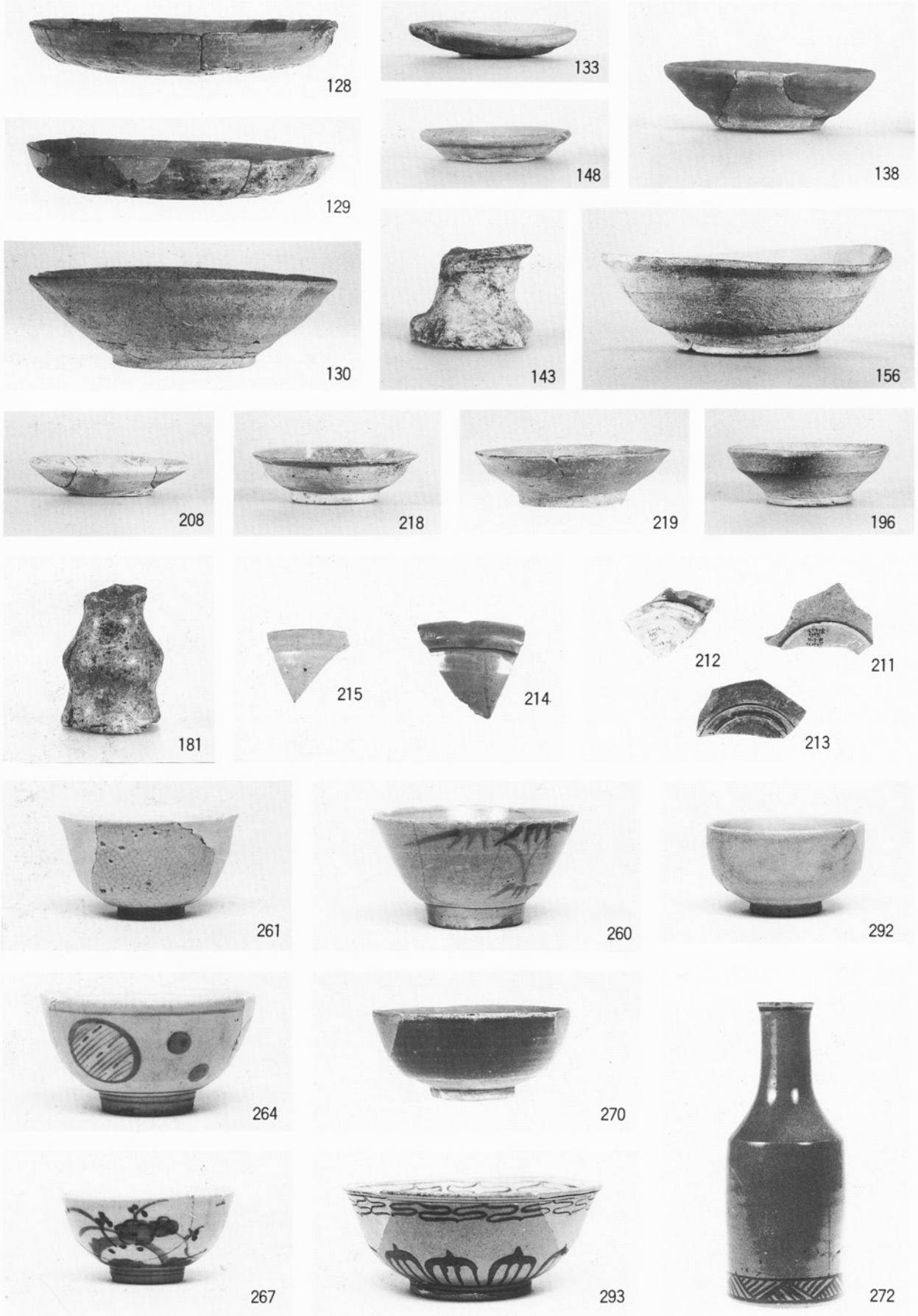


98



108

出土遺物 (1 : 3、12のみ1 : 4)



出土遺物 (1 : 3)

V. 津市長岡町 太田遺跡

1. 位置と地形

太田遺跡は森山東遺跡の南に隣接し、現況は標高7.2m前後の水田地帯にある。行政上は津市長岡町字太田に属する。本調査に先立ち実施した試掘調査の結果、計画路線内の南北約190mにわたって遺構あるいは遺物が確認され、少なくとも遺跡面積は、8,000㎡以上の広がりがあるものと推定された。しかし、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺物が多く確認されたのは、遺跡の北部のみで遺構密度は全体的に希薄であった。遺跡の南端部は、安濃川により形成された自然堤防上に立地しており、現在も

この自然堤防上に沿って東西に細長く伸びる河辺店の集落が営まれている。したがって太田遺跡の大半は、弥生水田遺構が確認された森山東遺跡の立地する微高地とこの自然堤防とに挟まれた低地部に位置し、土層の堆積状況から長年にわたり低湿地帯であったものと思われ、むしろ初期水田遺構の存在の可能性が期待された。

なお、当遺跡の位置と地形についての詳細は、既に第IV章で触れたので、ここでは割愛したい。



第66図 太田遺跡・森山東遺跡発掘調査区位置図（1：5,000）

2. 調査の概要

調査は、現在の排水路の北側と南側の2地区に分けて実施し、便宜上北側をA地区、南側をB地区と呼称することにした。また試掘調査の結果から遺構の希薄な箇所については、幅10mのトレンチ調査としたため、今回の調査面積は3,320㎡である。

A地区では、表土下約1mで大溝（旧河道）が検出された。大溝からは弥生時代～古墳時代の土器、木製品が多量に出土したほか、県下では2例目の発見となった銅鐸形土製品が出土するなど当時の生活様式を考察する上で貴重な成果が得られた。このほか、この大溝が埋没後掘られた古墳時代末期の溝も検出されている。また、水田遺構の存在を仮定して実施した下層遺構の調査では、この大溝に流入する網目状の流路やヨシ・オギ類の草本植物を人工的に敷いたと思われる溝を検出した。なおA地区南端のトレンチで確認した杭列を伴う溝は、昭和47年の県

営ほ場整備事業が施工される前まで利用されていた用水路である。

B地区は、調査当初幅10mのトレンチ調査区であったが、トレンチの南部で柱穴や溝が確認されたため南部については調査区を拡張して面的な調査を実施し、建物遺構の検出に努めた。しかしその結果は遺構・遺物ともに希薄で、検出された溝の多くは、時期を特定するまでには至らず、中には近世以降のものも認められた。遺物は弥生時代～鎌倉時代にかけての土器、陶器等が出土したが、いずれも細片で遺物包含層出土のものが大半を占めた。

調査地は、沖積低地を南北に横切っており、森山東遺跡から続く一連の調査として、古環境の復元、特に集落と低湿地との関係について考える上で、貴重な調査となった。

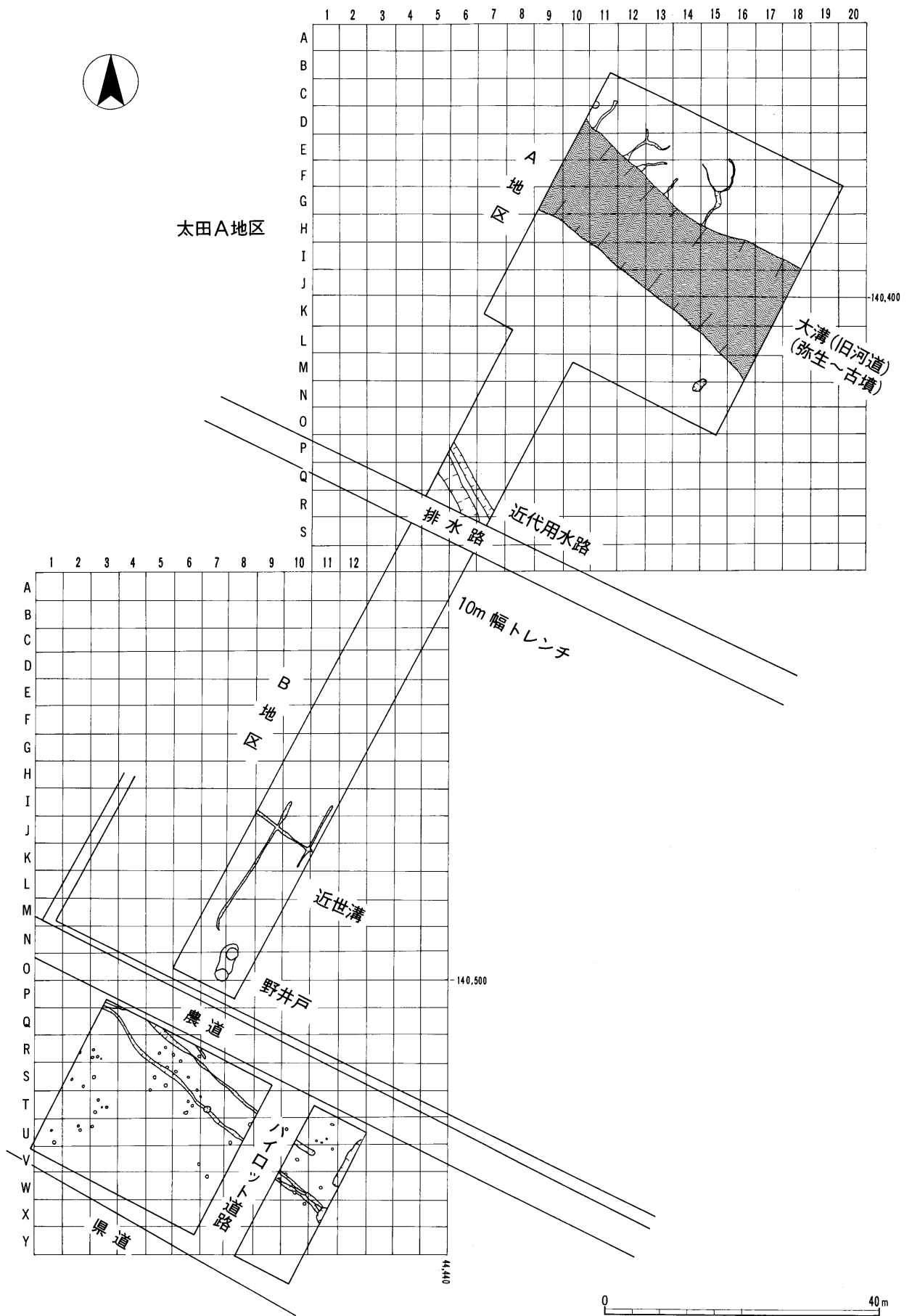
3. 遺跡の基本層序

A地区における土層の基本層序は、第24表に示した。I・II層は、ほ場整備事業が施工される以前の耕土及び床土で、若干中・近世陶磁器が含まれていた。III層は、土層内に0.2～0.4cmの褐色のマンガング粒の沈着がみられ、乾田・半乾田のような状態にあったものと推定される。このIII層からは、平安時代末～鎌倉時代の山茶碗、山皿のほか、少量のロクロ土師器片、緑釉陶器片等が出土している。IV層からV層にかけては、ヨシ植物等の腐食した酸化鉄の集積やヨシ植物による暈管状の斑紋が層全体にわたってみられ、地下水位の上昇、下降の影響を受けやすい湿地状況にあったものとみられる。この暈管状の斑紋層は、大溝（旧河道）付近で約30cm～40cmと最も厚く、これから遠のくにつれ次第に薄くなっている。VI層の青灰色粘土層は、還元化が特に著しかった層で、大溝はこの層の上面から浸食し形成されたものである。VI層からは遺物が出土していないが、大溝下層の出土遺物が弥生後期から古墳時代前期を中心とするところから、VI層の生成時期はこれより以前

と考えられる。この層は森山東遺跡の南から太田遺跡A地区の南まで認められたが、これより以南では消失し、B地区ではこれに変わり、灰色砂混じり土・灰白色砂が厚く（約80cm）堆積していた。VII層の黒色泥炭土は、弥生水田が確認された森山東遺跡の第XI層に対応するものである。この層は太田遺跡の旧河道に向かって徐々に低くなり、最も低い旧河道部で標高5.8m、比高差はおよそ50～60cmほどである。

層名	色調・土質	層厚(cm)	備考
I層	灰色泥土	20～25	耕作土
II層	灰褐色泥土	20～25	床土
III層	灰黄褐色粘質土	24～16	褐色マンガング粒沈着
IV層	黄褐色粘質土	16～25	ヨシ植物腐蝕集積層
V層	灰褐色粘土	16～28	ヨシ植物沈着
VI層	青灰色粘土	70～85	大溝の落ちこみ・植物遺体
VII層	黒色泥炭土	3～15	未分解植物・溝状遺構
VIII層	暗灰色粘土	10～15	未分解植物
IX層	黒灰色泥炭土		未分解植物多し

第24表 A地区土層基本層序

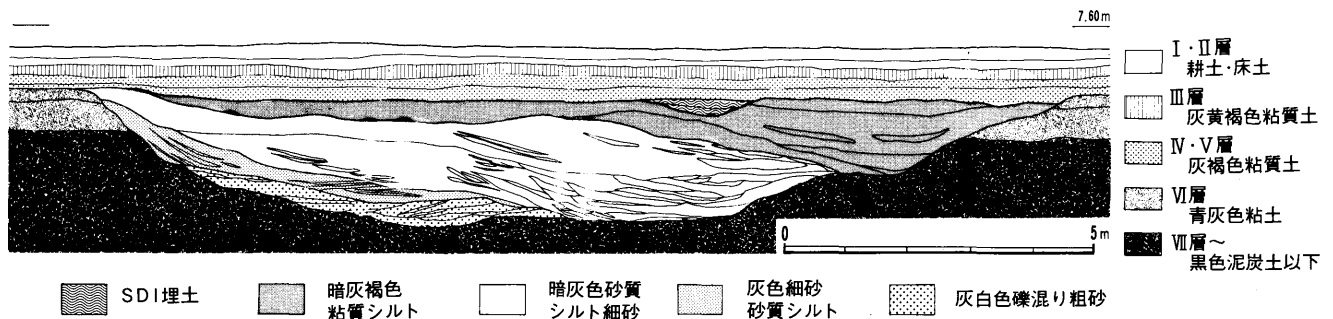


第67図 遺構配置図及び地区割り図 (1 : 800)

Ⅷ層以下は暗灰色シルトや黒灰色有機物混入シルトの互層となっていた。

B地区の土層はA地区と異なり、耕土・床土の下は灰褐色砂質土で、その下は灰色砂混じり土・灰白

色砂が厚く堆積し、さらにその下でA地区から続く黒色泥炭土が認められた。この黒色泥炭土層の標高は6.4mでA地区から徐々に高くなってきている。なおB地区の遺構検出面は灰褐色砂質土上面である。



第68図 大溝西壁土層断面図 (1:120)

4. 遺 構

(1) A地区の遺構

第Ⅵ層（青灰色粘土層）上面で確認した大溝（旧河道）、溝、自然流路のほか、第Ⅶ層（黒色泥炭土）上面で検出のヨシ・オギ類の草本植物を敷いたとみられる溝、網状の溝状遺構等がある。ここでは前者を上層遺構、後者を下層遺構と呼ぶことにする。

大溝（旧河道） 調査区中央部を北西から南東方向に走る自然の河道。幅は11.1m～16.8m、深さは最深部で遺構検出面から2.0mである。しかし、一時期にこれだけの溝幅があったのではなく、第68図の大溝断面図や第69図の遺構平面図で示したように何度も流路を変えながら、埋没、削平を繰り返し、徐々に流路を拡げていったものとみられる。

その堆積状況は、大きく上層、中層、下層の3層に分かれる。上層は暗灰褐色粘質シルトで、河の流れとしてはやや淀んでいた状況を示している。中層は上部に暗灰色砂質シルト、下部に灰色細砂が互層に堆積しており、水の流れが活発であったことが分かる。下層は、上部に灰色細砂が部分的に互層に入る砂質シルト、下部に灰白色礫混り粗砂が堆積しており、中層と同様、水の流れは速かったものと思われる。

遺物の出土状況は、概ね各層の堆積状況に順応しており、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての

各期のものが認められた。

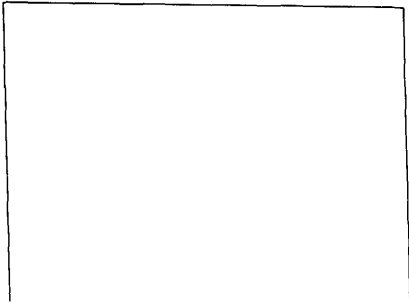
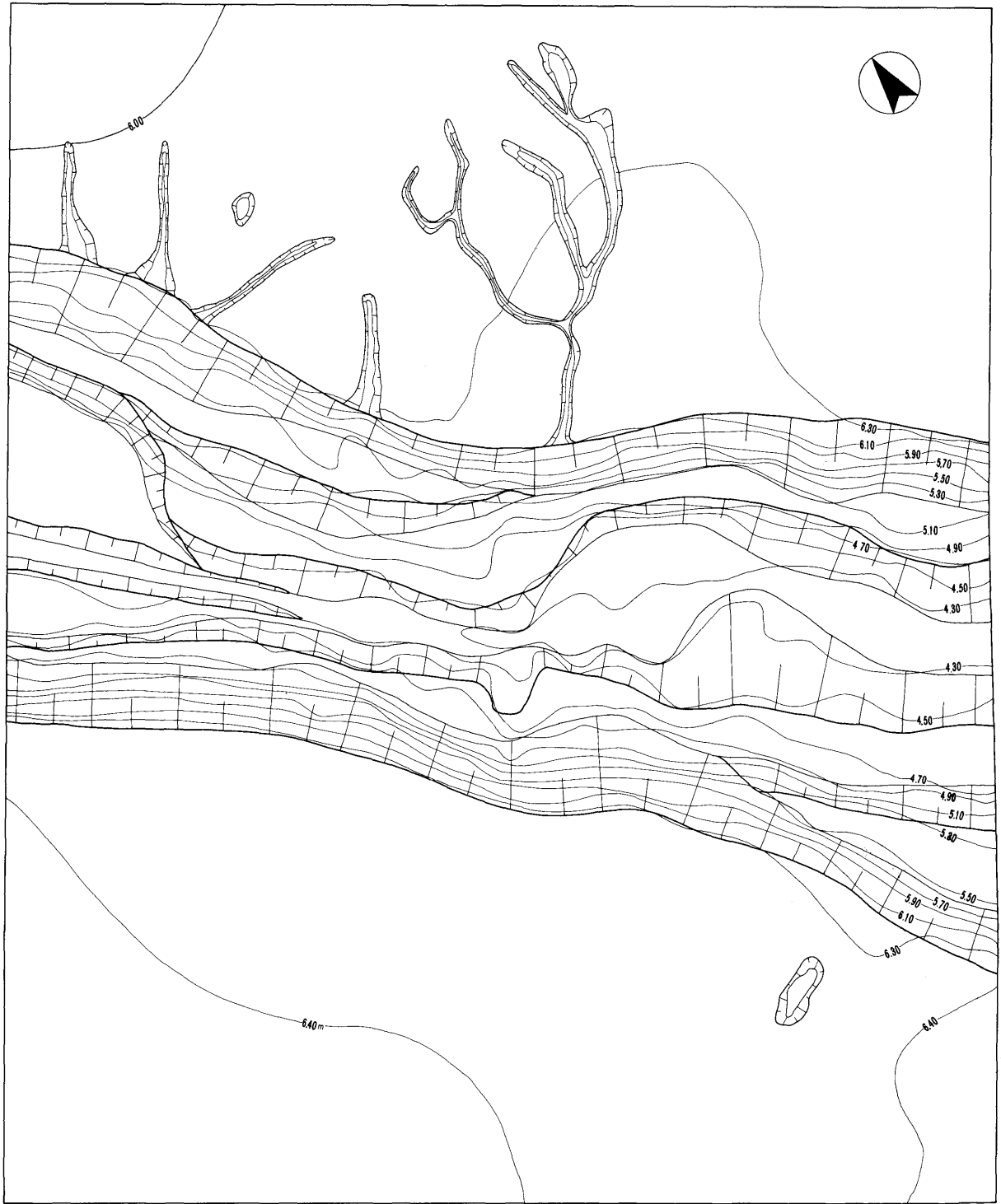
上層では第71図に示したように、古墳時代後期の土師器台付甕や高杯が比較的多く出土している。また調査区西寄りの大溝北側の肩斜面では、土器溜まりがみられ、土師器高杯、須恵器杯・甕のほか、一体分と考えられる馬歯等がまとまって出土した。

中層では、弥生時代後期の土器を若干量含むものの、古墳時代前期～中期の土器が中心で、板、有頭棒、杵、建築部材等の木製品も出土している。なおTK23～47型式に併行する須恵器蓋杯は中層下部の砂層上面で出土しているが、これより下層からは須恵器類は全く確認されていない。

下層では、流入品と思われる縄文時代後期～晩期の土器片をはじめ、少量の弥生時代中期の土器や古墳時代前期の古式土師器も認められたものの、弥生時代後期の土器が主体を占め、完形品も多く出土した。また木製品の出土量も多く、このうち柱材や杭等の部材や流木は、大溝の西端と南東端に集中していた。特に南東隅では建築部材と考えられる加工木がまとまってみられた。このほか、鍬、鋤等の耕作用具はすべて下層からの出土である。

なお、中・下層からのおもな遺物の出土状況については第78・79図を参照されたい。

SD1・2 旧河道が埋没後、この上面から掘られた溝。SD1は幅0.8～1.9m、深さ30cm前後でや



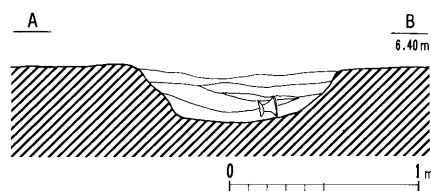
第69図 大溝 (旧河道) 遺構実測図 (1 : 200)

や蛇行しながら南へ延びる。溝埋土は砂や灰色砂土の互層で、6世紀末～7世紀前半頃の土師器高杯、須恵器杯蓋、平瓶が出土した。SD2は、SD1から分流した小溝である。幅は40cm、深さ20cm前後で南東方向に延びる。

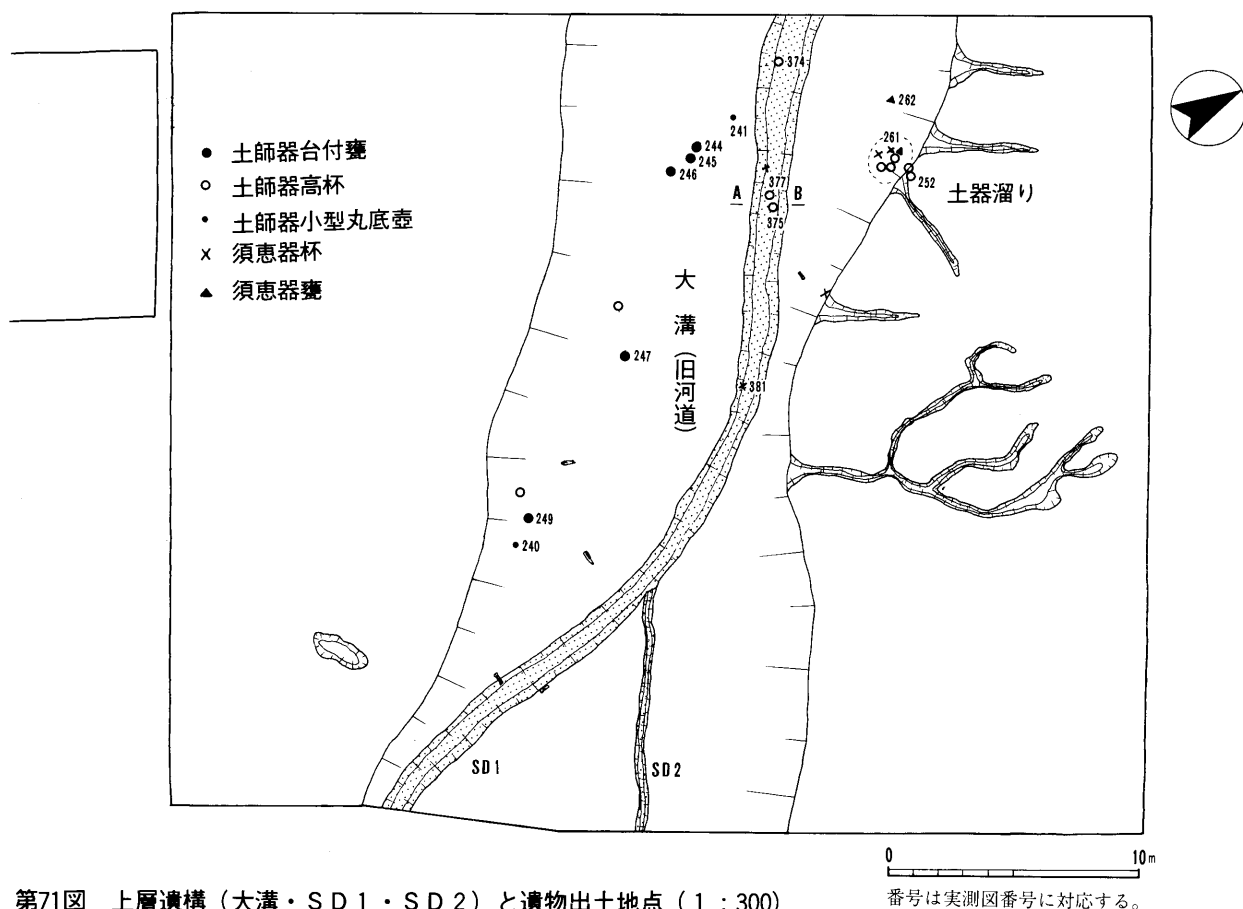
SD3 下層遺構として検出された幅50cm、深さ20cm前後の溝。溝底にヨシ・オギ類の草本植物が人工的に敷かれた状態で検出された。草本植物の厚さは2～6cmである。旧河道の南辺からは約3.6mの距離をおき、ほぼこれに沿って並走しており、他の溝とは様相を異にしているところから、一応人為的な溝と考えた。しかし溝の規模は、旧河道に流入する幾条もの溝（自然流路?）の規模と大差なく、また両者が交差する地点での溝底の深さは、ほとんど同じであるところから、SD3も自然流路の一つと考えることもできる。

溝状遺構(?) 幅20～50cm、深さ10～25cmで、断面がU字状を呈する溝状遺構として確認された。流路底の絶対高は旧河道に向かって低く、相対的に西から東へも低い。第VI層上面のほか下層の第VII層

上面でも確認され、特に旧河道南側で下層遺構として確認した流路は、平面形態のうえでは小刻みに蛇行しながら等高線に対して縦横に走り、互いに網目状に連結しながら流路を集め旧河道に向かって流入する様子が顕著に認められた。また自然流が旧河道に注ぐ先端部近くで、流路に対して直交するように3本の杭が打ち込まれていた箇所が一つ確認された。なお、旧河道北側の流路は浅く、その埋土は褐灰色土であるのに対し、南側の流路はやや深く、壁面が垂直に近かったり、埋土が自然流の堆積とは考えにくいVI層とよく似た青灰色粘土であることなど、多少様相を異にしており、調査概報^①でも述べたように、こうした流路を人為的な溝状遺構とみることもできる。

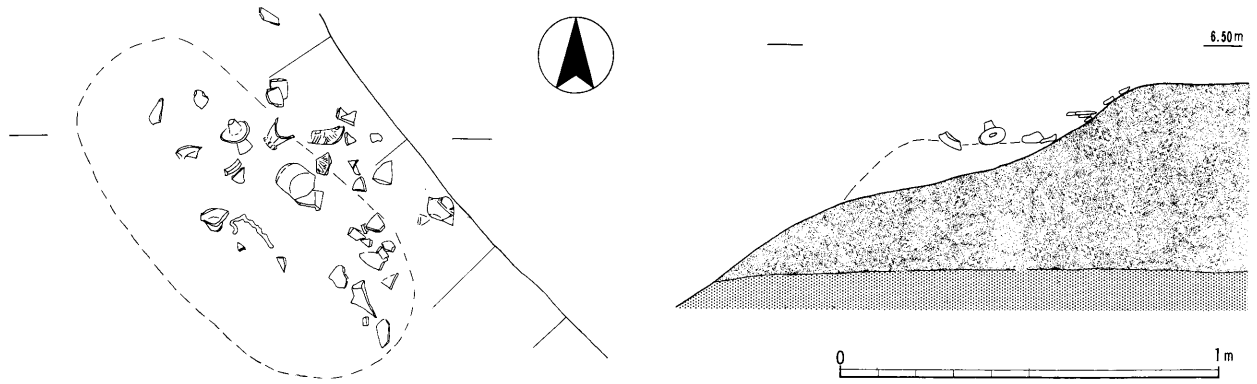


第70図 溝SD1断面(1:40)

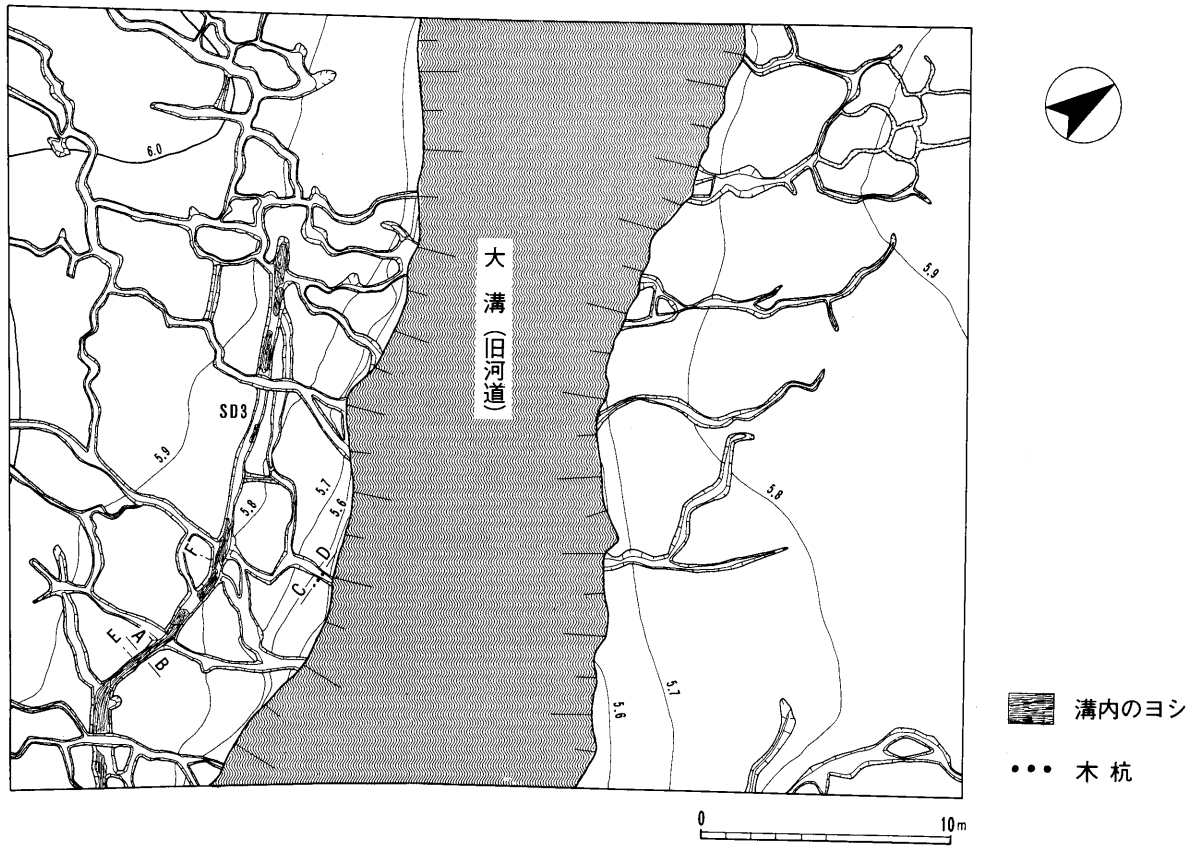


第71図 上層遺構(大溝・SD1・SD2)と遺物出土地点(1:300)

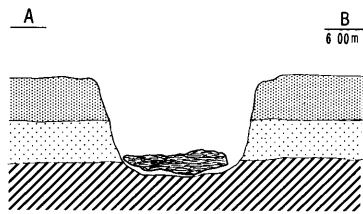
番号は実測図番号に対応する。



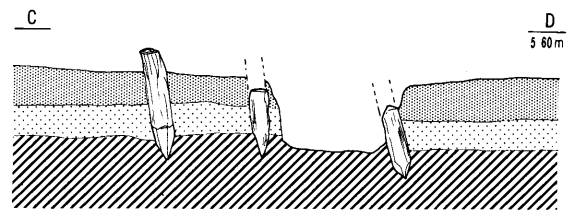
第72図 大溝土器溜りの平面図・断面図 (1 : 20)



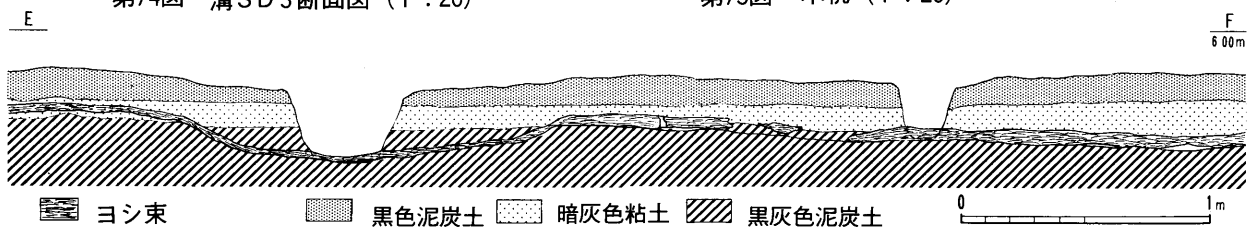
第73図 下層溝状遺構 (1 : 300)



第74図 溝SD3断面図 (1 : 20)



第75図 木杭 (1 : 20)



第76図 溝SD3縦断面図 (1 : 30)

(2) B地区の遺構

遺構はすべて灰褐色上面で検出された。

トレンチ調査区では、顕著な遺構はほとんどなく、南部で近世～近代と思われる溝3条と石灰焼成のたき井戸を2基検出したのみである。遺物は中・近世のものが、耕土、床土とその下の灰褐色土から少量出土したにとどまる。

トレンチを面的に拡張した南調査区では、7条の溝と柱穴を検出した。溝SD5～9は、幅30～50cm、深さ20cm前後の浅い溝で、埋土は暗紫色砂質土であ

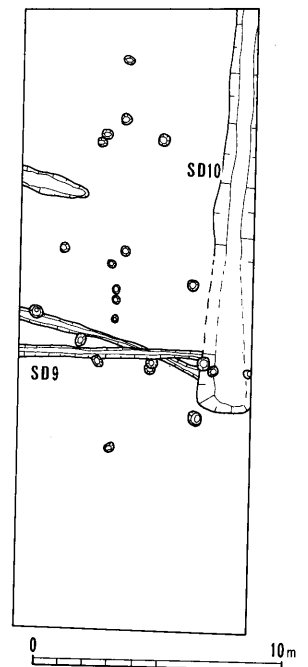
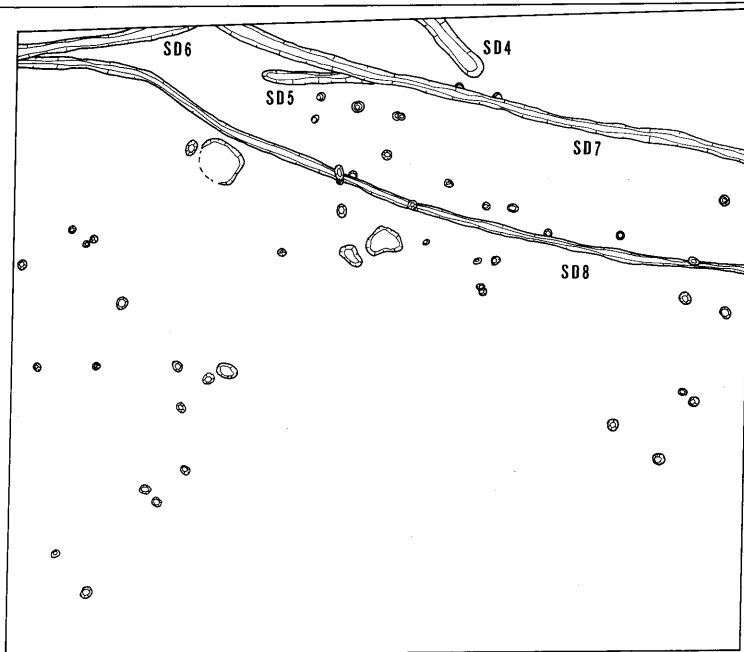
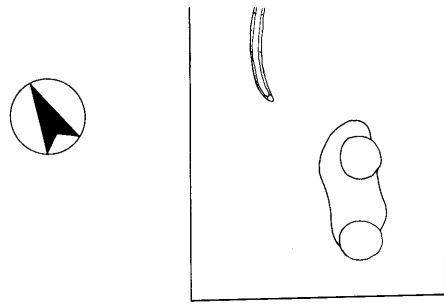
〔註〕

① 「森山東・太田遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会 1989年

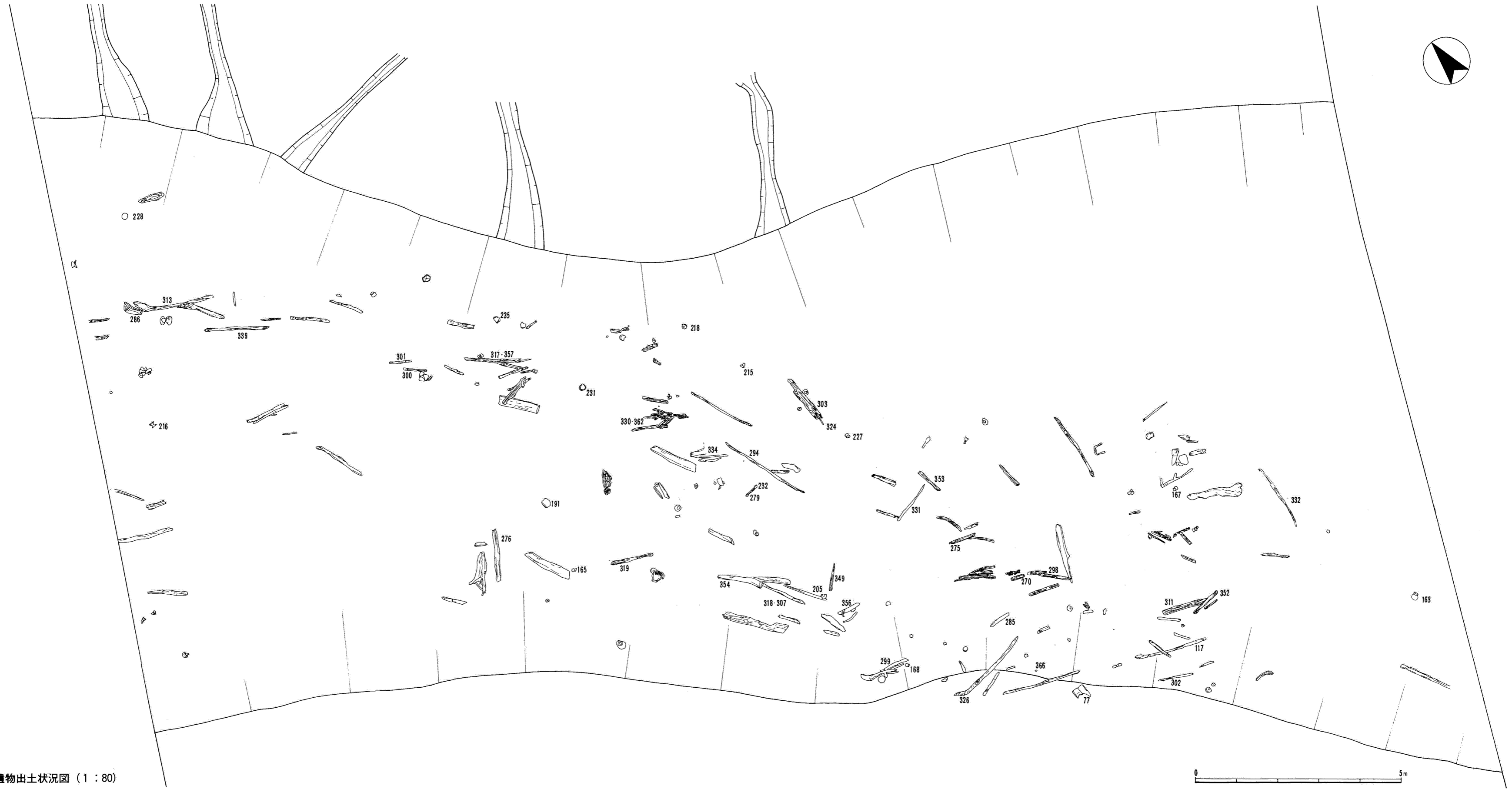
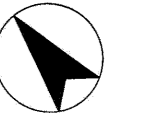
る。このうちSD7とSD8は、約4.5mの間隔を置いてほぼ並走する。あるいは道路遺構かもしれない。調査区東端で検出したSD10は、幅1.0～2.2m、深さ10cm前後の浅い溝である。これらの溝から出土した遺物には、ごく僅かではあるが古墳時代～飛鳥時代の土師器片のほか、鎌倉時代の山茶碗片などもみられ、溝の時期を特定するまでには至らなかった。なお、SD4は耕作に伴う近代の溝である。

柱穴は径30～40cmの小さなもので、調査区全体にわたりまばらに認められたが、掘立柱建物としてまとめることはできなかった。

(浅生悦生・倉田直純)

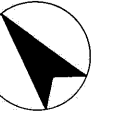


第77図 B地区調査区遺構平面図(1:300)



第78図 大溝中層遺物出土状況図 (1 : 80)

0 5m



第79図 大溝下層遺物出土状況図 (1 : 80)

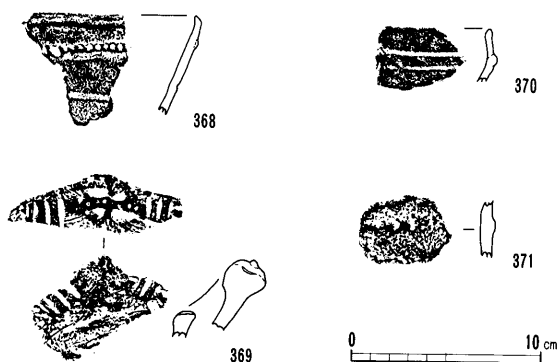
0 5m

5. 遺物

本遺跡の出土遺物は、A地区大溝の弥生時代～古墳時代にかけての土器と木製品がその大部分を占め、包含層やB地区の遺物は少量である。以下、記述にあたっては、大溝・SD1・包含層等出土の遺物について順次行うものとし、B地区出土遺物については一括して記述する。

(1) 縄文時代の遺物

A地区大溝下層からの出土で、土器片4点のみである。368は鉢で口縁部下に突帯が巡り刻み目が施される。口縁端部がやや内側に入る。369は深鉢で、口縁波頂部は肥厚し口唇面にタテ・ヨコの順に粘土紐を貼付した後、細かな竹管文が施される。口縁上端部には、ヘラ状具による刻みが施される。370は浅鉢で口縁下に2条の沈線に区切られた突帯が巡る。371は深鉢で突帯文に刻み目が施される。前3点は縄文後期に、後1点は晩期に比定されるものである。これらは大溝への流入品と考えられる。



第80図 縄文土器(1:4)

(2) 弥生・古墳時代の遺物

1. 大溝出土遺物(1~367・372・373)

当該時期の遺物は、A地区大溝からの出土がほとんどであり、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものがその中心をなす。大溝の層序は、大きく3層に分けられる。全体的には埋没に順応した遺物の出土状況が認められるが、若干の錯綜もみられるようである。以下、遺物の記述について、弥生土器・土師器に関しては、下記のように形態的な特徴を主

とし一部それに製作調整技法を加えた分類に従って遺構、層位ごとに記述することにするが、杯・器台・ミニチュア土器・土錘に関しては出土個体数が少ないこと、もしくは多様な器形があるため分類を行わずに個々の遺物について述べることにする。須恵器に関しては遺構、層位ごと一括して述べる。木製遺物については、層位によらず、用途別の分類に従い器種ごとに述べることにする。なお、個々の遺物の出土位置、法量、調整技法の特徴等については、その詳細を遺物観察表に譲ることとする。

A. 大溝下層出土土器・土製品(1~158・372)

壺A・B・C・D・E・F・G・I、小型丸底壺A・B、甕A・C・D1・D2・D3・F、甕脚部A・B、高杯A・B・C・D・F、高杯脚部A・B・C・D・E、鉢A・B、器台、ミニチュア土器、土錘、銅鐸形土製品等が出土している。

壺A1 頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部が扁平気味になって外面にヘラ状具による刻みが施されるもの(1・2)、太い頸部に突帯が貼り付けられ、口縁端部が明瞭な面をもたずに外面に施文されるもの(3)、細い頸部に突帯が付され大きく外反して端部外面に施文されるもの(4~6)がある。


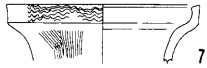
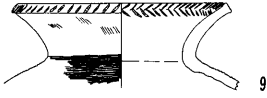

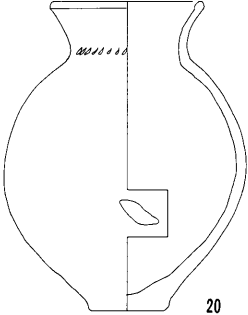
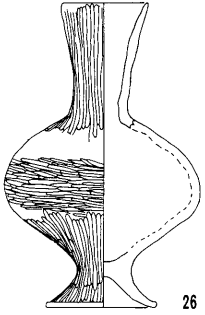
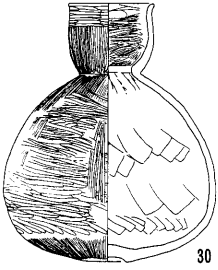
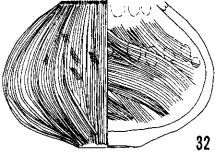
壺A2 口縁部が受口状を呈し、口縁部外面に波状文を施すもの(7)と羽状刺突文を施すもの(8)がある。

壺A3 壺A1に比べて口縁部の外反が弱い。9は口縁端部に明瞭な面をもつ。10は直線的に口縁が延び端部が折り返して成形され厚くなる。

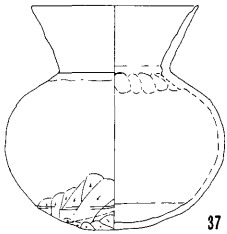

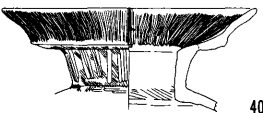
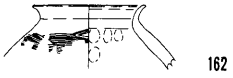


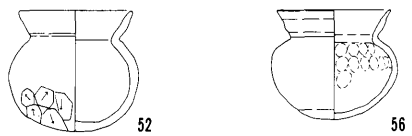

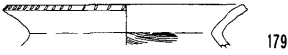
壺A4 口縁端部が垂下する形状で口縁端部に施文される。竹管文が施されるもの(11・12)とハケによる横線が施されるもの(13)がある。

壺A体部の文様 体部の文様は櫛によって施され、横線文を基調としている。その間に櫛刺突連続文を施すもの(15・19)、波状文を施すもの(16・18)、扇状文を施すもの(17)が見受けられる。いずれも弥生後期に位置づけられる資料である。

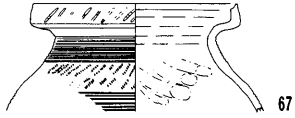
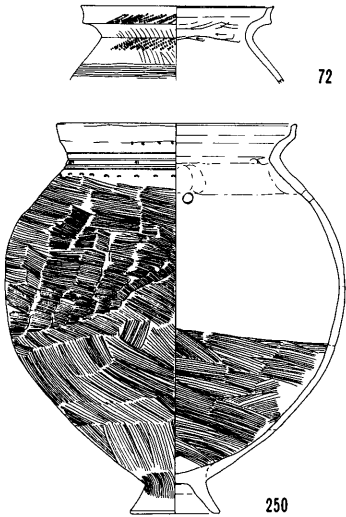
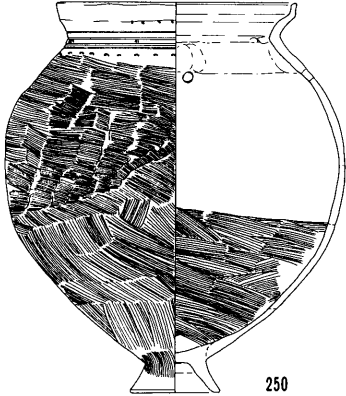
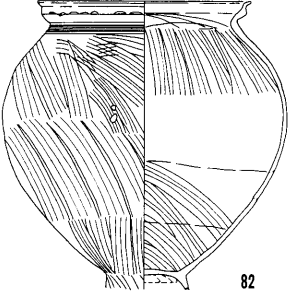

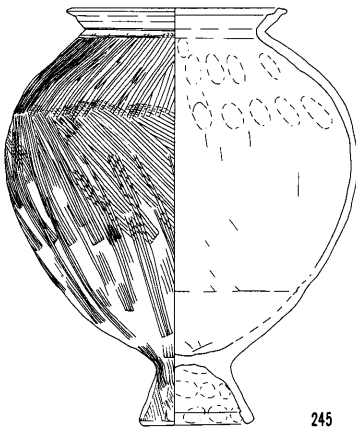
壺B 短頸壺。口縁部は卵形の体部からわずかにのび、端部は丸くおさめる。底部は平底形態を呈す

器種	器形	細分	形態	特徴
壺	A	1		口縁部は大きく外反し、端部外面に施文がみられる。頸部に突帯が付されるものがある。
		2		口縁部は受口状を呈する。
		3		口縁部の外反は弱く、端部に明瞭な面をもつ。端部に施文がみられる。
		4		口縁部は大きく外反し、端部が垂下する。端部に施文がみられる。
	B			卵型の体部からゆるやかに口縁部がのびる。平底形態を呈する。 小型のものもある。
	C			脚台付長頸壺 外面に、タテ・ヨコのヘラミガキが施される。
	D			瓢壺 体部下半で最大径となる。 外面に丁寧なヘラミガキが施される。
	E			D類の形態よりも扁平な体部で、平底形態となる。外面にタテ方向のヘラミガキが施される。

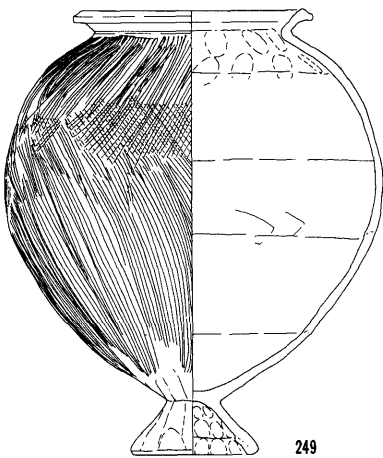
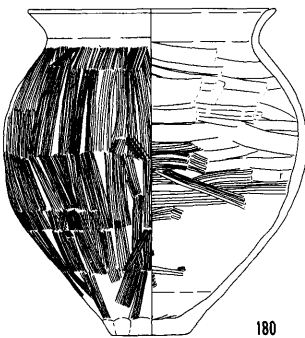
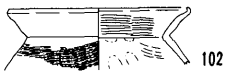
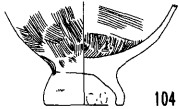
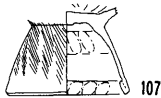
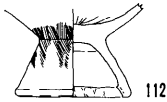
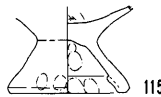
第81図 弥生土器・土師器の形式分類図(1)

器種	器形	細分	形態	特徴	
壺	F	1		球形の体部から口縁部が直線的にのびる。端部は丸く、またはやや尖り気味になる。底部が平底となるものもある。	直口壺
		2		口縁部は直線的にのびる。 端部は平坦面をもつ。	
	G		二重口縁壺 柱状の頸部から、口縁部は段をもち大きく外反する。		
	H		短頸壺 口縁部は短く外反する。体部の器壁は厚い。		
	I		小型壺 小型で器壁が比較的厚く、口縁部は外反気味となる。		
小型丸底壺	A			口縁部径が体部径を凌駕するもの。 (口縁部径 > 体部径)	
				口縁部径が体部径と同等、もしくはそれに及ばないもの。 (口縁部径 ≤ 体部径)	
甕	A			口縁部は大きく外反して開く。端部外面に刻み目が施される。	
		B		頸部は「く」字状に屈曲し、端部外面に刻み目が施される。	



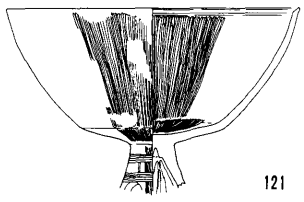

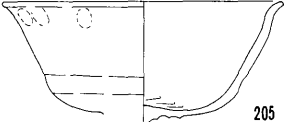
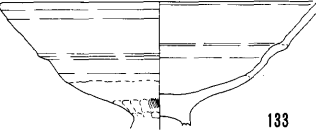
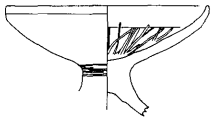
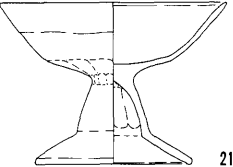
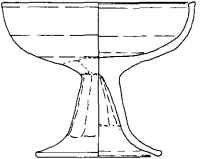
第82図 弥生土器・土師器の形式分類図(2)

器種	器形	細分	形態	特徴	
甕	C	1	 67	口縁部の立ち上がりが内傾して屈曲する。	口縁部は受口状を呈する。 〔受口状〕 〔口縁甕〕
		2	 72  250	口縁部の立ち上がりは直立、またはやや外反気味に外傾して屈曲する。 短い脚台を有するものもある。	
	D	1	 82	口縁部の屈曲が顕著で、垂直気味に立ち上がる。口縁部外面に刺突押引文、頸部近くにヨコハケが施されるものがある。	口縁部が屈曲し脚台をもつ 体部から脚台部にかけてタテハケ、ナナメハケが施される。 〔S字状口縁〕 〔台付甕〕
		2	 91	口縁部の屈曲はやや弱くなり、体部上部にヨコハケが施されるようになる。頸部に凹線が巡るものがある。	
		3	 245	口縁部、体部とも器壁が厚くなる傾向がみられる。口縁端部は外傾する面をもつ。体部上部のヨコハケは消失する。	

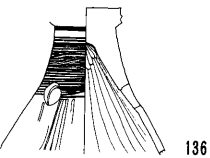

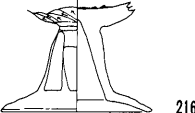
第83図 弥生土器・土師器の形式分類図(3)

器種	器形	細分	形態	特徴	
甕	D	4		口縁部の屈曲はなくなり、器壁はさらに厚くなる。口縁端部は肥厚し水平方向にのびる。 外面のハケ調整は脚台部に及ばないものが多い。	S字状口縁台付甕の系統で、いわゆる「宇田型甕」と称されるもの。
		E		頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、底部は平底形態を呈する。 体部外面にはタテ方向の細かいハケ調整が施される。	
		F		頸部は屈曲し、口縁端部は上方へつまみ上げられる。体部外面にはタタキが施される。(庄内甕の系統)	
甕 脚 台 部	B	A		内弯する脚台で、接地面は明瞭な平坦面をなす。	S字状口縁台付甕の脚台部
		1		内弯気味にのび、裾端部折り返す。器壁が比較的薄い。	
		2		1より裾の開きが大きくなり器壁も比較的厚くなる。	
		3		裾の開きはさらに大きくなり器壁も厚い。	


第84図 弥生土器・土師器の形式分類図(4)

器種	器形	細分	形態	特徴
高杯	A	1	 117	杯部に明瞭な稜が認められ、外反する口縁部をもつ。内外面にヘラミガキが施される。
		2	 120	杯部の稜はやや弱くなり、口縁部は直線的に開く。1と3の中間的な形状となる。
		3	 121	深い杯部を有し、口縁にかけ内弯してのびる。口縁端部は内傾する面をもつ。
	B	 122	椀状の杯部で、内弯して口縁はのび、端部は丸くおさめる。	
	C	 205	椀状の杯部で、口縁部は外反する。	
	D	 133	杯中央部で屈曲して段をもち、口縁部にかけて直線的にのびる。	
	E	 209	口縁部にむかって直線的にのび、端部は直立気味に内弯する。	
	F	 217	直線的に外上方へ開く杯部をもつ。口縁端部をつまみ上げるものもある。脚部は柱状部がやや内弯気味になり、裾部は屈曲して外方へ開く。	
	G	 218	浅い椀状の杯部で、口縁部にかけ内弯する。口縁端部に面をもつ。脚部は直線的な柱状部から裾にむかってゆるやかに開く。裾端部がつまみ出されるものもある。	

第85図 弥生土器・土師器の形式分類図(5)

器種	器形	形態	特徴
高杯	H		<p>大型の高杯。</p> <p>外反する口縁部をもち、端部は上方へつまみ上げられる。脚部はゆるやかに開き、裾端部は下方へつまみ出す。</p>
高杯脚部	A		<p>柱状にのびる脚上半から、裾部はゆるやかに外反する。外面にタテ方向のヘラミガキと、櫛描横線文が施される。</p> <p>下半に透穴が穿たれる。</p>
	B		<p>裾部にかけて内弯気味に開く脚部。上半に透穴を穿つ。櫛描横線を施すものがある。</p>
	C		<p>直線的にのびる脚部で、裾部がわずかに外反気味になる。透穴を穿つものもある。</p>
	D		<p>柱状部から明瞭に屈曲して裾部が外方へ開く。高杯Fの脚と同形態。</p>
	E		<p>柱状部から裾に向かってゆるやかに開く。裾端部がつまみ出されるものがある。高杯Gの脚と同形態。</p>
鉢	A		<p>頸部から大きく外反して端部は明瞭な面をもち、刻み目が施される。</p>
	B		<p>脚台付鉢（受口状口縁）</p> <p>口縁部が受口状を呈する。</p> <p>脚台部は裾にかけてゆるやかに開く。</p> <p>内外面に細かな調整を施す。</p>

第86図 弥生土器・土師器の形式分類図（6）

器種	器形	形態	特徴
鉢	C		<p>脚台付鉢（S字状口縁） 口縁部はS字状を呈する。 調整技法は甕D類とほぼ共通する。</p>

第87図 弥生土器・土師器の形式分類図（7）

る。比較的大型のもの(20~23)には外からの穿孔が認められるもの(20)がある。体部の調整が粗いハケとケズリによるもの(22)と細かいハケ調整が施されるもの(23)がある。小型のもの(24・25)には体部にヘラミガキが認められる。弥生土器第V様式に相当し、後期に位置づけられるものである。

壺C 脚台付長頸壺。算盤玉状の体部に長くのびる口縁部と低い脚台部が付く。外面にタテ・ヨコの細かいヘラミガキが施されるもの(26)が唯一の完形であるが、裾部に複数の小孔が穿たれる脚台部(27)も出土している。

壺D 瓢壺。外面にタテ・ヨコ方向の細かいヘラミガキが施される。ハケによる波状文が施されるもの(28)、ミガキの後に貝殻連弧文を施すもの(29)があるが、全体の形状が認められるのは(30)のみである。最大径は体部下半にあり、底部は上げ底になる。

壺E 壺Dよりも扁平な体部で、平底形態となる。外面は、タテ方向の細かいヘラミガキが施される。完存するものはなく口縁部が全て欠損しており全体の形状は不明であるが、おそらく頸部から直線的にのびる口縁部をもつものであろう。内面の調整は、ナデ・オサエが基調であるがハケの施されるもの(32・34)もある。

壺F1 体部から直線的に外上方へ口縁部が開く。底がややドーナツ状になり体部下部に穿孔されるもの(36)、口縁端部が尖り気味になるもの(37)と丸くおさめるもの(38)、体部がやや扁平気味でヨコ方向のヘラ調整が施されるもの(39)がある。

壺F2 口縁端部に水平な面をもち外面はハケ調整が施される。出土はこの14の1点のみである。

壺G 二重口縁壺。40が調査区全体を通して唯一の出土である。頸部はほぼ垂直に立ち、水平方向に広がって外上方へのびる。内外面に細かいヘラ

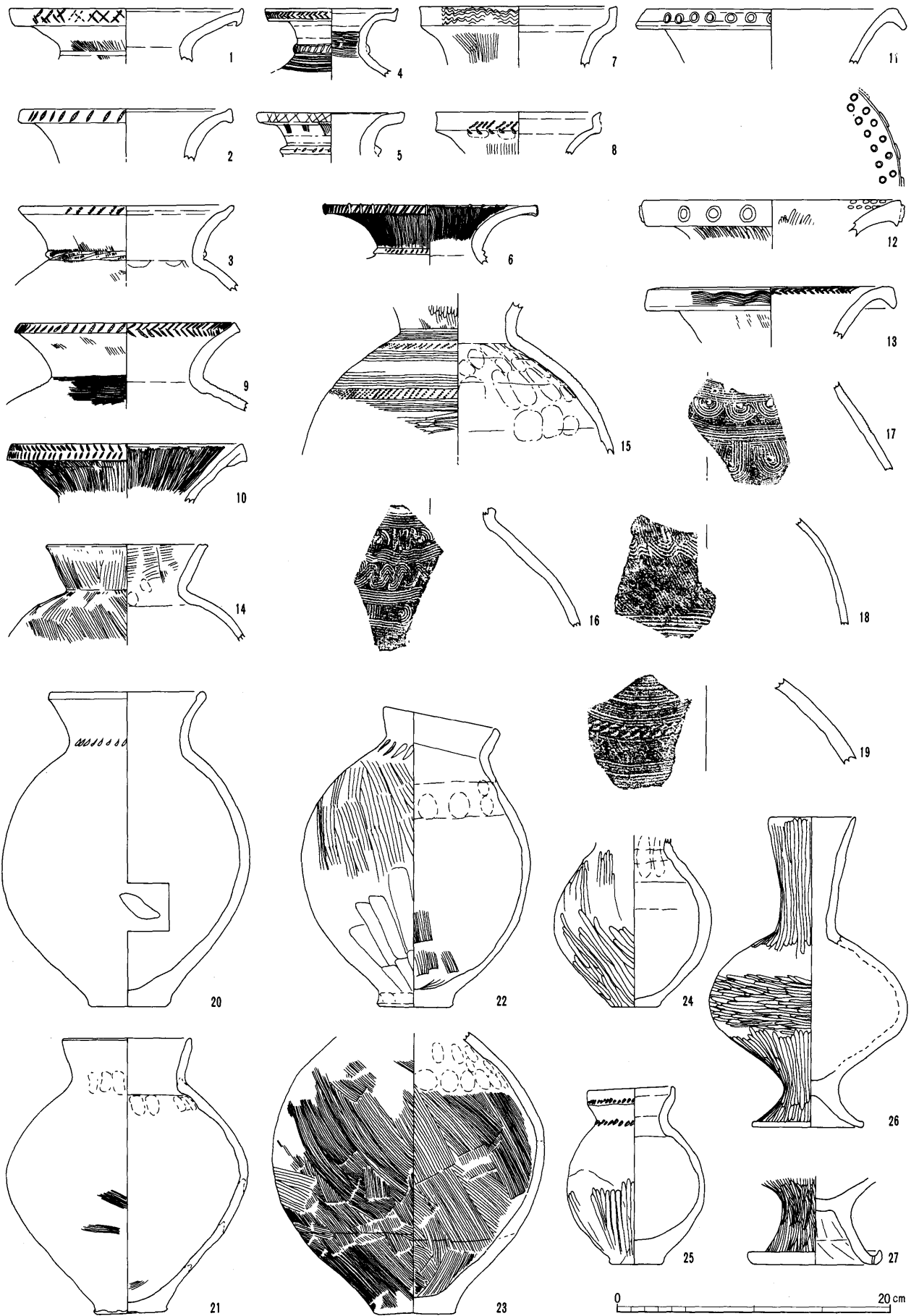
ミガキが施される。

壺I 小型壺。小型丸底壺より器壁が厚く、口縁部高に比べて体部高が大きく上回るものを小型壺として分類した。41は大きさに比べて体部の器壁はかなり厚く、口縁内面から外面は丁寧なナデ調整が施される。42は41に比べ調整は雑であり、内外面にヘラケズリ痕が明瞭に残る。43は器壁はそれほど厚くないが、小型丸底壺に比べ容量が大きく上回る点から小型壺の範疇に含めた。内外面とも調整は比較的丁寧である。

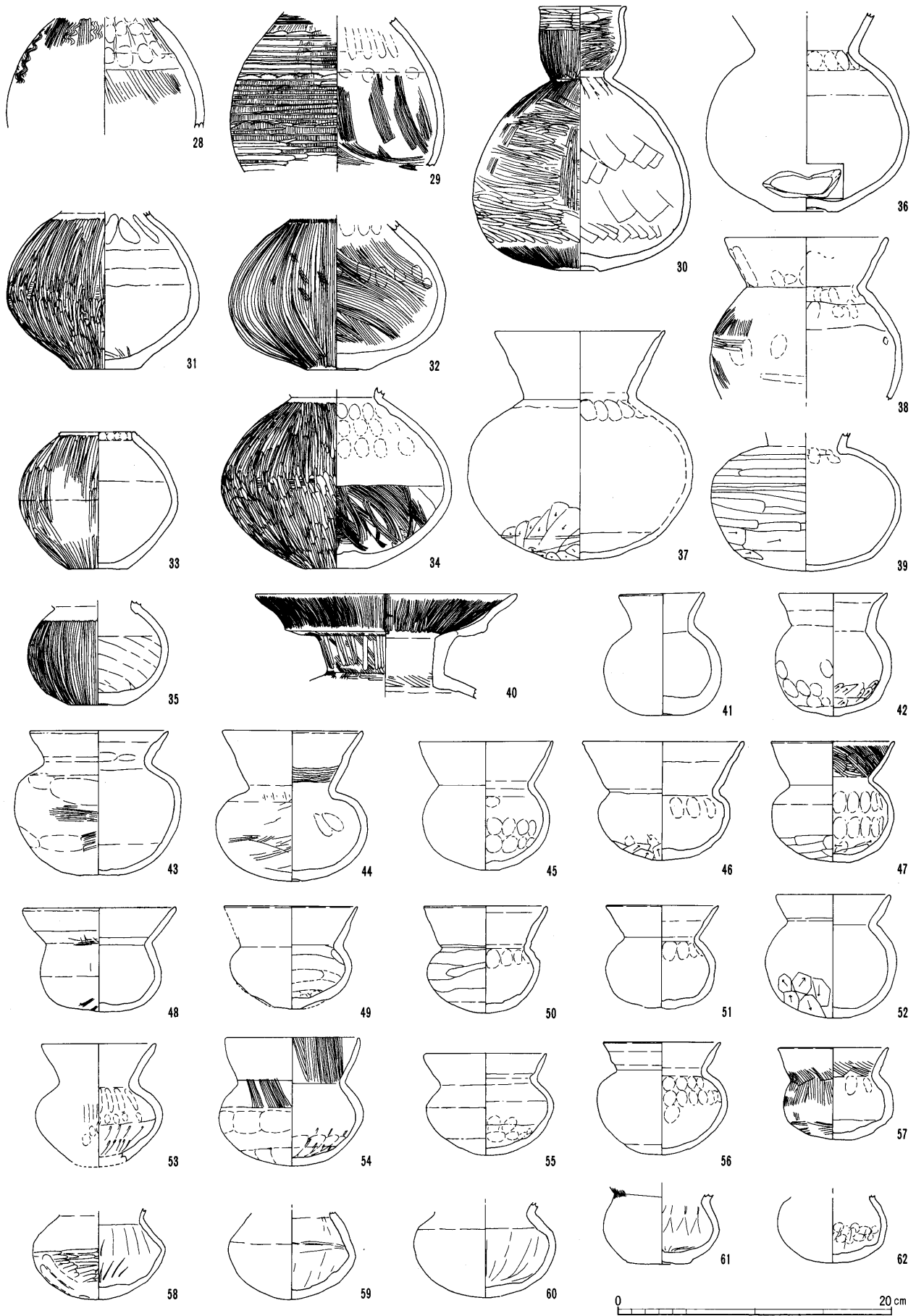
小型丸底壺A 口縁部径が体部径を凌駕するもの(45~51)をA類として分類した。全体的に粗雑な造りであり、口縁部は直線的に外上方へのびる。体部下半がヘラケズリののちナデ調整されるもの(45・51)と、ヘラケズリ痕が明瞭なもの(46~48)がある。47の口縁部内面には螺旋状に細かいハケメが施される。50は体部外面の大部分がヨコ方向のヘラケズリが施される。

小型丸底壺B 口縁部径が体部径と同等もしくはそれに及ばないもの(44・52~57)をB類として分類した。A類と同様に造りの粗雑なものが多いが、44は口縁部が長くのび、内外面とも丁寧な調整が施され、やや系統が異なるものである。52は全体の器壁が厚く、体部に比べ口縁部も短くおさまることから、むしろ小型壺の範疇にはいるものかもしれない。体部の肩が張って最大径となるものと小型でやや平底気味になるものがある。調整はバラエティーに富み、口縁内面に螺旋状のハケメを施すもの(54)や内外面ともハケメが施されるもの(57)などがある。また、55の内側全面には朱が残る。朱が認められるのは小型丸底壺のなかでもこの1点だけである。

58~62は口縁部が欠損するためA類、B類の分類は不能であるが、体部の肩の張るものと小型のもの



第88图 大溝下層出土土器実測図(1) 1:4



第89图 大溝下層出土土器実測図(2) 1:4

が認められる。58にはわずかにヘラミガキがみられる。61は底部にドーナツ状に粘土が貼り付けられ高台状になる。

甕A 63の1点のみの出土で、体部から口縁部にかけて徐々に厚くなって外反し、口径は35cmを越える大型品である。口縁端部にはヘラによる刻み目が施され、口縁内外面にハケ調整が施される。弥生中期中葉に位置づけられるものである。

甕C1 口縁部が受口状を呈するものをC類とし、立ち上がり内傾して屈曲するもの(67~70)をC1類として分類した。口径12~15cmの小・中型もの(67~69)と20cm以上の大型もの(70)がある。口縁部外面に櫛による刺突が施されるのが共通し、頸部内面にハケメの施されるもの(68・69)もある。弥生後期初頭に位置付けられよう。

甕C2 口縁部が受口状を呈するもの(C類)のうち、立ち上がり直立あるいはやや外反気味に屈曲するもの(71~81)をC2類として分類した。口径が12cm前後の小型のもの(81)、14~18cmの中型のもの(72・73・75~78・80)、20cm前後の大型のもの(74・79)など、大きさはバラエティーに富む。口縁外面には櫛による刺突や刺突押引文が施される。ただ、76については口縁外面にヘラ状具による刻み目と体部にヨコハケ調整がなされ、櫛描横線文はみられないことから別系譜のものとも考えられる。

甕D1 口縁部が短く屈曲し、脚台をもつタイプの甕で、一般的に「S字状口縁台付甕」と称されるものである。口縁部の屈曲が顕著で垂直気味に立ち上がり、頸部付近にヨコハケが施されるもの(82~88・90・92)をD1類として分類した。屈曲部の外面に刺突押引文の施されるもの(82・83)が当遺跡出土のこのタイプの甕のなかでは最も古いものと考えられ、赤塚編年^①のS字甕A類の古段階に位置づけられよう。

甕D2 D1類に比べて口縁の屈曲はやや弱くなり外上方に開くようになる。ヨコハケが体部上部に施されるもの(89・91・93・94)と施されないもの(95~100)がある。また、頸部外面にヘラ状具による凹線が施されるもの(91・93・95・97~100)がみられる。完存するものはないが体部の調整は羽状ハケ(95・98)になる。

甕D3 口縁部、体部とも器壁が厚くなる傾向がみられ、口縁端部には外傾する面をもつ。下層からの出土は、101の1点のみである。

甕F 頸部は鋭く屈曲し、口縁端部は上方につまみ上げられる。体部外面にはタタキが施される。太田遺跡では、102が唯一の出土である。

甕脚台A A類として分類したもの(103~105)は下層からのみの出土である。B類に比べやや小型で、接地面が明瞭な平坦面をもち、胎土が細かい点でもB類とは区別される。調整は全体的に丁寧である。

甕脚台B1 S字状口縁台付甕の脚台のうち器壁が薄く、裾の開きが小さいもの(106~109)をB1類として分類した。外面に不連続のナナメハケが施される。

甕脚台B2 B1類よりも器壁が厚くなり、裾の開きも大きくなる。脚台部の高さもやや低くなる傾向にあり、外面にナナメハケの施されるもの(110~112)と施されないもの(113・114)がある。

甕脚台B3 器壁はさらに厚く、高さも低くなる。外面にはハケ調整は施されず、ナデとユビオサエによるもので、下層からは115のみの出土で、前2者に比べ数的に劣勢である。

高杯A1 116~119。杯部に明瞭な稜が認められ外反する口縁部をもつ。口径は23~29cmと様々である。

高杯A2 120。A1類に比べて杯部の稜は弱くなり、口縁部は外反せず直線的に延びて深さも増す。

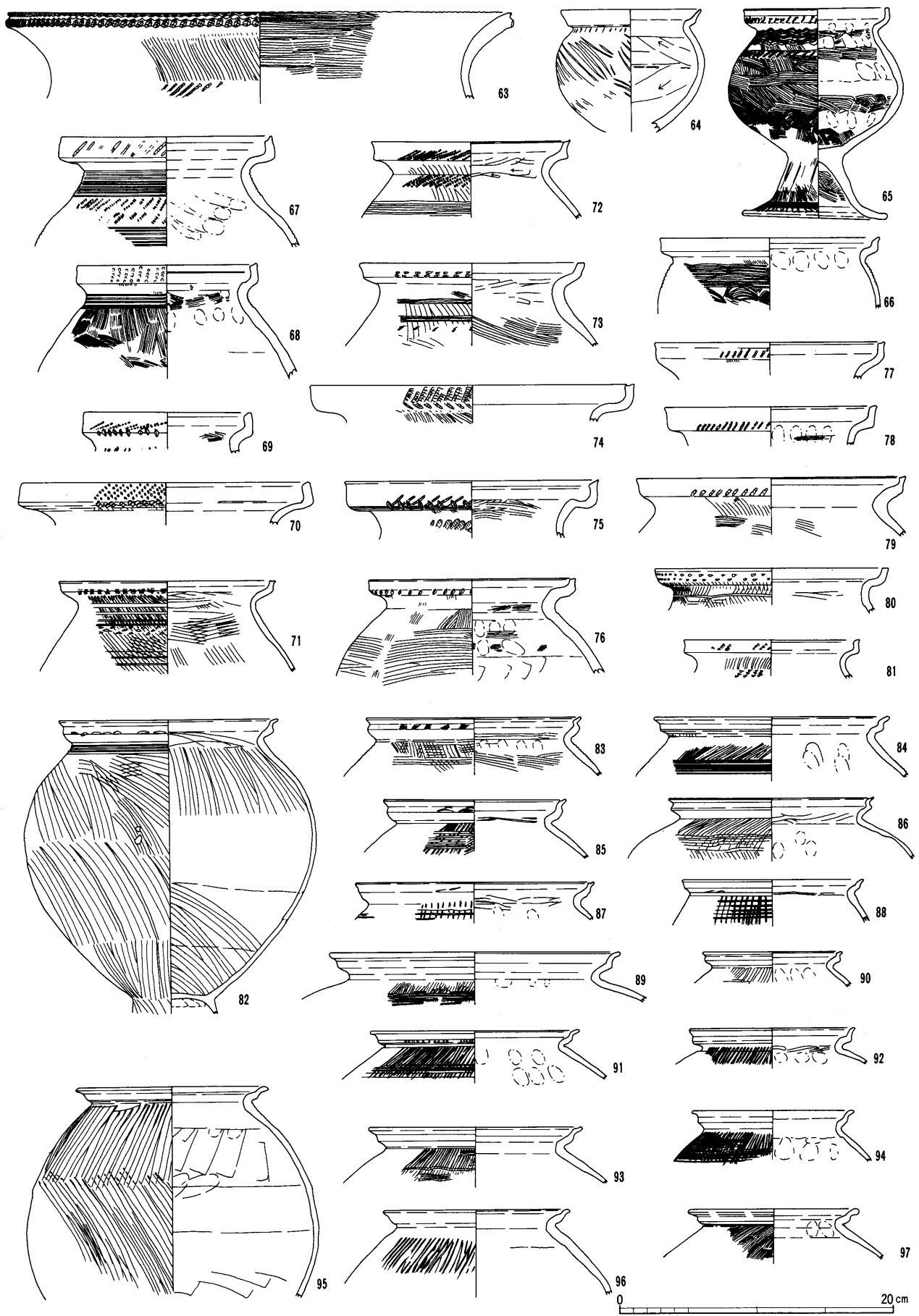
高杯A3 121。杯部下部にわずかに稜の痕跡が残し、口縁部にかけ内弯して延び、杯部は深い。

高杯B 122。椀状の杯部で口縁に向かって内弯気味に立ち上がる。外面に細かいヘラミガキが施される。

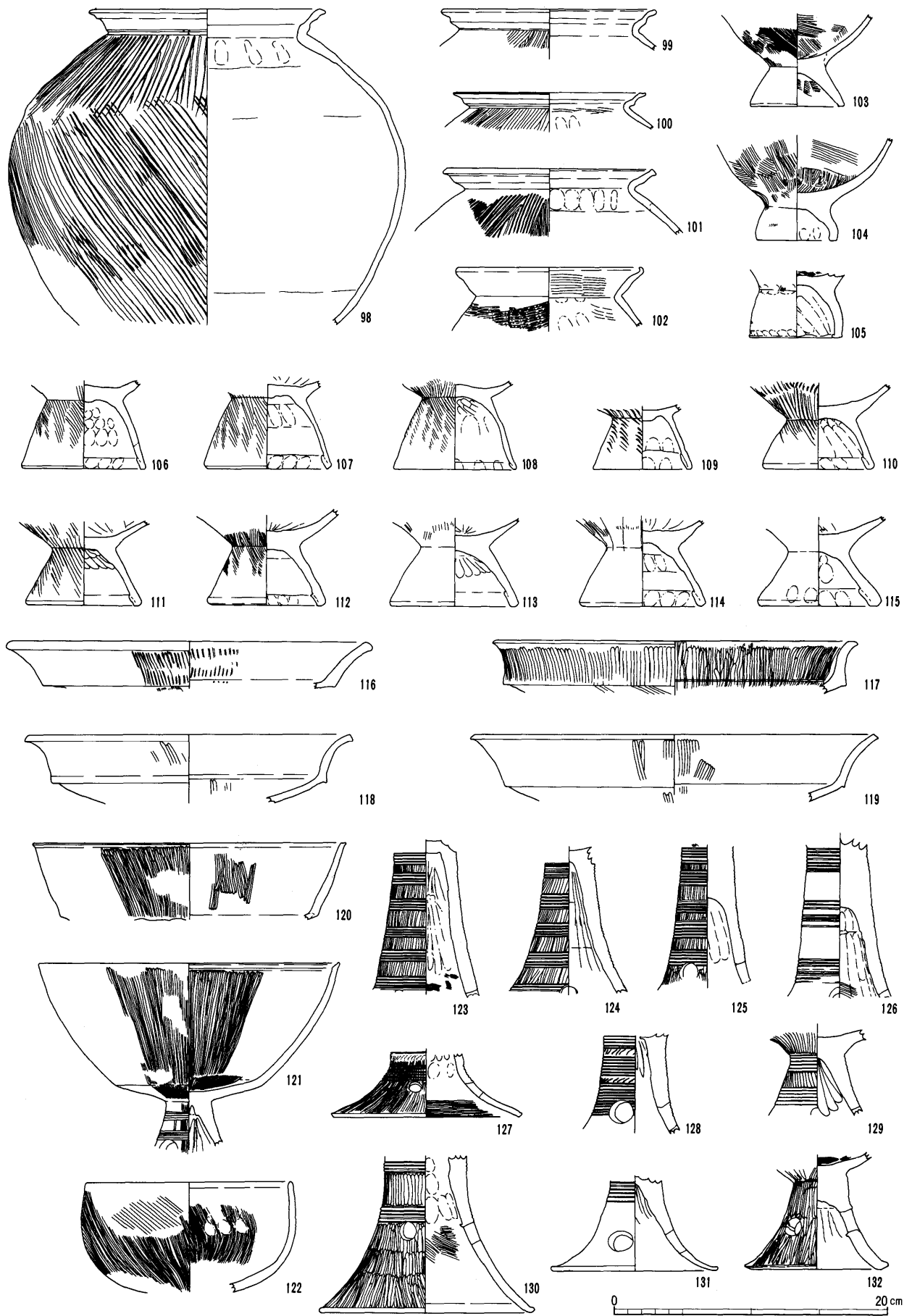
高杯D 133。杯中央部で段をもち、口縁部に向かって直線的に開く。搬入品の可能性がある。

高杯脚部A 123~128・130・131。縦方向のヘラミガキのち櫛描横線が施され、下半に穿孔される。杯部との接合部が比較的薄いもの(123・124)と厚いもの(125・126)がある。また、低脚のもの(131)もある。

高杯脚部B 裾部にかけて内弯気味に開き、上半に穿孔される。縦方向のヘラミガキのち櫛描横線



第90图 大溝下層出土土器実測図(3) 1:4



第91图 大沟下層出土土器実測図(4) 1:4

の施されるもの(134~136)と施されないもの(137・138)がある。

高杯脚部C 直線的にのびる脚部で、外面にはヘラミガキが施され、透孔のないもの(139)とあるもの(140)がある。

高杯F 直線的に開く杯部と、裾が屈曲して開く脚部の特徴から分類した。杯部は141のみである。

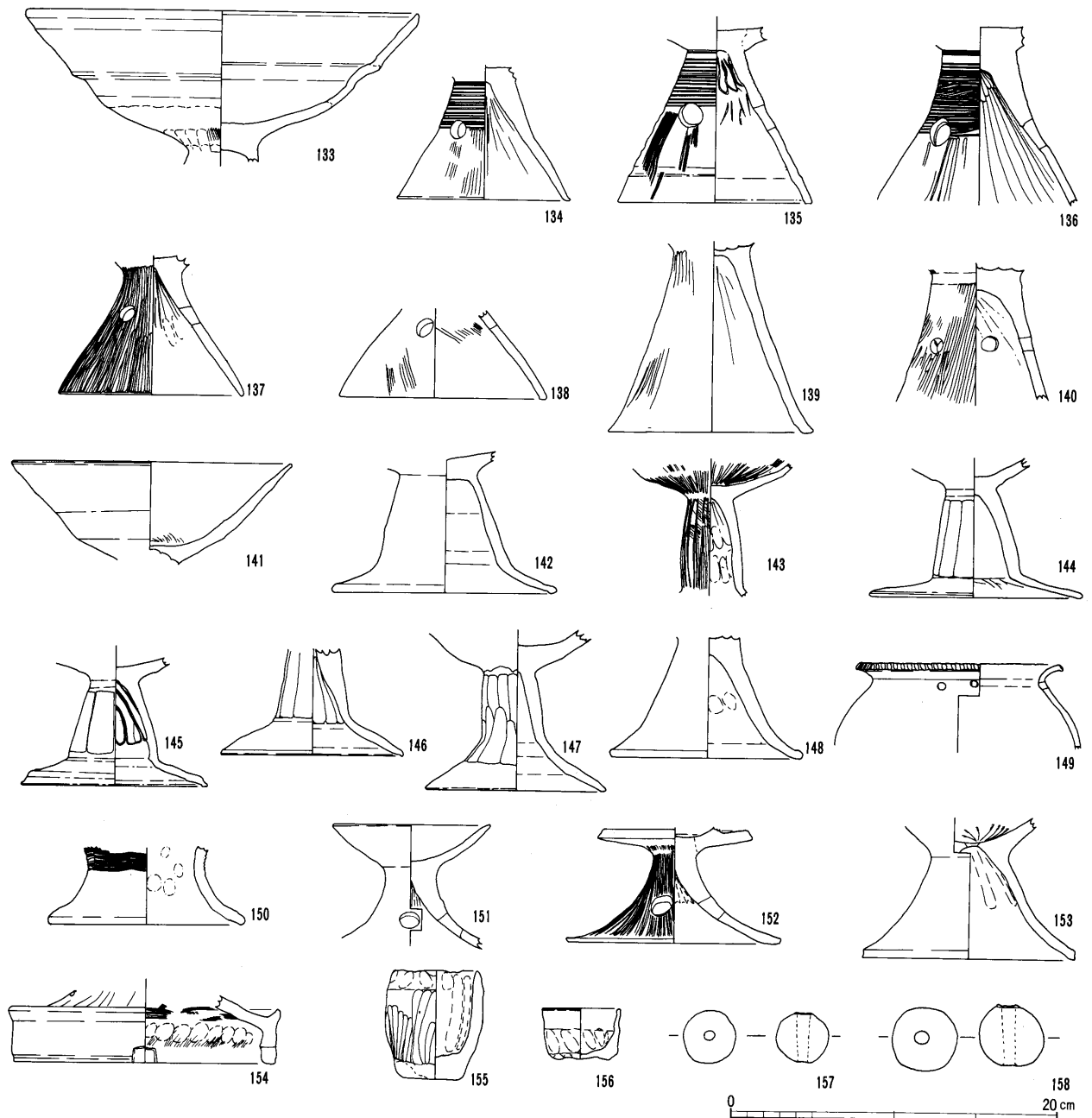
高杯脚部D 柱状部の径の太いもの(142)、細くヘラミガキが施されるもの(143)、縦方向板ナデの

施されるもの(144~147)がある。

高杯脚部E 148。脚部が裾に向かって緩やかに開くタイプのものである。

鉢A 149。頸部に2個一対の紐孔が穿たれる。口縁は大きく外反し端部に刻み目がある。本遺跡東方に位置する納所遺跡^②に類例がある。

鉢B 口縁部が受口状を呈し、脚台を持つものをB類としたが、全体の形状がわかるのは65のみである。65は小型鉢に裾部の緩やかに開く脚部がつく。



第92図 大溝下層出土土器実測図(5) 1:4

外面に櫛刺突文、波状文、ヨコハケが施され、調整の点でも甕C類との共通点が認められる。丘陵を挟んで北方の毛無川流域に位置する六大B遺跡で類例^③がある。64・66は脚部の有無は不明である。口縁部が外反して端部は尖り気味になる。

器台 下層からの出土は5個体(150~154)である。150は円筒状の脚部から裾の開くタイプで、杯部も同様に開くものであろう。151・152は底部径が杯部径を上回るもので、脚部は大きく外方に開き、透孔が3方向から穿たれる。151は皿状の杯部で口縁端部が尖り気味になる。152は杯部が水平方向に、その内側は上方向にのびるが、欠損している。153は高杯H類と類似するが、杯底部が焼成後に穿孔される。154は裾部が上下に張り出して直立する。裾の接地面に切り込みが認められ、おそらく等間隔4方向に施されるものであろう。愛知県朝日遺跡に類例^④がある。

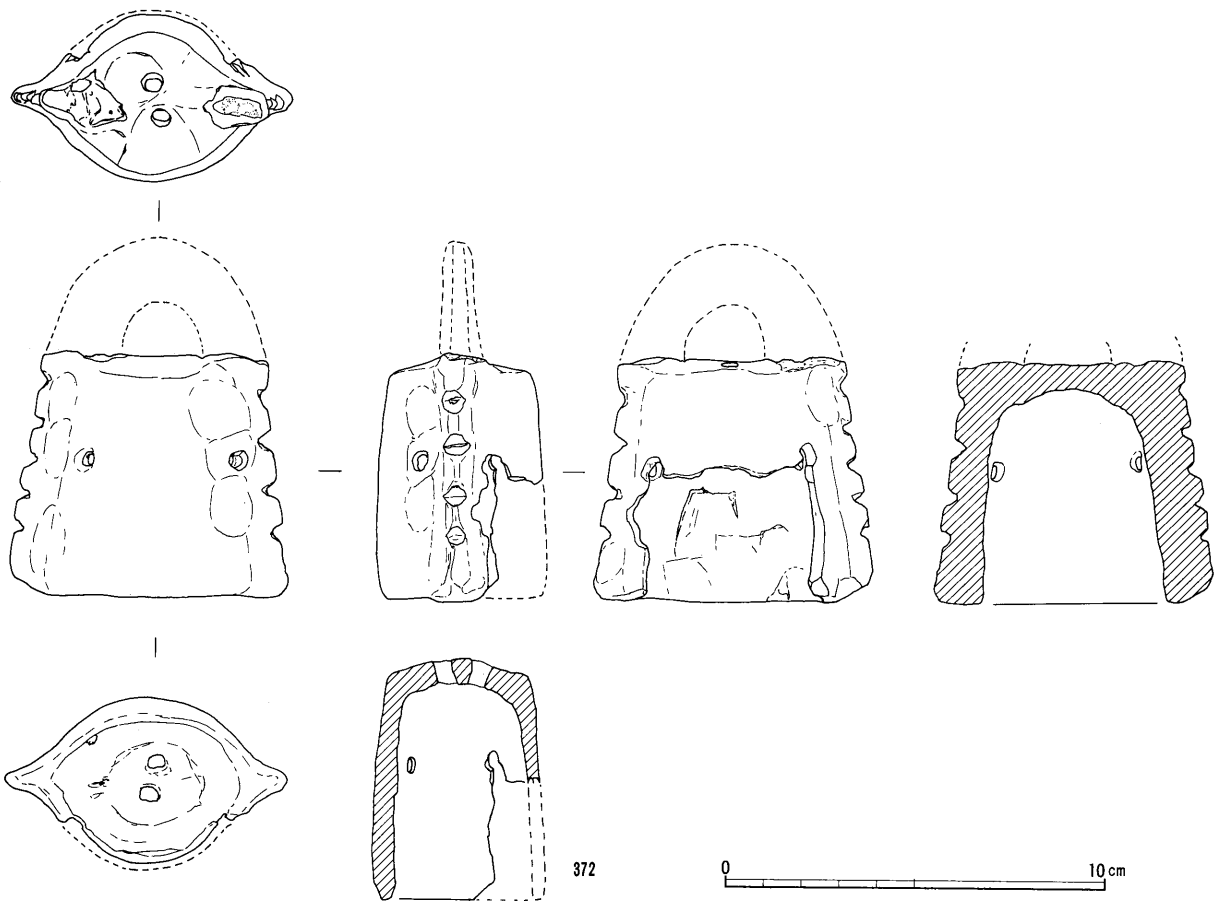
ミニチュア土器 円筒形で厚手のもの(155)と薄手のもの(156)がある。両者とも手捏ねで調整され

るが155には外面にヘラミガキが施される。

土錘 球状のもの(157・158)である。図示していないが管状のものもある。

銅鐸形土製品 (第93図)

銅鐸形土製品(372)は、大溝下層の灰白色礫混じり砂層から多量の弥生時代後期~古墳時代前期の土器と共に出土した。出土状況は湧水が多く不明である。鈕の部分と鐸身片面の1/2が欠損しているが、残り具合は良く、台形状で水平断面は楕円形を呈する。残存高6.5cm、復元推定高9.5cm、鐸身の高さ6.3cm、裾長径7.3cm、短径4.5cmで薄手の丁寧な作りである。鐸面は無文で鱗部をかなり誇張して刻んでいるが左右対称とはならずそれぞれ4カ所と5カ所の刻み目がある。型持孔は竹管状のもので刺突され、舞部にも同様の孔が2つあるが、これは中心線からずれている。内面には舌などによる擦痕は認められない。胎土は比較的緻密で、焼成も堅緻である。鈕の欠損は、鐸身部分との接合部分の剝離によるものと考えられる。鐸身部片面の欠損は、型持孔の存



第93図 大溝下層出土銅鐸形土製品実測図(1:2)

在と器壁の薄さに起因する比較的弱い部分への力の作用によるものであろう。

B. 大溝中層出土土器 (159~236)

壺A 1・A3・H・I、小型丸底壺A・B、甕B・C・D3・D4・E、甕脚台B、高杯A1・C・E・F・G・H、高杯脚部A・D・E、杯、器台、須恵器が出土している。

壺A3 159。頸部から緩やかに口縁部はのび、端部はやや肥厚する。口縁内面に竹管刺突文が施される。体部外面にはヘラミガキが施される。

壺A1 160・161。口縁部は大きく外反する。外面にハケメが施され、161の口縁端部にはヘラ状具による格子目がみられる。

壺H 162。厚い器壁から口縁部は薄く短く外反する。短頸壺と認められるのはこの1点のみである。

壺I 163。小型丸底壺と類似するが、口縁部が体部に比べて比較的短い点から小型壺として分類した。胎土は密で調整も丁寧である。

小型丸底壺A 下層に比べて、B類と共に量的に少なくなる傾向にある。体部がやや扁平気味のもの(164)と球状のもの(165)がある。165には比較的丁寧な調整が施される。

小型丸底壺B 体部が球状のもの(166)、扁平になるもの(167~169)、算盤玉状のもの(170)があるが、169の底部には意図的と思われる打ち欠きが認められる。

甕B 179。頸部が屈曲して開くもので、口縁端部に刻み目がみられる。178は頸部の屈曲が弱く刻

み目も認められないが同様のものとしてとらえられよう。

甕C C1類(175)・C2類(176・177)ともに認められるが、下層に比べその量は少ない。

甕D D1類・D2類がほとんどなくなり、D3類(187~193)がその中心となる。口縁部径が12~15cmの範囲のものである。また、D4類としたものは、口縁部の屈曲の痕跡を残すもの(194)と、やや小型のもの(195)が認められる。

甕E 平底形態を呈し、大型のもの(180)である。外面にはタテ方向の細かいハケ調整が施される。頸部が屈曲して小型のもの(181)も同系統のものと考えられよう。

また、分類はしえなかったが小型の台付甕(182)や受口状となる甕(184)などがあるが、184は甕Cとは形状が異なり、別系譜のものと考えたい。

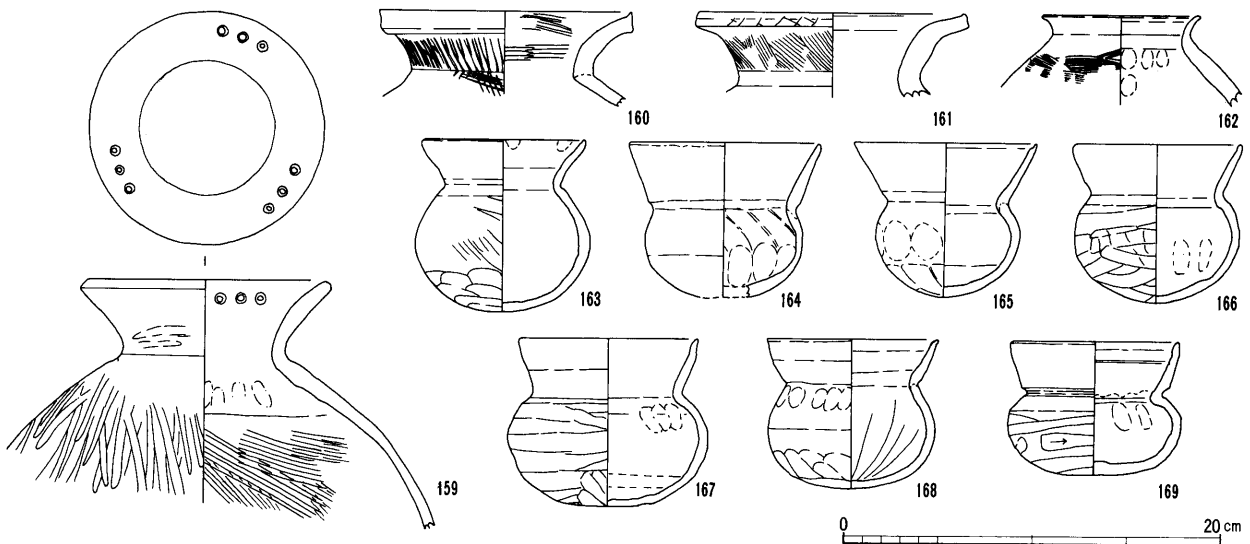
甕脚台B B1類(196~198)・B2類(199・200)・B3類(201~203)がある。B3類には裾端部の折り返しのないもの(201)もある。

高杯A1 204。杯中央部から緩やかに外反する。

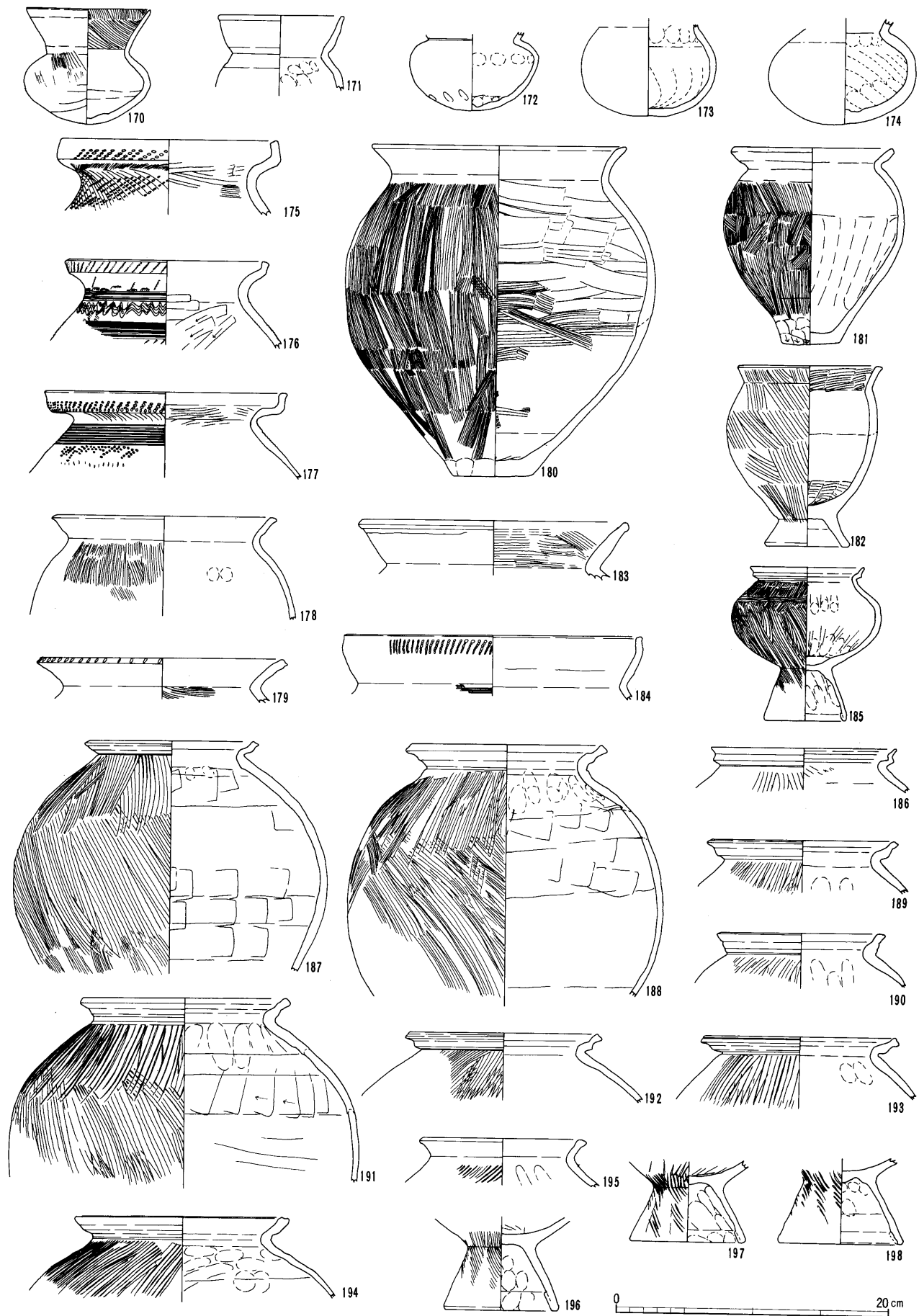
高杯C 205。深い椀状も杯部で口縁部は外反する。出土はこの1点のみである。

高杯E 直線的に開く杯部で端部が直立気味に内弯し、脚部はおそらく大きく開くものと考えられる。

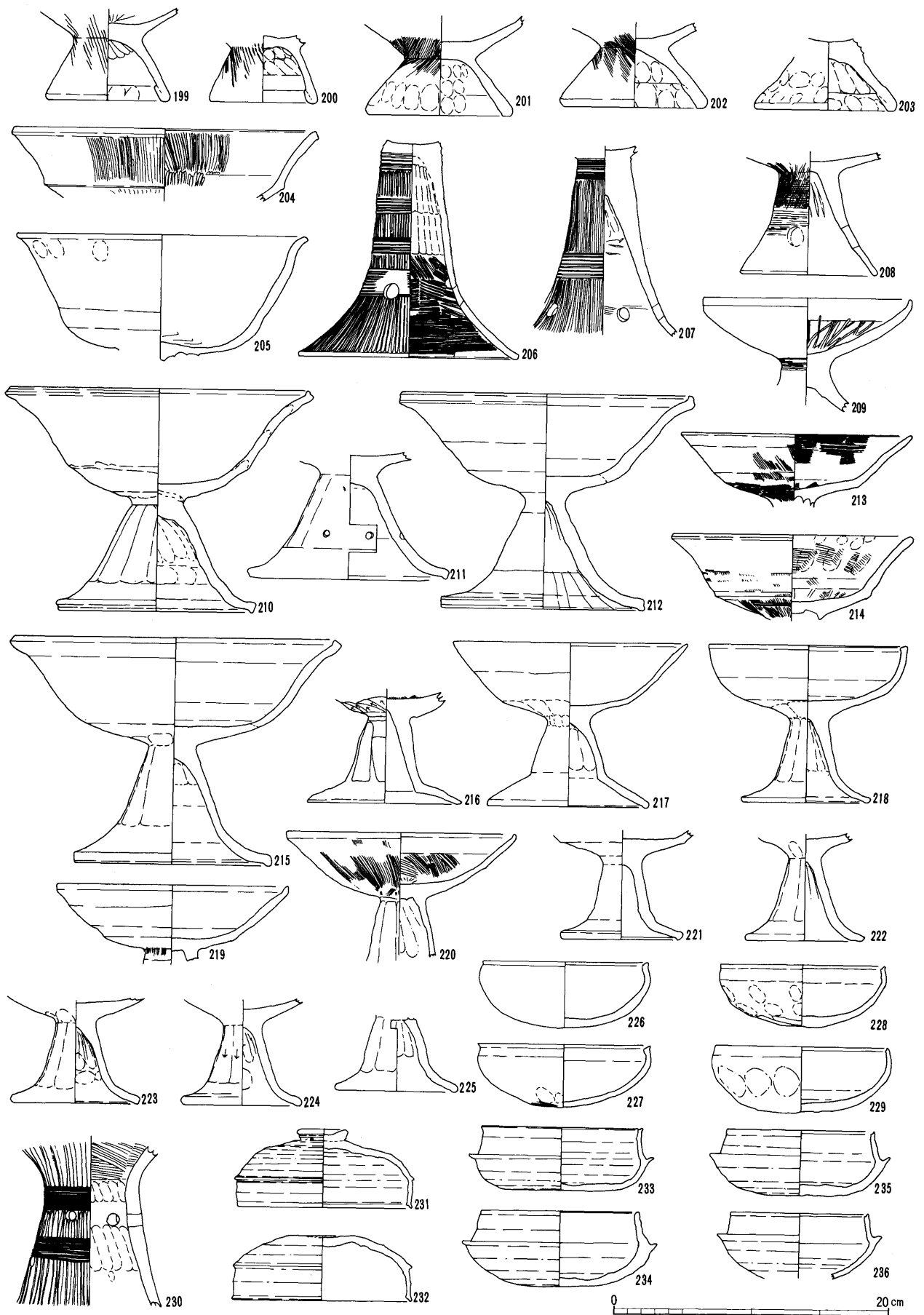
高杯F 213・214は、杯部の稜以下に細かいハケメが施され、口縁部にかけてはやや外反気味に開く。217は杯部が直線的に外上方へのび、裾部は屈曲して開く。219・220は杯部が内弯気味に緩やかに開き、



第94図 大溝中層出土土器実測図(1) 1:4



第95图 大溝中層出土土器実測図(2) 1:4



第96图 大溝中層出土土器実測図(3) 1:4

口縁端部がわずかにつまみ上げられる。

高杯G 全体の形状がわかるのは218のみである。杯部は口縁部にかけ内弯し、端部に明瞭な面を持つ。

高杯H 210～212・215。大型の高杯である。杯部は口縁部近くで外反し、端部がつまみ上げられる。脚部は裾に向かって大きく開き、裾端部も口縁端部同様つまみ出される。

高杯脚部D 216。屈曲して開く裾部をもつ。

高杯脚部E 直線的な脚柱部から裾部は緩やかにひろがるもの(221～225)で、端部がつまみ出されるもの(221・223)もある。

杯 226～229。口縁部にかけて内弯し、端部に面を持つ。法量は、口径12cm前後、器高4.8cm前後で揃っている。

器台 230。杯部と脚部の境界が明瞭でないタイプのもので、外面にタテ方向のヘラミガキののち、櫛描横線2条、透孔が4方向・2段に穿たれる。

須恵器 蓋には有蓋高杯の蓋でつまみがつくもの(231)と、杯の蓋でつまみのないもの(232)がある。両者とも天井部の1/2以上に回転ヘラケズリが施され稜も明瞭に認められる。田辺編年^⑤TK23～47型式に併行する。杯身は、口縁部が垂直で外反気味に立ち上がり、底部が回転ヘラケズリで稜もシャープなもの(233)がある。234・235はややシャープさがなくなり、236はやや小型のものである。233はTK208型式に、以下はTK23～47型式に併行するものである。

C. 大溝上層出土土器・鉄製品(237～262・373)

壺A4・F・I、小型丸底壺A・B、甕C2・D3・D4、高杯H、高杯脚部E、須恵器、鉄鏃などが出土している。

壺A4 237。口縁端部が肥厚して垂下し、外面に櫛羽状刺突文を施す。

壺F1 238。やや扁平気味の体部で、肩が張る。全体に丁寧なナデ調整がされる。

壺F2 248。太い頸部から口縁部は直線的に大きく開き、端部は面をなす。体部には粗いハケメが施される。壺よりむしろ甕の範疇でとらえられるべきものかもしれない。

壺I 239。口縁部が大きく開き体部径を上回る。全体的に器壁は厚く、底は上げ底気味になる。

小型丸底壺A 240。口縁部が外反して開く。

小型丸底壺B 241。体部下半に最大径があり扁平気味の体部で器壁は厚い。頸部から緩やかに開く口縁部をもつ。239同様小型壺とする方が妥当であろう。

分類は出来なかったが、平底の壺の体部(242)も出土している。

甕C2 250。口縁部が受口状を呈する甕の中で唯一全体の形状のはっきりした資料である。小型の脚台がつき、体部上部に焼成後穿孔される。頸部にヘラ状具による凹線が数条施され、体部の調整はハケによるもので、他のC類の甕と比較すると若干様相が異なる。形態上の特徴からC2類として分類したが、別系譜のもの可能性がある。

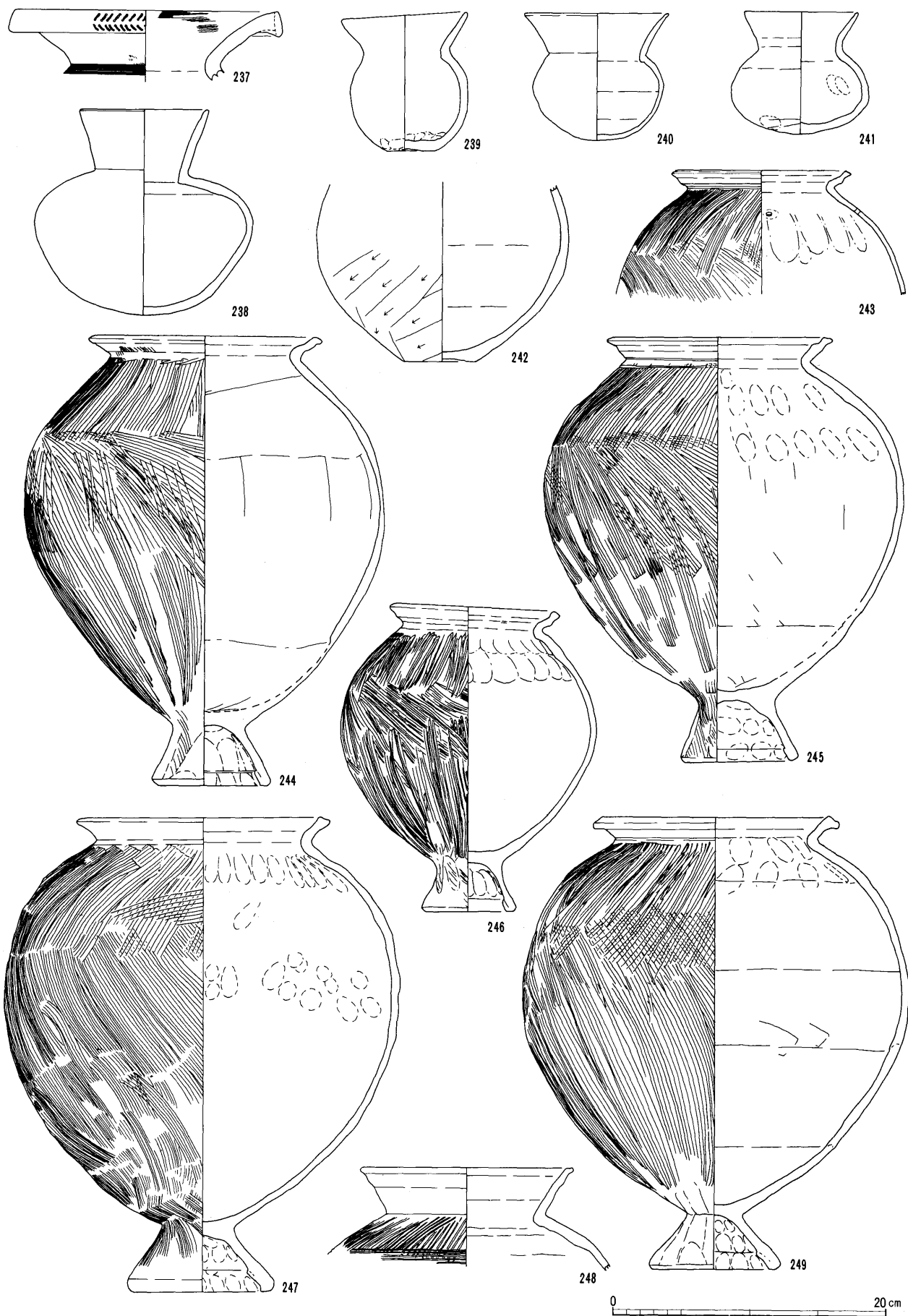
甕D3 遺物の遺存状況は良好で、ローリングをあまり受けていない。大型のもの(243～245)と中型のもの(246)があり、体部のハケメは全体的に粗く、羽状に施される。243の体部には焼成後に穿孔される。

甕D4 247・249。D3類と同様に遺存状況は良い。口径17cm前後、器高30cm前後の大型品で、口縁端部が肥厚して水平方向にのびる。脚台部は大きく開く形状となる。「宇田型」と称される甕^⑥である。

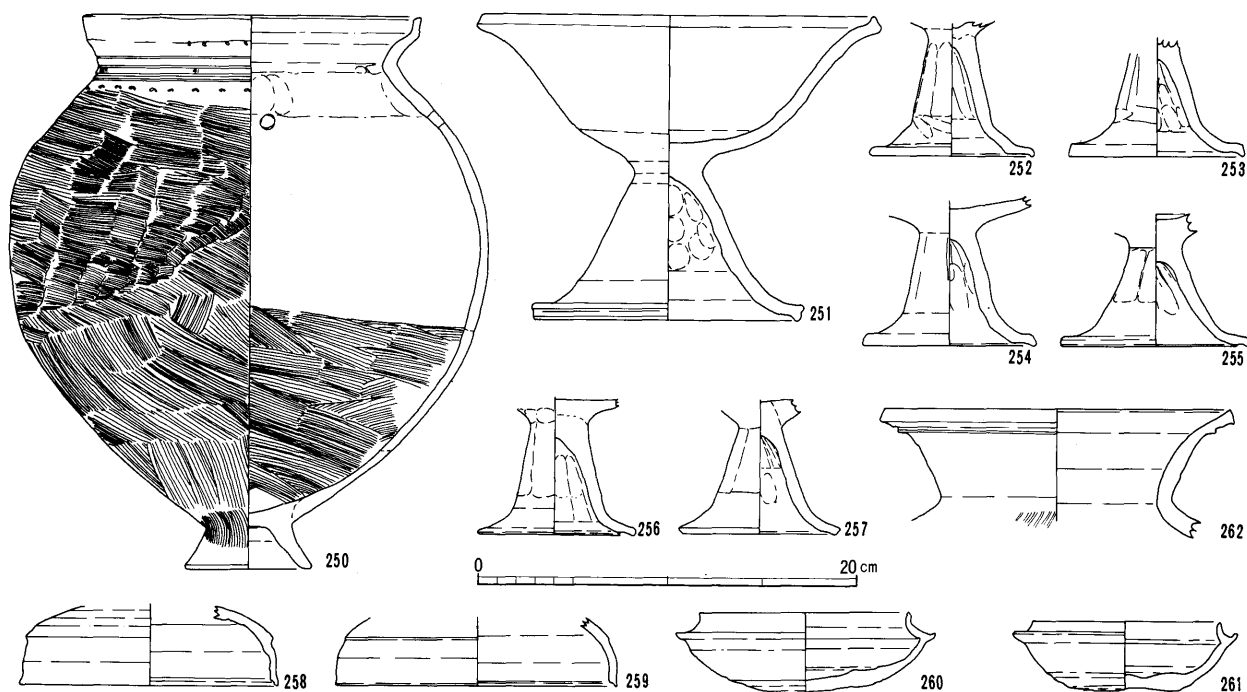
高杯脚部E 252～257。外面は板状具によるナデが施される。裾端部がつまみ出されるものが多い。

高杯H 251。大型の高杯で、口縁端部、裾端部はそれぞれつまみ出される。

須恵器 杯蓋は、稜が認められ口縁端部内面に段を残すもの(258)と、口径が大きく稜がなくなって、口縁部は内径して端部にわずかに段が認められるもの(259)がある。時期的に前者がMT15型式に、後者はTK10型式に併行するものである。杯身は受部からの立ち上がりが緩く短いもので、260は大きく内傾してから口縁端部が短く直立する。261は口径も小さく、立ち上がりも短い。底部はヘラ切り後ナデ調整される。TK209～TK217型式に併行するものである。262は甕の口縁部で、体部外面にタタキが認められる。杯蓋・杯身の形状から見て、いずれも中層出土のものに比べて時期的に後出であることはあきらかで、大溝の埋没状況との齟齬をきたすような資料の混入は認められない。



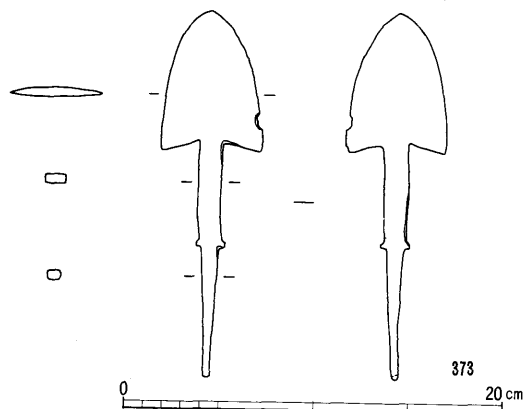
第97图 大溝上層出土土器実測図(1) 1:4



第98図 大溝上層出土土器実測図(2) 1:4

鉄鍬 (第99図)

鉄鍬(373)は大溝上層の北肩の灰色粘土層中の古墳後期の土師器高杯、須恵器類の土器溜まりで出土した。完形で扁平な三角形状を呈し、基部はやや内に入りこんで基部に至り茎尻は尖る。全長9.5cm、刃部長3.7cm、刃部幅2.6cmを測る。(中村光司)



第99図 大溝上層出土鉄鍬実測図(1:2)

D. 大溝出土木製遺物(263~367)

木製遺物は、大溝(旧河道)の中層及び下層を中心として出土し、上層からも少量の板材が出土した。これらを使用時の用途に従って以下のように分類整理した。

- 1 農工具 耕作用農具(鋤・鋤)
- 収穫・脱穀用農具(横槌・竖杵)

工具(横斧膝柄)

- 2 容器 槽
- 3 家具 案
- 4 紡績具 編台の目盛り板、木錘
- 5 建築部材 柱材、垂木、楣材、蹴放し、桁材、校木、壁板、梯子
- 6 杭材
- 7 その他

全体として、杭類及び建築部材の出土が顕著であり、生活用具類はそれほど多くなく、2は1点、3も2点のみの出土である。また、これら製品以外にも、粗く枝打ちを施しただけのものや自然木等も数多い。

報告にあたっては、人工の加工を施したもののうち、その形状がわかるものや加工痕が明瞭なものについてはできるだけ報告に努めた。欠損部が大きい棒状品や板状品、杭の一部は割愛したものもあるが、ほぼ出土遺物の全体像はつかめるであろう。なお、遺物は層位をもとに取り上げられているが、当報告ではレイアウトと記述の煩雑さを避けるため、層位に拠らず、上記の分類に従い器種毎にその概要や特徴的な遺物について報告することとし、個々の遺物の出土層位や計測値、樹種等は観察表に譲りたい。

(渡辺尚登、穂積裕昌)

1. 農工具

農具としては、鋤・鋤・横槌・竖杵が、また工具としては、横斧膝柄が出土しており、計9点を数える。

a. 農具

狭鋤(263) 身の長さ18.3cm、幅9.3cmで、身の形態が縦長の長方形を呈する。柄が柄孔に装着された状態で遺存する。柄は、柄孔周辺が緩やかに隆起する肥厚部分が削りだされた面にのびており、この面が使用者に正対する前面となっている。なお後面は平滑面をなす。刃部は、刃縁のみならず、両側縁も削られて刃のように仕上げられている。身の頭部先端は切断されたような面をもつが、意図的なものか、単なる欠損か不明である。

膝柄鋤身^⑦(264~266) 264・265は別木の膝柄を緊縛して、使用される鋤の身である。これらの鋤身にとまなう膝柄は出土していない。どちらも膝柄を受けるための着柄軸部の上部を欠損するが、身の形態はともに肩部がゆるやかに下がる櫛形を呈す。また、着柄軸部や身部の幅・厚さ、身部の推定全長もほぼ同じである。作りも同様で、身の厚さは刃先及び両側縁に向かって薄くなり、前面は平滑に、後面は中央を厚く削りだしている。身部の断面はゆるやかな船底形を、着柄軸部の断面は、前面を平坦とするカマボコ形を呈す。266は膝柄鋤身の着柄軸部である。先端には紐がかりとなるような瘤状の隆起をもち、断面はカマボコ形を呈す。264・265の樹種がカシ類なのに対し、266はコナラであり前者とは別個体のものである。なお、266は鋤の膝柄台部の一部の可能性もある^⑧。

組合せ鋤身(267) 267は、別木の柄を受けるための着柄軸・着柄溝・柄孔をもつ、組合せ式の鋤身である。身の形態は、刃縁部を欠損し、身は半分しか遺存しないが、着柄軸に対し直角に張りだす肩をもつスコップ状と思われる。身の上面中央に設けられた着柄溝の底は身の面に対し水平に削られており、柄も水平に延びるものと思われる。溝の中程に穿たれた円孔は柄を固定するためのものと思われる。

横槌(268) 槌部は粗く面取りされただけで、部分的に樹皮が残る未成品である。槌部の長さは16.0cm、推定仕上がり径6cmで、長く・細いタイプであ

る^⑨。

竖杵(269~270) 搗部と握部の境に凸帯をもたない269と、搗部と握部の境に凸帯をもつ270の二形態がある。ともに両搗部は遺存するが、握部を欠損しており、その形状は不明である。また、竖杵に伴う臼は出土していない。269の搗部は、先端から握部境まで同じ太さで、その断面は楕円形である。270の握部は、断面は円形で、先端から握部にかけて徐々に細くなっており、握部との境に幅3.6cmの低い凸帯をもつ。搗面は両者ともに丸く、使用による磨滅痕が著しい。270の両搗面には幅1~2cmの浅い溝状の加工があるが、機能については不明である。

b. 工具

横斧膝柄(271) 台部の基部先端に、身部と緊縛するための紐がかりとなる部分がないことから斧膝柄とした。台部の幅が狭く、柄の径も細い、小振りのものである。基部と装着部との境の両側面に浅い抉り部があり、装着部の後面は平滑面を、前面は中央に稜が走る山形を呈する。前面の装着部に近い部分に押圧によると思われる剝離痕があり、袋状の鉄斧が装着されていたと思われる。(渡辺尚登)

2. 容器

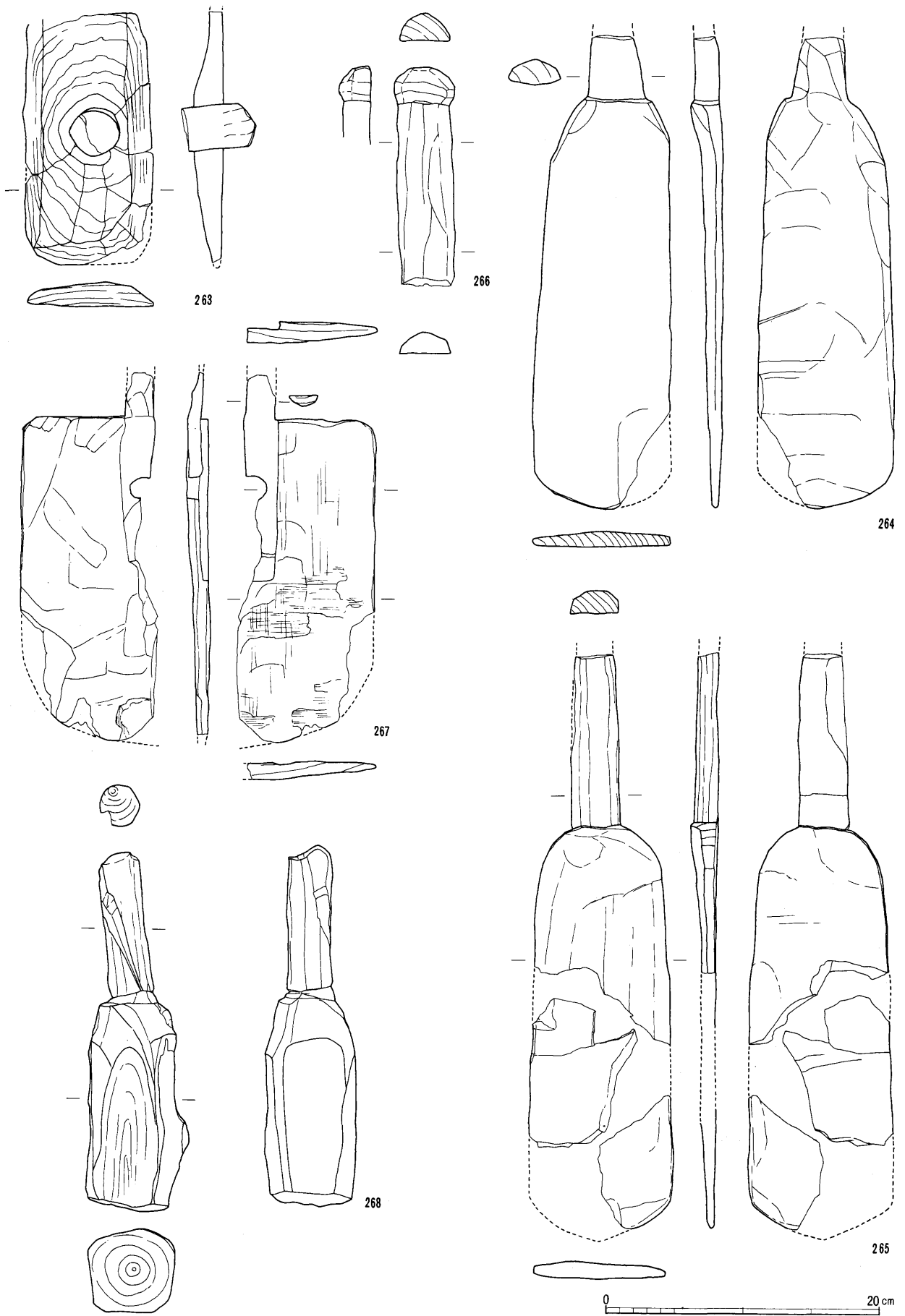
槽(272) 欠損部が大きく全体の平面形は不明であるが、おそらく長形状となるものであろう。体部は、全体に薄く作られている。体部に比べて厚みと高さをもつ長方形の脚台が作り出されている。遺存しているのは1個のみであるが、本来的には長軸方向に沿って2脚2対の計4個の脚台が存在したものであると思われる。体部底面と側面の境は明瞭で、側面が直線的に立ち上がる。

3. 家具

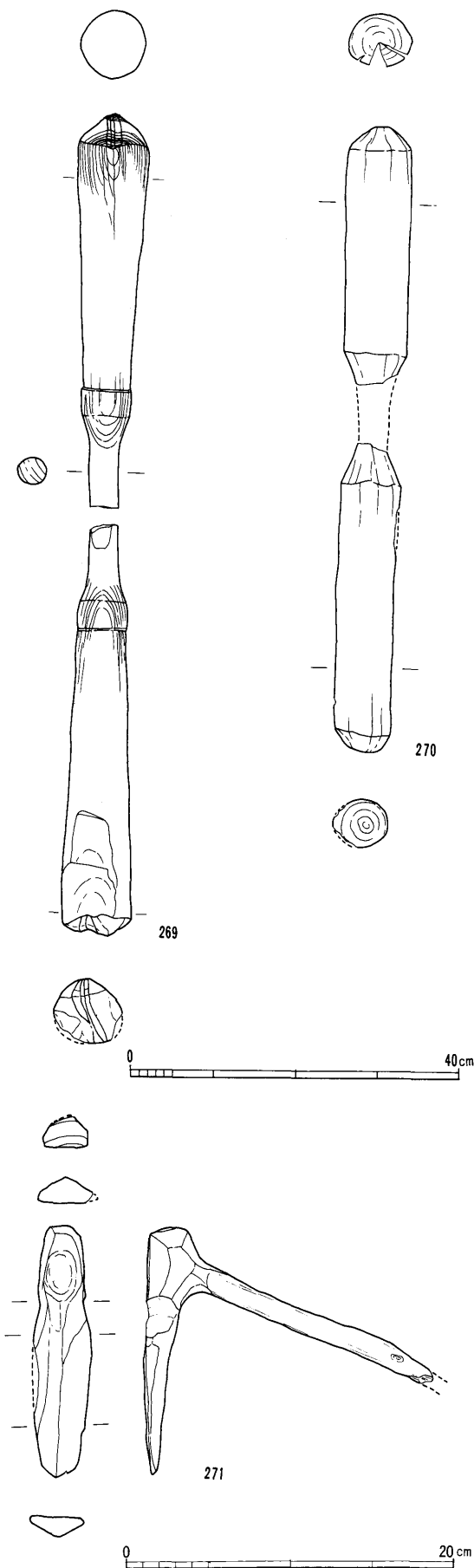
案(273~274) 2点出土しており、いずれも天台部である。273がひとまわり大きいものの形状には全く同じである。脚部との接合には天台裏面に溝を彫ってそこに脚部を装着する形状をとるが、その溝断面は方形である。天台裏面は、溝が彫られた中央部は厚いが、側縁部の4辺は削り込まれて外側へ向かって薄くなっていく形状をとる。

4. 紡績具

a. 編台の目盛り板(275~276) いずれも長方形の薄板の長辺部両側に刻みが施されたものである。



第100図 大溝出土木製遺物実測図（農具、1：4）



このうち275は、長辺2辺のうち1辺の側縁部が削り込まれて薄く仕上げられてそこに大きめの刻みがやや不間で施されているのに対し、対辺側の薄く削り込まれていない辺ではV字形のコンパクトな刻みが17cm間隔で施されている。端部は欠損しているものの、先端部は端部に向かって細くなっていくのがわかる。276は、やや残りが悪いが、断面が平行四辺形となって長辺部両側縁が薄く仕上げられ、そこに約16cm間隔で刻みが施されている。これも先端部はやや細められている。

b. 木錘(277) 丸太材を適当な大きさに切断しその中央部に溝を彫り込んで鼓状とし、両端部も切断面の角が取れるように削ぎ落としたものである。

5. 建築部材^⑧

太田遺跡大溝(旧河道)出土の木製品のなかでも杭類と並んでその出土が顕著な遺物である。そのなかでは、壁板などの板材系の部材は比較的少なく、柱材などの細長い材の出土が目立つ。

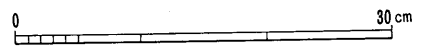
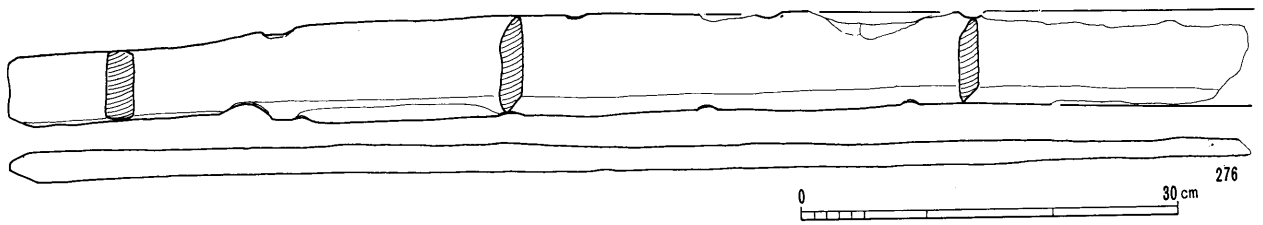
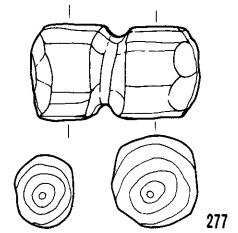
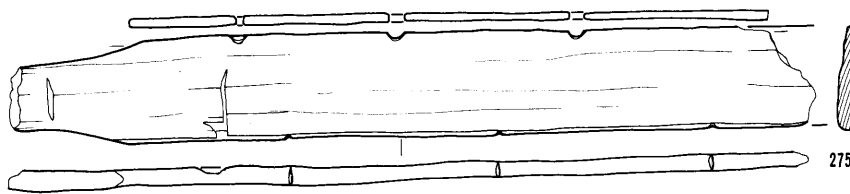
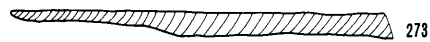
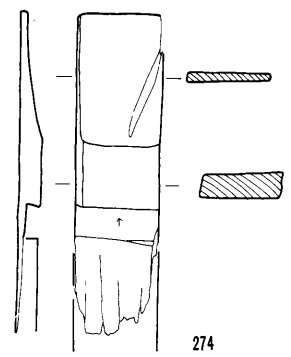
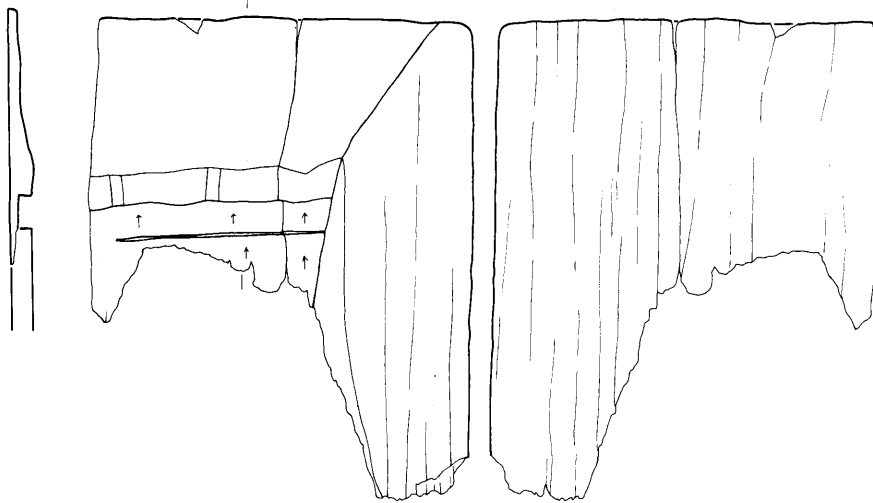
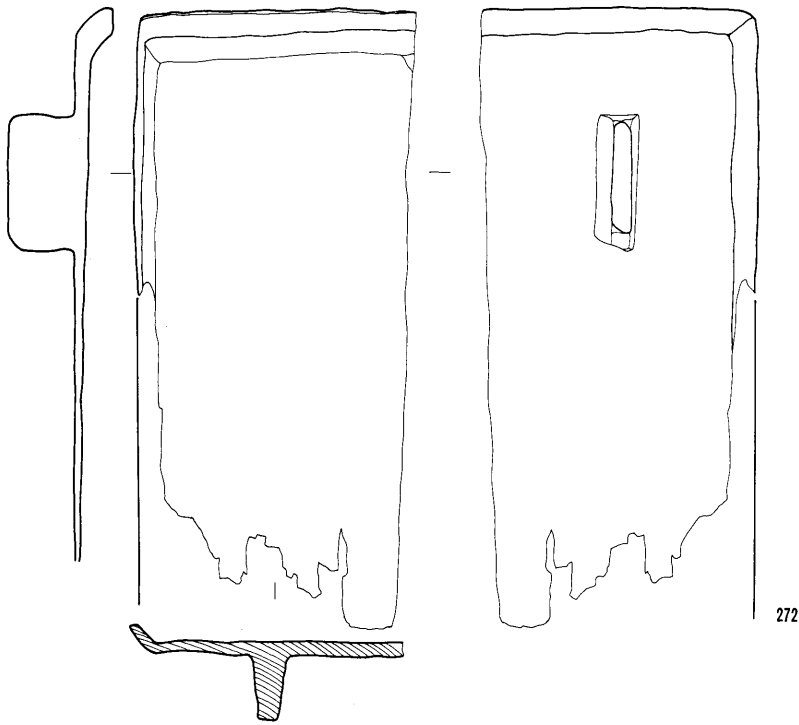
一応、36点を建築部材として認めたが、これ以外にも本来は建築部材であったものが他の部材に転用されていたり、小片となったため現状では建築部材としては認められないものも少なからず存在すると思われ、本来の実数はさらに多いものであろう。

a. 柱材 腐蝕が大きく、不明な点も多いが、竪穴住居用と考えられる材と、掘立柱建物用と考えられる材及び不明の材があり、掘立柱建物用の材はさらに高床建物用と非高床建物用に細分される。

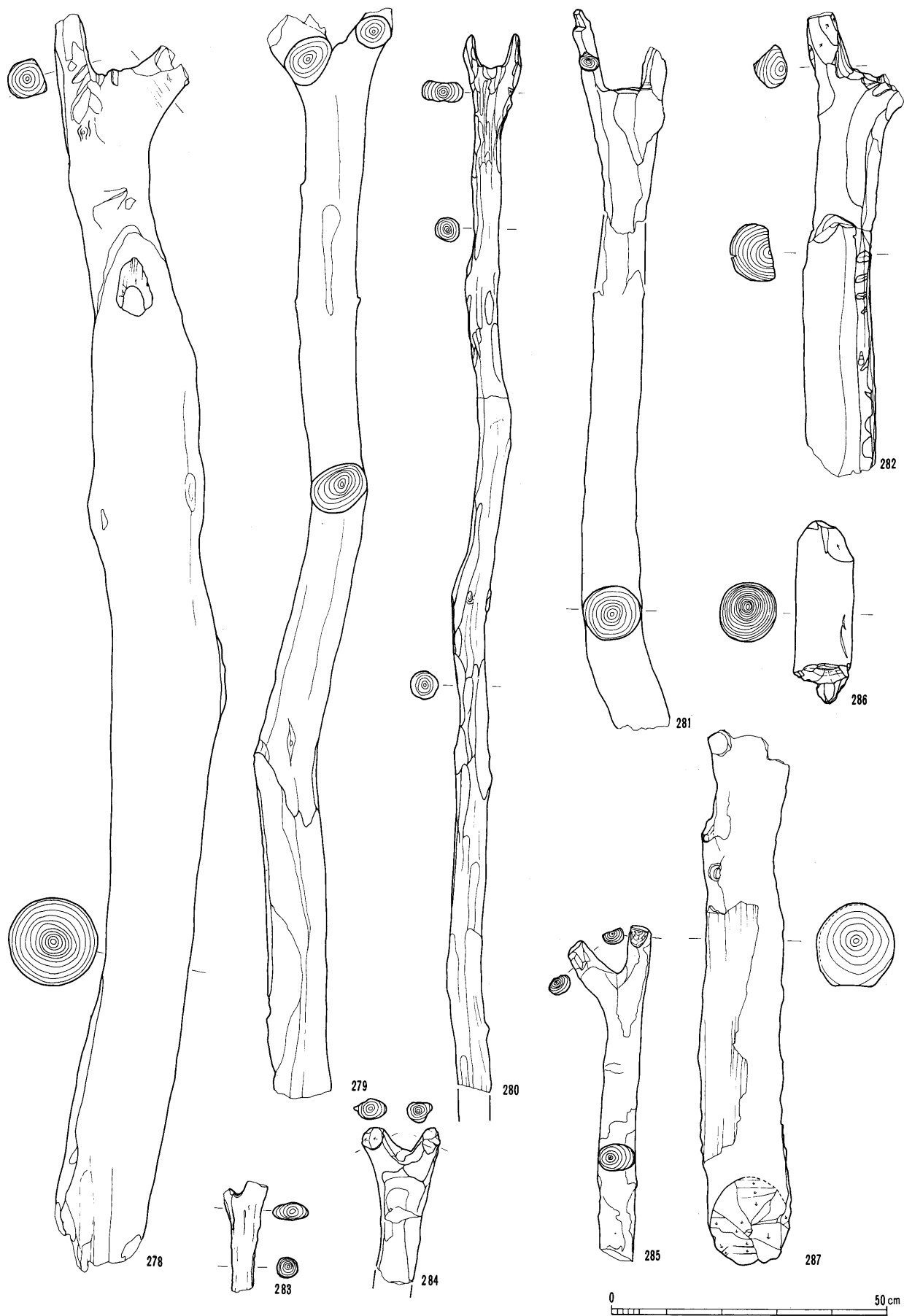
竪穴住居用柱(278~285) 上端部が二股となっていることから竪穴住居用の柱材と判断した。多少屈曲もある樹幹部分の二股となる先端を整え、粗い枝打ちを施しただけの程度のもが多いが、280は比較的丁寧な加工がなされている。全体が残っているものはないが、278は全長227.6cmに及ぶ大きなもので、二股部には緊縛痕も残る。

高床建物用柱(288~290) 288は、樹幹部分を途中から半截して断面半円形としたもので、高床倉庫に使用された柱である。半截部が高床倉庫床上部となり、半截していない丸太のままの部分が床下部になるものであろう。289は、やや小振りであるが、小型高床建物の束柱となるものと思われる。下部の腐蝕の激しい部分が使用時に柱穴に埋められていた

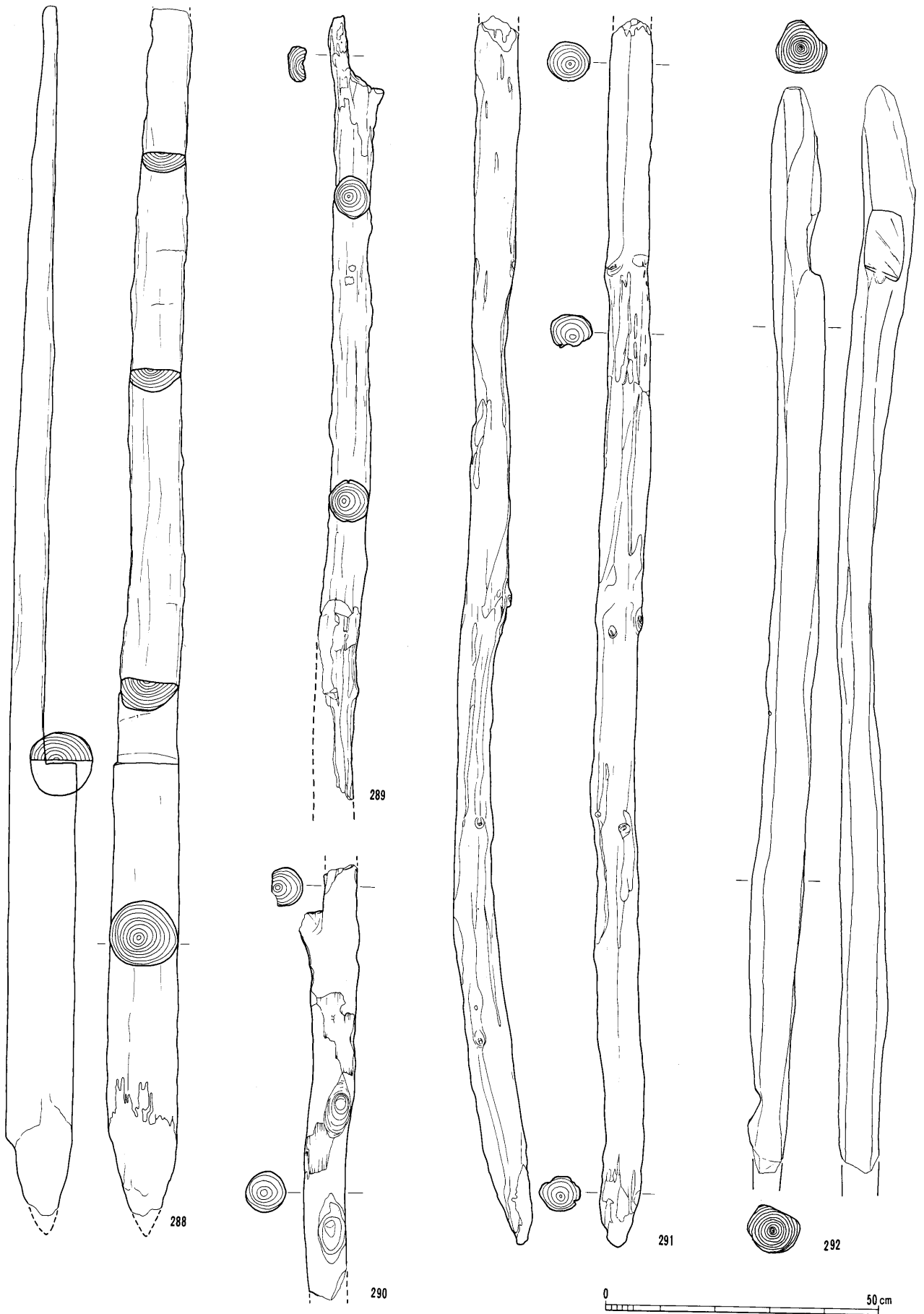
第101図 大溝出土木製遺物実測図(農工具、269・270は1:8、271は1:4)



第102図 大溝出土木製遺物実測図 (容器・家具・紡績具、1:6)



第103图 大溝出土木製遺物実測図 (建築部材、1:10)



第104図 大溝出土木製遺物実測図 (建築部材、1 : 10)

部分とすると、地表から床までは約1mの高床となる。柱頭の叉木で床桁を受けたのであろう。290も小片ながら289と同様であろう。

非高床建物用柱(291~292) 比較的長めの柱がほぼまっすぐに延びる断面円形のもの(291)や、断面円形の柱で上端部に桁受けの抉りを入れたもの(292)を非高床の掘立柱建物用柱と考えた。いずれも破片であり、全体的な建物の規模は不明である。

その他の柱(286~287) 上端及び下端が欠損しているため、性格はいまひとつ明瞭でないが、材の大きさ等から柱材と推定したものである。このうち、287は樹種がクリであり、堅穴住居用柱である可能性が高い。

b. 垂木(293~302) 比較的細い材の上端部に抉りを入れたものである。完形のものはないが、最も遺存状態の良い294は長さ229.6cmで、下端部は杭として転用されている。頭部は、切断面をそのままにしておくのではなく、粗いながらも側縁が滑らかなになるよう切り落とされ、293などはさらに丸い有頭状に作り出されている。

c. 楣材(303) 高床倉庫の観音開きの扉口の上にくる楣材である。片側は欠損しているが端部には柱を挟み込んで固定するための両つの造り出しが存在し、それに接して方立孔と円孔が一連で穿たれている。円孔は、扉材が回転するための軸部が入る軸釣穴である。材の側面片側にはほぼ直角に立ち上がる突起が造り出されているが、これは扉の振れ止めの機能を持つものである。

d. 蹴放し材(304) 高床倉庫の扉口に据え置かれる蹴放し材である。両側端部にはやや欠損しているが、柱固定用の両つの造り出しが存在しており、それをもとにすると扉口部分の柱間は約1.2mになる。軸釣穴となる円孔が1つしかないため片開きの扉になるのであろう。材に穿たれた溝は、縦壁板(方立)をはめ込むための板溝で、その間約45cmが扉によって開閉する開口部となる。板溝から、板厚3cmで板幅は26cmと39cmの壁板(高さは当然のことながら不明)が復元される。方立溝の長さは前述の楣材のものとは異なっており、従って両者は一対のものにならないと思われる。片側側縁部に沿って4個並んだ方孔は、転用時の小舞孔であろう。

e. 桁材?(305) 板材側面に残る柄孔は一部が貫通せずに底部を残していることから、旧角材を薄く削って板材として転用されているものと推定される。柄孔は旧角材時に穿たれた壁の縦小舞柄孔と思われる。旧角材は高床建物の土居桁材もしくは桁材と推定される。その場合、柄孔が2個接して穿たれているのは時期の異なるものと思われる。長辺部側縁の柄孔も含めると旧角材で都合3時期の変遷が考えられる。

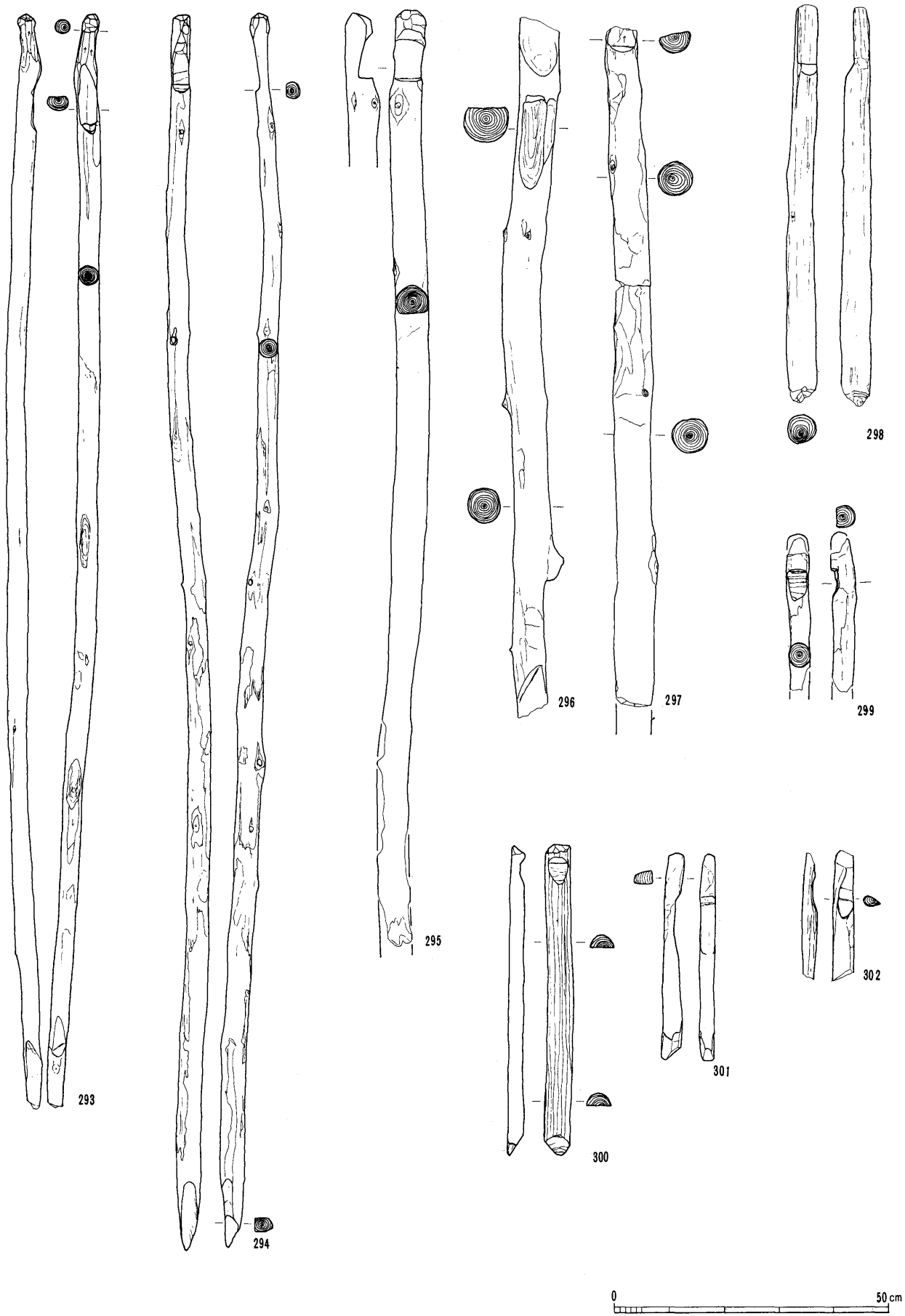
f. 校木(306) 片側は欠損しているが、丸太材を半截して端部に突起を造り出したものである。突起の残る面は、現状こそ半截面に沿って突起が1個片側に残るだけであるが、欠損部分の状況から本来は両つになっていたものと思われる。両つの中の凹部中央は一段切り込まれて溝状になっている。これらのことから、この材は半割丸太の校木と推定され、両つのを交互に組み合わせることによって直交する校木と接続し、それだけでは不安定であるため切り込み溝に縄を結んで安定させていたものと思われる。

g. 壁板(307~309) 307は、元の長さは不明ながら現存長161.5cm・幅23.1cmの壁板である。308と309は、厚みが薄く壁板としては疑問が残るが、転用されたことも考えられるため壁板として分類した。別の部材の可能性もある。

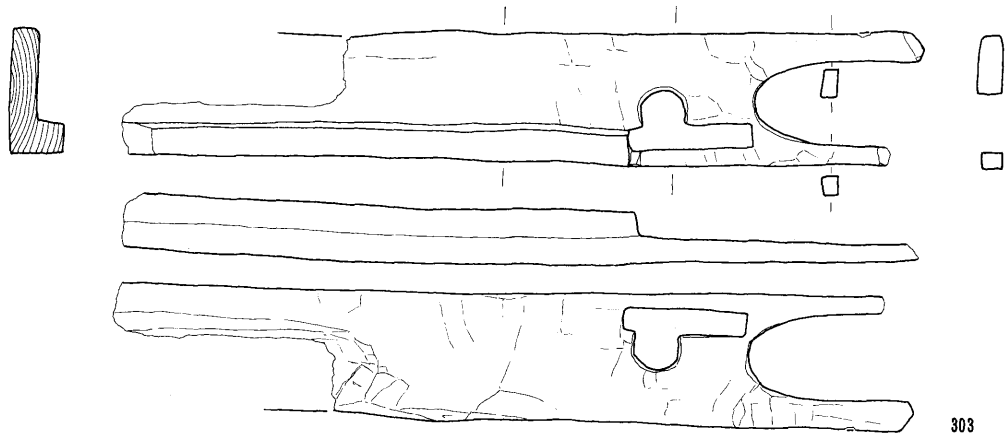
h. 梯子(310~312) 合計3個体出土している。足掛部の形状から2形態に分かれる。310は、足掛部の上面が直立して下面はなだらかに平坦部に移行するもので、311は、足掛部断面が上下の区別なく台形を呈して平坦部に移行するものである。台形の頂部となる部分の幅は広い。312は、通常のものに比べて幅が狭く、足掛部も削り取られていることから、2次的に棒状材として転用されているものと思われる。

6. 杭材(313~348)

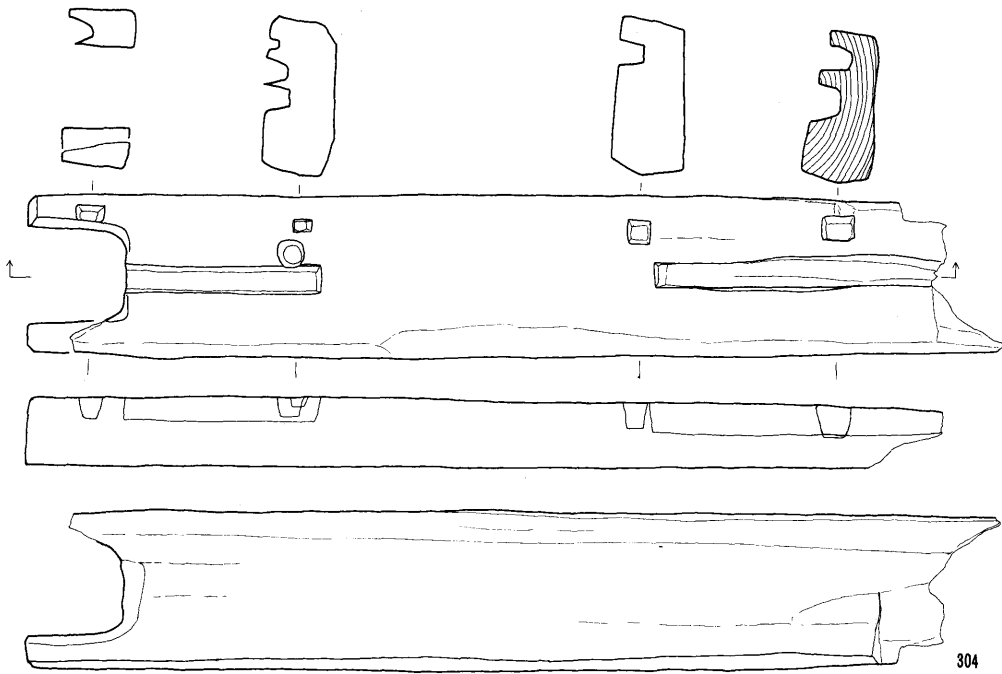
太田遺跡出土木製品のなかでは最も多量に出土した遺物である。完形のものはない。自然木の先端を尖らせた丸杭と、建築部材等の別部材を転用して杭に利用した転用杭とがあり、転用杭は断面が方形もしくは三角状を呈する。杭の大きさに応じて先端を尖らせるための切り落としには差異があり、より細



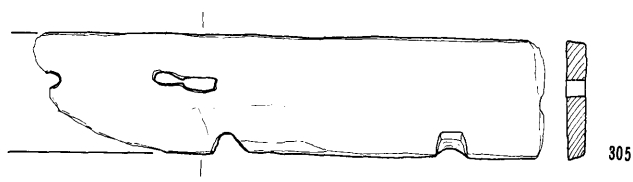
第105図 大溝出土木製遺物実測図 (建築部材、1:10)



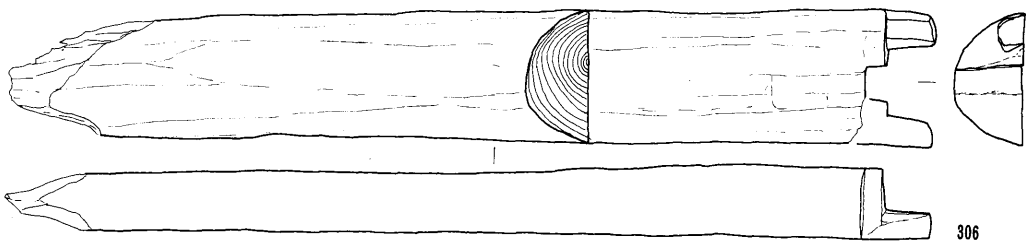
303



304



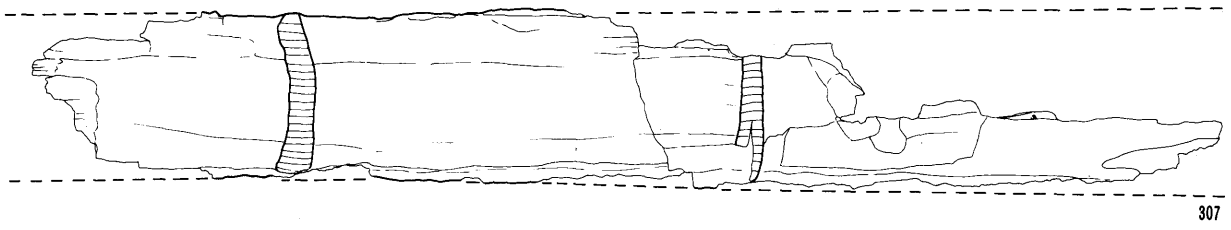
305



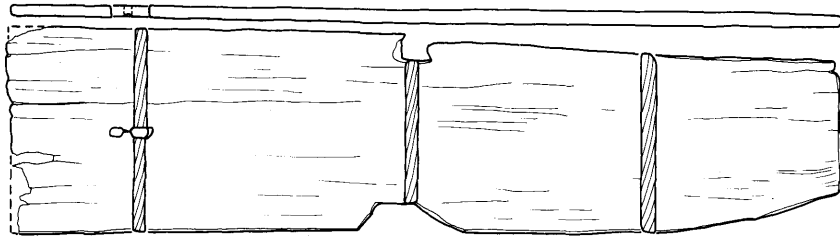
306



第106図 大溝出土木製遺物実測図（建築部材、1：10）



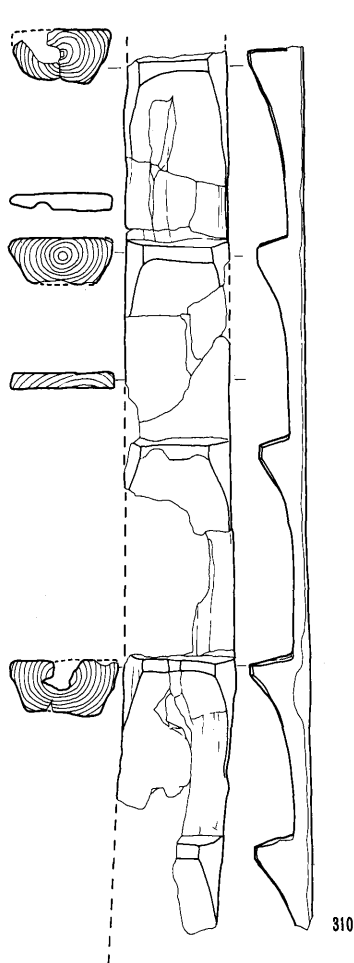
307



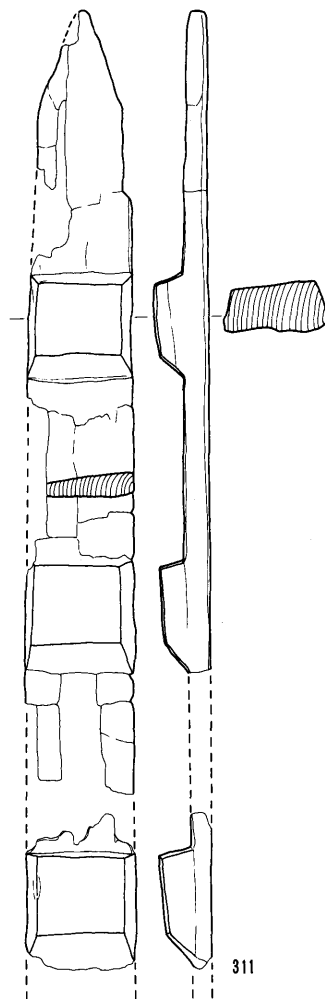
308



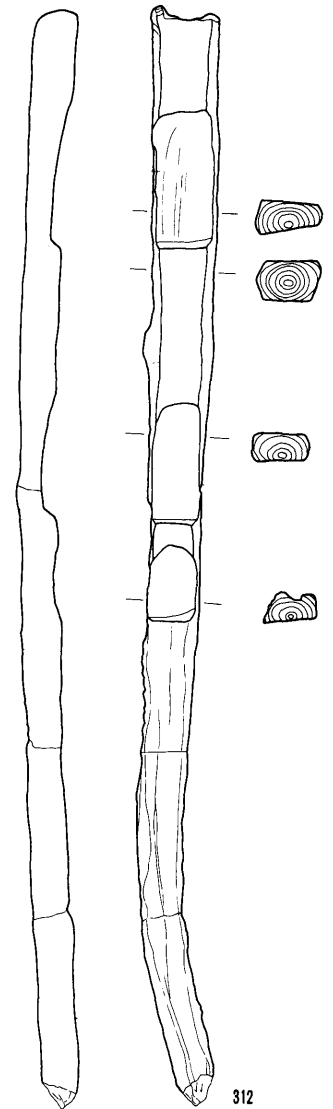
309



310



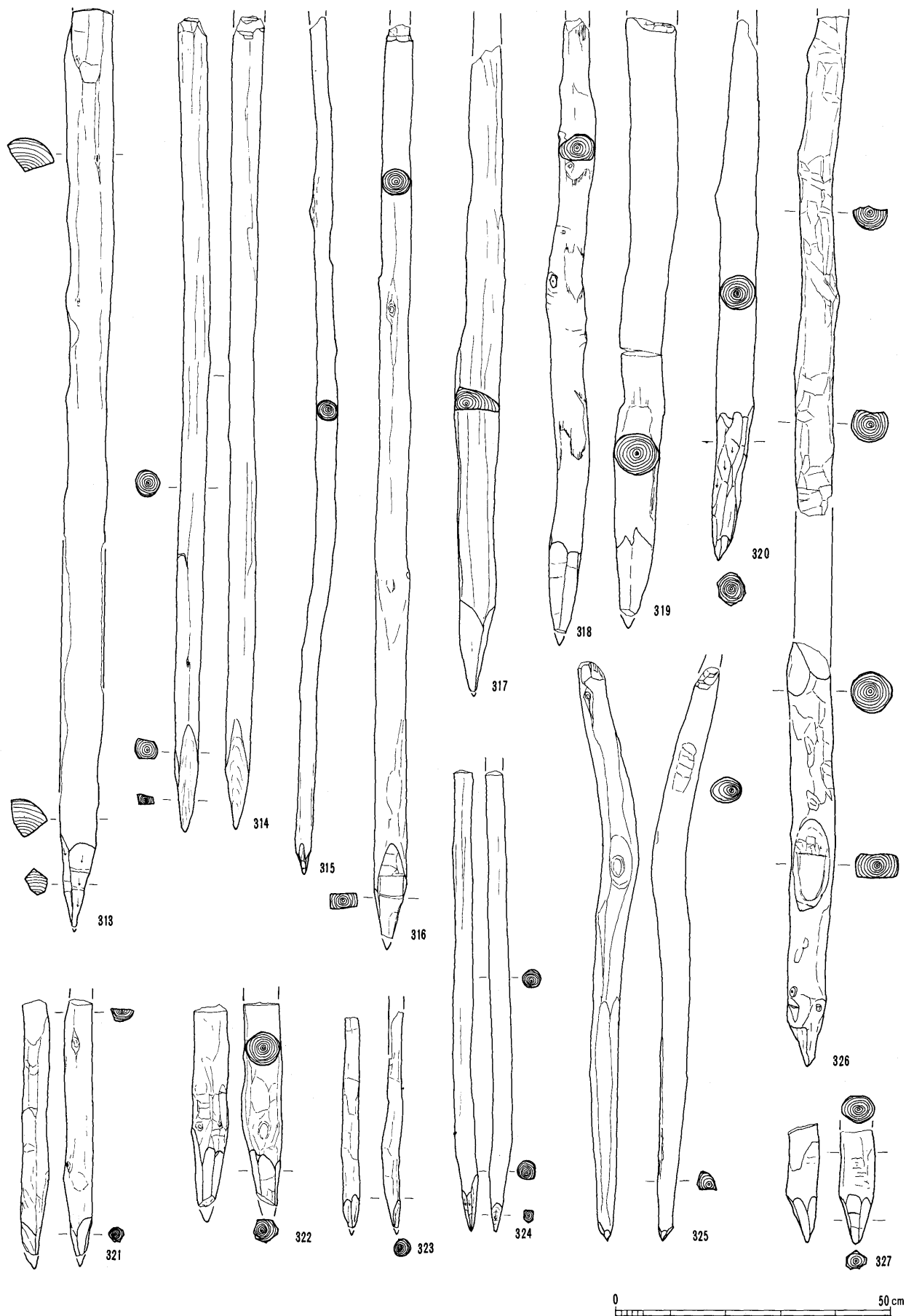
311



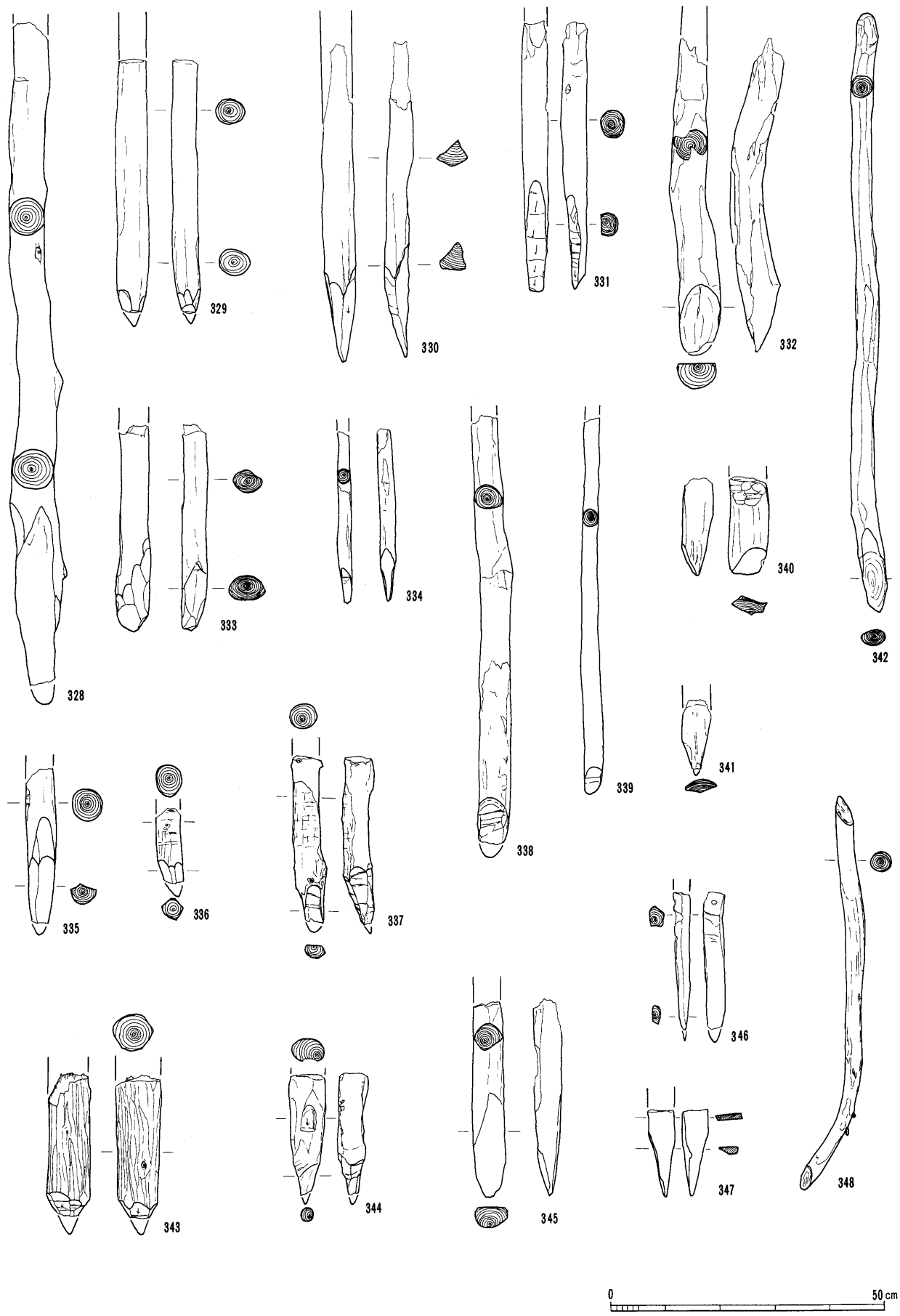
312



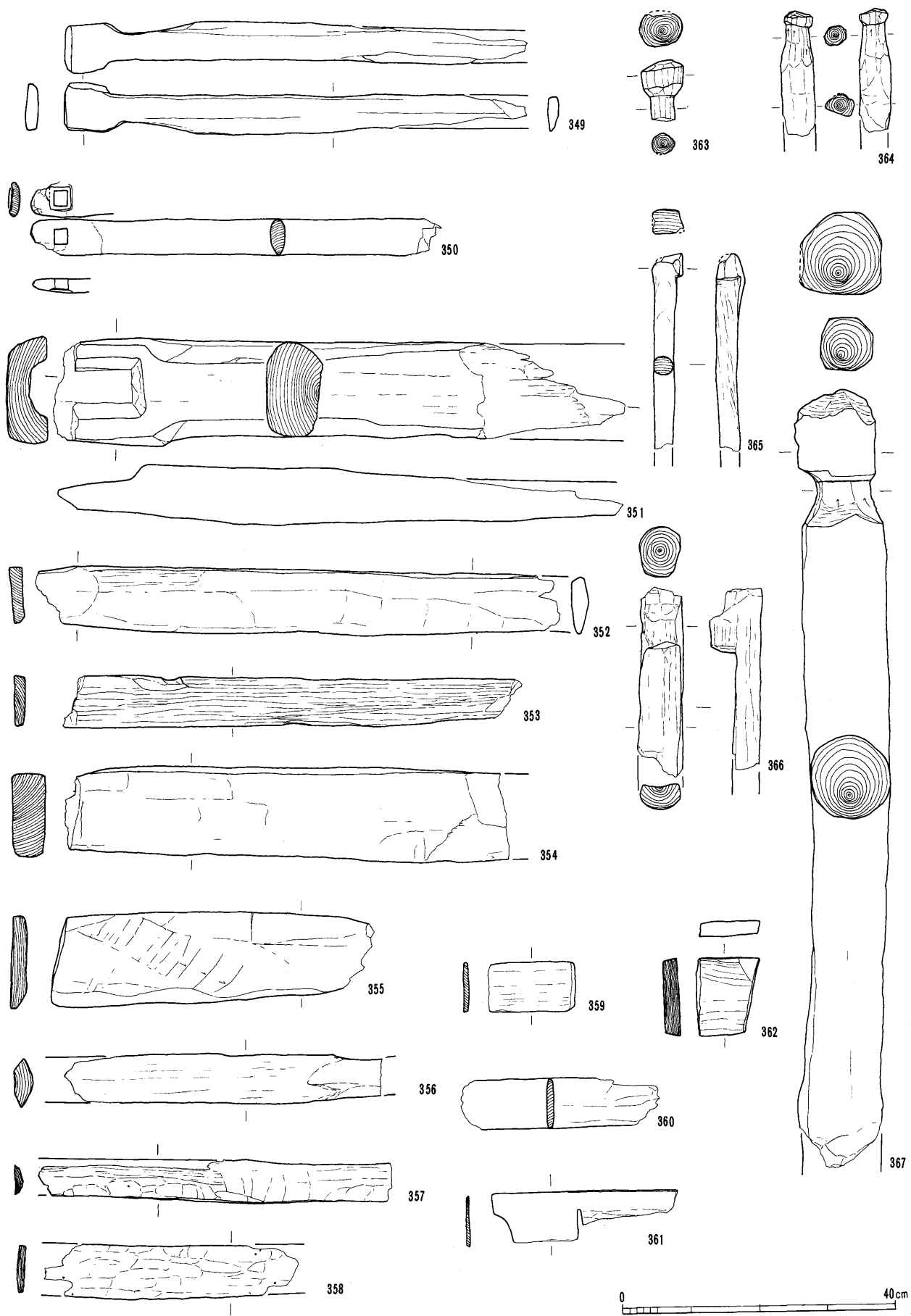
第107図 大溝出土木製遺物実測図 (建築部材、1:10)



第108图 大溝出土木製遺物実測図 (杭材、1:10)



第109图 大溝出土木製遺物実測図（杭材、1：10）



第110図 大溝出土木製遺物実測図 (板材・棒状木製品、1:8)

い杭は1方向もしくは2方向から切り落としただけのものが多い。

7. その他

明確な加工品ではあるが、いまひとつ用途が不明であるものを一括した。

a. 板材(349~362) 大小様々な大きさがあるが一応板材として認められるものを一括した。

349は、片側が欠損するが、細長い薄板の片側端部を有頭状に作り出したものである。長辺部片側側縁が薄く仕上げられており、あるいは刀形等になるものかとも思われるが、詳しいことは不明である。

350は、断面楕円形の細長い板材で、片側は欠損により不明であるが、端部には方形の抉孔を開けている。

351は、厚板を使用したもので、その大きさから建築部材かとも思われたが、貫通しない方形の抉りは建築材としての加工痕としては考えがたいものであり、その用途は不明である。

352~358・362は、壁板等の建築部材の可能性もある板材であるが、断定はできない。

356は、側縁部に非常にゆるやかな抉りをもつ。

359~361は、薄板である。このうち361には、溝が穿たれている。

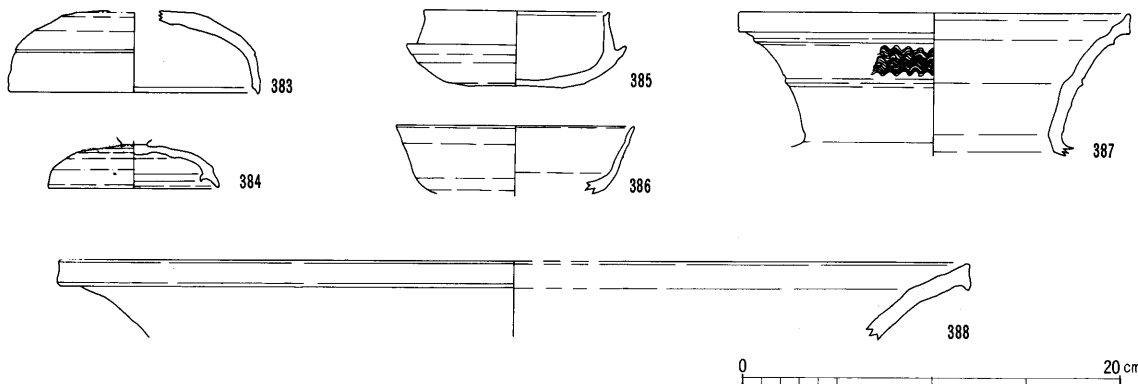
b. 棒状木製品

263と367は、形状は異なるがともに端部が有頭状になっている。何かの柄であろうか。

365と366は、抉りが入っているものであるが、その用途はわからない。

367は、断面円形で、片側が欠損しているが、もう片側は抉りを全周に入れることによって頭部を作り出したものである。

(穂積裕昌)

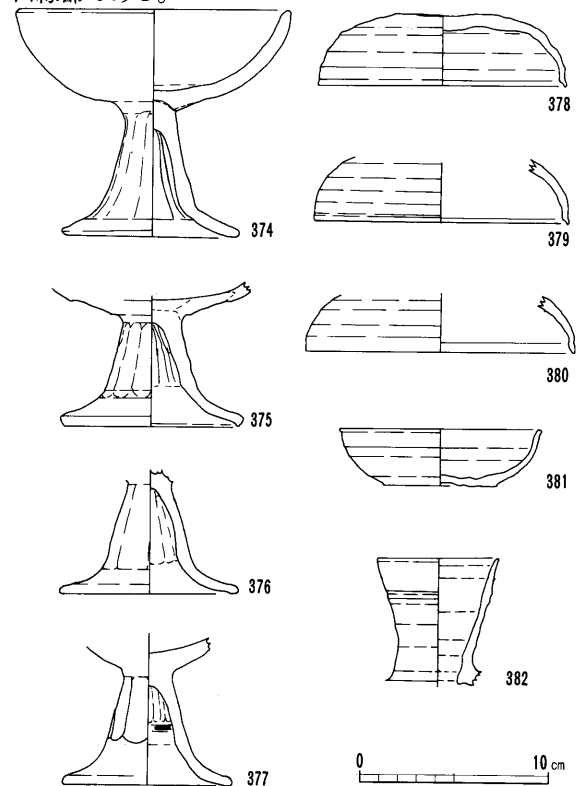


第112図 包含層出土土器実測図(1:4)

2. SD1 出土遺物(374~382)

大溝の埋土を切り込む溝からのもので、土師器高杯・須恵器が出土している。

374は高杯G類に分類されるもので、杯部の器壁は厚い。高杯脚部E類に分類されるもの(375~377)は板状具によるナデが施される。須恵器杯蓋(378~380)は、全体に丸みを帯びて稜がなくなりTK43型式に併行する。杯身(381)は小型で底部ヘラ切り未調整である。TK217型式に併行する。382は平瓶の口縁部である。



第111図 SD1 出土土器実測図(1:4)

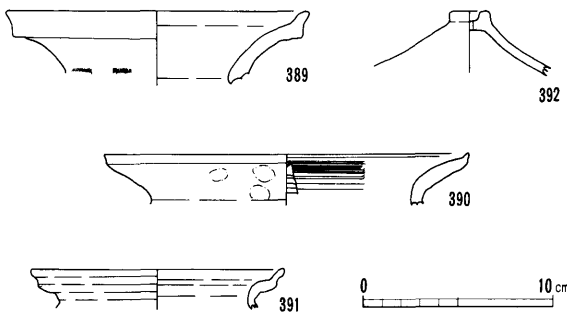
3. 包含層出土遺物(383~388)

須恵器では、杯蓋383が沈線が明瞭で口縁端部に段がみられMT15型式に、384は小型で宝珠つまみ

をもち、短いかえりをもつものでTK217 型式に併行する。杯身の385 は、やや小型で受部は短く外上方にのびる。口縁部は直立気味にのび、端部は段がわずかに認められる。386は口縁部へ向かって直線的にのびる。時期的には384とほぼ同時期のものであろう。387の甕口縁部は外面に波状文が施される。388は大甕で、口縁径は未確定である。

4. B 地区出土遺物(389~392)

図示しえたのは4点(389~392)のみである。391は甕D2 類にあたりやや小型である。392は上方に開くつまみをもつ蓋で天井部に穿孔される。弥生後期の所産であろう。(中村光司)



第113図 B 地区出土土器実測図(1:4)

(3) 歴史時代の遺物 (393~408)

この時期の遺物は、すべて包含層からの出土である。

393~395は土師器の皿である。393~394は器壁がやや厚く、口縁部は内外共にヨコナデされる。とり

わけ394には強いヨコナデが施されている。395は器壁が薄く、口縁部が垂直に近く立ち上がる。

396・397は土師器の鍋である。396は器壁が厚く、胎土も粗い。397は器壁が薄く、口縁端部は折り返されて上端が尖る。

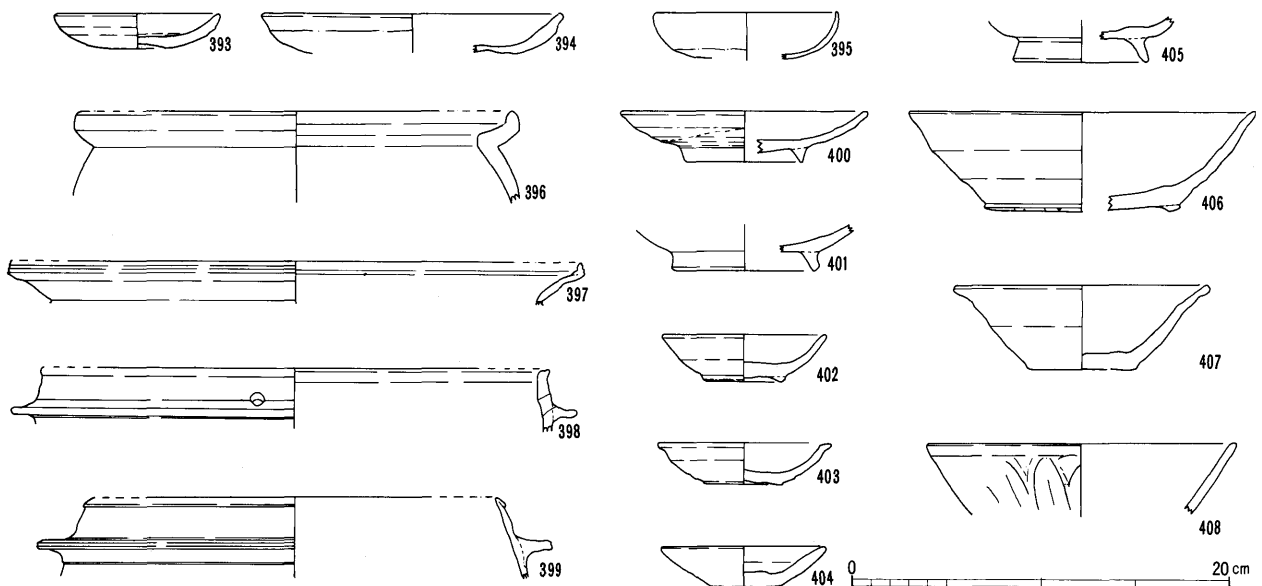
398・399は土師器の羽釜である。398は器壁が厚く胎土もやや粗い。399は器壁が薄く胎土もやや細かい。口縁端部は外側に折り返される。

400・401は灰釉陶器である。400は皿で、外面は口縁端部以外すべて回転ヘラケズリ調整されている。内面と口縁端部に灰釉が漬け掛けされる。401は椀で、底部外面の糸切り痕はナデ消しされている。

402~404は山皿である。402は高台が残るもので器高も高い。403は、高台はないがわずかに台状に残り、体部には丸みが残る。404は高台の名残は完全に無くなっており、体部も直線的である。

405~407は山茶椀である。405は外傾する高い高台が付き、底部には糸切り痕が残る。406は高台がつぶれ、モミガラ痕が見られる。底径は405に比べかなり大きい。体部にはわずかに丸みが残る。407は高台が剥がれた痕跡が残るのみで、底径は小さく体部は直線的である。

408は青磁の椀である。口縁部の小片であるため詳細は不明であるが、外面には蓮弁文が施され、内外両面に灰オリーブ色の釉がかかる。(山口 格)



第114図 包含層出土歴史時代遺物実測図(1:4)

〔註〕

- ① 赤塚次郎『廻間遺跡』(財愛知県埋蔵文化財センター 1990年)
- ② 伊藤久嗣『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会 1980年
- ③ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』1991年
- ④ 愛知県教育委員会『朝日遺跡Ⅰ(本文篇Ⅰ)・Ⅳ(土器図版篇)』1982年
- ⑤ 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年
以下、記述の須恵器の年代観は上記文献による。
- ⑥ 赤塚次郎『最後の台付甕』『古代』第86号 早稲田大学考古学会 1988年

- ⑦ 柄が身に緊縛されるにしろ、柄孔に装着されるにしろ、柄と身は別木になるので、組合せ鉄(財団法人東大阪市文化財協会『鬼虎川の木質遺物—第7次発掘調査報告書 第4冊—』1987年)の名称をさけ、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘報告Ⅹ』にしたがう。
- ⑧ 財団法人 東大阪市文化財協会『鬼虎川の木質遺物—第7次発掘調査報告書 第4冊—』1987年P11～12
- ⑨ このタイプは、渡辺誠「木製品の民具学的研究」『考古学ジャーナルNo.335』1991年によれば豆打ち用である。
- ⑩ 以下、建築部材については、宮本長二郎の御教示を得た。

6. 結 語

(1) 遺構について

太田遺跡の位置を北から見ると、見当山丘陵—美濃屋川—微高地(森山東遺跡)—低湿地(太田遺跡)—微高地(自然堤防)—低湿地と続き、今回の調査で唯一注目されたA地区の大溝(旧河道)は、微高地間の最も低い位置に形成されている。この旧河道は、弥生時代中期には既に形成されていたと思われるが、森山東遺跡の調査で確認されたように、後期以降急速に展開する水田可耕地の拡大と相まって、集落の多くは、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて河道北部の微高地や低丘陵上あるいは裾部に形成された。旧河道出土の遺物がこの時期を中心とすることは、このことを裏付けていると言えよう。そして古墳時代末期には旧河道は埋まり、付近は低湿地化していったものとみられる。この旧河道の流路がいかなる状況であったのか、今後古地理復元の上で追求すべき課題であろう。

一方、当初期待された下層水田遺構については、黒色泥炭土上面で畦畔等が確認されなかったため、その存在を確証することができなかった。土層断面などからみると、旧河道の北側と南側とで若干差異があり、北側はかなり流水により削られて土層も不安定であることから、たとえ畦畔があったとしても流失した可能性もある。南側の溝状遺構については前にも述べたように人為的な溝の可能性もあり、地形的に低湿地であるところから何らかの排水に関わる遺構とも考えられる。ヨシ・オギ類の草本植物を敷いた溝SD3も同様に、暗渠排水としての機能を

果たしていたとも考えられ、今後こうした類例の発見に期待したい。なお、黒色泥炭土中のイネのプラント・オパールの分析結果では、プラント・オパールの密度が低いものの、水田遺構の存在の可能性は比較的高いとされている。

(浅生悦生・倉田直純)

(2) 大溝出土土器について

大溝から出土した土器及び土製品は図示した分だけでも267点を数える。時期的に出土遺物の中心的位置を占めるのは、弥生時代後期から古墳時代にわたるものである。以下、各層の遺物の状況を甕を中心にして概観し、その位置づけを考えてみたい。

下層の出土土器を見ると、数点の後期から晩期に位置付けられる縄文土器の出土がみられるが、これは溝の流れにともなう流入品と考えてよい。

弥生中期(第Ⅲ様式)に位置付けられる甕(63)はこの1点のみの出土である。周辺の遺跡を見ると、北側の丘陵裾に位置する辻の内^①、山籠^②、長^③、亀井^④の各遺跡、そして下流域に位置する納所遺跡^⑤に当該期の資料がみられる。63はこれら近在の集落と同時期に営まれた調査区外の居住域からの流入品と考えられよう。

下層出土土器の中心は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものである。

壺A類に分類したものは、いずれも弥生後期に位置付けられるものであり、A2類を除いて東海地方(伊勢湾沿岸地域)の特徴を有するものである。A2類は、その器形と口縁部外面への施文の特徴から、

甕C類と同系統のものと考えられる。

甕C類は、弥生中期末～後期に位置付けられ、口縁部の形状から一般的に受口状口縁甕と言われるもので、その出自は近江地方にあるとされている。県内で、この「受口状口縁甕」を出土する遺跡を見ると、北勢地方の鈴鹿川流域と、本遺跡を含む安濃川流域に広がることが指摘されている^⑥。周辺の遺跡(志登茂川・安濃川流域)の出土例を見ると、管見に触れた限りでは、六大B^⑦・橋垣内^⑧・納所^⑨・蔵田^⑩・西垣内^⑪等の各遺跡があげられる。六大B遺跡からのものが土坑からの一括遺物として認められ、後期に位置付けられている。本遺跡出土品は、口縁が直立または外傾して立ち上がるタイプ(C2類)が多く、近江地方の編年^⑫に照らし合わせると、第V様式に相当するものと考えられる。

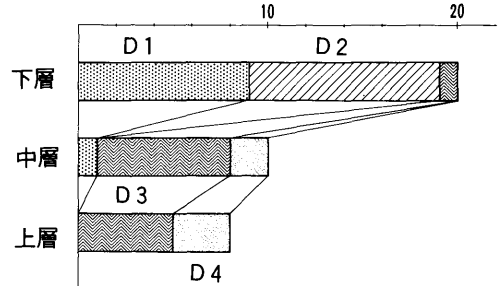
次に、甕D類についてみてみることにする。

甕D類として分類したものは、所謂「S字状口縁台付甕」と呼ばれるもので、その分類と変遷は先学の研究^⑬に詳しく、口縁部の形状を分類の主基準とし、体部外面調整等により分類される。本遺跡出土物の分類は、こうした成果を踏まえつつも、主に口縁部の形状に重点を置いて行った。口縁部外面への施文、体部外面への調整法等によって、更に細分は可能と考えられるが、ここでは簡略に1～4類に分類した。これは、体部の調整が確認できるほどの遺物の残存状況になかったことにもよるが、口縁部の形状が最も変化の状況を捉えやすいと考えたことにもよる。以下、再度D1～D4類の分類のポイントを記しておくことにする。

- D1 : 口縁部の屈曲が顕著で、垂直気味に立ち上がる。
- D2 : 口縁部の屈曲は弱くなり、水平方向にのびるようになる。
- D3 : 口縁部、体部とも器壁が厚くなる傾向が見られる。口縁端部は、外傾する面をもつ。
- D4 : 口縁部の屈曲はなくなり、器壁はさらに厚くなる。口縁端部は肥厚し水平方向にのびる。

上記のようなポイントに沿って分類を行い、層位別に甕D類各種の出土数をみると次図のようになる。出土個体数がそれほど多くないため統計的な結果は

得られないが、各層の出土状況は認められよう。



第115図 大溝甕D類層別出土個数

下層における主要構成器種であるD1類とD2類は、中層においては1個体とほぼ消失する。これに対し、下層で1個体しか認められなかったD3類が中層では主要となり、D4類も認められる。上層になると、D3類とD4類のみが認められる状況である。このように層位的にみても甕D類の変化の状況が捉えられるようである。

甕D類と分類した「S字状口縁台付甕」は、濃尾平野を中心にして、畿内、北陸、関東にまで及ぶ広い範囲に分布することが明らかになっている。県内の弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡の分布に関しては貝塚遺跡の報文^⑭に詳しいが、安濃川流域で本遺跡周辺地域をだけみても、辻の内^⑮(本報告分類D1～4類)、清水西^⑯(同D3・4類)、桐山^⑰(同D1類)、竹川^⑱(同D1・2類)、養老^⑲(同D2・3類)、森山東^⑳(同D4類)[本報告書所収]、納所^㉑(同D1～4類)の各遺跡があげられる。丘陵を挟んだ志登茂川流域では、中鳶遺跡^㉒(同D2・3類)においてまとまった資料が見られる。分布状況を見るかぎり、周辺に広がる当該時期の遺跡においては普遍的にみられる器種である。甕F類としたものは、出土点数は僅か1点であるが庄内甕の系統のもので周辺地域では初見である。甕類においては東海系(在地系と捉えてもよいかもしれないが)のものが主要である中で、畿内からの搬入品として捉えられるものであろう。

次に、出土遺物の時期をみることにする。前述したように、大溝出土遺物は弥生時代から古墳時代にかけてのもので、各層によっておおまかに時期は捉えられそうであるが、下層・中層・上層の各出土土器がそのまま各層の時期を示すものではない。あくまで埋没時期を示すものであるが、中層、上層には須恵器が共伴する。中層出土須恵器杯(231～236)はTK208～TK47型式に併行するものであることか

ら、同層は6世紀初頭には埋没したものと考えられる。また上層出土須恵器杯(258~261)はやや時期幅があるがMT15~TK217型式に併行しており、最終埋没時期は7世紀初頭と考えられる。上層からの出土遺物にはローリングを受けたものが少ないのが特徴であり、これは溝の埋没状況とも関わるものであろう。上層埋没段階での大溝の機能としては、こうした遺物の状況や埋土の質(粒子の細かい粘質土)からみても、水の流れが緩やかなものと推察でき、漸次大溝が埋没していったことが窺知できる。

大溝出土の土器類に関しては、伊勢湾沿岸を中心に分布するものがその主体を占めるが、一部に搬入品と考えられる個体もある。また、従来近江地方にその出自が求められる受口状口縁甕も多数出土している。こうした出土状況は、当地域の持つ地理的条件によるものと考えられるが、畿内でも近年注目されているS字甕を中心とする東海系土器の搬入等、その流通ルートとしての当地域のあり方や、逆に畿内及び近江からの影響の受容地域としての当地域のあり方、また当地域の在地色の有無等、今後検討すべき点は多い。周辺地域において、弥生後期から古墳前期にかけての堅穴住居や土坑等の一括遺物の出土を見ないことにもよるが、鈴鹿川北岸の亀山市地蔵僧遺跡^②S B26からは、本報告分類の甕C類とD類が相伴していることも報告されており、今後こうした一括資料の増加を待ちたい。

(中村光司)

(3) 大溝出土の木製品について

太田遺跡から出土した木製品は、そのすべてが大溝からの出土であった。出土状況からは、とくに特定器種が1カ所に集中して出土するといった状況は認められない。ここでは、大溝出土の木製品についての全体的な特徴を概観して遺跡全体での木製品の位置づけを図るとともに、個々の遺物についても個別に若干の検討を加えることとする。

A. 木製品組成からみた遺跡の性格

大溝からは多量の木製遺物が出土したが、今回図示したのは104点を数える。事実報告のところでも述べたが、その全体的な特徴を列挙すると以下のとおりである。

- ①. 全体の組成に占める杭類と建築部材の比率が大きい。
- ②. 建築部材では、板材系よりも細長い柱材系の部材の出土が顕著である。
- ③. 杭類、建築部材以外では、比較的農具の出土が多い。
- ④. 明確な武器・武具類、武器形木製品の出土が認められない。
- ⑤. 全体として、遺存状況の悪いものが多い。

以上のような諸特徴は、現在までに県下で調査された集落跡と思われる木製品出土遺跡の状況とはかなり趣が異なるものである。具体的に若干の遺跡を例示すると、

上野市北堀池遺跡^③では、杭類・建築部材の出土も多いのであるが、それとともに農具類や槽をはじめとする容器類等の出土も多いのであって、集落で使用された木製品類がその脇の大溝に廃棄された状況を示している。

上野市城之越遺跡^④では、通常の当該時期の集落遺跡では一般的な遺物である耕作用農具類と槽の出土がない点が北堀池遺跡とは異なる。杭類・建築部材以外では、武器形や紡織具、案等の出土が顕著である。こうした木製品の一部は、貼石を施した大溝という出土遺構の性格からも、祭祀に使用されたものがそこに投棄されたという状況を示している。

津市橋垣内遺跡^⑤は、杭類や建築部材とともに、農具や紡織具、武器形をはじめとする多種多様の遺物が出土している。これらは、北堀池遺跡同様、集落で使用された木製品類がその脇の大溝に廃棄されたとともに、大溝もしくはその周辺で祭祀も行われたことが考えられる。

このように、太田遺跡と同時期の県内の木製品出土遺跡を概観すると、杭類・建築部材以外にも、遺跡によって出土する遺物の組成に差異はあるものの様々な木製品が出土していることがわかる。北堀池遺跡^③や橋垣内遺跡^⑤は、住居も発見されていて同時期の集落遺跡であることも確認されているし、城之越遺跡^④でも時期による性格の差はあるものの周辺に堅穴住居や掘立柱建物の存在が確認できる。

これに対して、太田遺跡の木製品の組成を考えた場合、太田遺跡は、上記の他遺跡とは出土遺構の性

格や出土遺構周辺部の状況が異なるものと理解される。すなわち、太田遺跡大溝の少なくとも発掘調査部分は集落等の居住域の存在を暗示するものではなく、むしろその場が水田等の生産域であったことを示すものと思われる。あえて想像を交えて考えれば、杭類の多さや建築部材でも柱材を中心とする棒状系の材が多いということは、発掘区内では発見されなかったがその上流にそうしたものを多数使用する施設、例えば堰状遺構等が存在していた可能性を窺わせるものであり、それが崩れて発掘区に流入している状況を想起させるものである。このことは、出土量的には全く太田遺跡とは比較にならないが、日常用具類が全くなく建築材や杭が多量に出土した愛媛県古照遺跡出土木製品が堰遺構に伴うものであることを考えると、興味深いものがある。先にみた③の特徴も、この場が生産域に近いことを示すものとも言えるし、何より北堀池遺跡等と異なり、周辺部で住居群等が発見されていないこともこの考えと矛盾しない。(穂積裕昌)

B. 個別遺物のまとめ

農具は、農具8点・工具1点で総数は少ない。

竪柱は、握部と搗部の境に低い突帯をもつものもたないものに分類できる。これらは、出土層位が異なっており、突帯のないものが中層（ほぼ古墳時代前中期に相当）から、突帯のあるものが下層（ほぼ弥生時代後期に相当）から出土したものである。

今回、膝柄鍬の身とした(2~4)は、前述したようにいずれも膝柄を伴って出土しておらず、断定する資料はない。しかし、鬼虎川遺跡の出土例や平城宮跡の出土例の報告に倣い、膝柄鍬とした。また同じ中勢道路内の橋垣内遺跡から単独ではあるが、台部の底面が平坦で、基部先端に瘤状の突起をもつ弥生時代後期から古墳時代前期の膝柄が出土している^⑨。膝柄鍬の県内出土例は、中勢道路内の橋垣内遺跡からのいわゆるナスビ型がある^⑩。他に上野市北堀池遺跡から出土したものは「組合せ鋤」として報告されている^⑪、太田遺跡出土のものと同型式であり、膝柄鍬と考えたい。

ところで、これら農具と周辺遺跡との関連であるが、当遺跡と北接する森山東遺跡（当報告に所収）から弥生時代前期及び後期に営まれたと考えられる

水田遺構^⑫が検出されている。水田は、農具が出土した大溝から北へ約70mのところまで広がっており、関連が興味深い。(渡辺尚登)

槽や案といった用具類は、出土量もごく僅かで比較検討にたる資料ではないが、いずれもヒノキが用いられており、製作にあたっての樹種の選択が窺える。

編台の目盛板は2例出土した。いずれもヒノキが用いられている。上野市北堀池遺跡出土例^⑬では、刻みは材長辺の片側のみに刻まれているが、太田遺跡のものはいずれも両側縁に刻まれている。275は、材両側の刻みの間隔が異なっているが、276は両側とも16cm間隔の刻みである。用途に応じた目盛り板の使い分けがみられるが、275の片側も17cm間隔の刻みであり、276と近似したものになっている。

建築部材は、上述のように柱材系が中心で、板材系のは少数である。これは、多分にそれを必要とした遺構の性格とも係わってくるものと思われるが、建築材から建物を復元するにあたっては、資料不足であることは否めない。

竪穴住居用材として認定できたのは、柱材のみである。柱頭に桁受け用の二股をもつ。カヤやサカキといった掘立柱建物用材としても使用される材以外に、クリやコナラといった広葉樹も好んで使用されているが、これは樹木の性格から上端の二股を取り易く、しかも固くて丈夫であるからであろう。

高床建物用材では、いくつかの注目される遺物が出土した。このうち、蹴放し材と楣材については後述する。

(306)は、断面形状が半円形を呈しているが、校倉壁材の校木になるものと思われる。材端部が両角となった仕口は、登呂遺跡で確認された横壁板の端部と基本的に共通しており、弥生時代から古墳時代にかけての壁板や奈良時代以降の井戸枠の組合せ仕口として用いられているという。県内では、太田遺跡出土例と同様の端部仕口をもった断面6角形の校木が上野市北堀池遺跡で発掘されており、ともに奈良時代以前に遡る校木の出土例として全国的にも貴重なものである。

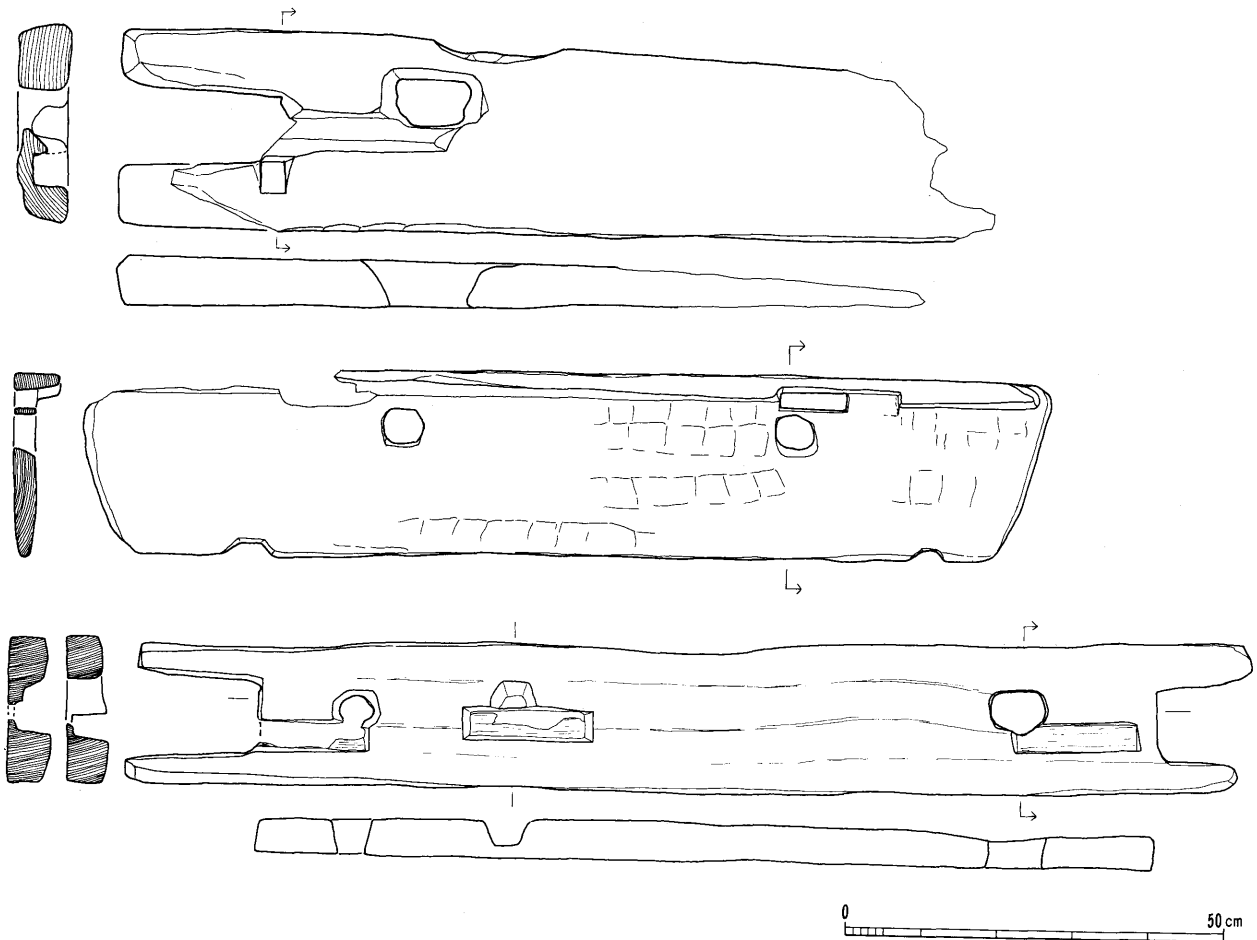
C. 太田遺跡出土の蹴放し材と楣材について

太田遺跡からは、高床建物の扉口に使用された楣材と蹴放し材が出土した。これらについては、群馬県渋川市中村遺跡の報告での宮本長二郎氏による考察^⑧と、長野県川田条里遺跡の出土品を通した伊藤友久氏による考察^⑨によって、遺跡から出土した当該遺物の使用方法の概略は明らかにされている。本来、この遺物は扉板とセットになるものであるが、太田遺跡では扉材の出土はなく、県内外の他遺跡においても、すべてセットで出土しているという幸運な例はあまり聞かない。しかし、楣材と蹴放し材は扉板そのものと並び、全国的にも類例が増加しつつあるものである。太田遺跡出土の当該資料を考えるうえでも、他遺跡の類例の把握は必要不可欠なことと思われる。そこで、まず県内の当該遺物を出土した遺跡のうち、すでに報告書は刊行されているものの実測図がなかったりいまひとつ内容が明瞭でなかった松阪市前沖遺跡^⑩と杉垣内遺跡^⑪の資料を紹介し、その後、県内外の資料を概観して太田遺跡出土遺物の位

置づけを図りたい。

①. 前沖遺跡出土遺物 旧河道から出土した蹴放し材の片側端部破片である。時期を明示できるような遺物の共伴はない。方立溝に接して存在する大きい方の柄は、扉軸を差し込むための軸釣穴と思われる。もうひとつの小方孔はいまひとつ性格が不明であるが方立を補助的に支える材を挿入していた可能性がある。

②. 杉垣内遺跡出土遺物 旧河道から出土した建築部材のなかに蹴放し材と楣材が含まれているが、共伴遺物からの時期特定はできない。ともに遺存状態は良い。蹴放し材は、両側端部に両つの造り出しをもち、一方はそれに接して、もう一方はやや端部から内側へ入ったところにやや短めの方立柄穴と扉軸釣穴が一連で穿たれており、開口部の比較的広い両開き扉に伴うものである。もう一つ、端部からかなり内側へ入ったところにも方立柄穴と比較的小さい方孔が一連で穿たれている部分があり、あるいは後に片開き扉の蹴放し材として転用されたのかもし



第116図 前沖遺跡出土蹴放し材（上）・杉垣内遺跡出土楣材（中）と蹴放し材（下） 1 : 10

部材名 遺跡名	蹴 放 し 材	楯 材
城之越 (三重)		
北堀池		
前沖		
杉垣内		
太田		
納所		
百間川原尾島 (岡山)		
讃良郡条里 (大阪)		
北新町 (大阪)		
中村 (群馬)		
川田条里 (長野)		

第117図 各地の蹴放し・楯材 (杉垣内・納所・中村は1:30、川田条里は1:40、その他は1:20)

れない。楣材は、両端の両つの造り出しは遺存していないが、両側端部からかなり内側へ入ったところで短めの方立柄孔と円形の軸釣孔が穿たれる。材の片側側面には扉の振れを防止するための突起が造り出されている。また、突起とは反対側の側面は、2

に半円形の抉りが施されているが、性格は不明である。この蹴放し材と楣材は、蹴放し材が下層から出土したのに対して楣材が中層から出土したことや、軸釣穴に挟まれた開口部の広さが異なっていることなどから、それぞれ別個の扉口に据えられているものと思われる。

上記の2遺跡の資料を加えると、三重県下で蹴放し材もしくは楣材が確認できた遺跡は6遺跡にのぼり（太田・前沖・杉垣内・上野市北堀池・城之越・津市納所^⑩）、全国的にみても当該遺物の出土が目立つ地域となっている。

さて、当該遺物を見ていくにあたって、11遺跡16例の遺物を取りあえず提示してみた。これらは、まず開口部が片開き扉になるか両開き扉になるかで軸釣穴の数が異なってくるが、それ以外にもとくに楣材では突起の位置や方立柄孔の長さ・穿孔位置などで差異がみられる。このことは、扉口構造の差異となって現れてくることが予想される。今ここで扉口構造の詳細についてを部材から復元する力は持ち合わせていないが、片開き扉か両開き扉かの差異は取りあえず措くとして、楣材と蹴放し材の現状での形態分類を試みておきたい。

楣材は、扉の振れ止め機能をもつ突起の位置から（a類）材中央部に位置し、断面凸形を呈するもの（b類）材側面部に位置し、断面L字形を呈するものに分類できる。この場合、方立柄孔は、a類では突起上に穿たれるのに対して、b類では突起の内面揃いに接して穿たれるのを基本とする。それぞれをさらに細かく見ると、a類の長野県川田条里例^⑪では方立柄孔はみられないし、b類では方立柄孔と扉軸釣穴が独立して穿たれる杉垣内例と、一連で穿たれる納所・太田例^⑫というような差異がみられる。また、同じa類の群馬県中村例^⑬と大阪府北新町例^⑭を比べると、中村例では端部の欠込みと突起幅が同じであるのに対し、北新町例では欠込み幅の方が大きい。こうした差異は、欠込みが挟み込むべき対象が異なっ

ていることと関係するのであろう。a類は、関東から近畿までの広範囲で出土が確認できる。現状の資料によるかぎり三重県内出土の楣材は納所の1例を除いてb類のみである。また、端部の欠込みが存在しないものも存在するが、これらが二次的なものでなく本来的なものであるとすれば（少なくとも自然面を残す川田条里例は本来的なものであろう）、柱や辺付等との接続関係が問題となるが、現状では不明である。

これに対し、蹴放し材では、楣材ほどの顕著な形態差はみられない。せいぜい方立幅の長短と、方立柄孔と端部の欠込み部が接続しているか独立しているか程度の差異する程度である。方立柄孔が長い太田例と川田条里例はともに片開き式の扉であるか、これが本来的な対応関係にあるかどうかはまだ資料不足でなんともいえず、今後の資料増加を待って検討する必要がある。また、いずれも端部に欠込みが認められ、この点では柱等との接続関係に楣材ほどの問題はない。今後は欠込みの左右で長さや幅に差がないかどうかといった細かいところまで注意を向けていく必要があろう。

以上のように、最近の蹴放し材・楣材の資料の増加をふまえ、各遺跡での出土例を概観し、その特徴について記した。扉構えの具体的な復元に及んでおらず、まだまだ不十分ではあるが、とりあえず今後の当該遺物研究の叩き台となれば幸いである。

（穂積裕昌）

（4） 銅鐸形土製品について

本遺跡で出土した銅鐸形土製品（以下、「土製品」と略記）は、県下では上箕田遺跡に次いで2例目の出土である。

土製品の出土は、全国で72例、東海地域では18例（愛知県14、三重県4）^⑮を数えるが、現在のところ、県内では4例の出土（第25表参照）が確認されている。以下、本遺跡出土の土製品を中心にして、若干の考察を試みたい。

まず、その所属時期であるが、土製品（第93図）は、調査区東端の大溝下層の中でも灰白色礫混じり砂層からの出土で、同層は大溝の最下部に当たる。大溝下層出土の遺物は、弥生時代後期～古墳時代前

期にかけてのものが中心であるが、同一地点内（4×4mの範囲）で下層の出土遺物をみると、図示したものは、30・69・83・129が挙げられる。いずれも、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのもので、土製品の時期もおおよそ弥生時代後期に比定できよう。

次に、土製品の形状と調整についてみてみることにする。本遺跡例は、県内他遺跡出土のものに比べて薄手で、丁寧な作りである。上箕田遺跡例（第118図・1）は、鐸身の両面に袈裟襷文が表現される点で他の無文の3例とは異なり、最も具象的な土製品といえる。本遺跡の土製品は、鐸面に文様は施されないにしろ、鱗の部分への刻み目によって飾耳を表現したものと考えられる。鱗部の突起状の表現は涌早崎遺跡例（第118図・3）にも認められるが、こちらは鱗部への刻みではなく、つまみ出しによるものと考えられ、両者の異なる点である。最も小型の一反通遺跡例（第118図・2）は、県内出土4例の中では最も抽象化の進んだものととらえられる。形態的にも他の3例と比較して極端に小さく、底部にはわずかに内面を表現した凹みがみられるのみで鐸身部は充填されており、鱗部は紐状粘土が貼付され表現されている。内面への舌の装着を可能にする舞部の孔は、一反通遺跡例を除き認められるが、舌等による内面の擦痕や紐等を使って縛った痕跡は認められていない。これは、土製品のモデルとなる銅鐸を外側からの視覚的な面にそのポイントを置いて、模倣し、製作されたものと考えられる。上箕田遺跡例、本遺跡例とも、外面の施文や丁寧な調整に比べて内面の調整が雑になっていることから、このことが指摘できよう。また、これは土製品の機能を考える上でも重要な点である。

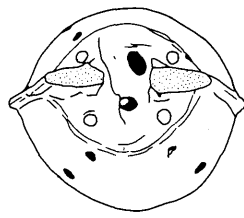
最後に、土製品のモデルとなった銅鐸との関連を考えてみることにする。太田遺跡は、前述のとおり

津市内の安濃川中下流域の沖積地に立地している。現在、市内での銅鐸の出土は、神戸（外縁付鈕2式鐸・流水文）、野田（突線鈕式三遠式鐸）、高茶屋（突線鈕式近畿式鐸・六区袈裟襷文）の3例の出土が知られている。巨視的にみれば、神戸、野田の両地区は安濃川の流域と捉えられる範囲である。本遺跡出土の土製品は鈕が欠損し不明であるが、左右に4カ所と5カ所の刻み目により鱗部の表現がなされており、神戸鐸が左右4対の飾耳を、野田鐸が左右3対の飾耳をそれぞれ付していることから、それらの外面的な特徴を誇張して模倣したものと考えられよう。しかしまた、銅鐸との関連を考える上では一反通遺跡での出土例は注目される場所である。同遺跡では、土製品出土地点（包含層）の近くの弥生後期の溝から銅鐸片（鱗下端部）が出土している。かつて、上箕田遺跡例報告時に、銅鐸が「上箕田遺跡よりあまり遠くない何処かに埋蔵されていて、その模造品の方が先に出土をみたとは考えられないだろうか」とした真田幸成氏の指摘は現在も有効性を持つものであろう。愛知県朝日遺跡でも土製品とともに銅鐸が出土しており、土製品と銅鐸が同一地、もしくはそう遠くない場所での存在の可能性を示唆するものである。本遺跡での土製品の出土は大溝からのもので、近くの集落のものか、流れにともなうものかは不明であるが、想像を逞しくすれば、遺跡周辺での銅鐸の存在も考えられなくもない。ただ、太田遺跡の遺物（大溝の多量の土器と木製品）を使用した集落が未確認である以上、あくまで可能性の範囲を超えないものである。

以上、県内出土の銅鐸形土製品について若干の検討を行った。機能面への言及は、土製品出土地点が大溝下層の埋土中であり、流れに伴うものとも考えられるためにあまり行わなかった。しかし、溝に伴う農耕祭祀という積極的な意味の付加もあながち否

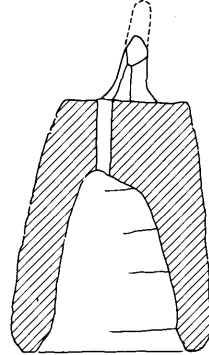
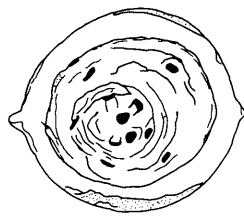
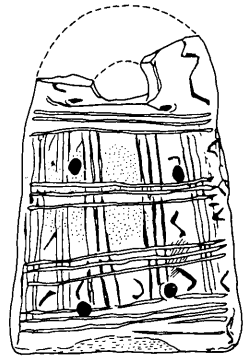
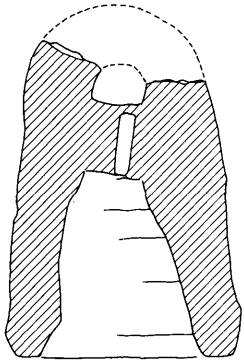
No.	遺跡名	所在地	法量 (cm)			現在〔復元〕	出土年月	出土遺構	時期	図版番号
			高さ	底部長径	底部短径					
1	上箕田遺跡	鈴鹿市箕田町字祇園田	8.4〔9.5〕	6.2	5.4	1969. 1	大溝	後期前半	118-1	
2	太田遺跡	津市長岡町字太田	6.5〔9.5〕	7.3	〔4.6〕	1988.11	大溝	後期	93	
3	一反通遺跡	鈴鹿市上野町字一反通	4.0〔-〕	2.8	2.4	1989. 1	包含層	後期	118-2	
4	涌早崎遺跡	松阪市大津町字涌早崎	8.0	6.8	5.0	1990. 4	柱穴	中期末	118-3	

第25表 三重県内出土銅鐸形土製品一覧表

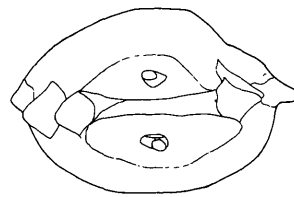
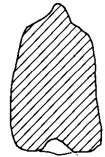
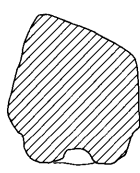
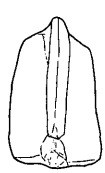


1 上箕田遺跡

(報告書から一部改変、再トレース)

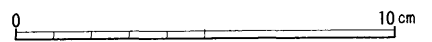
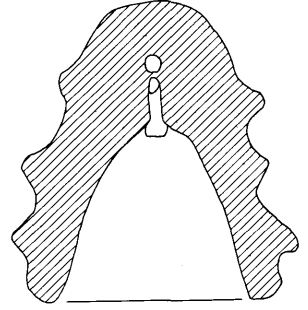
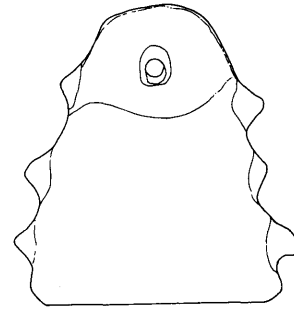
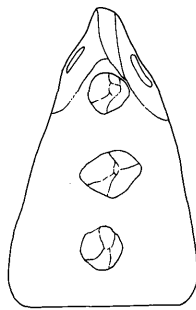
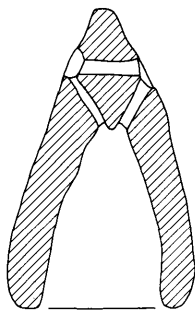


2 一反通遺跡



3 涌早崎遺跡

(報告書を再トレース)



第118図 三重県内出土銅鐸形土製品 (1:2)

定できないことも事実である。沖積地に広がる遺跡であり、弥生時代の拠点集落である納所遺跡にも近く、生産域としての水田遺構を検出した森山東遺跡〔本報告書所収〕に隣接するという立地を考えても、集落における農耕祭祀との関連は明かであろう。

本遺跡出土例を中心にした県内出土のわずか4例の土製品の比較検討であり、推測の域を出ない点も多い。また、銅鐸との関係、集落内での祭祀の在り方とも関連するものであり、詳細な検討を今後の課題としたい。

(中村光司)

〔註〕

- ① 伊藤克幸ほか「安芸郡安濃村・辻の内遺跡」『昭和50年度農業基盤整備地域埋蔵文化財調査報告1』安濃村遺跡調査会 1975年
- ② 増田安生・浅生悦生「Ⅲ 山籠遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990年
- ③ 萱室康光ほか「長遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1989年
- ④ 谷本鋭次「津市河辺町・亀井遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県文化財連盟 1973年
- ⑤ 伊藤久嗣「納所遺跡―遺構と遺物―」三重県教育委員会 1980年
- ⑥ 岩崎直也「邪馬台国出現前夜の近江―弥生土器から―」『滋賀考古』創刊号 滋賀考古学研究会 1989年
- ⑦ 「Ⅲ 六大B遺跡―B～G地区」『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991年
- ⑧ 「Ⅱ 橋垣内遺跡―B地区」『同前掲書⑧』
- ⑨ 同前掲書⑤
- ⑩ 米山浩之「Ⅲ 蔵田遺跡」『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報』津市教育委員会 1993年
- ⑪ 萱室康光「西垣内遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1986年
- ⑫ 兼康保明「近江地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』寺沢薫・森岡秀人編 木耳社 1990年
- ⑬ 赤塚次郎「廻間遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990年
- ⑭ 伊藤克幸「一志郡三雲村・貝塚遺跡」『昭和51年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1976年
- ⑮ 同前掲書①
- ⑯ 谷本鋭次「安芸郡安濃村・清水西遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県文化財連盟 1973年
- ⑰ 谷本鋭次ほか「養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告」三重県文化財連盟 1972年
- ⑱ 同上
- ⑲ 同上
- ⑳ 同前掲書⑤
- ㉑ 萱室康光「中高遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1977年
- ㉒ 倉田直純「地藏僧遺跡発掘調査報告」亀山市教育委員会 1978年
- ㉓ 駒田利治・山田猛ほか「北掘池遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1981年
- ㉔ 穂積裕昌ほか「城之越遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1992年
- ㉕ 1992年度三重県埋蔵文化財センター調査部分
- ㉖ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」1991年
- ㉗ 古照遺跡調査団編『古照遺跡』松山市教育委員会 1974年
- ㉘ 財団法人 東大阪市文化財協会『鬼虎川の木質遺物―第7次発掘調査報告 第4冊―』1987年
- ㉙ 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘報告X」1981年
- ㉚ 三重県埋蔵文化財センター「中勢道路調査ニュースNo.14」1991年
- ㉛ 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」1991年
- ㉜ 同前掲書②③
- ㉝ 当報告の森山東遺跡の部分を参照
- ㉞ 同前掲書②③
- ㉟ 関野克「住居址と倉庫址との建築学的考察」『登呂本編』日本考古学協会編 1954年
- ㊱ 宮本長二郎氏の御教示による。
- ㊲ 同前掲書②③
- ㊳ 宮本長二郎「古墳時代高床建物の扉構え」『中村遺跡』渋川市教育委員会 1986年
- ㊴ 伊藤友久「集落遺跡に係わる建築構造―長野県の原始・古代・中世―」『信濃』第44巻第4号 1992年
- ㊵ 増田安生ほか「前沖遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会1986年
- ㊶ 出土状況の写真はあるが、個別の実測図・写真は掲載されていない。河瀬信幸ほか「Ⅳ 松阪市深長町杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1989年
- ㊷ 同前掲書⑤
- ㊸ 大竹憲昭・河西克造「(12) 川田条里遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報6』財団法人長野県埋蔵文化財センター 1989年
- ㊹ 大東市北新町遺跡調査会『北新町遺跡第2次発掘概要報告書』1991年
- ㊺ 「見晴台遺跡 第30次発掘調査の記録」名古屋市見晴台考古資料館 1992年
- ㊻ 「上箕田 弥生式遺跡第二次調査報告」上箕田遺跡調査会・鈴鹿市教育委員会 1970年
- ㊼ 「涌早崎遺跡発掘調査報告書」松阪市教育委員会 1992年
- 遺物の実見にあたって、松阪市教育委員会社会教育課福田昭氏に御配慮と御教示を得た。記して謝意を表する次第である。
- ㊽ 「鈴鹿市埋蔵文化財だより2」鈴鹿市教育委員会 1989年
- 遺物の実測・出土状況については、鈴鹿市教育委員会文化財保護課新田剛氏に御配慮と御教示を得た。記して謝意を表する次第である。
- ㊾ 註46、47の各報告書による。
- ㊿ 「津市の文化財」津市教育委員会 1989年
- ① 註48に同じ
- ② 真田幸成「上箕田出土の銅鐸形土製品について」『考古学雑誌』第55巻1号 1969年
- ③ 「朝日遺跡Ⅱ(本文篇2・図版篇)」愛知県教育委員会 1982年
- なお、第117図は、以下の文献をもとに作成した。
- 城之越遺跡 註②④文献
- 北掘池遺跡 註②③文献
- 前沖遺跡 再実測
- 杉垣内遺跡 新たに実測
- 太田遺跡 当報告
- 納所遺跡 註⑤文献
- 百間川原尾島遺跡 『百間川原尾島遺跡2』建設省 岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1984年
- 讚良郡条里遺跡 『都市計画道路国守・黒原線建設工事に伴う讚良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会1991年
- 北新町遺跡 註④⑤文献
- 中村遺跡 註⑧⑨文献
- 川田条里遺跡 註④⑤文献及び、大竹憲昭「(9) 川田条里遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報7』財団法人長野県埋蔵文化財センター 1990年

遺物 番号	登録番号	遺 構 (出土位置)	器 種	法 量 (cm)	調整技法の特徴		色 調	胎 土	残存度	備 考
					口縁部 (杯部)	体部 (脚部・底部)				
1	018-02	大溝下層 G-10	弥生土器 壺A1	口径16.6	外面:櫛刺突斜格子文 内面:ナデ	—	にぶい橙	密	口縁1/6	
2	025-04	〃 G-11	〃	口径15.0	外面:櫛刺突文 内面:ナデ	—	灰白	密	口縁1/4	
3	025-03	〃 G-11	〃	口径15.2	外面:浅い櫛刺突文 内面:ヨコナデ	内面:ヨコナデ、ナデ	灰白	密	口頸2/5	
4	076-03	〃 K-15	〃	口径 9.6	外面:羽状刺突文 内面:頸部にヨコハケ	—	にぶい橙	密	口頸1/6	
5	058-04	〃 J-13	〃	口径10.5	端部外面:ヘラ状器具による 斜格子状文 内面:ナデ	—	にぶい黄橙	並	口頸1/5	
6	082-02	〃 K-17	〃	口径15.4	内外面:ミガキのちナデ 端部外面に棒状浮文貼付	—	浅黄橙	密	口縁2/5	
7	040-01	〃 H-12	壺A2	口径14.2	外部:波状文 内面:ヨコナデ	—	灰黄	密	口縁1/10	
8	058-07	〃 J-13	〃	口径12.0	外面:羽状刺突文 内面:ナデ	—	にぶい黄橙	やや粗 ~2mmの長石等含	口縁1/7	
9	023-06	〃 G-11	壺A3	口径15.5	外面:櫛刺突文 内面:羽状刺突文	—	にぶい橙	並	口頸3/5	
10	043-08	〃 H-13	〃	口径16.7	端部外面:浅い横線の後 羽状刺突文 内外面:ヘラミガキ	—	灰白	密	口縁1/5	
11	033-03	〃 H-10	壺A4	口径18.2	外面:竹管刺突文 内面:ていねいなナデ	—	にぶい黄橙	並	口縁1/5	
12	035-05	〃 H-11	〃	口径18.6	外面:竹管浮文、ヘラミガキ 内面:竹管刺突文	—	にぶい黄橙	やや粗 ~2mmの長石等含	口縁1/7	
13	082-04	〃 K-17	〃	口径16.4	外面:ハケによる横線 内面:羽状刺突文、ナデ	—	にぶい褐	並	口縁1/5	
14	013-01	〃 F-11	土師器 壺F2	口径11.5	外面:ハケのちヨコナデ 内面:ヨコハケ	外面:ハケメ 内面:ヨコナデ	黒	密	口頸1/3	外面スス附着
15	078-01	〃 K-15	弥生土器 —	—	—	外面:櫛刺横線、刺突文 内面:ユビオサエ	浅黄橙	並	体部3/10	
16	100-03	〃 G-11	〃	—	—	外面:櫛刺波状文、横線文	黒褐	密	体部片	
17	101-05	〃 K-17	〃	—	—	外面:櫛刺横線文、扇状文	淡黄	密	体部片	
18	101-04	〃 —	〃	—	—	外面:櫛刺波状文、横線文	黒褐	密	体部片	
19	101-06	〃 I-14	〃	—	—	外面:櫛刺横線文	にぶい橙	密	体部片	
20	038-05	〃 H-12	壺B	口径 11.0 底径 5.5 器高 23.0	内外面:ヨコナデ	内外面:粗いミガキ、ナデ、体部に穿孔、 頸部外面に刻目	にぶい橙	密	ほぼ完存	
21	050-01	〃 I-13	〃	口径 9.2 底径 5.0 器高 20.1	内外面:ヨコナデ	内外面:ナデ	浅黄橙	並 ~3mm長石含	完存	
22	063-02	〃 J-14	〃	口径 8.2 底径 5.2 器高 22.0	内外面:ヨコナデ	外面:上半ハケメ、下半ケズリ 内面:ハケメ、頸部指圧痕	にぶい黄橙	密	完存	
23	098-03	〃 I-13	〃	底径 5.3 体部最大径19.8	—	外面:ハケメ 内面:ユビオサエ、ハケメ	灰黄	密	口縁部欠損	
24	064-05	〃 J-14	〃	底径 3.3	—	外面:ヘラミガキ 内面:ユビオサエ、ナデ	にぶい褐	並	口縁部欠損	
25	061-05	〃 J-14	〃	口径 6.2 底径 3.7 器高 13.0	外面:刺突文 内面:ヨコナデ	外面:頸部刺突文、下半ヘラミガキ 内面:ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙	並	完存	
26	085-01	〃 L-16	壺C	口径 6.2 底径 4.0 器高 22.7	外面:タテ方向ヘラミガキ	外面:中央部ヨコ方向ヘラミガキ 下半・脚台部タテ方向ヘラミガキ	にぶい黄橙	並 ~3mm長石多含	完存	
27	039-02	〃 H-12	〃	底径 9.0	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	にぶい黄橙	やや粗	脚台部完存	
28	018-04	〃 G-10	土師器 壺D	体部最大径 14.4	—	外面:ヘラミガキ、波状文 内面:ユビオサエ、ナデ、粗いハケメ	灰	密	体部1/5	
29	044-03	〃 H-13	〃	体部最大径 15.5	—	外面:タテ方向ミガキのち横方向ミガキ、ナデ 具殻腹縁による刺突文3段 内面:ハケメ、ナデ	橙	密	体部3/10	
30	079-03	〃 K-16	〃	口径 5.3 体部最大径15.8 器高 19.3	外面:タテ・ヨコミガキ 内面:ミガキ	外面:タテ、ヨコ細かいミガキ 内面:板状具によるナデ	浅黄橙	密	ほぼ完存	
31	052-06	〃 I-14	壺E	底径 4.7 体部最大径13.9	—	外面:ヨコハケのち細かいヘラミガキ 内面:ユビオサエ、ユビオサエ	淡橙	緻密	体部完存	
32	038-04	〃 H-12	〃	底径 4.6 体部最大径15.7	—	外面:タテ方向ヘラミガキ 内面:ハケメ、ユビオサエ	にぶい黄橙	密	体部完存	
33	021-03	〃 G-11	〃	底径 4.4 体部最大径11.6	—	外面:タテ方向ヘラミガキのちヨコナデ 内面:ナデ、ユビオサエ	褐灰	密	体部完存	
34	021-04	〃 G-11	〃	底径 4.4 体部最大径16.7	—	外面:ヨコハケのちタテ方向ヘラミガキ 内面:上半ユビオサエ、下半不定方向ハケメ	にぶい黄橙	密	体部完存	
35	063-01	〃 J-14	〃	底径 4.0 体部最大径10.1	—	外面:細かいヘラミガキ、上部ナデ消し 内面:ナメ方向ユビナデ、ユビオサエ	浅黄橙	密	体部完存	
36	041-04	〃 H-13	壺F	底径 4.8 体部最大径14.8	—	外面:ナデ、下半に穿孔 内面:頸部にユビオサエ	橙	並	口縁部欠損	表面は剝離 激しい

第26表 遺物（土器）観察表（1）

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
37	027-01	大溝下層 G-12	土師器 壺F1	口径 12.3 器高 16.8	内外面:ヨコナデ	外面:底部に不定方向のケズリ 内面:ナデ、ユビオサエ	灰黄	並	完存	
38	066-03	〃 E-11	〃	口径 11.8	内外面:ヨコナデ	外面:ハケメ、ユビオサエ、ナデ 内面:ユビオサエ、工具痕	橙	密	1/3	
39	052-03	〃 I-14	〃	体部最大径13.8	—	外面:上半は粗いヘラミガキ、底部ヘラケズリ 内面:ナデ、ユビオサエ	橙	密	体部完存	
40	042-04	〃 H-13	〃 壺G	口径 18.6	内外面:細かいヘラミガキ	頸部外面::ハケのちヘラミガキ 頸部内面:ナデ、ハケ	にぶい橙	並	口頸ほぼ完存	
41	052-02	〃 I-14	〃 壺I	口径 6.2 器高 8.6	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:ナデ、底部未調整	灰黄	密	完存	
42	015-04	〃 F-11	〃	口径 7.9 器高 9.0	内外面:ヨコナデ	外面:上半ヨコナデ、下半ユビオサエ 内面:底部に工具痕	にぶい褐	密	4/5	
43	076-04	〃 K-15	〃	口径 10.0 器高 10.7	内外面:ヨコナデ	外面:ハケメ、ユビオサエ 内面:ナデ	にぶい黄褐	並 雲母含	完存	
44	061-02	〃 J-14	〃 小型丸底壺B	口径 10.0 器高 11.0	内外面:ヨコナデ	外面:上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ 内面:ナデ、ユビオサエ	にぶい橙	並	ほぼ完存	
45	064-01	〃 J-14	〃 小型丸底壺A	口径 9.7 器高 9.5	内外面:ヨコナデ	外面:上半タテハケ残る、下半ナデ 内面:ユビオサエ、ナデ	にぶい褐	並	口縁1/2欠損	
46	050-03	〃 I-13	〃	口径 11.6 器高 8.7	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ、底部ヘラケズリ 内面:ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙	並	完存	
47	075-01	〃 K-15	〃	口径 8.9 器高 8.9	外面:ユビオサエ 内面:ハケのちユビオサエ	外面:ナデ、底部ヘラケズリ 内面:ユビオサエ	明褐灰	やや粗 雲母含	完存	
48	012-05	〃 F-11	〃	口径 11.0 器高 8.1	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:ナデ、ユビオサエ	黄灰	密	完存	
49	062-07	〃 J-14	〃	口径 9.8 器高 7.5	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:不定方向のヨコナデ	にぶい黄橙	密	口縁1/2欠損	
50	061-06	〃 J-14	〃	口径 8.9 器高 7.9	内外面:ヨコナデ	外面:上半ヘラケズリ 内面:ナデ、ユビオサエ、工具痕残る	黄灰	並	完存	
51	012-04	〃 F-11	〃	口径 8.2 器高 7.6	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:ナデ、ユビオサエ	にぶい赤褐	密	口縁1/2欠損	
52	012-06	〃 F-11	〃 小型丸底壺B	口径 8.2 器高 9.0	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ、底部ケズリ 内面:ナデ	灰黄褐	密	完存	
53	085-05	〃 L-16	〃	口径 8.2	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ、粗いたテハケ、ユビオサエ 内面:ナデ、ヘラ杖工具痕残る	にぶい橙	やや粗 2~3mmの粒含	2/5	
54	084-01	〃 L-16	〃	口径 9.6 器高 9.4	外面:ヨコナデ 内面:タテハケ	外面:上部ハケメ、底部ケズリ 内面:底部工具痕	にぶい褐	やや粗 ~3mmの粒含	完存	
55	064-03	〃 J-14	〃	口径 8.8 器高 7.5	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ、一部ハケメ残る 内面:底部ユビオサエ、全体に朱が残る	にぶい黄橙	やや粗	口縁1/2欠損	
56	064-02	〃 J-14	〃	口径 8.4 器高 8.2	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:ユビオサエ顕著	にぶい黄橙	並	完存	
57	010-05	〃 F-11	〃	口径 8.0 器高 6.7	内外面:ヨコナデ、ハケメ	外面:ハケメ、底部ハケ、ナデ 内面:ナデ、ユビオサエ	にぶい褐	並	口縁2/3欠損	
58	041-03	〃 H-13	〃 小型丸底壺	体部最大径 9.7	—	外面:上半ヨコナデ、下半ヨコ方向ヘラミガキ 内面:工具痕、ユビオサエ	にぶい黄橙	密	体部完存	
59	048-03	〃 I-13	〃	体部最大径 9.2	—	外面:不定方向のナデ 内面:工具痕明瞭に残る	褐灰	密	体部完存	
60	075-04	〃 K-15	〃	体部最大径 10.4	—	内外面:ナデ	にぶい褐	並	体部完存	スス付着
61	075-03	〃 K-15	〃	底径 4.6 体部最大径 8.4	—	外面:ナデ 内面:ヨコナデ、工具痕	にぶい黄橙	並	体部完存	
62	075-02	〃 K-15	〃	体部最大径 8.0	—	外面:ナデ 内面:ヨコナデ、ユビオサエ、工具痕	灰黄	並	体部完存	
63	025-01	〃 G-11	〃 弥生土器 壺A	口径 36.4	外面:ヘラ杖具による押印跡あり 内面:粗いヨコナデ、ケズリ突文	—	にぶい黄橙	並	口縁1/10	
64	040-02	〃 H-12	〃 鉢B	口径 10.1 体部最大径10.8	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ (3~4本/cm) 内面:ナデ	にぶい黄橙	密	口縁~体部 ほぼ完形	
65	070-01	〃 J-17	〃	口径 10.5 底径 10.4 器高 15.3	外面:ヨコナデ、櫛刺突文 内面:ヨコナデ	外面:櫛刺突文、波状文、ハケ 内面:ハケ、ユビオサエ	褐灰	並 ~2mmの粒含	完存	
66	023-09	〃 G-11	〃	口径 15.9	内外面:ヨコナデ	外面:櫛刺横線文、波状文 内面:ユビオサエ、ハケ	灰黄褐	並	口縁~体部 1/5	
67	025-05	〃 G-11	〃 壺C1	口径 15.1	外面:櫛刺突文 内面:ヨコナデ	外面:櫛刺横線文、櫛刺突文 内面:ユビオサエ、ナデ	灰白	やや粗 ~2mmの粒含	口縁~体部 1/4	
68	024-05	〃 G-11	〃	口径 12.8	外面:櫛刺突文 内面:ヨコナデ	外面:櫛刺横線文、ハケ 内面:ナデ、ハケ、ユビオサエ	にぶい橙	密	口縁~体部 1/3	
69	080-03	〃 K-16	〃	口径 12.0	外面:ヨコナデのち櫛刺突文 内面:ヨコナデ	頸部外面:ナデ 頸部内面:ナデ	灰黄	やや粗	口頸1/5	
70	082-03	〃 K-17	〃	口径 20.7	外面:櫛刺突文2種 内面:ヨコナデ	—	灰黄褐	やや粗 雲母含	口縁1/10	
71	042-08	〃 H-17	〃 壺C2	口径 15.6	外面:櫛刺突文 内面:ヨコナデ	外面:ハケのち横線 内面:粗いハケ	にぶい黄橙	並 ~1mmの粒含	口縁~体部 1/3	
72	046-04	〃 H-14	〃	口径 14.4	外面:櫛刺突文 内面:ヨコナデ	外面:櫛刺突文、ハケ、櫛刺横線文 内面:ナデ	灰黄褐	並	口縁~体部 1/3	

第27表 遺物(土器)観察表(2)

遺物 番号	登録番号	遺 構 (出土位置)	器 種	法 量 (cm)	調整技法の特徴		色 調	胎 土	残存度	備 考
					口縁部 (杯部)	体部 (脚部・底部)				
73	058-06	大溝下層 J-13	弥生土器 甕C2	口径 16.1	外面:刺突押引文 内面:ヨコナデ	外面:粗いハケのち横線文 内面:ナデ、ハケ	浅黄橙	並	口頸1/5	
74	033-04	〃 H-10	〃	口径 23.4	外面:櫛刺突列点文 内面:ヨコナデ	—	褐灰	粗	口縁1/7	
75	084-04	〃 L-16	〃	口径 18.4	外面:ヨコナデのち櫛刻目 内面:強いヨコナデ	外面:頸部櫛状具による刻目 内面:粗いハケ	灰褐	やや粗 ~2mmの粒含	口頸1/7	
76	023-04	〃 G-11	〃	口径 14.9	外面:ヨコナデ、ヘラ状具 による刻目 内面:ヨコナデ	外面:タテハケのちヨコハケ 内面:ハケのちナデ	にぶい黄橙	密	口縁~体部 完存	
77	035-02	〃 H-11	〃	口径 16.7	外面:ヨコナデのち櫛刺突文 内面:ヨコナデ	—	褐灰	やや粗	口縁1/10	
78	042-07	〃 H-13	〃	口径 15.3	外面:ヨコナデのち櫛刺突文 内面:ヨコナデ	頸部外面:ユビオサエ、ハケメ 頸部内面:ユビオサエ	灰白	やや粗 ~2mmの粒含	口頸1/5	外面スス附着
79	024-04	〃 G-11	〃	口径 19.6	外面:ヨコナデのち櫛刺突文 内面:ヨコナデ	頸部外面:ハケメ 頸部内面:ハケのちナデ	灰黄	並	口頸1/5	
80	043-06	〃 H-13	〃	口径 16.9	外面:ヨコナデのち刺突押引文 内面:ヨコナデ	頸部外面:タテハケ、ヨコハケ 頸部内面:ハケのちナデ	にぶい黄橙	並	口頸1/3	
81	049-04	〃 I-13	〃	口径 12.8	外面:ヨコナデのち櫛刺突文 内面:ヨコナデ	外面:頸部ハケ、体部櫛刺突文	にぶい黄褐	並	口頸1/7	
82	054-04	〃 I-14	土師器 甕D1	口径 15.8	外面:ヨコナデ、刺突押引文 内面:ヨコナデ	外面:ナメハケのちヨコハケ、刺突文 内面:ハケのちナデ	灰黄	並	脚台部欠損	
83	080-06	〃 K-16	〃	口径 15.5	外面:ヨコナデ、刺突押引文 内面:ヨコナデ	外面:不定方向ハケ 内面:ハケ、頸部ユビオサエ	明黄褐	並	口縁~体部 1/5	
84	025-02	〃 G-11	〃	口径 16.9	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケのちヨコハケ 内面:ナデ、ユビオサエ	灰白	並	口縁~体部 1/5	
85	024-02	〃 G-11	〃	口径 13.1	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケのちヨコハケ 内面:ユビオサエのちナデ	灰黄	並	口縁~体部 1/5	
86	010-01	〃 F-11	〃	口径 15.1	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケ (9本単位、5本/cm) のち ヨコハケ、頸部に凹線 内面:ユビオサエ	淡黄	並	口縁~体部 1/5	
87	052-05	〃 I-14	〃	口径 17.2	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケのちヨコハケ 内面:頸部粗いハケ、ナデ	灰白	密	口頸1/10	
88	055-03	〃 I-14	〃	口径 13.1	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケのちヨコハケ 頸部に凹線 内面:ナデ	灰白	並 雲母含	口縁~体部 1/4	
89	049-01	〃 I-13	甕D2	口径 21.0	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケのちヨコハケ 内面:ユビオサエ、ナデ	にぶい黄橙	並 ~2mmの粒含	口縁~体部 1/7	
90	051-01	〃 I-13	甕D1	口径 10.0	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケのちヨコハケ頸部に凹線 内面:ユビオサエ、ナデ	淡黄	並 雲母含	口縁~体部 1/3	外面スス附着
91	055-02	〃 I-14	甕D2	口径 15.2	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケのちヨコハケ 内面:ユビオサエ、頸部に粗いハケ	黄褐	密	口縁~体部 1/4	
92	023-05	〃 G-11	甕D1	口径 12.0	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケ 内面:ユビオサエ、ナデ	黒褐	並	口縁~体部 1/4	外面スス附着
93	024-03	〃 G-11	甕D2	口径 15.3	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケのちヨコハケ頸部に凹線 内面:ユビオサエ、ナデ	灰黄	並	口縁~体部 1/5	
94	050-02	〃 I-13	〃	口径 11.6	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケのちヨコハケ 内面:ユビオサエ、ナデ	黄褐	密	口縁~体部 1/4	
95	039-03	〃 H-12	〃	口径 13.5	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ (2~3本/cm) 頸部に凹線 内面:板ナデのちナデ	黒	並	2/5	外面スス附着
96	056-01	〃 I-14	〃	口径 13.3	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケ (4本単位、3本/cm) 内面:ナデ	暗灰黄	並 雲母含	口縁~体部 1/3	
97	062-03	〃 J-14	〃	口径 12.2	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケ (単位不明、4本/cm) 頸部に凹線 内面:ナデ	灰白	並	口縁~体部 1/5	
98	029-01	〃 G-12	〃	口径 16.2	内外面:ヨコナデ	外面:ナメハケ (単位不明、3本/cm) 頸部に凹線 内面:ユビオサエ、ナデ	灰黄	やや粗 ~3mmの粒含	口縁~体部 4/5	
99	051-02	〃 I-13	〃	口径 15.4	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ (単位不明、5~6本/cm) 頸部に凹線 内面:ナデ	灰黄褐	並	口縁~体部 1/7	
100	035-03	〃 H-11	〃	口径 13.3	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ、頸部に凹線 内面:ナデ	褐灰	並	口縁~体部 1/4	
101	048-02	〃 I-13	甕D3	口径 15.0	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ (単位不明、3~4本/cm) 内面:ユビオサエ、ヘラ状工具痕	黒	密	口縁~体部 1/7	外面スス附着
102	043-02	〃 H-13	甕F	口径 13.4	頸部つまみあげ 外面:ヨコナデ 内面:粗いハケ	外面:タタキ 内面:粗いハケのちナデ	灰黄褐	並 ~2mmの粒含	口縁~体部 1/5	
103	055-01	〃 I-14	弥生土器 甕脚台A	底径 6.8	—	外面:細かいハケ、脚部ナデ 内面:細かいハケ、脚部ナデ	にぶい橙	密	脚台完存	
104	086-04	〃 L-16	〃	底径 5.8	—	外面:ハケ、脚部ナデ、裾ヨコナデ 内面:ハケ、脚部ナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙	密	脚台完存	
105	049-02	〃 I-13	〃	底径 6.7	—	外面:ナデ、裾ヨコナデ 内面:ユビナデ、底部未調整	灰黄	密	脚台完存	
106	064-06	〃 J-14	土師器 甕脚台B1	底径 8.8	—	外面:上半ハケ、下半ナデ、裾ヨコナデ 内面:ユビオサエ、ナデ、裾折り返し	灰黄褐	並	脚台完存	
107	063-04	〃 J-14	〃	底径 8.7	—	外面:ハケ、裾ヨコナデ 内面:ユビオサエ、ヨコナデ、裾折り返し	にぶい黄橙	密	脚台完存	
108	049-05	〃 I-13	〃	底径 8.9	—	外面:ハケ、裾ナデ 内面:工具痕、ユビオサエ、ナデ、裾折り返し	にぶい黄橙	密	脚台4/5	

第28表 遺物 (土器) 観察表 (3)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
109	012-03	大溝下層 F-11	土師器 甕脚台B1	底径 7.1	—	外面:ナメハケ 内面:ユビオサエ、裾折り返し	灰黄	密	脚台7/10	
110	011-03	〃 F-11	〃 甕脚台B2	底径 7.9	—	外面:体部~脚上半ハケ、裾ヨコナデ 内面:ユビナデ、裾折り返し	赤灰	密	脚台完存	
111	011-01	〃 F-11	〃 〃	底径 8.0	—	外面:ナメハケ 内面:シボリ痕、ヨコナデ、裾折り返し	褐灰	密	脚台完存	
112	011-02	〃 F-11	〃 〃	底径 8.5	—	外面:体部~脚上半ハケ 内面:ヨコナデ、裾折り返し、ちユビオサエ	にぶい橙	密	脚台完存	
113	064-04	〃 J-14	〃 〃	底径 8.9	—	外面:ナデ 内面:ヨコナデ、裾折り返し、ちユビオサエ	灰黄	密	脚台完存	
114	063-03	〃 J-14	〃 〃	底径 8.7	—	外面:ナデ 内面:ヨコナデ、裾折り返し、ちユビオサエ	灰黄褐	密	脚台完存	
115	075-06	〃 K-15	〃 甕脚台B3	底径 8.5	—	外面:ナデ、ユビオサエ 内面:ナデ、裾折り返し、ちユビオサエ	灰白	並	脚部完存	外面剝離激しい
116	033-05	〃 H-10	弥生土器 高杯A1	口径 25.8	端面:ヨコナデ 内外面:ヘラミガキ	—	にぶい赤褐	並	口縁1/7	
117	067-07	〃 J-15	〃 〃	口径 26.2	端面:ヨコナデ 内外面:ヘラミガキ	—	にぶい橙	密	口縁1/3	
118	040-04	〃 H-12	〃 〃	口径 23.2	端面:ヨコナデ 外面:ヘラミガキ 内面:ナデ、ヘラミガキ	—	にぶい橙	並	口縁1/5	
119	040-06	〃 H-12	〃 〃	口径 29.0	端面:ヨコナデ 内外面:ヘラミガキのちナデ	—	明黄褐	密	口縁1/7	
120	026-03	〃 G-11	〃 高杯A2	口径 22.8	端面:ヨコナデ 内外面:ヘラミガキ、ナデ	—	にぶい赤褐	並	口縁1/7	
121	042-05	〃 H-13	〃 高杯A3	口径 21.7	端面:ヨコナデ 内外面:ヘラミガキ	外面:ヘラミガキのち櫛描横線(6本単位) 内面:工具痕	にぶい黄橙	密	体部~脚上半 1/10	
122	023-07	〃 G-11	〃 高杯B	口径 14.9	外面:ハケ、ヘラミガキ 内面:細かいハケのちナデ	—	にぶい赤褐	密	杯部1/5	
123	023-03	〃 G-11	〃 高杯脚A	—	—	外面:タテ方向ヘラミガキのち櫛描横線 (6本単位) 内面:工具痕、ナデ	灰黄褐	並	脚柱部	
124	069-02	〃 J-16	〃 〃	—	—	外面:タテ方向ヘラミガキのち櫛描横線 (6本単位) 内面:シボリ痕顕著	灰黄	並	脚柱部	
125	023-02	〃 G-11	〃 〃	—	—	外面:タテ方向ミガキのち櫛描横線 (5本単位) 内面:ナデ	明褐灰	並	脚柱部	
126	019-05	〃 G-10	〃 〃	—	—	外面:タテ方向ナデ櫛描横線 内面:タテ方向ナデ	灰黄	並 ~3mmの粒含	脚柱部	
127	057-02	〃 I-16	〃 〃	—	—	外面:以腹線刺突、ていねいなミガキ のち櫛描横線文(6本単位) 内面:ユビオサエ、裾ハケ	浅黄橙	密	脚部1/3	
128	036-04	〃 H-11	〃 〃	—	—	外面:櫛描横線文、貝腹刺突文 内面:シボリ痕、ナデ	黄灰	密	脚部上半	
129	079-02	〃 K-16	〃 高杯脚B	—	—	外面:タテ方向ヘラミガキのち櫛描横線 (6本単位) 内面:シボリ痕顕著	にぶい褐	並	脚部上半	
130	090-05	〃 —	〃 高杯脚A	底径 15.4	—	外面:タテ方向ヘラミガキのち櫛描横線 (5本単位) 内面:ユビオサエ、ナデ、端面ヨコナデ	赤褐	密	脚部1/2	
131	041-01	〃 H-13	〃 〃	底径 11.9	—	外面:櫛描横線、ナデ、裾ヨコナデ 内面:シボリ痕、ナデ	暗灰黄	密	脚部ほぼ完存	
132	041-02	〃 H-13	〃 高杯脚	底径 9.1	—	外面:タテハケのちタテ方向ヘラミガキ 内面:シボリ痕	褐灰	密	脚部完存	
133	012-01	〃 F-11	土師器 高杯D	口径 23.8	内外面:ヨコナデ	外面:杯接合部ユビオサエ	にぶい赤褐	密	杯部4/5	
134	050-04	〃 I-13	弥生土器 高杯脚B	底径 10.5	—	外面:櫛描横線、タテ方向ヘラミガキ 内面:シボリ痕、裾ヨコナデ	灰白	密	脚部1/2	
135	036-01	〃 H-11	〃 〃	底径 11.7	—	外面:櫛描横線、タテ方向ヘラミガキ 内面:ヘラ状工具痕、裾ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部完存	
136	028-03	〃 G-12	〃 〃	—	—	外面:櫛描横線、タテ方向ヘラミガキ 内面:シボリ痕顕著	橙	密	脚部上半1/2	
137	022-05	〃 G-11	〃 〃	底径 11.1	—	外面:タテ方向ヘラミガキ 内面:上部シボリ痕、下半ナデ	明褐灰	並	脚部1/2	
138	024-08	〃 G-11	〃 〃	底径 12.5	—	外面:ナデ、ハケメ残る 内面:ナデ、裾ヨコナデ	黄灰	密	脚部裾3/10	
139	066-06	〃 J-15	〃 高杯脚C	底径 12.5	—	外面:タテ方向ヘラミガキ 内面:タテ方向、裾ヨコナデ	灰白	並	脚部1/2	
140	036-02	〃 H-11	〃 〃	—	—	外面:タテ方向ヘラミガキ 内面:タテ方向ナデ	灰黄	粗	脚部上半完存	
141	011-04	〃 F-11	土師器 高杯F	口径 16.9	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコナデ 内面:底ハケメ残る	橙	密	杯部完存	
142	010-06	〃 F-11	〃 〃	底径 13.4	—	外面:タテ方向ナデ、裾ヨコナデ 内面:ヨコナデ	にぶい黄橙	密	杯部ほぼ完存	
143	036-05	〃 H-11	〃 〃	—	内外面:タテ方向ヘラミガキ	外面:タテ方向ヘラミガキ 内面:杯部ヘラミガキ、脚部シボリ痕、ユビナデ	橙	密	杯底~脚柱部 完存	
144	010-03	〃 F-11	〃 〃	底径 13.0	—	外面:タテ方向板ナデ 内面:ナデ 内外裾:ヨコナデ	にぶい褐	密	脚部完存	

第29表 遺物(土器)観察表(4)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
145	090-01	大溝下層 —	土師器 高杯F	底径 11.2	—	外面:ヨコナデのちタテ方向板ナデ 内面:タテ方向ナデ、内外襷ヨコナデ	にぶい黄褐	並	脚部完存	
146	060-06	J-16	〃	底径 11.0	—	外面:タテ方向板ナデ 内面:シボリ痕顕著、内外襷ヨコナデ	にぶい橙	並	脚部ほぼ完存	
147	066-04	J-15	〃	底径 10.8	—	外面:タテ方向板ナデ 内面:ケズリ、内外襷ヨコナデ	淡赤橙	並	脚部完存	
148	068-01	J-16	〃 高杯G	底径 11.4	—	外面:タテ方向ナデ 内面:ユビオサエ、襷ヨコナデ	黄灰	並 ~2mmの粒含	脚部4/5	
149	082-01	K-17	弥生土器 鉢A	口径 12.2	端部刻み目	外面:ナデ 内面:ヨコナデ	にぶい黄橙	並	口縁~体部 1/5	
150	057-01	I-16	器台	底径 11.6	—	外面:ナデ、ヨコハケ 内面:ナデ、襷内外面:ヨコナデ	灰褐	並	裾部1/4	
151	085-06	L-16	器台	口径 9.3	内外面:ナデ、端部ヨコナデ	内外面:ナデ	橙	密	裾部欠損	
152	028-01	G-12	器台	底径 13.0 器高 7.1	外面:細かいハケ 内面:ナデ	外面:タテ方向の細かいミガキ 内面:シボリ痕、内外襷ヨコナデ	にぶい黄橙	並 ~3mmの粒含	ほぼ完存	
153	010-04	F-11	器台	底径 13.0	—	外面:タテ方向板状具によるナデ 内面:シボリ痕、ヨコナデ	黄灰	並 ~2mmの粒含	脚完存	
154	088-01	M-12	器台	底径 15.8	—	外面:ミガキ、襷内外ヨコナデ 内面:ハケのちナデ、ユビオサエ	黄橙	並	裾部1/5	
155	038-01	—	ミニチュア土器	口径 5.0 底径 3.3 器高 6.6	内外面:ユビオサエ	外面:タテ方向ヘラ状具によるナデ 内面:ヨコナデ、ユビオサエ	橙	密 雲母含	完存	
156	052-01	I-14	ミニチュア土器	口径 4.6 底径 3.2 器高 3.1	内外面:ヨコナデ	内外面:ナデ、ユビオサエ	にぶい橙	密	完存	
157	034-03	H-11	土錘	直径 3.2 孔径 0.6	—	—	灰	並	完存	
158	038-02	H-12	土錘	直径 3.9 孔径 0.8	—	—	灰白	並	完存	
159	056-05	大溝中層 I-14	弥生土器 壺	口径 12.4	内外面:ヨコナデ 内面に竹管刺突文	外面:粗いヘラミガキ 内面:ハケ、ユビオサエ	にぶい橙	並 雲母、~4mmの粒含	口頸部完存 体部2/5	
160	044-01	H-13	壺A1	口径 13.3	端部:ヨコナデ	頸部外面:粗いハケ 頸部内面:ハケナデ	灰白	粗 ~5mmの粒多含	口縁部完存	
161	069-03	J-16	〃	口径 14.5	内外面:ヨコナデ 端部にヘラ状具格子文	頸部外面:ハケナデ 頸部内面:ナデ	にぶい黄橙	並	口頸部 ほぼ完存	
162	019-02	G-10	壺H	口径 8.2	内外面:ヨコナデ	外面:ハケ、ナデ 内面:ユビオサエ、ナデ	明褐灰	密	口縁~体部 1/3	
163	085-04	L-16	土師器 壺I	口径 8.4 器高 9.1	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコナデ、ナデ 内面:ヨコナデ、ユビオサエ	浅赤橙	並	ほぼ完存	
164	073-02	K-14	小型丸底壺A	口径 9.9 器高 8.2	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:ユビオサエ、ユビナデ	にぶい褐	並	1/2	
165	048-01	I-12	〃	口径 9.6 器高 8.2	内外面:ヨコナデ	内外面:ヨコナデ 底部外面ケズリ	灰白	密	ほぼ完存	
166	073-01	K-14	小型丸底壺B	口径 8.7 器高 8.4	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコ方向へヘラケズリ、ナデ 内面:ナデ、ユビオサエ	にぶい橙	密	完存	
167	076-05	K-15	〃	口径 9.4 器高 8.9	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコナデ、下半はケズリ 内面:ナデ	灰褐	並	完存	
168	061-04	J-14	〃	口径 9.0 器高 7.9	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ、ヘラナデ 内面:ナデ、ヘラ工具痕	褐灰	並	完存	
169	061-03	J-14	〃	口径 8.7 器高 7.1	内外面:ヨコナデ	外面:ヘラケズリ頸部、ヘラ状具ケズリダシ 内面:ユビオサエ、ナデ	暗灰黄	密	完存	
170	012-02	F-11	〃	口径 9.0 器高 8.5	外面:ヨコナデ 内面:ハケ	外面:上部にハケ 内面:ナデ	にぶい黄橙	密	完存	
171	077-05	K-15	小型丸底壺	口径 8.9	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコナデ 内面:ユビオサエのちナデ	灰白	密	口縁~体部 1/3	
172	060-05	F-11	〃	体部最大径 9.4	—	外面:ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面:ナデ、ユビオサエ	灰黄	並 ~2mmの粒含	体部完存	
173	030-01	G-12	〃	体部最大径 9.9	—	外面:ヨコ、ナメ方向のナデ 底部ケズリのちナデ 内面:ユビオサエ、ナデ	にぶい黄橙	密	体部完存	
174	072-01	K-11	〃	体部最大径10.8	—	外面:ヘラケズリのちナデ 内面:ユビオサエ、ユビナデ	灰白	密	体部7/10	
175	068-04	J-16	弥生土器 壺C1	口径 15.5	内外面:ヨコナデ 外面:櫛刺突列点文	外面:粗いハケのち櫛刺突列点文 頸部に細かいハケ 内面:粗いハケ、ナデ	褐灰	やや粗 ~2mmの粒多含	口頸1/4	
176	084-05	J-16	壺C2	口径 14.6	外面:櫛刺突文 端部~内面:ヨコナデ	外面:櫛刺横線文、波状文 内面:ナデのちヘラケズリ	浅黄橙	並	口縁~体部 1/4	
177	018-03	G-10	〃	口径 17.6	内外面:ヨコナデ 外面:櫛刺突列点文	外面:櫛刺横線、櫛刺突、ヘラ刺突 内面:ナデ、頸部粗いハケ	にぶい褐	密	口縁~体部 1/3	
178	056-02	I-14	壺B	口径 15.5	内外面:ヨコナデ	外面:ハケ、ナデ 内面:ていねいなナデ、ユビオサエ	外:黒 内:お黄橙	密 雲母含	口縁~体部 1/7	外面スス付着
179	033-02	H-10	〃	口径 17.2	内外面:ヨコナデ 端部:ヘラ状具刻み目	頸部外面:ナデ 頸部内面:ハケのちナデ	黒褐	やや粗	口頸部1/3	
180	079-01	K-16	口径 18.5 底径 5.6 器高 24.3	内外面:ヨコナデ	内外面:ヨコナデ	外面:ハケ 内面:ヨコハケ	浅黄橙	密	完存	外面スス付着

第30表 遺物(土器)観察表(5)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
181	069-01	大溝中層 J-16	弥生土器 甕E	口径 11.6 底径 4.2 器高 14.5	内外面:ナデ	外面:タテ方向ハケ 内面:ナデ	灰褐	並	完存	内面底に穀物炭化物付着
182	053-02	〃 I-12	〃	口径 10.4 底径 6.0 器高 13.3	内外面:ハケ	外面:ハケ 内面:ハケ、ナデ、脚部内外面ナデ	灰黄	並	7/10	
183	043-05	〃 H-13	〃	口径 19.2	端部~外面:ヨコナデ 内面:粗いヨコハケ	-	灰黄褐	並 雲母多含	口縁1/5	
184	058-05	〃 J-13	〃	口径 21.5	内外面:ヨコナデ 外面:櫛刺突列点文	-	にぶい褐	並	口縁1/7	
185	066-01	〃 J-15	土師器 鉢C	口径 8.2 底径 5.9 器高 11.3	内外面:ヨコナデ	外面:体部~脚上半ハケ、ヨコハケ沈線有 内面:ヘラナデ、ユビナデ	灰黄	並	完存	
186	046-02	〃 H-14	甕D1	口径 13.5	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ(3~4本/cm) 内面:ナデ	黄灰	粗 ~3mmの粒多含	口縁~体部 1/10	
187	049-06	〃 I-13	甕D3	口径 12.0 体部最大径22.9	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ、頸部に凹線 内面:ユビナデのち板状具によるナデ	淡黄	並 雲母多含	口縁~体部 4/5	
188	047-01	〃 I-12	〃	口径 13.8 体部最大径23.0	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ、頸部に凹線 内面:ユビオサエ、板状具によるナデ	灰白	やや粗	口縁~体部 上半 完存	
189	062-05	〃 J-14	〃	口径 13.3	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ(3本/cm) 内面:ナデ、ユビオサエ	黒褐	並	口縁~体部 1/2	外面ス付着
190	037-03	〃 H-12	〃	口径 12.0	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ(3本/cm) 頸部に凹線 内面:ユビナデ	黄灰	並	口縁~体部 1/7	
191	037-01	〃 H-12	〃	口径 14.8 体部最大径25.6	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ(3本/cm) 内面:ユビオサエ、板状具によるナデ	黒	並	口縁~体部 上半 2/5	焼成時外面に炭素吸着か?
192	030-02	〃 G-12	〃	口径 13.6	内外面:ヨコナデ	外面:ハケ 内面:ナデ	にぶい黄橙	並	口縁~体部 1/4	
193	077-02	〃 K-15	〃	口径 14.0	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケ 内面:ナデ	暗灰黄	並	口縁~体部 1/4	
194	062-04	〃 J-14	甕D4	口径 14.7	内外面:ヨコナデ	外面:ハケ(8~9本単位、4本/cm) 頸部に凹線 内面:ナデ、工具痕	灰黄褐	やや粗	口縁~体部 1/5	
195	067-03	〃 J-15	〃	口径 11.5	内外面:ヨコナデ	外面:粗いハケ 内面:ナデ	灰白	並 ~2mmの粒含	口縁~体部 1/10	
196	066-08	〃 J-15	甕脚台B2	底径 8.1	-	外面:ハケ、ナデ 内面:裾折り返しのちユビオサエ	灰白	並	脚台部完存	
197	075-07	〃 K-15	〃	底径 8.3	-	外面:粗いハケ 内面:裾折り返しのちユビオサエ	灰黄	並	脚台部完存	
198	041-07	〃 H-13	〃	底径 8.9	-	外面:粗いハケ 内面:ナデ、ユビオサエ、裾折り返し剝離	灰	並	脚台部4/5	
199	075-05	〃 K-15	〃	底径 8.7	-	外面:ハケ、ナデ 内面:シボリ痕、ヨコナデ、裾折り返しのちユビオサエ	にぶい黄橙	並	脚台部完存	
200	037-02	〃 H-12	〃	底径 7.5	-	外面:ハケ、裾折り返しのちナデ 内面:ユビナデ、ヨコナデ	灰白	並	脚台部完存	
201	006-02	〃 E-11	甕脚台B3	底径 10.3	-	外面:ナナメハケ、ユビオサエ 内面:ユビナデのちユビオサエ	褐灰	並	脚台部完存	
202	028-05	〃 G-12	〃	底径 10.1	-	外面:ハケ、ナデ 内面:裾折り返しのちユビオサエ	灰白	並	脚台部完存	
203	054-06	〃 I-14	〃	底径 10.0	-	外面:ユビナデ、ユビオサエ 内面:ヨコナデ、折り返しのちユビオサエ	明褐灰	並	脚台部完存	
204	032-01	〃 G-13	弥生土器 高杯A1	口径 21.6	端部:ヨコナデ 内外面:ヘラミガキ	-	にぶい橙	並	口縁1/7	
205	043-01	〃 H-13	高杯C	口径 20.7	端部:つまみあげ 内外面:ヨコナデ 内面底:板状工具痕 内外面:ヨコナデ	-	にぶい黄橙	やや粗	杯部ほぼ完存	
206	036-06	〃 H-11	高杯脚A	底径 15.8	-	外面:タテ方向ヘラミガキのち櫛描横線 内面:ハケメ、ヨコナデ	灰黄褐	密	脚部ほぼ完存	
207	067-05	〃 J-15	高杯脚A	-	-	外面:タテ方向ヘラミガキのち櫛描横線 内面:ナデ	灰白	並	脚柱部	
208	018-01	〃 G-10	高杯脚A	底径 9.6	-	外面:上部タテハケのちヨコハケ 下部ヘラミガキのちナデ 内面:シボリ痕顕著、ナデ	にぶい橙	並	脚部3/5	
209	068-05	〃 J-16	高杯E	口径 15.0	内外面:ヨコナデ 内面下半:ナデのち籬なヘラミガキ	頸部外面に横線 内外面:ナデ	明褐灰	並	杯部完存	
210	021-01	〃 G-11	土師器 高杯H	口径 21.4 底径 14.0 器高 16.2	端部:つまみあげ 内外面:ヨコナデ 内面底:ナデ	外面:タテ方向ナデ、裾ヨコナデ 内面:ユビオサエ	橙	並	杯部完存 脚部1/4	
211	052-07	〃 I-14	〃	底径 14.0	-	外面:タテ方向ナデ、2対の円形刺突 内面:ユビオサエ、裾ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部完存	
212	013-06	〃 F-11	〃	口径 21.0 底径 14.7 器高 15.7	内外面:ヨコナデ	外面:タテ方向ナデ、裾ヨコナデ 内面:シボリ痕、ヨコナデ	橙	密	3/4	
213	073-03	〃 K-14	高杯F	口径 16.6	内外面:ハケのちナデ	-	橙	並	杯部4/5	
214	074-01	〃 K-14	〃	口径 17.3	端部内外面:ヨコナデ 内外面:ハケのちナデ	-	にぶい黄橙	密	杯部ほぼ完存	
215	045-04	〃 H-14 G-13	高杯H	口径 23.1 底径 14.1 器高 16.5	内外面:ヨコナデ	外面:タテ方向ナデ 裾内外面:ヨコナデ	にぶい橙	並 ~4mmの粒含	杯部1/2 脚部完存	
216	010-02	〃 F-11	高杯F	底径 11.1	-	外面:板状具ナデ 内面:ツリ具によるケズリ 裾内外面:ヨコナデ	にぶい褐	密	脚部完存	

第31表 遺物(土器)観察表(6)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
217	076-01	大溝中層 K-15	土師器 高杯F	口径 16.9 底径 11.6 器高 12.0	内外面:ヨコナデ	裾内外面:ヨコナデ 内面:シボリ痕	にぶい橙	密	ほぼ完存	
218	045-01	〃 H-14	〃 高杯G	口径 14.4 底径 9.2 器高 11.5	内外面:ヨコナデ	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:シボリ痕 裾内外面:ヨコナデ	橙	並	ほぼ完存	
209	060-01	〃 J-14	〃 高杯F	口径 16.6	内外面:ナデ、ヨコナデ	外面:杯接合部にハケ	暗灰黄	並	杯部完存	
220	077-08	〃 K-15	〃 〃	口径 16.5	外面:ハケのちヨコナデ 内面:ハケ、ヨコナデ	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:タテ方向ユビオサエ顕著	にぶい黄橙	やや粗	杯部~脚上半 完存	
221	015-02	〃 F-12	〃 高杯G	底径 8.5	内外面:ナデ	外面:ナデ 内面:シボリのちナデ 裾内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部完存	
222	042-02	〃 H-13	〃 〃	底径 8.4	-	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:シボリのちナデ 裾内外面:ヨコナデ	橙	密	脚部4/5	
223	042-03	〃 H-13	〃 〃	底径 9.2	-	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:シボリ痕、ユビオサエ 裾内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部ほぼ完存	
224	042-01	〃 H-13	〃 〃	底径 8.4	-	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:シボリのちナデ 裾内外面:ヨコナデ	橙	並 ~3mmの粒含	脚部1/2	
225	052-04	〃 I-14	〃 〃	底径 8.5	-	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:タテ方向ユビオサエ 裾内外面:ヨコナデ	にぶい赤橙	密	脚部完存	
226	062-02	〃 J-14	〃 杯	口径 11.9 器高 4.8	内外面:ヨコナデ	外面:不定方向ナデ 内面:底部ナデ	橙	密	1/3	
227	053-01	〃 I-14	〃 〃	口径 12.4 器高 4.8	内外面:ヨコナデ	外面:ヘラケズリのちナデ、ハケ 内面:ナデ	橙	密	ほぼ完存	
228	006-01	〃 E-11	〃 〃	口径 11.9 器高 4.5	内外面:ヨコナデ	外面:ユビオサエ、底部ヘラケズリ 内面:ナデ	橙	密	完存	
229	076-02	〃 K-15	〃 〃	口径 12.5 器高 4.8	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ、ユビオサエ 内面:ナデ	浅黄橙	密	ほぼ完存	
230	053-03	〃 I-14	弥生土器 器台	-	-	外面:タテ方向ヘラミガキのち樽指横線2条 透穴4孔×2段=8孔 内面:ハケ、ユビオサエ	明褐灰	並 ~3mmの粒含	柱状部完存	
231	031-03	〃 G-13	須恵器 杯蓋	口径 13.0 器高 5.7	内外面:ロクロナデ	外面:天井部1/2回転ヘラケズリ、つまみ基部にヘラ 内面:ナデ、粘土紐痕顕著	褐灰	並 ~3mmの粒含	完存	灰かぶり
232	048-07	〃 I-13	須恵器 杯蓋	口径 13.0 器高 4.7	内外面:ロクロナデ	外面:天井部2/3回転ヘラケズリ 内面:ナデ、粘土紐痕顕著	灰	並 ~4mmの粒含	1/3	
233	031-02	〃 G-13	須恵器 杯身	口径 11.6 器高 4.6	内外面:ロクロナデ	外面:底部回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ、ナデ	灰	並 ~3mmの粒含	口縁一部欠損	
234	041-06	〃 H-13	須恵器 杯身	口径 11.5 器高 5.6	内外面:ロクロナデ	外面:2/3回転ヘラケズリ 内面:ナデ	灰白	並 ~3mmの粒含	1/2	
235	031-01	〃 G-13	須恵器 杯身	口径 10.7 器高 4.8	内外面:ロクロナデ	外面:3/4回転ヘラケズリ 内面:ナデ	褐灰	並 ~3mmの粒含	ほぼ完存	
236	044-05	〃 H-13	須恵器 杯身	口径 10.0	内外面:ロクロナデ	外面:1/2回転ヘラケズリ 内面:ナデ	灰	並 ~2mmの粒含	1/4	
237	074-02	大溝上層 K-14	弥生土器 壺A1	口径 19.1	端部外面:樽羽状刺突文 内面:ハケのちナデ	外面:頸部に樽指横線	にぶい黄橙	並	口頸部1/5	
238	098-01	〃 L-15	土師器 壺F1	口径 9.2 体部最大径15.8 器高 15.0	内外面:ヨコナデ	内外面:ナデ	橙	並	完存	
239	073-04	〃 K-14	〃 壺I	口径 9.2 器高 10.1	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面:ヨコナデ、底部凹凸(未調整)	灰白	並	ほぼ完存	
240	073-05	〃 K-14	〃 小型丸底壺A	口径 10.5 器高 9.3	内外面:ヨコナデ	内外面:ヨコナデ、ナデ	淡黄	密	ほぼ完存	
241	021-02	〃 G-11	〃 小型丸底壺B	口径 8.2 器高 8.9	内外面:ヨコハケ	内外面:ナデ	にぶい黄橙	密	完存	
242	047-03	〃 I-12	弥生土器 壺	体部最大径18.4 底径 5.1	-	外面:上半はナデ、下半はていねいなケズリ 内面:ナデ	黄灰	やや粗 3mm程の粒多含	体部下半 完存	
243	009-01	〃 E-14	土師器 壺D3	口径 12.4	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ(6本/cm)、頸部に凹線 内面:ヨコナデ、ユビオサエ	にぶい黄橙	並 ~3mmの粒含	口縁~体部上半 ほぼ完存	外面スス付着
244	095-01	〃 G-11	口径 15.8 底径 7.8 器高 32.9	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ(4本/cm、下部6本/cm) 内面:ていねいなナデ 脚縁:折り返しのちユビオサエ	にぶい橙	並 ~1mmの粒多含	ほぼ完存		
245	096-01	〃 G-11	口径 15.3 底径 7.7 器高 31.1	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ(4~5本/cm) 内面:ユビオサエ、ていねいなナデ 脚縁:折り返しのちユビオサエ	灰褐	並 ~1mmの粒多含	ほぼ完存		
246	034-01	〃 H-11	口径 12.3 底径 6.9 器高 22.6	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケ(8本単位3~4本/cm) 内面:ユビオサエ、ナデ 脚縁:折り返しナデ	にぶい黄橙	並 1~2mmの粒含	完存		
247	097-01	〃 I-13	口径 16.9 底径 10.0 器高 34.6	内外面:ヨコナデ	外面:タテハケ(4~5本/cm) 内面:ナデ、ユビオサエ 脚縁:折り返しのちユビオサエ	にぶい黄橙	並 雲母、~3mmの粒含	ほぼ完存		
248	017-02	〃 F-13	口径 15.6	内外面:ヨコナデ	外面:粗いナメハケ(8本単位、4本/cm) 内面:ナデ	明褐灰	やや粗 ~4mmの粒多含	口縁~体部 1/3		
249	065-01	〃 J-14	口径 16.5 底径 9.0 器高 33.2	内外面:ヨコナデ	外面:粗いタテハケ(4本/cm)、頸部に凹線 内面:ていねいなナデ 脚縁:折り返しのちユビオサエ	灰白	並	1/2		
250	071-01	〃 J-17	土師器 壺C2	口径 17.6 底径 8.5 器高 29.3	内外面:ヨコナデ	外面:ヨコ方向細かいハケ 内面:ナデト半ヨコハケ	にぶい黄橙	並	ほぼ完存	体部スス付着
251	099-01	〃 -	口径 20.6 底径 13.9 器高 16.1	内外面:ヨコナデ	外面:ナデ 内面:ナデ、ユビオサエ 裾内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	杯部1/2 脚部ほぼ完存		
252	015-06	〃 F-12	〃 高杯G	底径 8.5	-	外面:板状具タテ方向ナデ 内面:シボリ痕顕著 裾内外面:ヨコナデ	橙	密	脚部完存	

第32表 遺物(土器)観察表(7)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
253.	016-01	大溝上層 F-13	土師器 高杯G	底径 9.2	-	外面:板状具クテ方向ナデ 内面:シボリ痕ユビナデ 楕内外面:ヨコナデ	橙	密	脚部完存	
254	016-03	〃 F-13	〃	底径 9.0	内外面:ナデ	外面:板状具クテ方向ナデ 内面:シボリ痕、ユビナデ 楕内外面:ヨコナデ	橙	密	杯下部~脚部 完存	
255	014-05	〃 F-12	〃	底径 9.9	-	外面:板状具クテ方向ナデ 内面:シボリ痕顕著 楕内外面:ヨコナデ	橙	密	脚部1/2	
256	015-05	〃 F-12	〃	底径 8.1	-	外面:板状具クテ方向ナデ 内面:ユビナデ 楕内外面:ヨコナデ	橙	密	脚部完存	
257	014-06	〃 F-12	〃	底径 8.0	-	外面:板状具クテ方向ナデ 内面:シボリ痕顕著 楕内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部4/5	
258	060-03	〃 J-14	須恵器 杯蓋	口径 13.6	内外面:ロクロナデ	外面:天井部2/3回転ヘラケズリ	褐灰	並 ~2mmの長石等含	口縁~天井 部1/3	焼ぶくれ有
259	014-01	〃 F-12	須恵器 杯蓋	口径 14.8	内外面:ロクロナデ	-	灰	密	口縁1/7	
260	007-01	〃 E-12	須恵器 杯身	口径 3.7 器高 4.3	内外面:ロクロナデ	外面:底部回転ヘラケズリのちナデ 内面:ロクロナデ、底部不定方向ナデ	灰	並 ~4mmの長石等多含	口縁1/2 欠損	
261	014-03	〃 F-12	須恵器 杯身	口径 9.9 器高 3.7	内外面:ロクロナデ	外面:底部ヘラ切りのちナデ 内面:ロクロナデ	灰白	並 ~3mmの長石等含	ほぼ完存	
262	022-01	〃 G-11	須恵器 甕	口径 18.2	内外面:ロクロナデ	外面:クタクキ 内面:ナデ	灰白	密	口縁~体部 1/3	
368	091-01	大溝 G-11	縄文土器 鉢	-	外面:口縁端部に面をもつ 直下に貼付突帯、沈線	-	褐灰	粗	口縁1/10 以下	
369	091-02	〃 G-11	〃	-	口縁波頂部粘土紐貼付 波底部ヘラ状具刻み目	-	褐灰	粗	口縁1/4 以下	
370	091-03	〃 H-12	〃	-	外面:口縁下に突帯	-	褐灰	粗	口縁1/10 以下	
371	091-04	〃 I-14	〃	-	外面:突帯に刻み目	-	褐灰	粗	口縁破片	
374	013-04	SD1 F-11	土師器 高杯G	口径 14.3 底径 9.0 器高 12.0	内外面:ヨコナデ 底部内面:不定方向ナデ	外面:クテナアのちヨコナデ 内面:シボリ痕 楕内外面:ヨコナデ	灰褐	やや粗	ほぼ完存	
375	028-06	〃 G-12	〃	底径: 9.1	-	外面:クテ方向ナデ 内面:シボリ痕 楕内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部4/5	
376	027-02	〃 G-12	〃	底径 9.1	-	外面:クテ方向ナデ 内面:シボリ痕 楕内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部4/5	
377	028-02	〃 G-12	〃	底径 8.7	-	外面:クテ方向ナデ 内面:シボリ痕 楕内外面:ヨコナデ	にぶい橙	密	脚部4/5	
378	089-01	〃 M-15	須恵器 杯蓋	底径 13.1 器高 3.8	内外面:ロクロナデ	外面:天井部1/2ロクロヘラケズリ 頂部ヘラ切りのちナデ 内面:ロクロナデ	暗灰	密	1/2	灰かぶり
379	089-02	〃 M-16	須恵器 杯蓋	底径 13.4	内外面:ロクロナデ	-	暗灰	密	口縁1/10	
380	089-03	〃 M-16	須恵器 杯蓋	底径 14.2	内外面:ロクロナデ	外面:天井部1/2ロクロヘラケズリ 内面:ロクロナデ	灰	密	口縁1/5	
381	045-02	〃 H-14	須恵器 杯身	口径 10.6 底径 6.0 器高 3.0	内外面:ロクロナデ	外面:底部ヘラ切り未調整 (粘土ヒモ痕顕著) 内面:ロクロナデ	灰	密	1/3	
382	066-07	〃 J-15	須恵器 平瓶	口径 6.4	内外面:ロクロナデ	-	灰	密	口縁~口頸部 ほぼ完存	口縁部歪み大 きい 灰かぶり
383	001-05	包含層 L-10	須恵器 杯蓋	口径 13.1 器高 4.4	内外面:ロクロナデ	外面:天井部回転ヘラケズリ、沈線1条 内面:ロクロナデ	灰	密	1/5	
384	087-01	〃 M-7	須恵器 杯蓋	口径 9.0 器高 -	内外面:ロクロナデ	外面:天井部回転ヘラケズリ 内面:天井部ナデ	灰白	密	1/2 つまみ欠損	
385	005-06	〃 G-13	須恵器 杯身	口径 9.7 器高 4.0	内外面:ロクロナデ	外面:底部回転ヘラケズリ 内面:ロクロナデ、底部ナデ	灰	密	1/3	
386	004-05	〃 I-16	須恵器 杯身	口径 12.5	内外面:ロクロナデ	-	灰白	密	口縁1/7	
387	001-03	〃 G-11	須恵器 甕	口径 20.5	内外面:ロクロナデ 外面に波状文(15本単位)	-	灰	密	口縁1/12	
388	004-08	〃 L-14	須恵器 甕	(口径48.0)	内外面:ロクロナデ	-	灰白	密 雲母含	口縁1/12	
389	092-04	B地区 ピット22 W-16	弥生土器 壺	口径 15.6	内外面:ヨコナデ	-	橙	密	口縁1/10	
390	092-03	〃 〃 〃	〃 甕	口径 19.0	外面:ユビオサエのちナデ 内面:ヨコハケ	-	にぶい黄橙	密	口縁1/10	
391	094-02	B地区 溝1 U-10	土師器 甕D2	口径 13.3	内外面:ヨコナデ	-	にぶい黄橙	やや粗	口縁1/10	
392	094-05	B地区 包含層	弥生土器 蓋	つまみ部径1.9	-	内外面:ヨコナデ、天井部に穿孔径0.5cm	淡黄	やや粗	つまみ部 完存	
393	002-02	包含層 I-13	土師器 小皿	口径 8.5 器高 1.85	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:ユビオサエ 内面:ナデ	内外共 にぶい黄橙	並	1/5	底部中心が 盛り上がる
394	002-04	〃 〃	土師器 皿	口径 15.6 器高 4.6	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:ユビオサエ?残り悪い 内面:ナデ	外:褐灰 内:浅黄橙	やや密	口縁部1/4	
395	002-08	〃 J-12	土師器 小皿	口径 8.6 器高 -	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:ユビオサエ 内面	内外共 浅黄橙	密	1/4	

第33表 遺物(土器)観察表(8)

遺物 番号	登録番号	遺構 (出土位置)	器種	法量 (cm)	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部(杯部)	体部(脚部・底部)				
396	092-02	B地区 包含層	土師器 鍋	口径22.6?	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	内面:ナデ?	外 におい橙 内 におい褐	やや粗	1/10未満	内外面磨減大
397	004-06	包含層 J-12	土師器 鍋	口径30.0?	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、端部折り返し	—	外 黒 内 におい黄橙	並	口縁部 1/10未満	
398	003-01	〃 M-8	土師器 羽釜	口径26.6?	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	—	外 におい黄褐 内 明褐	並	口縁部 1/10未満	羽直上に外から穿孔、径7mm
399	094-04	B地区 包含層	土師器 羽釜	口径21.2	外面:ヨコナデ、端部折り返し 内面:端部のみヨコナデ、ユビオサエ	—	外 浅黄橙 内 におい黄橙	密	口縁部 1/10未満	
400	002-03	包含層 R-6	灰釉陶器 皿	口径12.8 高台径 5.9 器高 2.7	外面:回転ヘラケズリ 内面:ヨコナデ	ケズリ出し高台、内部回転ヘラケズリ	外 灰白 内 灰白	やや粗	1/2	内面中央に直接 重ね焼きの痕、 灰釉流けかけ
401	005-01	〃 —	灰釉陶器 椀	高台径 7.2	外面:下部回転ヘラケズリ 内面:下部ヨコナデ	ハリツケ高台、内部ナデ消し	外 灰白 内 灰白	並	高台部1/4	内面中央に直接 重ね焼きの痕、 灰釉流けかけ
402	002-01	〃 L-9	山皿	口径 8.6 高台径 3.9 器高 2.45	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	ハリツケ高台、モミガラ痕 糸切痕ナデ消し、内面中央ナデ	外 灰白 内 黄褐	やや粗	1/2	
403	001-09	〃 H-10	山皿	口径 9.0 底径 4.2 器高 2.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	糸切痕ナデ消し(残る)	外 灰白 内 灰白	並	1/3	
404	058-02	〃 J-13	山皿	口径 8.6 底径 3.7 器高 2.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	糸切痕ナデ消し、内面中央ナデ	外 灰白 内 灰白	並 ~5mm	完形	
405	093-02	B地区 包含層	山茶碗	高台径 6.8	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	糸切痕残る	外 灰白 内 灰白	並 ~1mm	底部1/2	
406	001-04	包含層 G-13	山茶碗	口径18.4? 高台径 9.2 器高 5.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	糸切痕残る、モミガラ痕少し	外 灰白 内 灰白	並 ~4mm	1/10	
407	093-01	B地区 包含層	山茶碗	口径13.2 底径 5.4 器高 4.5	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	糸切痕残る、高台(輪トチ)ハリツケ 痕残る	外 灰白 内 灰白	並 ~3mm	1/6	
408	005-03	包含層 —	青磁 椀	口径15.8	内外面共施釉		素地 灰白 釉 灰オリブ		口縁部 1/10未満	外面蓮弁文

第34表 遺物(土器・陶器・磁器)観察表(9)

木製品

NO	登録NO	名称	出土遺構・層位	法量 (cm)			木取り	樹種	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ				
263	233-01	狭鋏	大溝 下層	18.5	9.0	1.5~2.0	板目	サカキ	形態は縦長の長方形。	
264	237-01	膝柄鋏身	〃 下層	(34.5)	10.1	1.1(身部)	追柁目~柁目	カシ類	肩部がゆるやかに下がる楕形。	
265	237-02	〃	〃 下層	—	(9.7)	1.2(身部)	追柁目	カシ類	肩部がゆるやかに下がる楕形。	破損大
266	234-03	〃	〃 下層	(16.0)	4.0(柄部) 4.3(頭部)	1.5~2.0	辺材	コナラ	断面半円の柄部。	
267	234-04	組合せ鋏身	〃 下層	23.8 (身部)	10.0	1.3	板目	カシ類	スコップ状の形態か。	
268	235-01	横槌	〃 下層	26.2	—	6.7	芯取り	クスギ	細長い形状。	樹皮残る未製品
269	236-03	堅杵	〃 下層	(97.4)	—	8.6	辺材	コナラ	握り部に凸帯が付く。	
270	233-02	〃	〃 中層	(69.2)	—	7.1	辺材	ヒノキ	握り部に凸帯が付かない。	
271	234-02	横斧柄	〃 下層	(19.3)	身部 15.3×3.6	1.5(身部)	柄を芯取りの一木 作り	サカキ	台部の幅狭い。	
272	212-01	槽	〃 下層	(48.6)	(22.4)	1.1(身部)	板目~追柁目 一木作り	ヒノキ	立ち上がりは明瞭。 脚台は高く長方形。	
273	214-01	案	〃 中層	(37.8)	(30.4)	1.9	柁目	ヒノキ	下面側縁部を削り込む。 溝断面は方形。	
274	235-03	〃	〃 中層	(25.3)	(6.8)	1.8	追柁目	ヒノキ	下面側縁部を削り込む。 溝断面は方形。	
275	266-03	編台の目盛板	〃 中層	(65.5)	(8.3)	1.0	板目	ヒノキ	片側は17cm間隔で刻み。 もう片側は不等間。	
276	257-01	〃	〃 中層	(98.7)	8.3	1.5	板目	ヒノキ	16cm間隔で刻み。	
277	235-02	木錘	〃 下層	13.5	—	7.2	芯持ち	ヒノキ	棒状材を切断し、両端を削り、 中央に溝を入れ鼓状とする。	
278	244-01	堅穴住居用柱	〃 下層	(227.6)	—	14.5~20.6	樹幹	クリ	頂部が二股で、全体に枝 を打ち落とした粗い調整。	
279	259-02	〃	〃 中層	(201.7)	—	9.0~11.6	樹幹	カヤ	頂部が二股で、全体に屈曲有。	
280	246-02	〃	〃 下層	(195.2)	—	6.5	樹幹	クリ	全体に丁寧な加工。 頂部の二股も偏平に作り出す。	
281	260-02	〃	〃 下層	(132.7)	—	10.7	樹幹	サカキ	頂部の二股の加工は丁寧。 下部の屈曲強い。	

第35表 木製品観察表(1)

NO	登録NO	名称	出土遺構・層位	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 徴	備 考
				長 さ	幅	厚 さ				
282	263-01	竪穴住居用柱	大溝 下層	(85.5)	—	12.5	樹幹を半載	クリ	頂部の二股はやや左右非対称。	
283	204-09	〃	〃 下層	(20.6)	—	5.2	樹幹	コナラ	頂部二股となるものの、柱とするにはやや細いか。	
284	204-08	〃	〃 下層	(28.4)	—	7.2	樹幹	コナラ	頂部二股。自然面を残す。	
285	267-01	〃	〃 中層	(61.5)	—	6.5	樹幹	クリ	頂部二股。自然面を残す。	
286	215-01	柱材	〃 中層	(33.5)	—	10.5	樹幹	ヒノキ	杭材に転用か。	
287	274-01	〃	〃 下層	(97.8)	—	13.0~14.8	樹幹	クリ	自然面を残す。	竪穴住居用材か?
288	245-01	高床建物用柱	〃 下層	(226.0)	13.1	床下部13.1 床上部 6.0	樹幹	ヒノキ	床上部は断面半円形に切断。後に杭材へ転用。	表面炭化
289	254-03	〃	〃 下層	(145.8)	—	7.1	樹幹	ヒノキ	頂部は叉木となる。下部の腐蝕部は地中部分か。	一部炭化
290	265-02	柱材	〃 下層	(81.8)	—	7.5	樹幹	—	頂部は叉木となる。自然面を残す。黒木。	
291	252-01	非高床建物用柱	〃 下層	(230.6)	—	8.2	樹幹	イヌガヤ	やや面取り気味に仕上げる。	
292	248-01	〃	〃 下層	(198.7)	—	10.5	樹幹	サカキ	やや面取り気味に調整。上部に抉り。下部にも抉り状の加工?	
293	247-01	垂木	〃 下層	(202.5)	—	3.6	細い樹幹	ヒノキ	先端部は丸く作り出す。	
294	251-01	〃	〃 中層	(229.6)	—	3.5~5.0	細い樹幹	イヌガヤ	元の木を倒立し、根元に近い部分へ抉りを入れて使用。杭転用。	黒木
295	261-03	〃	〃 下層	(177.5)	—	6.0	樹幹	ヒノキ	先端部抉り。身の部分に平坦面も作る。	
296	240-01	〃	〃 下層	(129.2)	—	7.0	樹幹	ヒノキ	粗い枝打ちを施したのみ。上部に抉り。建築材とすれば垂木。	
297	261-04	〃	〃 下層	(125.4)	—	6.6	樹幹	—	上部に抉りあるも欠損大きく詳細不明。	
298	218-02	〃	〃 中層	(73.5)	—	5.4	樹幹	カヤ	上端部に抉り。	
299	201-01	〃	〃 中層	(28.3)	—	4.0	樹幹	サカキ	頂部に抉り。黒木。	炭化
300	234-05	〃	〃 中層	(57.9)	4.5	2.7	樹幹を半載	カヤ	頂部に抉り。杭転用。	
301	215-02	〃	〃 中層	(38.6)	2.6	2.1~3.4	辺材	ヒノキ	頂部に緩い抉り。	
302	201-02	〃	〃 下層	(24.0)	3.7	2.7	樹幹	サカキ	頂部に抉り。	
303	260-01	楯材	〃 中層	(107.0)	17.5	3~3.6 7.0(凸部)	板目	ツバキ	断面し字状に作り出す。突起内側に柄孔と方立孔。	片側欠損
304	275-01 258-01	臙放し材	〃 下層	(122.9)	22.0	6.3~9.7	芯に近い部分で板目取り	イヌガヤ	4個の小方孔は二次利用か。端部の両つの形は隅丸方形。	
305	265-01	桁材?	〃 下層	(69.0)	16.1	2.5	追桁目	ヒノキ	材長側縁部の柄は穿孔しきらず底を残す。	
306	262-01	校木	〃 下層	(124.0)	17.4	9.5	樹幹を半載	ヒノキ	端部に、両つを作り出しその内側へ溝を入れる。	
307	238-01	壁板	〃 中層	(161.5)	(23.1)	4.3	桁目	クリ	両端部欠損のため、他部材との結合関係は不明。	
308	—	〃	〃 中層	112.5	27.2	1.6	桁目~追桁目	イヌガヤ	比較的薄板。材長側縁中央部に抉り。	
309	215-03	〃	〃 下層	(61.4)	10.6	2.0	板目	イヌガヤ	小孔の穿孔は2次加工か。	
310	271-01	梯子	〃 中層	(118.8)	14.6	2.0 7.9(足掛)	樹幹	ヒノキ	足掛け部の切り込みは直角。	
311	255-02	〃	〃 中層	(126.2)	14.2	3.3 7.2(足掛)	桁目	シイ	足掛け部の切り込みは鈍角。	破片となって出土
312	253-03	〃	〃 下層	(147.5)	(9.1)	3.0~4.2 5.5(足掛)	樹幹	シイ	足掛け部は転用時に切り落とす。	転用して板状に。
313	255-03	杭材	〃 中層	(169.0)	—	6.8~9.0	芯を中心に放射状に分割した一部。	コウヤマキ	先端部は鋭角的に切り落とす。	
314	238-02	〃	〃 下層	149.8	—	5.2	細い樹幹	イヌガヤ	先端部は鋭角的に加工。	
315	256-03	〃	〃 下層	(158.0)	—	3.7	細い樹幹	イヌガヤ	先端の加工はコンパクト。	
316	255-01	〃	〃 中層	(167.9)	—	5.5~6.0	細い樹幹	クリ	やや面取り有。黒木。先端は4面削り。	焼面有
317	253-02	〃	〃 中層	(119.4)	—	8.2	芯を中心に放射状に分割した一部。	ヒノキ	先端は4面削り。	

第36表 木製品観察表 (2)

NO	登録NO	名称	出土遺構・層位	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 徴	備 考
				長 さ	幅	厚 さ				
318	259-01	杭材	大溝 中層	(123.7)	—	6.8	樹幹	サカキ	先端は4面削り。黒木。	
319	253-01	〃	〃 中層	(110.6)	—	8.5	樹幹	クリ	先端は4面削り。黒木。	
320	269-02	〃	〃 下層	(80.1)	—	5.3	樹幹	ヒノキ	先端は多面削り。	
321	226-02	〃	〃 下層	(37.4)	—	4.0	樹幹	サカキ	先端の加工は短小。	
322	206-04	〃	〃 —	(36.7)	—	7.5	樹幹	—	先端は6面削り。	
323	222-02	〃	〃 中層	(40.0)	—	3.6	樹幹	サカキ	先端の加工は短小。黒木。	全体に焦げている。
324	270-01	〃	〃 中層	(85.9)	—	3.6	樹幹	ヒノキ	先端部は5面削り。	
325	242-01	〃	〃 下層	(106.4)	—	6.0	枝を使用か。	—	加工は両端に有。両端ともコンパクトな仕上げ。	
326	250-01	〃	〃 中層	(171.7)	—	8.5	樹幹	—	先端の加工は短小。	
327	216-02	〃	〃 下層	(22.0)	—	5.6	樹幹	ミズキ?	先端は7面削り。黒木。	
328	256-01	〃	〃 下層	(122.8)	—	6.5~9.3	樹幹	サカキ	先端の加工は大ぶり。	
329	217-02	〃	〃 中層	(45.7)	—	5.6	樹幹	サカキ	先端の加工はコンパクトな仕上げ。	
330	207-02	〃	〃 中層	(58.9)	—	5.8	芯を中心に放射状に分割。	カヤ?	先端は5面削り。	
331	208-02	〃	〃 中層	(48.8)	—	4.6	樹幹	イヌガヤ	先端は5面削り。	
332	213-01	〃	〃 中層	(58.6)	—	7.5	樹幹	ヒノキ	先端は2面削り。	
333	217-01	〃	〃 中層	(37.2)	—	6.1	樹幹	—	先端の加工は比較的丁寧。	
334	205-02	〃	〃 —	(31.4)	—	2.9	樹幹	—	先端は4面削り。	
335	201-05	〃	〃 —	(22.9)	—	4.5	樹幹	—	先端は5面削り。	一部焼面有。
336	216-03	〃	〃 下層?	(14.4)	—	4.3	樹幹	—	先端は5面削り。	
337	206-03	〃	〃 —	(31.8)	—	5.3	樹幹	アカマツ	先端は6面削り。黒木。	
338	220-02	〃	〃 下層	(81.5)	—	6.0	樹幹	—	先端は一方から切り落としたのみの1面削り。	
339	280-01	〃	〃 下層	(70.0)	—	3.6	樹幹	イヌガヤ	先端は1面削り。	
340	200-01	〃	〃 下層	(17.5)	7.8	5.7	辺材	サカキ	先端は2面削り。	転用杭。
341	216-04	〃	〃 下層	(13.0)	5.3	2.2	辺材	—	矢板状の形状。	転用杭。
342	277-01	〃	〃 下層	(110.5)	—	4.5	樹幹	カヤ	先端は1面削り。	
343	211-01	〃	〃 中層	(20.9)	—	6.6	樹幹	カヤ	先端は7面削り。	
344	200-02	〃	〃 下層	(22.0)	6.0	5.4	樹幹	イヌガヤ	先端は細かく加工。	焼痕有。髓の可能性も有。
345	210-04	〃	〃 中層	(35.7)	—	5.5	樹幹	クリ?	先端は2面削り。	
346	210-02	〃	〃 下層	(24.9)	3.9	2.8	芯材	—	先端は5面削り。	転用杭。
347	210-01	〃	〃 下層	(15.6)	4.8	1.3	辺材	クリ	矢板状に加工。	転用杭。
348	216-01	〃	〃 下層	73.4	—	3.1	枝を使用か	ヒノキ	両端を1面削り。黒木。	焼痕有。
349	239-01	板材	〃 中層	(67.7)	7.7(頭部) 5.6	1.8~2.0	不明	ヒノキ	端部を有頭状に作り出す。	刀形?
350	234-01	〃	〃 下層	(60.6)	5.2	2.2	榫目	ヒノキ	端部は丸く仕上げ、方形柄孔をもつ。	やや焼ける。
351	254-02	〃	〃 下層	(86.7)	16.0	8.5	芯に近い部分を板目取り。	ヒノキ	方形の抉り有。	
352	268-01	〃	〃 中層	(78.5)	9.3	2.6	追榫目~榫目	—	長細い板材。	
353	202-03	〃	〃 中層	(68.1)	7.7	1.7	追榫目	ヒノキ	長細い板材。	

第37表 木製品観察表 (3)

NO	登録NO	名 称	出土遺構・層位	法 量 (cm)			木 取 り	樹 種	特 徴	備 考
				長 さ	幅	厚 さ				
354	264-01	板材	大溝 中層	(65.4)	(13.0)	5.0	板目～追柾目	コナラ	厚手の板材。	
355	224-02	〃	〃 中層	(47.8)	(12.4)	2.2	板目	クリ	薄板に仕上げ。	
356	201-03	〃	〃 中層	(47.5)	7.3	3.0	板目	ヒノキ	長側縁片側に抉り有。	
357	211-02	〃	〃 中層	(52.8)	(6.4)	1.3	板目	カヤ	木目に並行な工具痕。	
358	226-03	〃	〃 下層	(37.1)	8.0	1.2	板目	イヌガヤ	浅い小穴有。	
359	235-06	〃	〃 下層	(13.1)	7.3	0.8	追柾目	イヌガヤ	薄板仕上げ。	
360	235-04	〃	〃 上層	(29.5)	6.4	1.2	追柾目～柾目	イヌガヤ	薄板仕上げ。	
361	235-05	〃	〃 中層	(27.7)	(7.4)	0.6	追柾目～柾目	イヌガヤ	非常に薄く仕上げ、溝有。	
362	223-04	〃	〃 中層	(9.7)	11.6	2.2	板目	—	方形に成形。	
363	236-02	棒状木製品	〃 —	(8.9)	—	頭部6.0 3.4	芯材	ヒノキ	頂部を円形に作り出す。	柄もしくは把手か。
364	236-01	〃	〃 下層	(17.8)	—	頭部4.2 4.7	芯材	イヌガヤ	頂部を有頭状にする。	
365	226-01	〃	〃 下層	(29.3)	(4.3)	頭部3.7 2.9	辺材	クリ	頭部を作り出す。	
366	230-01	〃	〃 中層	(28.3)	(6.3)	頭部7.4 3.9	芯材	クリ?	頭部を作り出す。	
367	272-01	〃	〃 下層	(114.5)	—	12.5	樹幹	ヒノキ	溝を入れることにより頭部を作り出す。	下部端部焼痕

第38表 木製品観察表 (4)



太田遺跡（南から）



調査区全景（北から）



大溝中上層遺物出土状況（東から）



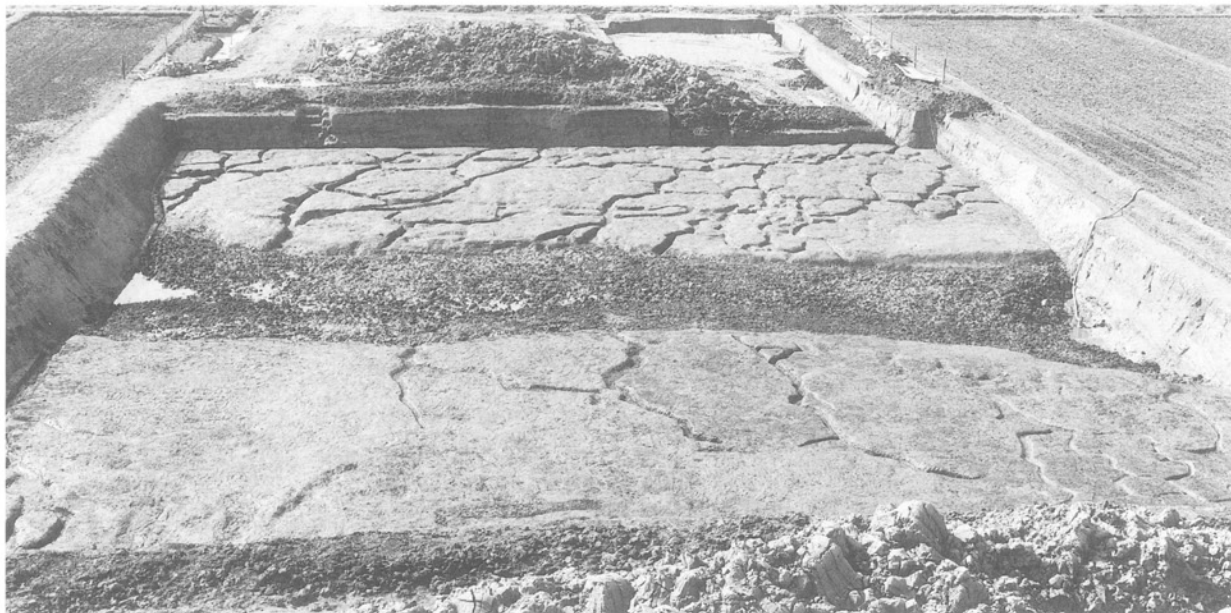
大溝中層遺物出土状況（東から）



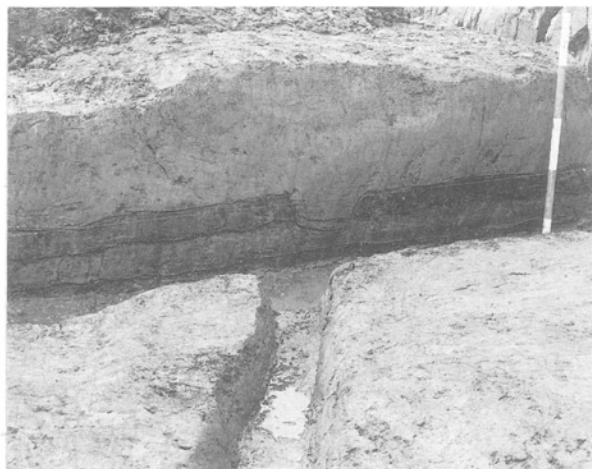
大溝下層遺物出土状況（東から）



大溝西壁断面（東から）



下層溝状遺構（北から）



溝状遺構断面



木杭



木杭断面（北東から）



大溝上層土器溜り



土師器甕出土状況（大溝上層）



榎材出土状況（大溝中層）



蹴放し材出土状況（大溝下層）



桁材?出土状況（大溝下層）



狭鋤出土状況（大溝下層）



横槌出土状況（大溝下層）



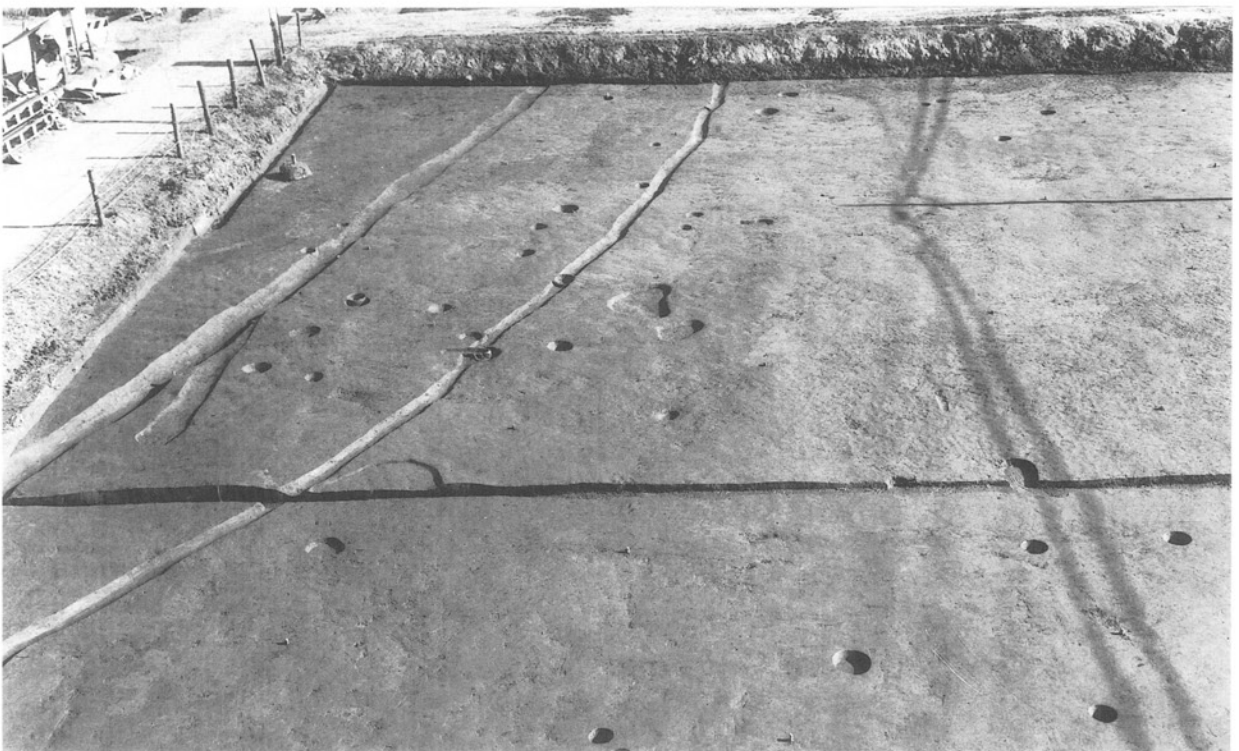
堅杵出土状況（大溝下層）



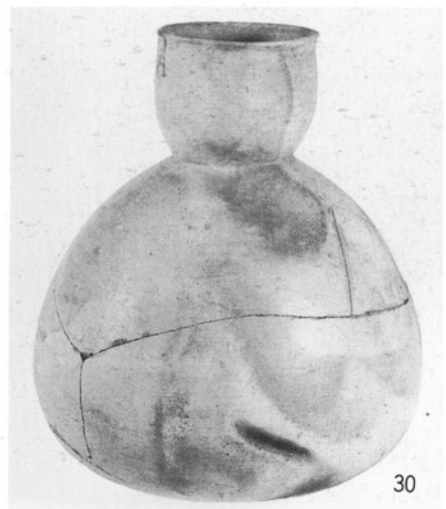
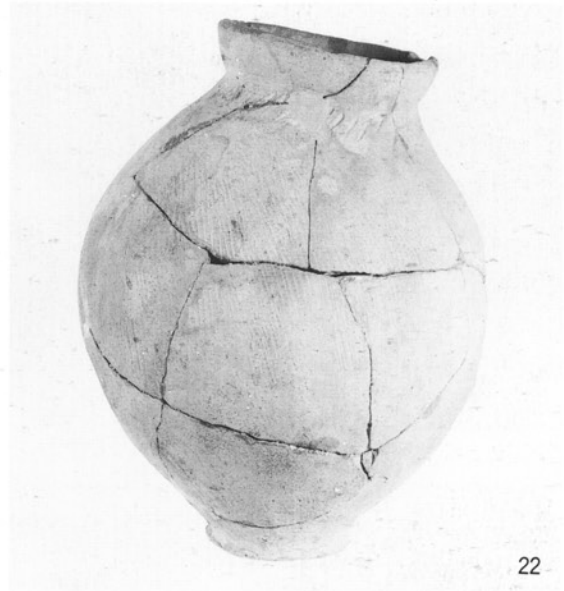
木錘出土状況（大溝下層）



槽出土状況（大溝下層）



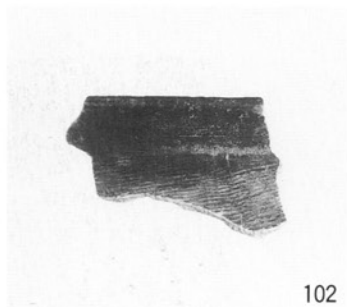
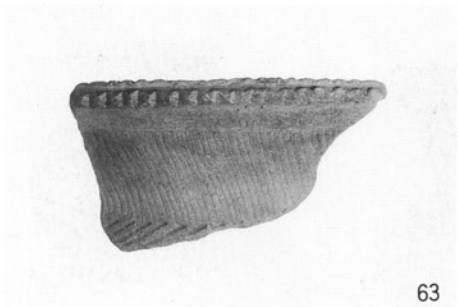
B地区南部全景（西から）



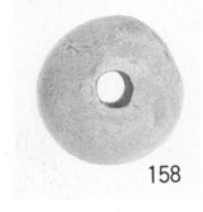
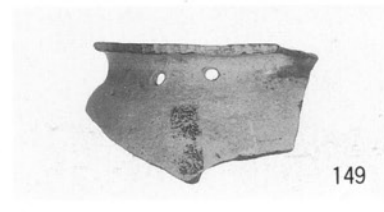
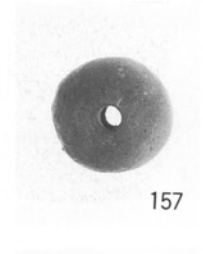
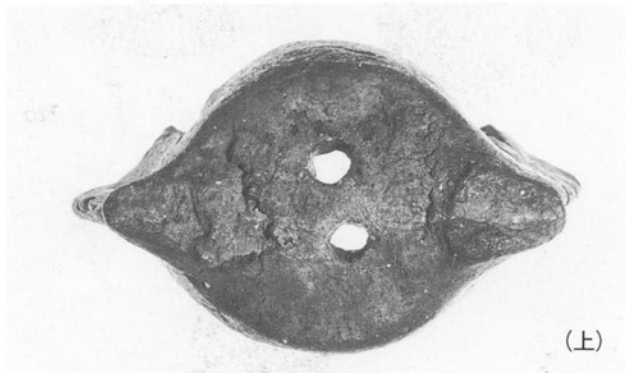
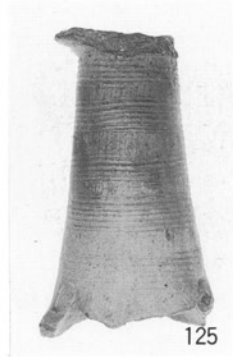
大溝下層出土遺物 (1 : 3)



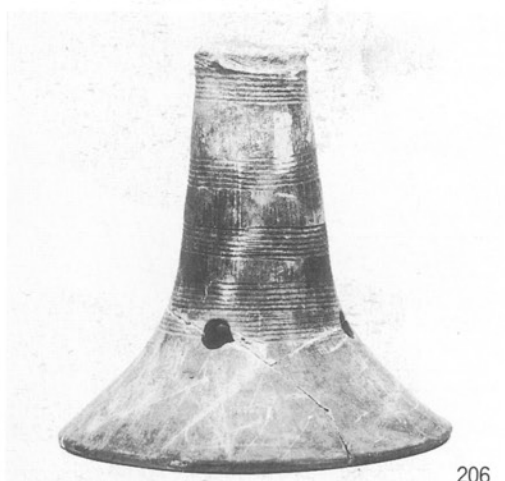
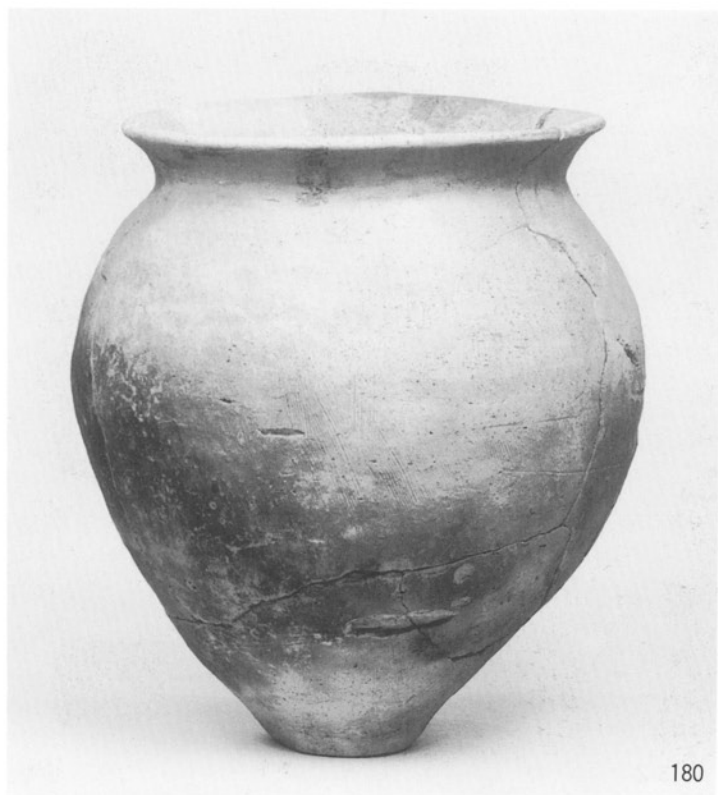
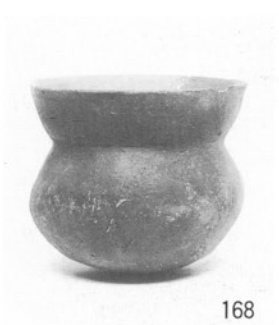
大溝下層出土遺物 (1 : 3)



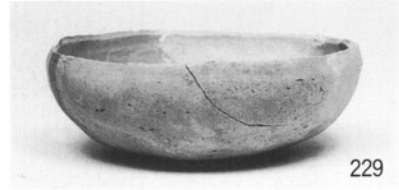
大溝下層出土遺物 (1 : 3)



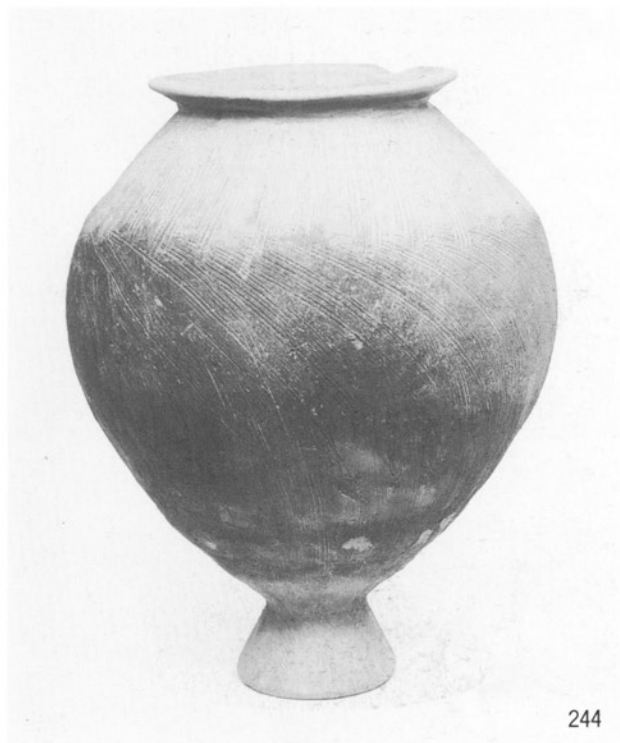
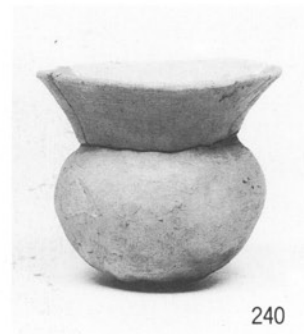
大溝下層出土遺物 (1 : 3、372は 1 : 1、157・158は 1 : 2)



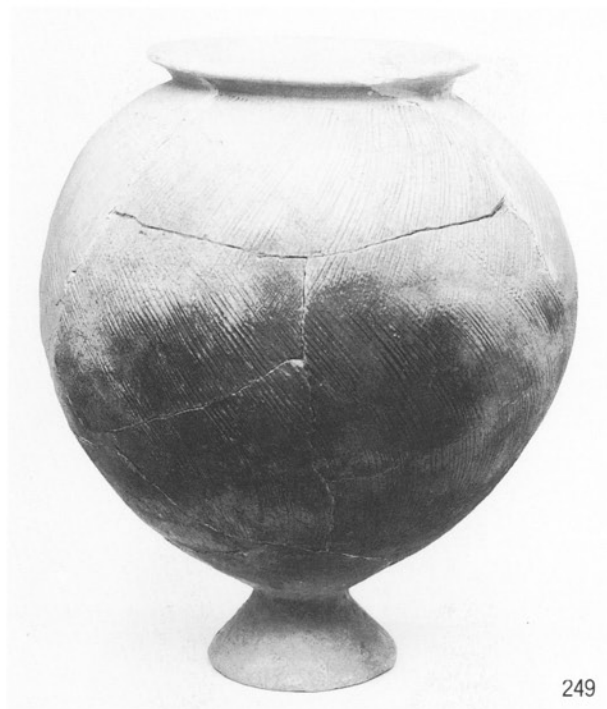
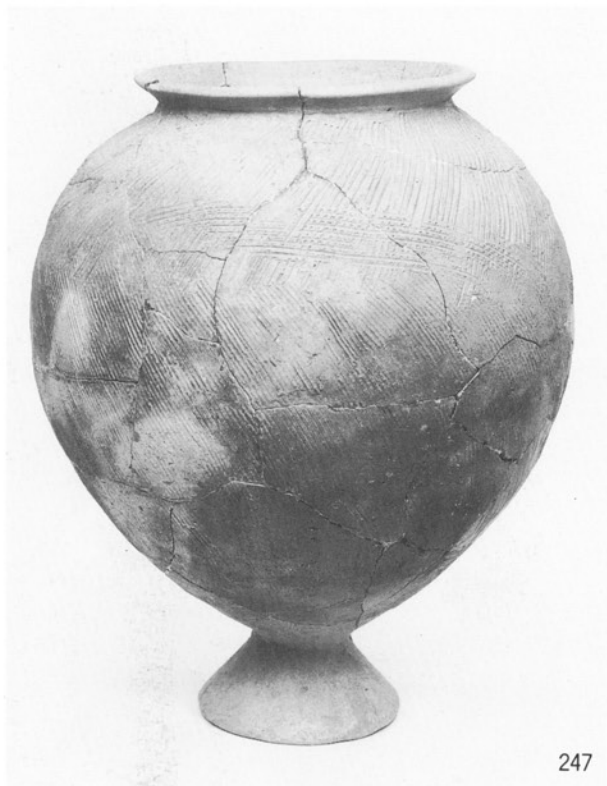
大溝中層出土遺物 (1 : 3)



大溝中層出土遺物 (1 : 3)



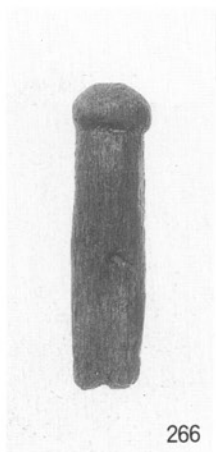
大溝上層出土遺物 (1 : 3、244・245・250は1 : 4)



大溝上層、SD 1、包含層出土遺物 (1 : 3、247・249は 1 : 4、373は 1 : 2)



263



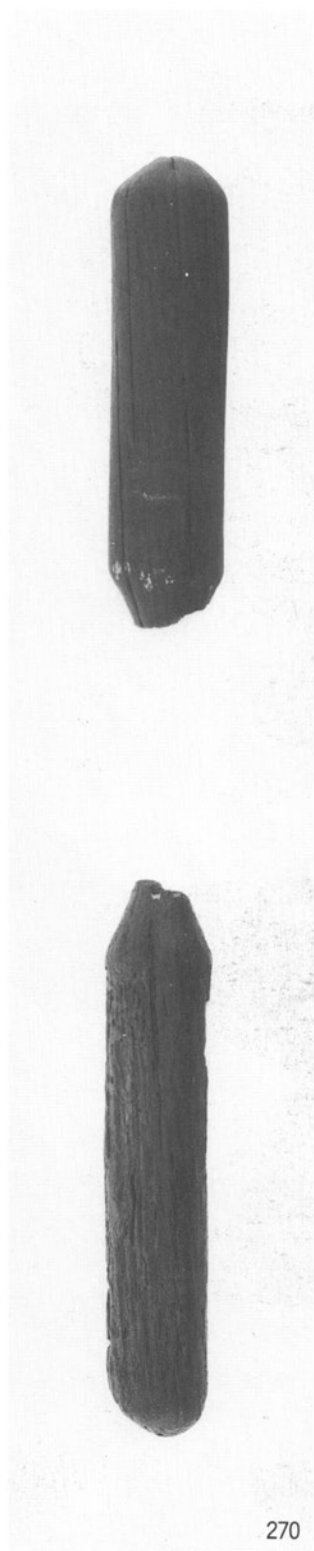
266



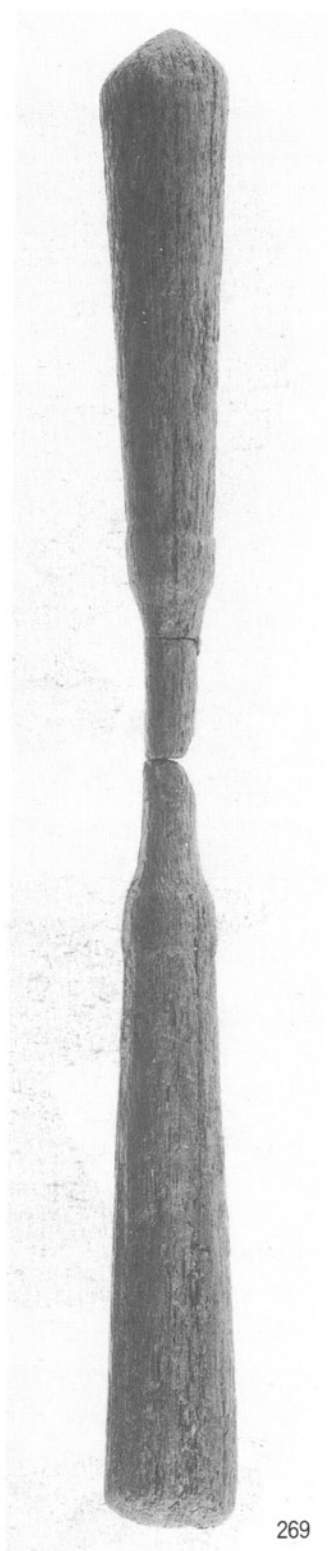
264



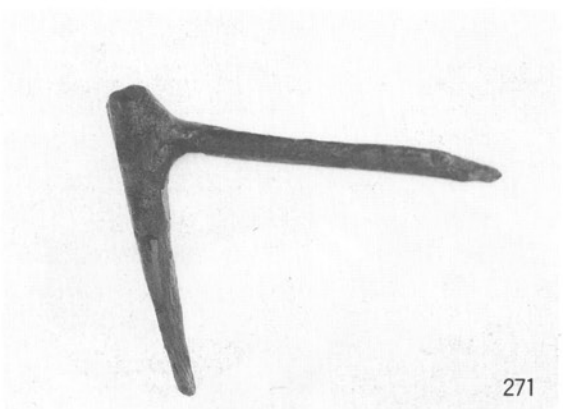
265



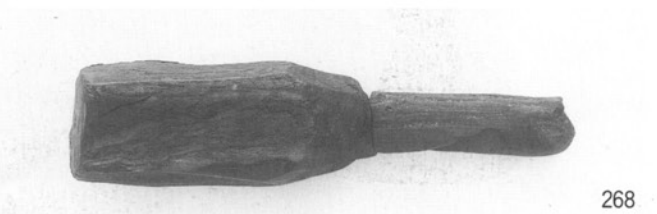
270



269

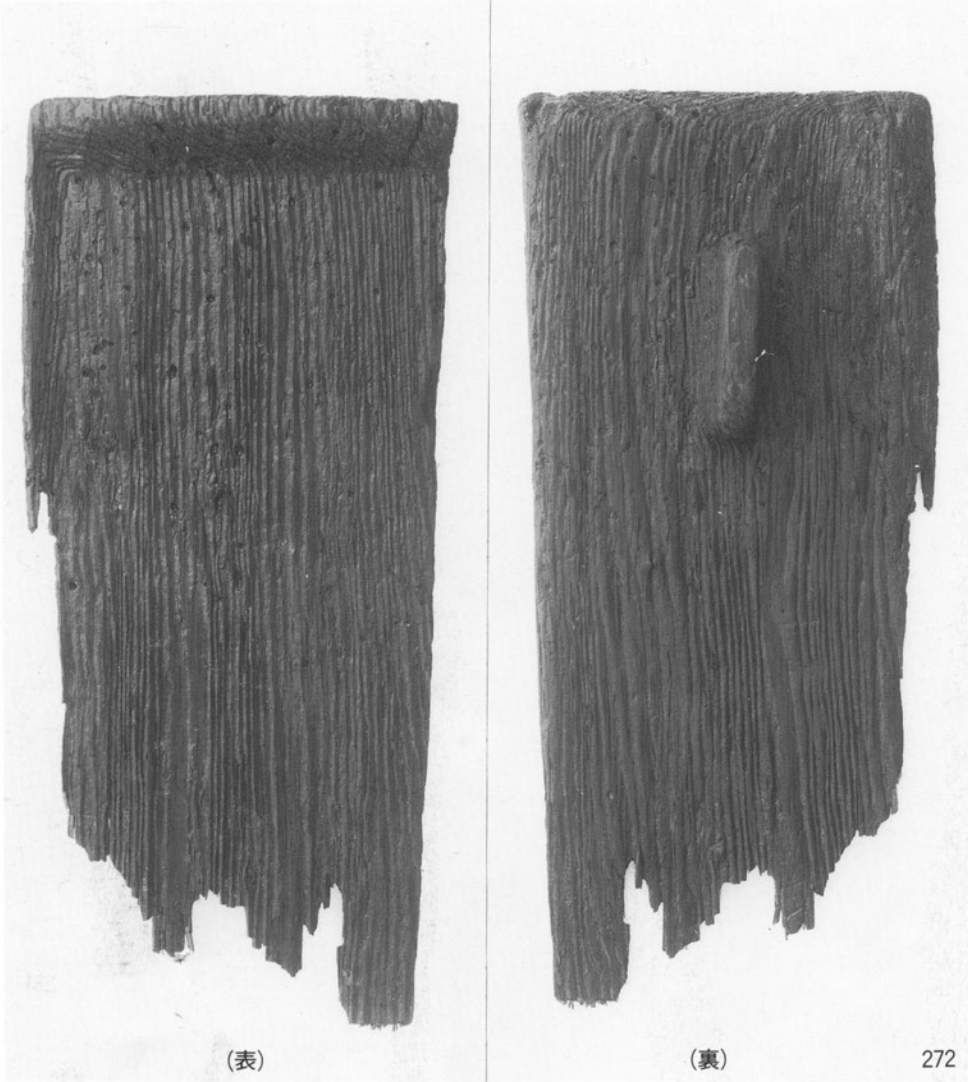


271



268

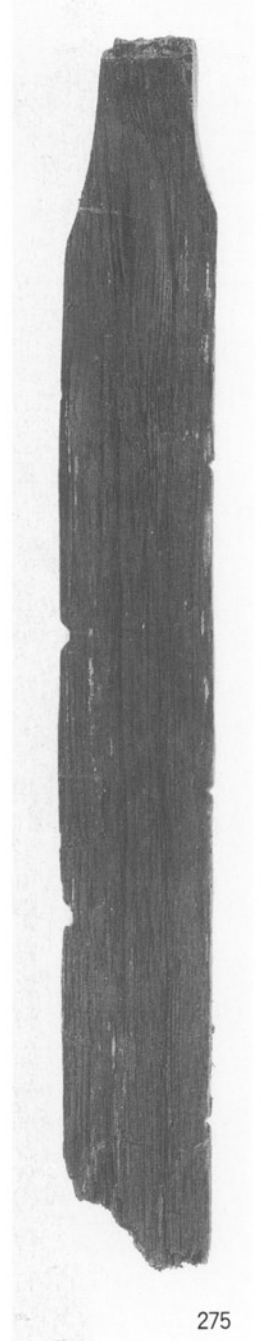
大溝出土木製品（農工具） 1 : 4、269・270は 1 : 5



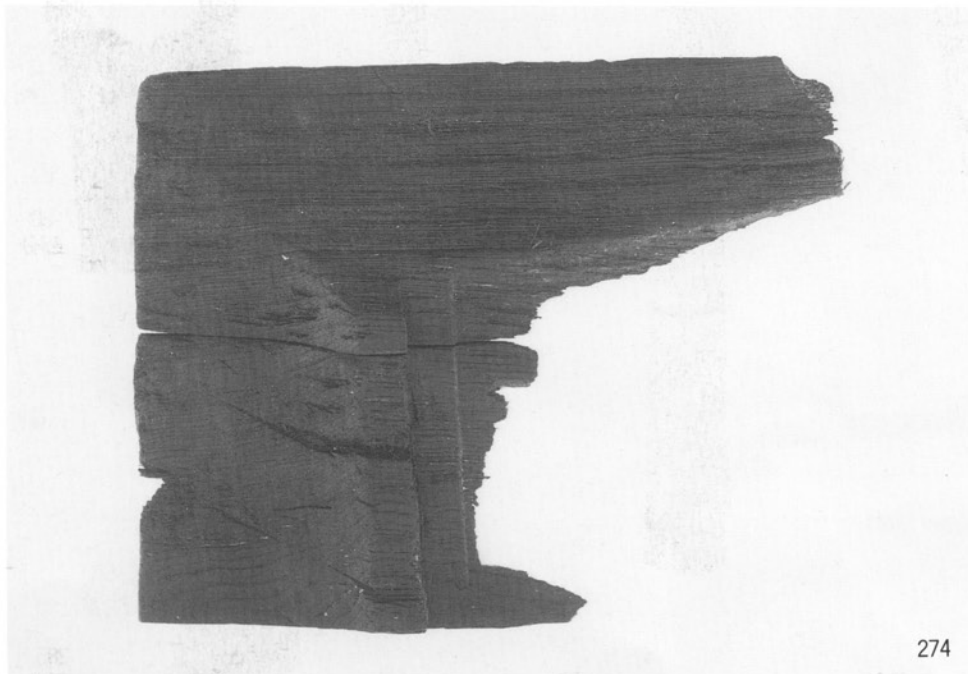
(表)

(裏)

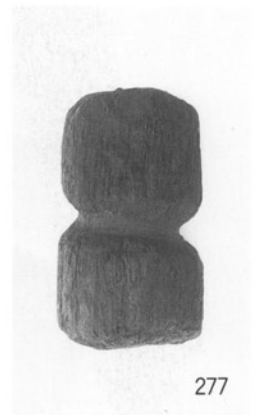
272



275

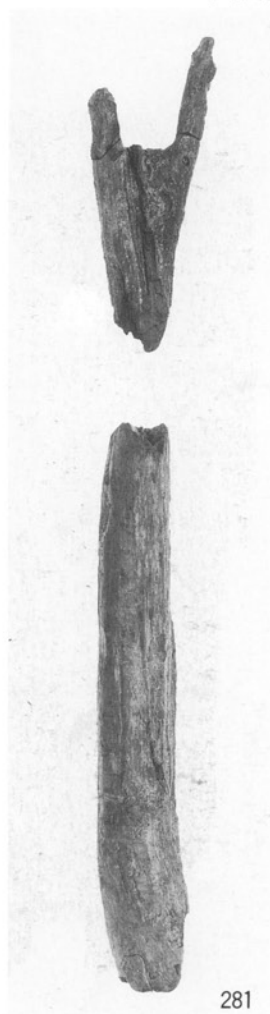
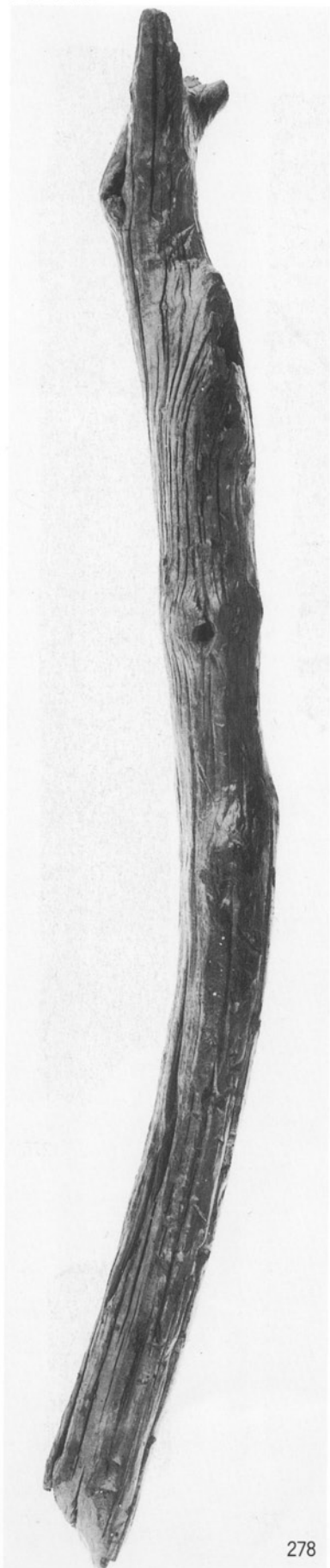


274



277

大溝出土木製品（容器・家具・紡績具） 1 : 4



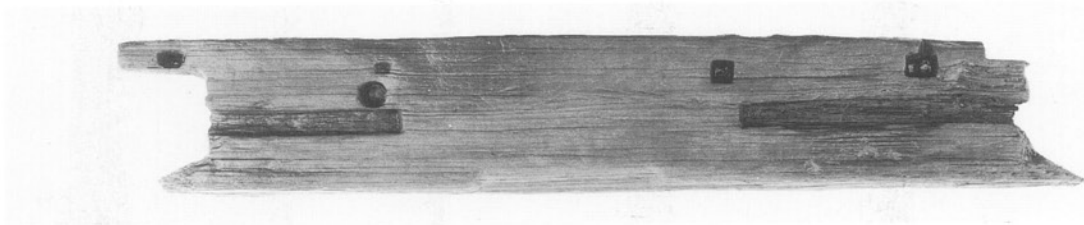
大溝出土木製品（建築部材） 1 : 10 280部分・285部分は 1 : 4



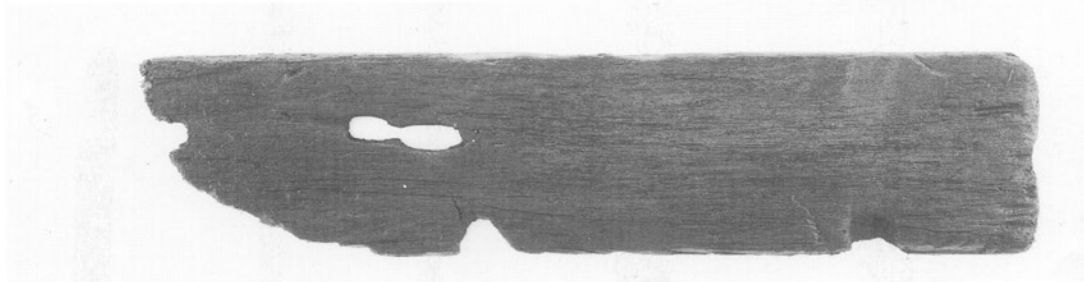
大溝出土木製品（建築部材） 1 : 10、293部分は 1 : 4



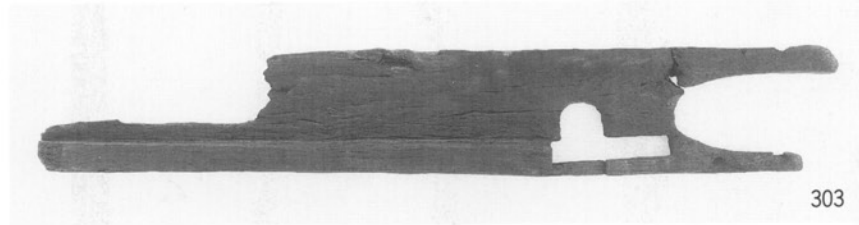
306



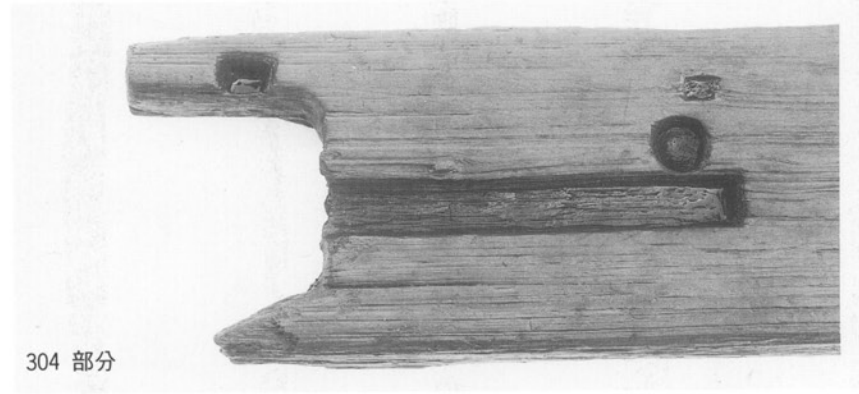
304



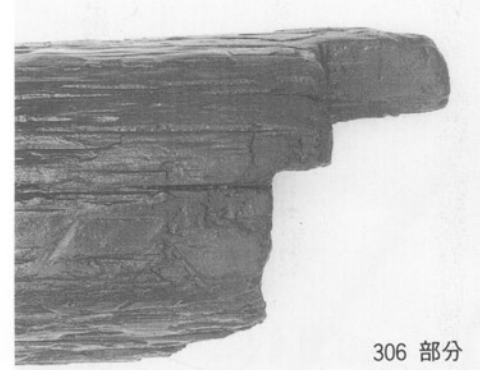
305



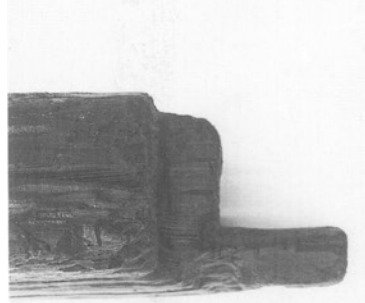
303



304 部分



306 部分



306 部分



310



311

大溝出土木製品（建築部材） 305は 1 : 6、304部分は 1 : 4 306部分は 1 : 4 他は 1 : 10

平成 5(1993) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 2 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告115-1

一般国道23号中勢道路(9工区)道路建設事業に伴う

松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告

1993年 3 月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 東海印刷株式会社
